鹿児島県史料

旧記雑録拾遺
記録所史料二

解　題

本巻は前巻に引続き『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　記録所史料二』として「御家伝并諸家由緒」、「国老并用人記」、「御役人帳」、「薩藩役職補任」、「備忘抄」の薩摩藩記録所関係史料を収録した。以下順次底本並びに関係史料、内容及び特色等について説明しよう。

「御家伝并諸家由緒」と表題のある史料は東京大学史料編纂所所蔵の島津家本五冊と鹿児島大学附属図書館所蔵の玉里文庫本五冊があり、他に都城島津邸所蔵本六冊もあるが、その各配列順等には異同がある。玉里本各巻には明治二十一年二月～四月の日付と筆者（折田則次・家村彦九郎）・糺合者（児玉五兵衛・五代徳夫・鎌田政敏）の記載があり、都城島津家本を書写したことが明示されている。島津家本にはその記載は無いが、両者の記述様式、内容等を比較してみる時、島津家本もほぼ同じころ別途都城島津家本を書写したものと思われる。ただ島津家本は冊毎の巻首に史料目録を掲出している特色が見られ、恐らく書写後追補したものと思われる。原書とされる都城本は表題・内題を欠くもの（）で示す）も含めて㈠上・㈠下・二㈠上・二下・三・四と並べることができ、対比してみると島津家本・玉里本共このうち二を欠き、島津家本はさらに二下のうち後半分を欠いていることがわかる。都城本は筆跡から近世後期の写とみられ、都城島津家が積極的に史料収集につとめ、本藩記録所史料を書写収集したと思われる寛政・文化・文政期頃の作かと推定される。因に本藩記録所史料でその後の政変などで消失したものは少なからず、かえって都城島津家記録方の書写本として残されているものが数多いことはこれまでも注目されてきたところであるが、本史料もその一例といえるのではあるまいか。（都城市教育委員会「都城島津家伝来史料　史料調査報告書」）さらに同家史料中に別に同種同内容の写本として「薩陽諸家由緒覚」三冊（これも本藩記録所旧蔵本の写本か）があり、それは前記都城本の本来の配列順を上・中・下の形で示しており、両者を比較対照すること

により、既に亡失した本藩記録所の「御家伝并諸家由緒」の原初本の像を想起することができよう。また、この「薩陽諸家由緒覚」はほぼ同内容で「旧典類聚」（東京大学史料編纂所所蔵、修史局蔵印本）の十二・十三に「諸家由緒」の題名で書写拾録されていることを付記しておこう。さらに別に島津家本中に「諸家由緒調」一冊があり、その内容は前半部分が前記「御家伝并諸家由緒」四とほぼ同じであるが、後半は同書冒頭の目録に「伊作家事件」と題する伊作島津家名跡立をめぐる関係史料等が収録されている。同目録の筆跡は伊地知季通のものであり、同書の表紙には「三番箱　伊進上」とあり、明治二十三年七月の磯島津家への進上書類目録中にも記載されている。その中には『伊地知季安著作史料集四』に収録した「猿渡氏系譜文書」も含まれており、季通が季安より相伝し後年島津家史料中に収めた史料としてみることができよう。季安は晩年記録奉行をつとめ、慶応三年歿するまで記録所史料に接し、必要と判断したものを積極的に自身又は他人の手を借り書写し手許に置いていたと思われるから、歿後は季通が保存につとめ、後年島津家々職につくに際して季通自身の書写収拾分と併せ伊地知家進上本として磯島津家邸に納付したものと思われる。

以上の経緯から今回の「御家伝并諸家由緒」は底本として当初予定していた島津家本に代えて都城本を採用、前述の諸本を参照、補正本として活用、一本にまとめて刊行することとした次第である。

なお本史料に関しては林匡氏が既に平成十五年刊行の日本学術振興会の研究成果報告書『近世薩摩における大名文化の総合的研究』所収の「藩記録所の活動に関する一考察」中の「三、諸家の筋目・系図の由緒調査―〝御家伝并諸家由緒〟を題材に―」でとりあげ、当時はまだ都城本が未調査であったため、島津家本により解説されているが、今回はあらためて都城本を中心に通覧してみよう。

一では、初めに元禄十三年、藩主綱貴より幕府に提出した覚（一号）には初祖忠久誕生と近衛家との由緒について記し、その後に日新・龍伯・家久代の近衛家との親交を示す古市（最上）氏関係の文書（四号）をあげている。

或いはこれが本史料の題名を「御家伝并諸家由緒」とした所以かと思われるが、以下の史料の内容の大部分は主として島津家一族・家臣団の個々の要望、或いは藩命による個人又は複数の家の由緒・家筋を調査、記録した史料で、年代は大体貞享、元禄、宝永年間頃のものが多くみられる。

さて諸家文書の始には吉利家の扶助要請に伴う由緒書（五号）、平田家の嫡子太刀進上願の記録奉行市来家年・肥後盛香調書（六号）等が続くが、先述の「薩陽諸家由緒覚」ではその前に㈠下の宝永元年三月二十五日付の記録奉行肥後盛香の家老島津久明の求めにより自家系図文書で作成した旨の序文と種子島氏以下田尻氏迄二十家の由緒書（四〇号）（『鹿児島県史料集Ⅵ』所収「別本諸家大概記」と同文）をのせている。また㈠上の大山家由緒（一九号）の後に廿五家御記録方調書（二〇号）をのせ、三原家より白尾家に至る二十四家の家筋並びに進上物調書を書き上げており、㈠下のはじめに二十五家目の伊地知金左衛門家由緒進上物調書を掲載し、外城養子につき中紙進上然るべしと元禄十六年十二月、田中・市来・肥後の記録奉行三人連名で記述し、そのあとに、以上の調書は覚であり文章に相違はあるにしても、家筋由緒については相違はない。中でも酒匂利兵衛・猿渡亀之允家筋の儀は文章迄も相違無く書写しているとことわっているのは興味深い。「薩陽諸家由緒覚」では掲出家名の順番の異動がみられ、たとえば酒匂のすぐあとに猿渡を記載している。他にもこの様な例がいくつもみられ、同本は都城本に後から手を加えているのではないかと考えられるのである。㈠下では他に記録奉行田中氏由緒書（三九号）が元禄十七年二月付で同僚の肥後・市来氏により詳細に記述されており注目される。

二㈠上はじめに山口家由緒として田中国明の貞享四年六月の覚書（四五・四六号）をあげ、庄内の乱・関ヶ原役・佐土原城地引継等で義久・家久と緊密な関係を保った幕臣山口勘兵衛直友の史料を列挙している。なお先の㈠下で御目見太刀進上願を受理されている山口甚九郎嫡子山口勘九郎とある（二六号）のは直友の弟分として薩藩家臣に召抱えられた直行の子孫である。また次の祢寝家由緒書之覚では、先に祢寝清雄より申出のあった小松改姓願に対

する元禄五・八年記録奉行伊地知助右衛門重英の史実に乏しく賛成し難いとする見解をのせ（五五号）、田中国明も同調（五六号）している。（宝暦十一年、清香の代に改姓は認められる。本件に関しては林匡氏『黎明館調査研究報告20「小松改号一件―近世祢寝氏の系譜意識と島津吉貴―」』の論考がある。）他に町田存松次弟久政を祖とする家の年頭太刀進上願（六一号）について同様の他家もあることから慎重論を述べ、判断を上司に委ね、不採択となった事例もあげられている（田中扱）（六二号）。なお二㈠は表紙等虫損が著しく、その故か島津家本・玉里本とも書写されず欠本となっている。（都城本には目録無し）

二下ではじめに継目御礼太刀進上願の吉田氏庶流和田家由緒書書抜（六八号）をのせ、次に鎌倉時代、武蔵国より下向、甑島地頭となり、文禄年間高橋に所替になった小川氏の由緒書並に記録所の調書（照会解答）（六九号）をのせる。島津家本ではその後に「右書ハ木脇啓四郎集録之由」の注記がある。木脇啓四郎祐尚は明治三年甑島地頭になっており、甑島旧領主小川氏に関心があってその項のみを集録したのかも知れない。島津家本は目録は記載しているが何故かその後の記載はない。都城本・玉里本では以下田布施衆中鮫島刑部左衛門家（先祖双月）の鹿児島高成願の由緒書（七〇号）をはじめ、蒲地（七一号）・本田（七二号）・郷田家（七三号）等の由緒書をのせている。

三ははじめに市来家由緒書として元禄十四年九月三日の市来源右衛門家年口上覚（『旧記雑録拾遺　家わけ九』市来文書所収）と同年十一月三日の市来小四郎家永口上書をのせる（八三号）。家年は当時記録奉行見習であり、かねてより市来家嫡系は忠家代に断絶したものと承知していたが、小四郎家が嫡流であるとして系譜を提出、先の奉行伊地知重英らも「諸家大概」の編者河野通古の説を踏襲認承しているのに疑義を抱き再調査を提議、これに対し家永が経緯を説明、反論している。この問題は未解決のままその後も小四郎家をはじめ数家が嫡流と称し推移した如くである。（拙稿『鹿児島中世史研究会報43「市来家由緒書と市来家文書・系図」』、林匡氏『鹿児島地域史研

究３「薩摩藩記録奉行市来家年について―島津氏家譜編纂・家筋吟味と系図・文書調査―」』参照）以下新納（八四号）・野元（八五号）・徳永（八六号）・相良（八七号）・中西家（八八号）よりの小番入願の由緒書、土持家よりの御番免除願の由緒書（八九号）をあげ、そのあとに元禄十五年二月二十五日付の記録奉行肥後盛香・市来家年・田中国明三人連署の調書及び小番入願調書作成の方針表明が記されている（九〇号）。次に諸家由緒大概として秩父十郎兵衛より永山休兵衛に至るまで四十三人の名をあげ、太刀・二種一荷進上一名、太刀進上十四名、二種一荷進上三名、中紙進上二十五名の進上物格式調の内訳を同年二月十八日付で記載している（九一号）。さらに翌十六年四月二十七日付の市来家年・肥後盛香連署調書では小番入願調の原案、小番を然るべしとする者十六人、大番を然るべしとする者十二人の名をあげている（九三号）。次に元禄十三年年頭座配の儀一所衆列の儀について記し、その儀礼の初めを寛永年中とする猿渡信安の説などを紹介している（九四号）。信安は伊地知重英代の記録所書役であり古事に明るく田中国明ら当代の記録奉行との関係も深かったようである。（林匡氏『黎明館調査研究報告16「薩摩藩記録所寸考（三）田中国明と猿渡信安―記録所関係者点描―」』参照）終りに仁礼景代系図之覚（一〇〇号）を掲載し、その後に「薩陽諸家由緒覚」では参考史料として諸家系図が付記されている。なお三の中表紙には「伊敬写　七拾九枚」の書き入れがあり、今後の検討を要する。

四のはじめには、都城本には無いが「諸家由緒調」の巻頭に所収の惟宗氏系図をあげる（一一〇号）。朱註にある如く四点共水引執印氏蔵で島津久経代、阿蘇谷久時と市来政家との間で系図相論があった際提出されたものとする。以下は都城本で酒匂家由緒書（一一一～一一三号）にはじまる。その内容は元禄七年藩主光久の葬礼役賦の儀で記録奉行伊地知重英が本来本田・酒匂等始祖以来の旧臣が中心に勤めるべきもので本田氏に片寄り酒匂氏が除かれているのは納得しがたいとし、両家勤役の史実を開陳、酒匂氏が出陣并祝儀の太刀役が主で葬儀の太刀役は勤めたことがないというのを、同家の相続に養子が何度も入り旧慣を忘失した故かと述べ、総州家との縁が深かったた

め、奥州家との縁の強い本田氏が専ら表に立っていることは、藩主家が相州・伊作家の統をつぐ現状にあっては望ましくないとの見解を披瀝し、嗣子の少八郎にも当時の一件資料を渡し（一一四号）、後年酒匂家にも伝達するようにとの意向にそい元禄十五年それをうけた酒匂家もあらためて自家の歴史を再認識し、翌十六年家伝の由緒書（一一七号）を記録所に提出していると思われるのである。同家の系譜は「諸家調抄」（『旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集九』）によれば大蔵兵衛景義―利兵衛景安とある。また次に揚げられる宝永元年十月二十一日の酒匂兵右衛門の願書（一一九号）では本田・酒匂・猿渡は譜代奉公の家であり、葬礼の儀には酒匂家も役を勤めたい旨願出ている。他に元禄十四年の赤松甚右衛門則茂の家筋由緒申出書写等（一二一号）があり、同家が播磨国より下向してきた経緯、越前島津家とのかかわり、鮫島・平山氏等との結縁等の記述がある。その後に村尾家・宮原家由緒書（一二二・一二三号）があり、続いて「諸家由緒調」では宮原氏・岩切氏系図をのせる。ただ同書では続く本田家由緒書を欠いている。宝永四年十二月の二通の本田信次郎の申状（一二六の1・2号）は身代の窮迫を訴え、忠久以来の奉公の継続を願い出ている。就中、曽祖父宣親の五代の祖董親の野心の風評是正に言及している点は注目されよう。（林匡氏『黎明館調査研究報告18「戦国期の大隅国守護代本田氏と近衛家」』参照）さて本書以後の内容は中世後期以降島津家の祖廟とみなされた花尾権現、一宮神社の由緒についての記録所調で併せて不断光院、下伊敷春日大明神の由緒調も記している（一三三～一三六、一四一号）。その他取り残したとみられる史料数点の補記がある。一は宝永二・五年の御目見列定（太刀進上に本田・酒匂の名もあり）（一三八号）、二は記録所調覚で御供三家（酒匂・本田・猿渡）について、また平姓北原氏と伴姓北原氏の相違について、それに猿渡氏の嫡家についての所見が記されている。（一三九・一四〇号）三は頼朝法名偽作者の件（一四二号）、四に宝永五年猿渡信安の嫡庶判断（一四三号）で、以後は島津家本「諸家由緒調」のみの掲載史料になる。

最初は島津家九代の大守忠国の法名院号一件書付（一四四号）で深固院・小城権現・眞勝院の名称由緒を記載し

ている。次に先掲の市来家嫡系をめぐる論争で元禄十五年正月に記録所（奉行は肥後・田中氏）が直接市来小四郎に尋問した記録並びに小四郎が後日提出した由緒家伝の写を掲出している（一四五号）。以下は季通が目録に伊作家事件と記載した相州島津家の格式を継承した態の垂水島津家に対し、伊作島津家の格式を宮之城島津家に与えるべきではないかとする同家久竹の申出に藩当局（家老・記録所）の対処ぶりを示す関係史料二十数点を集めたもので（一四六～一五〇号）本史料に関しては林匡氏の『黎明館調査研究報告17「薩摩藩記録所寸考（四）伊作家事件―島津氏支流の系譜・家格と記録所関係史料の紹介―」』があり、それによれば「伊作家事件は延宝七年から貞享五年（元禄元）に至る十年間の、年頭座配に象徴される、伊作家名跡を継承する家格相応の処遇（三男家における別格、または日置家と同格）をめぐる宮之城家側と家老・記録奉行との交渉の記録といえよう」と要約されている。当時の記録奉行ははじめ河野通古、ついで伊地知重英・田中国明でそれぞれ学識者で個性も強く、藩政の整備期に当たり、藩体制の確立に関わる記録所の役割も増し、その間にあって一々その処理に当たっている姿勢をこれら史料からうかがうことができよう。また島津本宗家の奥州家より伊作・相州家への変遷に伴う島津家一族及び家臣団の個々の家の盛衰の実情も本史料から推測できるのではあるまいか。

以上概述してきた記録奉行の調書から幾多の制約の下であくまで史実を求めそれを基本に処理に当たろうとする担当者の姿勢も伺見することが出来、時代をこえた共感を覚えずにはいられない。そしてまた以上の長い年月の間に史料が記録所においてどのようにしてまとめられ、保存されて現在に至ったものか他の関連史料を併せて考察を深め今後逐次明らかにされることを期待したい。なお前巻『記録所史料一』では江戸時代中期の記録所関係史料を紹介した。本巻ではそれ以前の前期の関係史料を紹介したことになる。

次にとりあげる三史料は何れも東京大学史料編纂所所蔵の島津家本史料である。

「国老并用人記」は内題に「島津家国老竝御用人記」とあり、はじめに家久・光久代の「御城代」島津久賀・北

郷久加をあげ、ついで光久男の佐多久達・島津久当、吉貴男の島津貴儔等、また「諸家大概」等により、立久から義弘代の「御家老」六名を、また義弘代の在所別家老並びに「御使衆」を記しており、その後に「御代々御家老記」として忠久以来斉宣に至る間の島津家歴代の家老（守護代）の氏名、略歴を列挙している。なお同本には同種の異本として別に「島津家代々御家老記」（東京大学史料編纂所所蔵島津家本）があるが、前者に比し簡略化されており、且つ誤脱が目立つ。また他に鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本に「君家累世御城代御家老記」があり、家老のみだが幕末期まで記載されている。（『鹿児島市史Ⅲ』所収）ついで底本では「旅御家老・御談合役・御詰役・若御年寄」としての寛永十二年の山田有栄以下寛政五年の島津将監まで八〇名の、「横目頭并大御目付」として島津久雄以下寛政三年顕娃久喬まで九十八名の、「御使役後御用人」の忠治代の二階堂左馬助以下寛政四年の本城源七郎まで三四八名の人名及び略歴を記載している。

「御役人帳」ははじめ談合役以下兵具奉行、文書奉行、記録奉行、記録方添役並稽古に至るまでの、寛永年間より文政年間頃まで（役職別毎に相違あり）の役人名及び略歴の記載があり、至便。たとえば前項でとりあげた記録奉行についての考察にも役立とう。ついで各役職毎の勤方や処遇等についての記述があり、その職務内容の大要を把握できよう。

「薩藩役職補任」は底本は写本であるが原本は家老以下軍賦役に至る役職毎に人名票を貼付した簿冊だと思われる。小松帯刀の文久二年をはじめとして幕末期当時の役職の各人毎の異動・待遇等の記載もあり、その職歴を確かめられよう。但し役職別の札番号順等書式については不明の点もある。以上の各史料とも記録所に於て作成、保管されてきたものの写として島津家編輯所に伝存したものと考えられる。

表題の**「備忘抄」**は鹿児島県立図書館所蔵の和綴上中下の三冊本で、内題にはそれぞれ「備忘抄上三冊」、「備忘録抄中」、「備忘録抄下」とあるから正確には備忘録抄というべきかもしれない。各巻末の県立図書館の受入印は何

れも大正三年四月廿七日購求となっているが、入手経緯は明らかでない。或いは県庁本よりの引き継ぎかとも思われる。現在のところ同書名の他本は見出せないが、内容からみて幕末の記録奉行伊地知季安関与の記録所史料であることは間違いあるまい。なお本書については昭和五十年の『鹿児島県史料集（XV）』で紹介、解題も執筆している（なお『鎌倉遺文月報7』所収　拙稿「備忘録抄所収の鎌倉期の文書」でも関説）が、本文ともども不備不足の点が少なくなかったので、今回の記録所史料刊行に際しては、目録を付し、稿を改めて掲載した次第である。

さて全体を通覧して上中下の史料は不揃いながら、概ね時代順に集められていることがわかる。上巻には始祖忠久の誕生、西国下向に関する史料（系図・伝承等）が島津家文書（三・二六・四一・四二号）、収集文書（五六・五七号）、典籍（七六・七八号）等より抄録されており、中に記録奉行の新出系図採否の見解（二〇・二一号）や、季安の慶応二年八十五歳時の張紙酒匂氏古写補帖（四二号）、頼政家集等の考証（七一号）等も記載されている。末尾の（九二号）は吉見系図等尊卑分脈よりの抄録である。

中巻はもっとも内容が豊富で、寛永十八年幕府への系図差出関連の史料（一〇一号）、島津家文書の目録（一〇五・一四一号）、「島津家本東鑑」、「東鑑脱漏」（一〇七～一一四号）（晋哲哉氏『鹿児島中世史研究会報44「島津家本吾妻鏡の伝来―二階堂某書状の検討―」』参照）、及び忠久の頼朝庶子説立証用の同書の焼失と復原の関係文書（一一七号）また関係史料乏少の若狭島津氏の系図等も注目されよう（一六二～一六四号）。さらに近衛家との親縁関係設定の動向（一六七号）（林匡氏『旧記雑録月報28「島津家由緒をめぐって―元禄から正徳期における政治的役割―」』参照）や、忠久代本田氏の下向地出水郡野田村関係史料（一七〇～一八〇号）等も収録されている。文書としては市来北山文書（一九一～一九八号）（拙稿『日本歴史170「島津庄日向方北郷弁済使並びに図師職について―備忘録抄所収北山文書の紹介―」』参照）等があり、島津家文書中箱四番下箱から「他家文書写」四十四通の中のはじめの二点をとりあげている（二〇一号）。一は文治五年八月十五日付の畠山重忠宛の源頼朝加判平盛時奉

書の頭書で忠久出陣と解した問題の文書であり、正文は正保四年に江戸に送ったとある但書は同文書が忠久の出自を立証する有力な史料として活用されるに至る経緯を暗示している。二は文治三年三月の平重澄の伊作庄等の寄進状で島津氏が代って同地支配の起源を説明する史料となっている。同文書は下巻でもとりあげられている（二九九号）が、重複削除はしなかった。（江平望氏『鹿児島中世史研究会報47「島津家文書〃他家文書四十四通〃」に関する一考察―とくに伊作荘史料について―』参照）

下巻ははじめに一乗院宝物案内記をあげ（二四一号）終わりに文久四年の一乗院宿中宛の記録所書付をあげている（三一七号）。注目される史料としては得能通昭の田中国明を学統の祖とする記事（二四三号）や、林春齋より島津久通宛の系図記載上の注意の書状（二四四号）、天文十三年より慶長四年に至る年代記（二五四号）、元禄六丑（ママ）年十一月二十六日の日帳に諸外城より提出の文書数九千八百四十五通との記事（二五七号）（元禄九年罹災）、文永三・四年、元亨元年の二階堂文書（二五八～二六一号）、国分正興寺玄俊の疏銘祈祷につき口上覚と季安の上井覚兼日記による注記（二六三号）、元治元年季安書になる加世田仁礼氏譜（二七二号）、天正六年正月以降新納忠元と天草方との交流記事（二七四号）（以後朱註「忠元譜へ仕込済」等の書入記事・文書多し）、慶長二年の奥方上洛ニ付御供衆賦（二七五号）（同）、慶長十八年の御質様御供衆賦銀渡方帳（二七六号）（同）、さらには安政五年持参された加治木新納仲左衛門家蔵文書の抄写（二七九号）等、下巻の後半分に関しては季安自らも縁故のある新納（忠元）家譜編纂史料の備忘録をも兼ねている観すらしないでもない。

以上再度本史料を要約すれば島津家始祖の有様をえがこうとする雑多の史料の抄録で終わりの方に季安所縁の新納（忠元）家譜関係史料も抄録集成した書冊といえよう。そしてこれまた拡大解釈すれば幕末の記録奉行伊地知季安の最晩年の業績の一つとして数えられよう。季安は長年にわたり島津家、藩関係史料の整理保存に尽力してきたが、とくに最晩年には藩主斉彬らの恩遇に酬いるべく、島津家始祖の考証に精力を傾注した。即ち江戸時代初期に

『記録所二』掲載文書点数

文　書　名	文書数 (収載)　〈未収〉	目録上史料 総　　数	掲載史料数
御家伝并諸家由緒（一上）	49 (8)　〈41〉	20	20
御家伝并諸家由緒（一下）	46 (0)　〈46〉	24	24
御家伝并諸家由緒　二(上)	32 (4)　〈28〉	23	23
御家伝并諸家由緒　二下	17 (0)　〈17〉	15	15
御家伝并諸家由緒　三	67 (0)　〈67〉	27	27
御家伝并諸家由緒　四	90 (4)　〈86〉	41	41
国老并用人記	0 (0)　〈 0 〉	1	1
御役人帳	4 (0)　〈 4 〉	4	4
薩藩役職補任	0 (0)　〈 0 〉	1	1
備忘抄　上	100 (9)　〈91〉	92	92
備忘抄　中	165 (23)　〈142〉	147	147
備忘抄　下	82 (29)　〈53〉	78	78

注１　収載とは、「旧記雑録」収載文書を示し、未収とは、「同」未収載文書を示す。
　　２　掲載史料数とは、『記録所二』内で掲載した重複分を除く史料数を示す。

成立をみた初祖忠久の源頼朝庶子説をこえた以仁王子説の立証につとめていた。「備忘抄」はその作業の関係史料とみることもできるのではあるまいか。その成果は得られなかったけれども、その立証過程で把握、収集された諸史料は今後島津氏の歴史を解明する上での貴重な資料となるといっても過言ではあるまい。（朝河貫一氏『史苑　一二ノ四』所収「島津忠久のおい立ち」、井原今朝男氏『歴史学研究　四四九』所収「荘

園制支配と惣地頭の役割―島津荘と惟宗忠久―」、野口実氏『立命館文学　五二一』所収「惟宗忠久をめぐって―成立期島津氏の性格―」、江平望氏『島津忠久とその周辺』参照）

終わりに今回の解題執筆に当たり、ここ数年来、記録所関連の研究成果を多数発表してきた林匡氏の業績を参照したことと、調査史料室の担当者諸氏より多くの示教、助言を得たことを記して謝意を表する。（五味　克夫）

御家伝 并 諸家由緒

（表紙　一）

『一番』

御家傳并諸家由緒

（中表紙）

「御家傳并諸家由緒」

▽㊟一御家傳并諸家由緒目録　　糺合濟

一忠久公御誕生御由緒之事

一惟新公御自記
一義久公御書
一諸家文書
一吉利家由緒書
一平田家由緒書
一高城家由緒書
一種子嶋家調書
一土持家調書
一諏訪家由緒書
一新納家・本田家調書
一有馬勘助家筋由緒書
一有馬吉兵衛（川）家筋由緒
一深見氏書付
一若松家由緒書
一筑後・肥後両国之住人
一平田九郎衛門家由緒
一大山家由緒
一廿五家御記録方調書△

1

忠久公御誕生御由緒之事（従綱貴公公義江為被仰上御書付ニ而候也、）

覺

一近衛家江由緒之儀者、私元祖豊後守忠久者右大将頼朝卿長子ニ而、頼家卿・實朝卿之庶兄ニ而御座候、頼朝卿初蛭嶋江居住之時、比企判官能員妹丹後局を為蜜妾懐胎候処ニ、御臺所平政子嫉妬甚敷候故、治承三年、局竊に関東を立出、攝州住吉江参掛候節、日暮産氣催候故、旅宿を求候得共、許容仕者無之候ニ付、不得已住吉社邊之於石之上忠久を致誕生候、翌朝（田ナシ）〔迄〕近衛基通公社参被成候処ニ、児之啼聲相聞へ候ニ付、人を被遣被為見候得者、右之次第ニ候故、則取揚候様ニと被仰付、御車ニ被載京都江被召列、養育被成候、其事頼朝卿江相聞へ候得者、早速使者を被差上、児を三郎与名付、丹後局を惟宗民部太輔廣言に被相嫁候、三郎君茂母儀ニ相随而廣言之家に同居候而致成長候故、最前者吴父之姓惟宗を冒候、元暦二年、三郎君七歳ニ罷成候時、頼朝卿蜜〻ニ鎌倉ニ被召寄、霾ケ岡之若宮於寶前三郎君に為初冠、称忠久、任左衛門尉、鳩作之脇差を致拜領候、且又勢州須可御庄・同國波出之御厨之地頭職に被補候、

一近衛基通公承久三年六月、右之由緒を以忠久を契子に被成候、依之早速惟宗之姓を去候而藤原之姓を冒候、近衛之氏族与罷成候ニ付、五六代以前之先祖共迄ハ、任官受領等之節者近衛殿下之推挙ニ而御座候つる、特に十五代之祖陸奥守貴久致家督候節者、近衛（田植）家公より日野左大弁宰相資持を為使節薩州迄差下、守護之（田裝）裝束を被饋下、家督之儀を被召賀候、尤偏基通公忠久を契子に被成候一筋を以之事ニ御座候、右之通ニ御座候処、近衛者基通公より當殿下ニ至、此方者忠久より私ニ至、今以舊好断絶不仕候、由緒之儀大抵如此御座候、以上、

▽（田）元禄十三年△
辰九月朔日

（本文書ハ「旧記雑録追録二」七九三号文書ト同一文書ナルベシ）

2

夫按當家之代々、自忠久至家久殆十九代也、予幸及八十余歳、近代見他家盛衰、歴々如見目、而或殆泯盡、或有如定（ヒカ）、瞬息之間、（中）他（化）烏有去矣、或称一士、而不擇家之貴賤、以我之有才覚、領莫太之知行、其勢雖似家

國興、不用旧邦之例、是故朝興而夕亡、終為槿辱(花カ)之夢矣、雖當(然脱カ)家無異儀而美譽振世者、以日本神國而率由旧章也、由此觀之、一士以無重代之良臣無諫諍賢、任心之所之、捨古賞新、不敬佛神、使民不以時、用人不用(ヲ「衍カ」)以道、因失往古之政、天罰不遁者乎、當家代々信心堅(固脱カ)榮者崇佛神敬先祖、修武略勤文教加忠節、以故國代益隆也、自今以後、嗣而守家者、愈守此旨、不可乱國家行儀、抑予辱為　義久公之舎弟、自少時委身於弓箭之事、奉命於危難之間、數十年之中不舎晝夜(チウ)、始挿懐遠(サシハサミ)柔近之心、終思見危授命(アヤウキ)之義、是故東戦而可疑代(ヲ「本ノマヽ」)、匪啻日本國中、着一戎衣而在朝鮮、此數歳斬敵立功、竟逢天下泰平國土安穏之時、惟實生前死後之本懐也、以事次予之武功之赴略(趣カ)記之者也、

一天文之比、薩隅日之國人等、挿逆心令蜂起(ヲ「本ノマヽ」)方、因茲可有誅罰逆徒由、　貴久公依御進發、先有着陣岩釼、逆徒亦回狼心謀、催多勢企伏兵欲得勝利、予於是不量軍之(サ吉)告凶、忽引卒陣中之軍兵、不止是(足カ)懸入追散方々、討亡數千之強敵得大利畢、然者逆徒等放火岩釼落去矣、自尒岩釼三年令在番、于時天文二十二(マ)癸丑(マ)三月晦日、予年十九歳也、

一蒲生之本城岸高谷深、四方無地續而易難攻之間、差通可攻松板(サ坂)之要害之由令評定、予忍可寄彼要害之模様見、茂架(モカリ)籬・乱机(サ杭)・逆茂木・城戸垂數多重有之、堅相構而可遂防戦雖成覺悟、猛勢押寄圍四方、放火民屋、揚吐氣之聲、自城内(サ合)舎吐氣之聲、放矢打石如雨降、時刻(サ移)〈而難叶之間、自手三尺劔真前攻入處、武者一騎懸出渡合予、暫雖相戦、終打伏捕渠首畢、攻終而見鎧之上、受矢四五箇所也、雖然不徹身、生年二十歳分捕之初也、于時弘治二年丙辰三月十五日之事也、

一蒲生之城主為加勢、自菱刈取添陣依相支、于時永禄元年戊午四月十五日、　貴久公為御大将、薩拂麓廻之麦作、押寄菱刈陣攻戦、然者陣高山也、自陣放矢者如雨之飛来、而中味方之壮士、自味方所射之▽(サ)矢者△難及敵陣、因茲味方徒費心力、忙然而難進、予於是攻入、士卒得力之一同攻登、爰柏原名乗而渡合予、(サ繼)組頭之合戦互欲決勝負、而暫雖相戦、終斬柏原首刎畢、在傍勇士亦懸手討捕、大将菱刈(サ左)在馬權頭自害、所楯籠之人數悉討亡、誠(サ快)侭意不少也、難然予蒙斬疵令痛悩、所受鎧

之矢亦多雖有之不徹身也、終日之戦〔矢刀〕(㊥失カ)疲、及深更軍兵本陣引退、近日可與攻蒲生由傳聞、同廿日、放火而城内令逐電也、

一自伊東家取懸飫肥及難儀之時節、為豊州之養子可相越旨、承　貴久公之命、誠一大事之儀進退究此也、伊東者一國之猛勢、飫肥者一郡之人數、争決雌雄哉、殊於飫肥有名程之家臣累年之弓箭遂戦死、相残衆(㊦「者カ」)有其餘裔也、殊更薩摩者遠路也、易難受加勢、豈不異夏虫入火也、雖然重義輕命武士之法也、于時永禄庚申三月十九日、既令進發至日州飫肥三年成在番矣、中比令歸國處、伊東卒大軍取懸飫肥之由告來之間、忽打立、亦欲趣飫肥、於是　貴久公御父子自未明及黄昏雖有御抑留、一旦豊州親子之約、此時於相疎者可背於道、加之自他國之誹謗固難遁、不顧貴命走籠飫肥、其比肝付敵軍令進發、忍取廻之城、即肝付〈㊥省〉釣令在城之間、　貴久公義久公為御大将被取巻城、因茲肝付之軍兵打出、一日令合戦、不意右馬頭(㊦「忠将カ」)持久其外歴々多依遂戦死、被引御陣、御家危急存亡時也、於是可致歸國之由、蜜々自貴久公雖被信通、更依難見棄、不隨貴命處、豊州忠親被來旅舘〈㊥訴〉予曰、一人於歸國者可為御家長久、愚家亦終可開運不相鎮哉、終日流涙被異見、被推道理令歸國畢、

一日州真幸院北原之一家乱、自飫肥西者属當家、従三山東者隨伊東、然間令発向飯野可相治旨承　貴久公命、永禄七年甲子既欲赴、爰横川之城主北原伊勢介依有逆心、彼院往還不自由之間、回霧島山之麓、凌山川越着飯野、而先押寄横川令誅戮伊勢介、横川者被宛菱刈處、還挿逆心以讎報恩、甚背順義、何遁天罰矣哉、重而矢所者可為菱刈云々、

一於三山伊東之軍勢差籠要害、可成防戦之有覚悟、彼城郭不追却者、可有事之煩間、可被追罰旨依令奏達　貴久公、永禄九年丙辰(寅カ)十月廿六日、被命諸卒有發向彼地、予致先陣、即外垂下部(㊥郭)打破攻入處、城中軍兵待請之、移刻相戦、要害漸攻傾處、予依疵(㊦「被カ」)軍士驚引退、仍不得勝利也、欝憤雖無限、先薩隅両州諸卒皆歸國也、

一菱刈依令謀反、可有退治之旨僉儀區(㊦「々」)也、予告諸卒曰、於馬越之城附忍、其趣細々聞之、則其堺知(㊥如)見之、〈㊥易〉可攻落由雖成諫、諸卒未同心、或人之曰、菱刈者要害十

ケ所餘有、半時之中英大之人數相聚、加之權威均相良・渋谷、易御退治可難成由為訴、雖然予被任申旨、永禄十年丁卯十一月廿四日、被催大行軍、　貴久公為御将軍自栗野有御發向湯尾、予亦従飯野打立、領馬越境窺菱刈兩院之躰、不意續松不盡數往、扨者隠謀相顕歟士卒成疑敢不進、不思儀哉、是者氏神稲荷大明神之寄火也、於當家佳瑞其例多、兩院者無理可属幕下不可疑由、暁諸軍兵即寄懸馬越、放火麓廻、揚吐気聲、従城内合吐気聲、數刻相戦、以多勢入易々依攻懸、難叶相見處、自本丸斬出進退寄手軍兵、予於是渡合強敵、懸手數多討捕、見之而士卒成勇攻入、城主及所楯籠人數不残討果畢、▽右此末可有、右之分本書ニ有之故寫之、本書ニ黙并假名雖有之、甚誤多除之△

天正十年壬午、八城　義久公御知行、

天正十一年癸未、肥州八城表花之山陣三船詰崩、木脇殿御奉公地頭也、

天正六年戊寅三月三日、日州高城之内石之城手換、六月陣着、九月廿九日　義久公知行、十月廿日、豊後衆六ケ國之衆同前高城陣着、十一月十一日、松山之陣倒、翌日皆廢亡、薩隅之人衆日州ェ移、天正十四年丙戌、薩隅日之軍兵數十万騎豊後入、十月十五日、日向口・肥後口　義久公御知行、

義久公御書　写

今度唐入之儀被仰付、既武庫父子被致渡海候之上、拙者亦名護屋江可参由承候之條、即應其儀候、寔数年在京故、國家雖令困苦、各以熟談、高麗江之見次并名護屋在陳、京都調其外執代等、又者船手之儀、夜白無油断可指上事頼入候、當家一難儀相及事眼前候、然処不入精仁有之者、任京儀可致其成敗候、併各於入魂者、當家可令連續之条、弥才覚専一候、仍證跡差出候之上者、縱令雖有無理之儀、國家之為たらハ、善悪可同心之間、可心易候、然時者捨遠慮可扱者也、仍状如件、

天正二十年　　龍伯在御判

五月四日

伊地知伯耆入道殿

本田右衛門佐殿

新納旅庵殿

山田越前入道殿
税所越前守殿
鎌田出雲守殿
本田因幡守殿
川上参河入道殿
新納武蔵入道殿
平田美濃守殿
町田出羽守殿

（本文書ハ「旧記雑録後編一」八七八号文書ト同一文書ナルベシ）

4の1

諸家文書写

今度上洛、殊種々逸切（旧懇）之儀、本望候、委曲如申候、家門之事、弥可然候様以馳走、必〻來年上洛待入計候、執成肝要候也、かしく、

七月三日　（花押）

古市長門守とのへ

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六八一号文書ト同一文書ナルベシ）

4の2

先年貴久公被任陸奥守、予亦号修理太夫義久刻、光源院様御取次之方迄遣使之儀、最上長門掾へ被仰付、京都之旨趣申調早、剰善左衛門尉事、近年息女依在京、為警固之者被召列、両度辛勞之至、于今條〻無忘却者也、依状如斯、

慶長十二年十月廿四日　龍伯　（花押）

最上善左衛門とのへ

（本文書ハ「旧記雑録後編四」四〇三号文書ト同一文書ナルベシ）

4の3

雖未申馴候、一札令啓上候、抑今度古市長門守上洛候而、御官位并上意之御字相調候、萬〻目出度令存候、當寺之儀、御家門様被懸御目候条、向後御用之儀蒙仰候者、可致馳走候、就中雖少札候、青蓮院宮被遊候百人一首令遣（旧進）上候、爰許之儀、実情（旧清）可申上候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

七月十八日　法印日承（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六八三号文書ト同一文書ナルベシ）

4の4

好便之条馳筆候、家門事對其國旧好吳于他儀不珎候、

連〻無疎意馳走之段、執成頼入候、依色紙三十六枚雖其憚多候、書進之候、委曲頼申含古市長門守候也、状如件、

六月廿七日　　（花押）

日新軒

平田豊前守とのへ

川東善左衛門とのへ

4の5

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六七四号・「同後編一」二九七号文書ト同一文書ナルベシ）

下國以後者不通候、無何事令着陣、武庫様懸御目、多年之本望此事候、龍伯様御無事御座候哉、旦暮御床敷奉存候、抑両人事就奥方別而頼置候、定可為辛労候、心よわく遠慮なと候而、緩なる儀共於有之者、後日ニ至両人稠可令其沙汰候、女方之儀者、平生法度たゝしき家中も、人間之迷而不可然儀共出合、外聞悪儀毎事有之事候、況御家内之儀者ゆるかしき由、兼而承及候間、いさゝ□（か）もうつけたる儀ハ見及聞およひ、切〻不寄男女可申聞候、誰（ニ）く而も候へ、りくつたてなといひ候ハん仁ハ、心付（以）可申越候、龍伯様御座候間、達不及申候へとも、帰朝之刻留主躰様可相尋候間、兼而如此候、不可有油断候、恐〻謹言、

霜月十六日　　▽忠恒（花押）△

5

（本文書ハ「旧記雑録後編二」一四二二号文書ト同一文書ナルベシ）

吉利家由緒書

私事身上差迫申候ニ付、去〻年十二月、御訴訟為申上置趣茂御座候へ共、未何分与不被仰渡候、然者身躰漸〻与禿入申事ニ罷成候故、不顧其憚又〻奉訴候、私家之元祖者嶋津三郎太郎國久三男嶋津伊勢秀久与申者ニ而、乍憚御末流故、侵御名字、鹿籠を領地仕罷在候、其子治部忠将事者　日新様御妹聟ニ被召成候故、忠将子右衛門久定者、乍恐　貴久様江御由緒御座候、右衛門吉利を拝領仕候ニ付、右衛門子下総忠澄代より吉利を家号与改申候、忠澄子下総忠張事者、　泰清院様御誕生被遊候節、御産之弓被　仰付、首尾好相勤申、冥加至極奉存候、忠張子山城久在迄も川邊之内野崎村・市來之内湯田村を一所之地に被下置候、代〻於御奉公者、治乱之時節共相應之勤をも仕候、其訳ハ先比委細申上置候、事長儀ニ御座候故、此節者差扣申候、於私

茂御番頭迄被仰付、只今茂一所衆之列ニ被召置候、右之通代〻忝被召仕為被下一筋之者ニ候處ニ、別而逼迫仕、當時少高ニ罷成候故、何程簡略仕候而も年〻借銀相重、當日家内を養申へき方便一圓無之、必至与差迫申候、私事者最早年罷寄候、嫡子杢(忠儀)之助事者先き〳〵似合敷御奉公を茂為相勤申度念願奉存候間、何卒被加御憐愍、一節相應之御扶助米をも被仰付、先祖一筋之名跡を御立置被下度、偏ニ奉願候、右之趣を以、成合申候様御披露奉憑候、以上、

(元禄十四年)巳十二月　　吉利治部(忠名)

6

平田家調書

平田民部左衛門嫡子平田平六事、平田民部左衛門家代〻御太刀進上仕來候間、平六事も御太刀進上ニ而　御目見被仰付度旨願申出候ニ付、相調可申旨被仰渡候、民部左衛門家者平田監物家之二男ニて御座候、監物家之先祖者平田氏嫡家美濃守重宗之二男民部少輔宗保与申者ニて御座候、宗保直孫安房介宗知之二男民部少輔宗貞与申者、是民部左衛門家之元祖ニて御座候、宗貞嫡子豊前守宗祇、其直孫民部左衛門宗直、其子民部左衛門宗増、三代所〻地頭被仰付候、宗増事當民部左衛門亡父ニ而御座候、右之通代〻地頭職被仰付、宗増事者吟味役迄為被仰付事ニ御座候、平六事不相替御太刀進上被仰付可然与相考申候由、

(元禄十六年)未七月　　市來源右衛門(家年)
肥後仁右衛門(盛香)

7の1

高城家由緒書大意

私此節名替仕候御礼御太刀進上仕申上度奉存候、私家筋者、渋谷家之内高城惣領ニ而、川内高城を領、代〻連續仕候、先祖之内九州評定衆列之内ニて候由、私六代之祖高城武蔵守(重治)与申者、　龍伯様御代祁答院良重与御和睦之儀、武蔵守以謀計相調申候ニ付、栗野江被召出御奉公相勤申候、其子高城左京(重説)事長野地頭被仰付、朝鮮國御征伐之刻御船奉行被仰付、三原諸右衛門(重種)同役ニ而差渡、帰朝仕候節功労仕候、依軍忠御知行拾斛被下候、私曽祖父主馬事御兵具奉行被仰付候、私祖父喜左衛門事も方〻御奉公仕候由段〻、但是より奥ハ高城

六郎右衛門茂初而之　御目見中紙進上仕候、當十郎兵衛茂初而之　御目見中紙進上仕候へ共、此節者御太刀進上被仰付度候由之願事ニて候、

右之通、高城十郎兵衛於江戸致名替、御礼之節御太刀進上被仰付度との願申出候由ニて、元禄十六年未七月、江戸御家老衆より御引合有之、しらへ之儀御記録方江被仰渡候事、

右高城十郎兵衛家筋調書

高城十郎兵衛家之儀者、渋谷庄司重國嫡男太郎光國(重カ)六男六郎重貞元祖ニて御座候、光國嫡男武蔵權守實重事者関東ニ罷在、其弟五人東郷・邪(祁)答院・霾田・入來院・高城、寳治年間薩劦ニ罷下、兄弟五人銘〻一所之地を領、其号を相立、薩劦之御家人ニて候、是を渋谷五家与唱申候、重貞事高城を領、高城六郎与名乗申候、就中下野權守重雄与申者足利将軍之時鎮西之評定衆ニて御座候、永禄年間迄者高城を傳領仕罷在候、十郎兵衛高祖父左京事、朝鮮國に船奉行ニ而罷渡候由申出候、御帰朝之節、敵船海上に浮出候ニ付、他之手より船一艘も出候儀不罷成節、各致参陳、別而軍労仕候ニ付、深く感思召候、依此忠節御知行拾斛被下候由、其時之御家老衆御證判致頂戴罷在候、且又左京事長野地頭職被仰付候由、家傳之趣書出候其通ニ可有之候へ共、御記録方ニ者未見當不申候、其子主馬(重貞)事御兵具奉行相勤申候、其子喜左衛門迄者御太刀進上仕來候得共、六郎右衛門中紙進上ハ無調法ニ而御座候、六郎右衛門・十郎兵衛小番騎馬をも相勤申候得共、零落為仕儀ニ而も無之候間、十郎兵衛願之通、御太刀進上被仰付可然与申談候由、

九月三日　　田中五右衛門(国明)
　　市來源右衛門(家年)

種子島家調書

種子嶋善左衛門小番願申出候間、相調可申上旨去巳年被仰付候得共、善左衛門事此節喜界島被致渡海候間、罷上候砌家筋等承達候而相調可差出由申上置候処ニ、善左衛門罷帰候処、此節相調差出申候、善左衛門家者、種子嶋氏之庶流川東氏之娘嫡家種子島家中ニ罷居候処、

種子島左近将監時堯息女　義久公御簾中ニて御座候ニ付、御局役ニて致勤労候故、御知行三百石拜領被仰付候而、最上長門守末子を養子に仕候得共、女子之家者不被召立御法故、局之父種子島家臣川上太郎左衛門二男家ニ相立、川東善左衛門（時弘）と申、後ニ北条善左衛門与申候、百引地頭職被仰付、其後嗣善左衛門（時常）者阿多掃部子ニ而御座候、御兵具奉行相勤、右之直孫善左衛門（時方）種子島相改申候、右通之家筋ニてハ御座候得共、先祖地頭職迄為被仰付故を以親善左衛門（時豊）迄小番勤來、善左衛門　御目見仕候節茂御太刀進上御免被遊候、然者家衰微不致、相應之御奉公相勉仕合ニ御座候ハ者、不替小番被仰付儀ニて御座候得共、身躰致逼迫、善左衛門事田地方輕き御奉公抔相勤申候、右通致零落候家者小番御免被遊間敷儀与相考申候、以上、

（元禄十六年）未九月六日

御記録所

市來源右衛門（家年）
肥後仁右衛門（盛香）
田中五右衛門（国明）

9

土持家調書大意

土持次郎九郎申出之通、古昔日州縣之城主ニて候与相見得申候、家筋之儀者申出之通相違無之候、志岐氏ニも其先き志岐之城主ニ而御座候、右之城主故を以御番御免ニて候哉、志岐家者御番相勤不申候、然者土持家も同前御番御免被成候方ニも可有御座哉、乍然田尻金右衛門家筋者秋月家ニて、筑後柳川之城主ニて御座候、没落之後　御家ニ罷出候、志岐・田尻両家共同格に年頭之年頭之（衍カ）御太刀進上被仰付候、田尻家者小番相勤申候、ケ様成儀者平等ニ無之欤与存候、前方小番者差立候面〻ニ被仰付候、御家老之子共も小番被相勤申候、一所衆之中ニ而も小番被相勉申候、寛永年間組頭被召立候而より、組頭・小番与相分り申候、組頭一所列外之面〻者御番御免可難被仰付候、乍然御番御免之面〻其通ニ被仰付置儀候ハ者、次郎九郎事も同前ニ御番御免被成度儀与相考申候由、

右達　貴聞、土持次郎九郎書物被　御覽置候、次郎九郎此節御番入被　仰付之旨可申渡由　御意候との趣ニ有之候、文字續キハ違可有之候へ共、一筋者相替儀無

之事、

未九月十二日書之、

諏訪家由緒書大意

10

上略

私先祖者上井伊勢覺兼弟上井次郎左衞門入道傳齋秀秋、惟新様飯野江御在陳之節御心易被召仕、御家老職被仰付、其子上井次郎左衞門里兼、初神五郎与申候節より御家老職被仰付候、其子市正（兼道）、其子者私養祖父采女、引續御使役被仰付候、采女事者、先年於江戸御犬追物之節射手方ニて、将軍家御目見被仰付候、右之通御家老役相勤申候、将軍家御目見をも為被仰付一筋ニて御座候間、此節名替之御礼御太刀・二種一荷進上被仰付被下度由、

右之書物、諏訪市右衞門より被差出筈候処、名替候者（ママ）太刀迄進上ニて、二種壱荷之進上無之候、組頭列一所列も其通候故、市右衞門も願不被申出被差扣候、

未九月廿三日書之、

11

新納家・本田家調書

新納喜右衞門（久行）嫡子新納松助（時有）、本田六左衞門嫡子本田助六事、於　御前元服被仰付筈候間、右両人之家筋見合可申上被仰渡候ニ付、左之通ニ御座候、

一新納喜右衞門元祖者、新納家二代之家督越後守實久二男悪四郎久顯ニ而御座候、實久長子久吉者他腹之処、大崎与家号を相立申候、久顯事者雖為嫡子故有之、不致家相續、居城志布志を去肝付ニ立除申候、後ニ者外舅を頼豊後佐伯に罷在、於彼地生害ニ而候、依之實久家督者久顯次弟近江守忠臣被致相續候、左候而、久顯之霊を忠臣志布志大慈寺中江臨大明神与崇為被申由候、此一流於新納嫡家差次之家ニて御座候、久顯嫡子致出家、佐伯より志布志江罷越、大慈寺江罷居候処ニ、元久公（氏）以　厳命拾三歳ニて致還俗、号十郎忠泰、後ニ兵部太輔、越後守与号候、新恩地六拾町被宛行、被補三俣院高城地頭職候、其子刑部（ヵ）少輔忠親同地頭職ニ而、志和地ニおひて致戦死候、其子越後守孝久、其子十郎忠堯、其子越後守忠誠与致連續候、忠誠事奉仕　貴久公、其子越後守忠包事　義久公御代被補所〻地頭職、

其子孫右衛門教久　惟新様致御供朝鮮ニ罷渡、御船奉行相勤申、且野尻地頭相勤申候、其子十郎久景、後越後守与申候、右十郎事　義弘公被加　御誓詞候御書頂戴候、其嫡子休左衛門久方、二男當喜右衛門ニ而御座候、兄弟共　中納言様御加冠ニ而元服被　仰付、御脇差為致▽㊫拜領△由候、休左衛門事病氣故喜左衛門(㊫右)致家督、地頭職、御用人御役迄被　仰付候、喜左衛門(㊫右)嫡子十郎事(久規)茂御加冠ニ而元服被仰付、御脇差致拜受候、是松助亡兄ニ而御座候、

一本田六左衛門元祖者本田古簾与申候、古簾事出所不相知候故、於本田家幾男家与難相定候、古簾嫡子下野守親尚奉仕　日新公、被補伊集院之地頭職候由、自家之系圖ニ相見得申候、然共於當座者書付書付(衍カ)等之内見當不申候、右下野守親尚嫡子民部少輔与申候、民部少輔・嫡子志摩之助、両人共家督相續仕器量無之故、親尚次男弥六親貞家統を續申候而、地頭職被仰付、於所〻軍労仕、後ニ下野入道三省与申候、　龍伯様御家老ニて御座候、三省事直子無御座候ニ付、嫡流本田大炊太夫親兼次男蔵之丞親兼(㊫孝)養子仕、家致附属、其子伊豫親正与申候、曽木・福山等之地頭職被　仰付、嫡子長七郎(次カ)親宣事於　御前元服被　仰付、御脇差拜領仕候、右親宣女子壱人出生仕、男子無御座候処ニ、親宣弟大学親秀兄弟共ニ早世仕候、依之三番目之弟六左衛門親武家相續仕、　御前元服被　仰付、御脇差拜領仕候由、自家之系圖ニ記置申候、右親武地頭職被　仰付、御用人御役相勉申候、右六左衛門親武嫡子六之助親堅致早世、其弟當六左衛門親方家督罷成候、其子助六ニ而御座候、

右両家前後之次第茂右之通ニ御座候、以上、

御記録所

(元禄十六年)
未十月四日

市来源右衛門(家年)
肥後仁右衛門(盛香)
田中五右衛門(国明)

有馬勘助家筋由緒書大意

12

一元祖者　忠久公御供仕罷下候、其已前より歴〻之者ニ而候由申傳候、先祖共諸所之押ニ被召移候節、類火に逢文書等焼失仕、委敷儀相知れ不申候付、家傳之趣委細を不申上候、

一七代之祖有馬軍弥左衛門事軍奉行被　仰付、　日新様御代方〻之合戦仕、無類相勉申候、伊地知方御攻被成候手形出申候節、何方ニ而軍労仕候七人　御身命ニ相替可申由、立願文金峯山江込申候、馬越堂崎ニて御合戦之節、相働戦死仕候、辻大蔵左衛門同前戦死仕候、此段者彼家ニも相知レ有之候、薩陽軍記ニ何〻与相見得申候、其子又次郎戦死仕候、二男ハ他家之養子ニ遣候故、三男を跡目ニ仕、有馬三左衛門与申候、龍造寺隆信与御合戦之節も罷立、殿をも相勉申候、豊後・肥後方之軍労仕候、高麗ニも罷渡候、慶長三年、家康将軍様へも御目見仕、御時服拝領仕候、其子仁右衛門高弐百八拾石所持仕候、浮得奉行被仰付候、江戸代官役をも▽㊥相勉申候△、唐船奉行茂被仰付、罷下候節中途何方ニ而相果申候、其子有馬治右衛門御普請奉行被仰付候、高弐百何十斛有之候、其子仁右衛門者私親ニ而御座候、

未十月

13

有川吉兵衛家筋由緒大意

私先祖者野崎對馬入道長阿与申候、拾弐歳之時鍋太郎与申候、伊十院粧(荘)厳寺弟子ニ而、彼寺江罷在候、伊集院城内江粧厳寺折〻祈禱ニ被参候節相付候而参、城内をも能存罷在候、其後右之城御攻被成候得共落不申候、依之鍋太郎事者折〻彼城江参候而案内存候間、忍入火を指シ可申由被仰付、城内に忍入火を指候ニ付、心安右之城御攻落被成候、就夫御羽織・御銀等拝領仕候、其後伊集院之内清藤を被下、彼地ニ罷在候、其子野崎吉左衛門与申候、伊勢兵部殿与力役相勉申候、高四百斛余所持仕候、騎馬与力役ニ而候、右清藤之高于今三石余持留ニて候、野崎名字者不栄候ニ付、兵部殿より有川名字被為免、右之吉左衛門事、後ニ有川吉左衛門与名乗申候、兵部殿免證文于今有之候、其子五左衛門方〻騎馬之御奉公相勉申候、當吉兵衛若年之内、五左衛門弟太郎左衛門事も番代仕、騎馬ニて方〻御奉公相勉申候、

未十月

最上家ニ有之由

初夏之比、最上宗檜御使僧相良方江被差下候、誠(田)之被添御心候、畏入存候、其後依御無音候、為使僧花舜軒被罷出候、可預御取会、先〻豊前表之干戈御和融之由及高聞候、尤目出度存候、然者田舎堺江一途御校量之事被頼存候、雖然依豊前境御取乱、于今御延引候哉、和平之上者可為此功(田切)候、随分(田而)相良當方数年申合、頃者如何様之被(田狭)捽心底候欤、對當家被求疵、剰格護之在所へ一ケ度被(田)餡(田脂)候、雖如此候、正(田心)遺恨漸調迄候、如當事奸於不正者、向後者以伊東同心可取企鉾楯事必定候、相良方江如舊談被仰付、可為一味之由所仰候、最前如申、出(田土)持境江御働本望候、自然於事延候者、伊東當方和与之御調儀彼是可得御意候、巨細彼僧長門江申達候へく条、麁毫候、

九月日

張紙ニ

追而見来候侭、緞子五端御中江被遣候、寔表志計候、

大友殿年行中江此方老中より

15

深見氏書付

覚

一私儀祖生者薩摩之者ニて御座候、父深見休兵衛与申者、此前吳國往來自由之節大明江渡海仕、拾ケ年餘(中逗)逼留仕罷帰候、當地馬場三郎左衛門様御奉行之節、休兵衛儀右之由緒を以被召寄、唐人大通事役被仰付之、十五六ケ年相勤、病氣仕候、

一私師匠者黄檗獨立ニ而御座候、幼年より獨立一生致随侍、醫道的傳仕候、獨立死後為療(中養)用京都江滞留仕候、

一貞享乙丑之年、松平大隅守殿より呼被申、拾ケ年之間相勤、甲戌之年、私願ニ付暇を得申候、夫より只今迄當所江罷在候、私兄深見休泰、姪深見覺左衛門・深見新助等、今以薩州ニ相勤罷在候、以上、

未八月七日　　深見元泰

16

若松家由緒書

一若松家之儀御尋ニて候、伊作家之二男家ニ而、若松(久)次

右衛門家嫡流ニ而御座候、若松平八左衛門家者次右衛門曽祖父民部左衛門嫡子新兵衛与申候、弁官新右衛門与申人之養子ニ被罷成、若松家者二男助左衛門被致相續候、是次右衛門祖父ニて御座候、然處ニ、右新兵衛一子十左衛門事叔父助左衛門弟分被仰付被下度旨　光久公御代願被申出、御免許ニ而若松十左衛門与号、御太刀・青銅進上ニて御礼被申上候、右養子十左衛門、実父者大口衆中ニて候処ニ、養子に被仰付由候、是平八左衛門亡父ニ而御座候、以上、

（亀）（長鑑）（親康）（久宗）（久盛）（親安）（久昌）（久東）

未十月六日（元禄十六年）　　市来源右衛門（家年）

17

筑後・肥後両國之住人九州記ニ相見得候面々

一筑後國之住人但山下之住人　　蒲地志摩守鑑廣

一肥後國之住人関山之城主　　大津山河内守

一同國和仁之住人　　和仁丹波守

18

平田九郎右衛門家由緒大意

一右家筋者源家之平田ニて、平氏之平田与者呉姓ニて御座候、古系圖文書無之故、以前之儀者相知レ不申候、九郎右衛門六代之祖治部少輔純貞入道純喜より相見得申候、純貞嫡子十郎次郎、二男九郎右衛門ニて候、十郎次郎天文年間於日州飫肥伊東家御合戦之時於業毎辻遂戦死申候ニ付、弟九郎右衛門嫡家相續仕候、元亀二年六月廿三日　貴久公被遊御逝去候ニ付、為菩提六十六ヶ國遍暦仕、翌年三月御跡奉追、此上之海上ニ飛入殉死仕候、此時純貞申候ハ、伊東者我太守之怨敵也、且ハ嫡子十郎次郎も為右遂戦死候由、切迷止勇氣向東方呪咀仕、海ニ飛入候由、　貴久公御譜之中ニ記置被申候、九郎右衛門嫡子休右衛門、弟清右衛門ニ而候、休右衛門死去、弟之清右衛門嫡家相續仕候、清右衛門者　中納言様江奉仕、納殿役相勤、両度ニ知行百斛被下候、　中納言様御病中　寛陽院様江戸江被成御座候、此時　御家之御重物愛染明王・摩利支天・鷹巣御鎧刀・眞利御刀・光忠御刀御譲被遊候、江戸江之御使清右衛門相勤申候、正保年間より御記録奉行被仰付、御系圖御記録編集仕候ニ付、御知行百斛被下候、清右衛門子九郎右衛門、其子清右衛門、其子當九郎右衛門ニ而候、

（本ノマヽ、歯カ）（純次）（純正）（世カ、本ノマヽ）（純直）（純音）（純旨）

清右衛門御用人役、諸所地頭職被仰付候、
右調之通候へ者、前代之儀相知不申候、六代之祖治部より相見得候へ者、御太刀・二種壱荷進上候様ニ者難被仰付候間、御太刀迄を進上仕候様被仰付候而可有御座哉与相考申候由、

（元禄十六年）（ヰ十）
未十二月廿八日　　肥後仁右衛門（盛香）
田中五右衛門（国明）

19

大山家由緒但文章覚違可有之候、尤本書ニ此書付よりも委細有之也、

一大山氏系圖無之候処、所目出不相知候、大山織部（経綱）与申者より相見得申候、織部事者　貴久公奉仕、方〻（ヰ）労軍務候、天文廿三年　貴久公自将ニて帖佐之岩釼之城御攻被成候節、織部事平松之星原与申所ニて遂戦死申候、一織部子大山金藤（次綱）、其子大山新藤（幸綱）与申候、　惟新様被召仕、方〻ニ而科人抔を御討せ被成候、或者を打申候節、稲からに蹈かゝり倒申候を新藤打果申候、其時稲助与名を被下候由、髪を一世ちやせん髪に結候儀者、御感状被下候儀ニ申替候而右之通御座候由、稲助代〻本名之由申上、佐〻木名字ニ罷成候、稲助子何某、其（ヰ）養子

20の1　20

當勘右衛門ニ而候、稲助事者高麗江御供仕、御兵具奉行相勤、本田隼人ニ役儀相渡候由、其身書付置候得共、只今之兵具奉行与者相替、成程かろき事ニ而御座候、
一大山三次（綱宗）事者稲助弟ニ而候、上方表ニ而すり切を仕候様ニ風聞有之候ニ付、何となしニ被召下候、其身ニも心元なくそんし罷在候処、大坂川口ニ而順風相待罷在候内ニ、三次昼寝を仕罷在候処ニ、船のやくらより水主之者怪我に落掛候を、三次心には我を取候与心得、右水主共を餘多切付候、依之其身よりも切腹可仕与申候、上よりも被仰付切腹仕候、夫より跡不召立候、今更三次跡可被召立儀ニ而無御座候、

（元禄十六年）
未十二月日　　肥後仁右衛門（盛香）
田中五右衛門（国明）

二十五家御記録方調書

三原諸右衛門嫡子
三原次郎四郎

一右家者、肥後國（兼地）（ヰ菊池）之領主将監則隆三男警固太郎・四男兵藤太夫筑後國三原之城ニ住居仕、三原を致家号

候、左衛門督直重与申者初而罷下候、其子孫伊作家に被召付候、三原遠江守入道昌安重秋　日新公御家老ニ而、　貴久公御當家御相續被遊候節、従　日新公被召附候、為御家無別心抽奉公候、　貴久公　義久公迄御三代之御家老ニ而候、昌安子備中守重種朝鮮國ニ罷渡、大坂御陳ニも罷立、庄内御陳ニも相詰、別而軍労仕候、慶長十七年、御家老職被仰付候、其子左衛門重庸寛永十二年御家老職被仰付候、殊ニ嶋原ニ而抽衆候働有之候、上使松平伊豆守殿より諸諸軍（衍カ）江被仰渡候御條書左衛門佐相廣候様ニ伊豆守殿より被仰渡、相廣被申候儀及数度候、此勤ニ付伊豆守殿より御褒美被成候、何様之訳ニ而候哉、重庸寺領被仰付候、其子遠江重何（時）、其子諸右衛門重何（尚）、其子當次郎（重房）四郎ニ而候、三原之嫡家ニ而、暦〻ニて候、▽（廿）且亦△貴久公三ケ國之太守ニ御定之時被召附、無別心相勤、両代迄御家老職ニ而、重庸嶋原ニて抽衆被相勤候、暦〻之儀候間、其身者御太刀迄を願被申出候へ共、御太刀ニ二種壱荷相添進上仕候様ニ被仰渡可然儀与相考申候、

20の2

本城源四郎嫡子
本城

一右家者中務太輔家久二男源七郎忠虎子孫ニて、嶋津中務殿二男家候間、勿論嫡子者御太刀進上被仰付儀与相考申候、

20の3

大嶋清太夫二男
大島

一右清太夫家筋者　御家四男家ニて、暦〻之儀候、依願年頭茂内〻御座ニ而御太刀進上被仰付候、清太夫嫡子者死去仕候ニ付、二男を嫡子ニ申上候、三男者桂氏之養子ニ罷成候、右何某者四男ニて候へ共、右之訳ニ付而二男ニ罷成候間、御太刀進上被仰付可然与相考申候、

20の4

新納仁左衛門嫡子
新納弥右衛門

一右家之元祖者新納治部六代之祖伊勢守久康（饒カ）弟休閑齋旅庵ニて候、始時衆之出家ニて、肥後國何寺ニ罷在候、便口發明ニ有之候ニ付、天正十五年　義久公被召出、刀大小被下之還俗被仰付候、其後新恩之地をも被下、

御家老職被仰付候、朝鮮國ニも罷渡候、御國元方〻御使等相勤、別而抽忠勤候、其後関ヶ原之御供仕候、旅庵・本田助(親貞)之丞鞍馬寺ニ忍居候処、関ヶ原落人奉行山口勘(直友)兵衛殿・能勢何某殿與力抔江被捜出候而、石田之與同被成候儀を被詰問候、旅庵・助之丞宜申上候由、別而忠義之段〻御記録方調書ニ有之候へ共、此座ニ不及記候、旅庵女子壱人有之候、川上因幡久國弟仲(忠雄)左衛門ニ嫁候而跡相續いたし候、仲左衛門事御用人役、地頭職被仰付候、其子仁(忠影)左衛門諸所地頭職被仰付候、其子當弥(時昭)右衛門ニて候、勿論代〻御太刀進上仕筈ニて御座候間、此節弥右衛門御太刀進上被仰付儀与相考申候、

20の5

伊集院四郎兵衛

一右家者、伊集院嫡家弾正忠頼久四男大和守忠(倍久)何、其子大和守忠公、是幸侃四代之祖ニ而候、忠公二男周防守忠成、其子八郎忠何、其子宮内少輔忠昭　義久公御代財部移地頭被仰付候、其子助右衛門忠何朝鮮國江も罷渡候、其後高岡之押被仰付、彼地江罷移候、慶長十一年、御犬手組ニも被召入候、其子九郎忠康、其子宮内少輔忠鎮吟味役、何方之地頭、穆佐之移地頭をも被仰付候、此嫡孫當四郎兵衛ニ而候、御太刀進上仕來候間、四郎兵衛ニも不相替御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

20の6

伊集院嘉左衛門嫡子
伊集院

一右家者、嫡流伊集院弾正忠頼久三男上野介久胤嘉左衛門家之元祖ニ而候、久胤一旦薩州家之家臣ニ罷成候、久胤子三郎左衛門延久二男加賀守久何(実)、其子加賀守久何(信)、其子内蔵人久近、其子長右衛門久何(友)、其子長左衛門久何(康)、其子當嘉左衛門ニ而候、延久者薩刕之家臣ニ罷成、後ニ帰参仕候、延久嫡流者大崎衆中伊集院少左衛門与申候、一旦倍(陪カ)臣ニ下り候得共、延久嫡子五兵衛与申者之代ニ財部地頭職被仰付候得者、此時御取立為被成与相見得申候、嘉左衛門家ニ一節とても地頭を為被仰付儀者無之候、伊集院家之三男之二男家与申迄ニ而者御太刀進上難被仰付候、長左衛門・嘉左衛門両代御太刀進上仕候儀者何故を以右之通候哉、當嘉左衛門吟味役被仰付候へ者、嫡子何某儀者御太刀進上仕候義

与相考申候、

20の7

比志嶋伊角養子
比志島兵次郎

一比志島家者、村上三郎左衛門尉頼重薩州満家院ニ配流仕、満家院郡司大蔵氏永平娘に嫁候而、左衛門尉重賢入道栄尊出生候、永平男子無之、外孫重賢江満家院を致附属候、　忠久公栄尊江被下候御證判嫡家ニ格護仕置候、兵次郎家者、嫡家九代之祖河内守義何(重)二男美濃守義何(方)、其子美濃守義何(住)二男宮内少輔國眞、其子紀伊守國貞方々致軍労抽忠勤候、　義久公御家老職相勤候、其子宮内少輔國何(隆)茂　家久公御家老職被相勤候得共、氣侭ニ有之仕形不宜候ニ付、種子島江流罪被仰付、於彼地御討せ被成候、其子内記(國安)者屋久島江流罪被仰付、宮内少輔跡者被召禿候、紀伊守別而御奉公被相勤候故、嫡家比志島監物(義之)ニ新恩之地(ヰ五)百斛被下、紀伊守跡被召立候、其跡比志島善八(國英)ニて御座候、監物跡者同名左京(義時)致相續候、内記義之被召直候節、善八家之二男家ニ相立候、然者宮内少輔跡者被召禿候間、伊角　御目見之節御太刀・三種二荷被仰付筈ニ而無之候処、其節御吟味無之為被仰付ニ而可有御座候、此節兵次郎江者御太刀計進上被仰付可然与相考申候、

20の8

田尻金右衛門嫡子
田尻嘉兵衛

一右家者大蔵(ヰ姓)性ニ而、原田・秋月・高橋抔一姓ニ而、筑後國致(ヰ各)領候、田尻氏者柳川之城主ニて候、田尻中務太輔鑑種後ニ丹後守与名替仕候、鑑種迄柳川之城主ニて、天正八年、肥州水俣御討取被成候而御手廣罷成候ニ付、國境之儀御頼被成候由被仰遣候、鑑種(ヰ無)事御心置被仰聞候段忝奉存候、境目之固目可仕被申上候、鑑種此方江御身方被仕候儀龍造寺隆信被承、柳川之城ニ押寄責被申候、男女四十人餘責殺被申、城中堅固ニ有之、責被申候儀不相成候、城中より切而出候人数も無之、三ヶ年籠城ニて候、此方より為御加勢、伊集院若狭・帖佐彦左衛門・瀧聞越後・田尻荒兵衛・谷口長門・矢野出雲・川端甲斐・本村淡治(ヰ路)・柏原将監、其外已上軍衆三百人為加勢被遣候、何れも及竭命候ニ付、軍衆帰

陣為仕候、此時　忠平公より鑑種に御書被遣候、隆信より和談之儀被申調、其後鑑種被討捕候、幼稚之子有之候、隆信方江質ニ取被申候、嘉兵衛与申候、後ニ右之子を可相(ヵ打)果由候処、隆信袋頻ニ望有之、命を被助置候而出家ニなし、名を自然与申候、隆信方ニ居被申候処、自然被存候者、眼前之親之敵ニ而候得者、彼方ニ居候義残念ニ被存候、此方様を可奉頼心差ニ而、先大友家ニ母方之外叔父本庄半太夫者大友家老ニ而候、半太夫所江罷居、本庄新右衛門与名乗被申候、半太夫より新右衛門を大友家ニ仕付、一廉知行を被遣へき由申候而、大友より家之字を遣、統種与相改申候へ共、此方様を心差罷在候ニ付、大友家ニ者断を申候而、豊後之内に致蟄居罷居候、田尻嘉兵衛与名乗申候、其後加治木江被参、　惟新様江被召仕度由被申上候、此時御前江被召出、柳川城責之儀者何年程ニ罷成候哉与御意候、三拾年程ニも可罷成よし被申上候得者、夫程ニ罷成候半与の　御意ニて候、左候而、比志嶋河内を以被　仰聞候者、直ニ可被召抱候得共、御隠居之御事候得(ヵ者)共、鹿児島江御相談をも可被成候、先豊後江罷帰、一左右を相待可申由被仰聞、河内相伴ニて御料理被下、御馬をも拜領仕、豊後江被罷帰候、其後嘉兵衛夫婦子共合五人・家来百人程召列、又〻被罷越候、串木野江着船ニて加治木江参上、従　惟新様比志島紀伊守を以て被仰聞候ハ、嘉兵衛事先市來之江口江罷居候様ニ与被仰聞、江口江被遣置候、為勘忍料年〻米五拾石百斛ツヽ被下置候、紀伊守を以被仰聞候ハ、御知行をも可被下候由緒も有之人人(衍カ)候得者、一所之地をも被下度候へ共、御隠居之事候間、鹿児嶋江御相談被成可被仰付よし被仰聞候処、追而　惟新様御逝去候、比志嶋紀伊守も相果被申候、其後嘉兵衛事伊集院之内ニも罷居申候、　中納言様江御目見仕、右之訳を以御知行百五拾斛被下候、其已後も為御加増百五拾斛、合三百斛被下置候、　惟新様被　仰出候通ニも無之候ニ付、責而由緒を申上、自家ニ残置申度候由願申上、年頭之御太刀進上被仰付候、嘉兵衛嫡子孫七早世故、二男八兵衛家督致相續候、其子當金右衛門ニて、于今年頭之御太刀進上不相替被仰付、金右衛門亡弟喜右衛門始而之　御目見ニも御太刀進上被仰付候間、此節嘉兵衛江者弥以

不相替御太刀進上可被仰付儀与相考申候、
但右調書本書者八行書料紙(ウ折)五枚ニ書記、事長く委敷
記付有之候へ共、一筋ニ相違無之様ニ書留置也、

20の9

伊集院造酒右衛門嫡子
伊集院猪右衛門

一右猪右衛門嫡子成之御礼御太刀進上之願申出候、造酒
右衛門親伊右衛門御用人役、地頭職被仰付候、造酒右
衛門儀も御目付役、地頭職被仰付置候得(ウハ)共、猪右衛門
事此節不相替御太刀進上被仰付儀与相考申候、家筋之
調者、先比造酒右衛門弟伊集院覚左衛門嫡子　御目見
願之節相調差上候間、再記ニ及不申候、

20の10

酒匂大蔵兵衛嫡子
酒匂利兵衛

一右家督之御礼御太刀進上仕度候、親大蔵兵衛茂御太刀
進上仕候由申出候、酒匂氏系圖之儀、利兵衛家ニも所
持不仕、脇々江も有之候得共、信用難致系圖ニ而候、
酒匂氏之儀、　御元祖　忠久公御當國江初而　御下向
之節、御沓之奉行ニ而御供仕罷り下候由、旧記ニも相
見得申候、本田氏・酒匂両氏　忠久公御家老職相勤候
与相見得候へ共、假名相知不申候、酒匂兵衛尉入道称
阿・同兵衛尉入道阿忍・同左衛門尉久景入道徳貴・同
次郎左衛門貞資入道貞阿、従　忠久公御代　貞久公御
代迄御家老ニ而候、酒匂氏　貞久公御子総州師久公江
被召附候、御子孫犬太郎久林代ニ　久豊公江被相背候
節、酒匂紀伊守与申者久林領地之内川邊松尾之城ニ罷
在、　太守公江御内應申上、御當家ニ被召出候与相見
候、然共紀伊守事酒匂利兵衛先祖与者難申候、系圖文
書等無御座候、利兵衛家ニ付　▽㋐御家之△御守本尊并
御母袋(ウ衣)与奉申、且又　頼朝公より拜領之太刀(号行親)一腰
致傳来候、御立置被成候土蔵ニ同前ニ相納格護仕候、
此儀を以推而相考候へ者、利兵衛家筋酒匂氏之嫡家ニ
ても可有御座哉、究而難相考事ニ御座候、右段々之趣、
酒匂氏之事ハ　忠久公以來之▽㋐御年比之△家ニ而御座
候へ(ウハ)共、嫡庶之儀者相知不申候得共、利兵衛親大蔵兵
衛事も御太刀進上為被仰付由候間、利兵衛事も不相替
御太刀進上被仰付可然与相考申候、

20の11

上村茂兵衛嫡子
上村安千代

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、茂兵衛親上村茂兵衛者神谷山三郎与申候而、江戸に牢人ニ而罷在候處、　寛陽院様より被召出、小小姓(御カ)ニ被召仕候、後ニ上村平右衛門養子ニ被仰付候、平右衛門親者上村主税与申候、上村氏之儀、先祖者何とも相見得不申候、親茂兵衛より當茂兵衛迄吟味役、地頭をも被仰付候間、嫡子安千代江も御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

20の12

五代正助嫡子
五代

一右初而之　御目見御太刀進上之願五代少左衛門より申出候、五代家之儀者新田宮社務執印氏之支族ニ而候、系圖之表混乱仕候ニ付相知不申候、五代筑前守助友より分明ニ相知レ申候、助友子勝左衛門友慶、後右京亮、惟新様御二男分ニ而被成御座候時分、友慶御供仕、永禄七年飯野江　御在城之節、　惟新様御領内之馬関田地頭被仰付候、天正十八年、小田原陣ニ友慶・同子勝(友奉)左衛門父子騎馬十六騎之内ニ被撰御供仕候、正助家者、友慶二男五代舎人(友安)江友慶(廿)江被下候〈廿〉▽(廿)御知行二百斛を舎人江被下候、御知行二百斛を舎人江致附属相立候家ニ而候、當五代舎人者正助家之二男家ニ而候へ共、吟味役、地頭職迄被仰付候へハ、乍二男家結構ニ被仰付候間、御太刀進上可被仰付儀ニ候、正助親三左衛門・正助二代中紙進上仕、勤方之品茂相替儀無之候間、正助嫡子者中紙進上可被仰付儀与相考申候△

20の13

猿渡仲右衛門嫡子
猿渡龜之允

一右代〻御太刀進上仕來候間、初而之　御目見御太刀進上被仰付度候由申出候、仲右衛門(信高)家之儀者、猿渡家十五代之家督形(刑)部少輔信有二男與市兵衛信兼之二男猿渡順阿弥与申者一流ニ而御座候、　日新公御代より加世田ニ罷在候、順阿弥直子無之、伊尻早左衛門二男養子ニ仕、九郎左衛門吉信与申候、其子嘉左衛門辰信後号備前、家久公御兵具奉行役相勤申候、辰信嫡孫九郎(武信)左衛門御兵具奉行役相勤申候、其子當仲右衛門ニ而候、猿渡家者古來相知為申家ニ而御座候、仲右衛門家者麁流ニて

20の14

候得共、相應之御奉公勤來、先祖両代御兵具奉行迄相勤、代〻御太刀進上為仕來由候間、龜之允事も御太刀進上被仰付度儀与相考申候、

是枝周防坊

一右養子成之御礼御太刀進上願申出候、右家筋者、高望王六代之孫頴娃三郎忠長与申者、平治之比頴娃之領主ニて御座候、六男薩摩六郎忠何之四男薩摩太郎忠秀薩摩之郡是枝名を領、彼之地被罷在候、今以是枝罷居候旧跡有之候由、忠秀より十代之孫房太郎忠盛、後ニ周防坊快秀与申候、此者代より山伏ニ罷成候由系圖ニ相記候得共、忠秀より忠盛迄十世之儀、紀千右衛門書調候系圖ニ而候得者、無覚束候、右快秀嫡子周防坊快心与申者阿多ニ罷在候、快心より十代程之儀〔㊥ニ而〕〔与〕不遠諸人も聞覚へ趣有之候、快心名字之地を去り阿多ニ罷移り候儀、何故与申候訳腰書ニ相見得不申候へ者、快心事是枝嫡家ニて者有之間敷与相考申候、右十世之間ハ千右衛門削添為申欤と存候、快心嫡子大膳房快順　日新公御意を以阿多より加世田ニ被召移候、岩釼之御陣ニ罷在軍務仕候、樺山助太郎・貴嶋助五郎・濱田藤左衛門同前ニ遂戦死候由系圖ニ相▽㊥見得候△得共、　貴久公御譜之内ニ者、右三人者相見得共、快順者相見得不申候、自家ニ申傳候半間、別条者有御座間敷候、快順事加世田より日置ニ被召移候、惣職をも被仰付候、隆信首　御驗見之節勇力之勤仕候由、系圖ニ記置申候、其後曽於郡之地頭職被仰付、且又國分〔冨カ〕高隈町奉行被下候由記置申候へ共、御記録方ニ者相知不申候、快順嫡子忠存坊快秀事も〔本ノマヽ〕方〻軍労仕候、忠存坊代ニ日置より鹿児島江被召移候、其後一節高隈江被召移候儀も有之候、忠存坊地頭職被仰付候、忠存坊嫡子周防坊快温、後ニ還俗して喜右衛門与申候、江戸・大坂ニも毎度被召列候、寛永十五年、嶋原原之城ニて屏を越賊徒二人討捕申候、山川之地頭職被仰付候、弟市右衛門跡職相續仕候、後ニ次郎左衛門、田代之地頭職被仰付候、嫡子喜右衛門養子當周防坊ニて候、右之通候得者、代〻御太刀進上為仕候而可有御座候間、周防坊江も此節不相替御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

20の15

奈良原清左衛門嫡子
奈良原

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、右家之先祖奈良原助八事者山城國加茂之住人ニて候、武勇有之、十六歳之時　忠昌公江被召拘候、永正五年　忠昌公御逝去之節、助八事御高恩之一筋を以福昌寺楠木之本ニて殉死仕候、段々之訳調書ニ者委細有之候御家ニ而殉死之初右之助八ニ而御座候、清左衛門より申出候ハ、助八事者清左衛門十代之祖奈良原伴五郎弟ニ而、助八子無之由申出候へ共、清左衛門新系圖所持候へ共、信用難仕系圖ニて候、清左衛門六代之祖奈良原長門守事　日新公江奉仕、加世田之浦地頭被仰付候、天文十四年、日州飫肥ニ而致戦死候、其子狩野之助後ニ安藝、　義久公御代日州佐賀谷之地頭職被仰付候、其嫡孫狩野之助直子無之、猪俣左近二男清左衛門養子被仰付候、清左衛門地頭者不被下候得共、吟味役迄被仰付候、當清左衛門父ニ而㊟候、　先祖地頭をも被下、忠死為仕者之子孫ニ而、當清左衛門茂御▽㊟太刀△進上仕候間、嫡子も御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

20の16

上井勘兵衛嫡子
上井犬千代

一右始而　御目見御太刀進上之願申出候、右家之元祖者上井筑前守為秋二男右衛門兼成ニ而御座候、諏訪甚六二男家ニて御座候、上井覺兼叔父ニて御座候、覺兼御家老ニて日州江被召置候、右衛門被召附置候、兼成曽孫勘兵衛兼何高奉行相勤候、其子五郎左衛門朗喜御用人役被仰付候、其子當勘兵衛始而之　御目見仕候節茂御太刀進上仕候間、犬千代事も不相替御太刀進上被仰付儀与相考申候、

20の17

鹿嶋郷兵衛嫡子
鹿嶋傳次郎

一右始而之　御目見御太刀進上之願申出候、右先祖小番騎馬をも相勤、折目ニ者御太刀をも進上仕來候ニ付、郷兵衛始而之　御目見之節も御太刀進上仕候間、傳次郎江も進上被仰付被下度由申出候、願之通御太刀進上可被仰付儀与相考申候、先祖代々御奉公相勤候儀者、先比相調差上置申候、

20の18

長谷場覚太夫養子
長谷場

一右養子成之御礼御太刀進上之願申出候、右本家者、長谷場源助九代之祖越前守慶純二男佐渡守匡純与申者之嫡子筑後守純辰二男典兵衛純正、典兵衛慶長四年庄内安永ニ而戦死仕候、直子無之ニ付、源助六代之祖長門守▽(サ)三男△弥二郎(純次)を純正之妹ニ嫁家相續、後ニ者主膳与名を申候、主膳女子壱人有之候付、牧氏二男伊角(純眼)聟養子仕候、其子覚太夫ニて候、典兵衛父筑後事者　義久公御右筆、後ニ　惟新公加治木江被成御座候時奉仕、御右筆相勉候、筑後嫡子織部子孫者今以長谷場次〈郎(サ)左衛門与申候而、加治木江罷在候、伊角事御近習御目付迄被仰付、御取仕(サ立)被召仕、大姫良之地頭職被仰付、覚太夫迄御太刀進上被仰付候へ者、養子之儀も不相替御太刀進上可被仰付哉与相考申候、

20の19

福屋助左衛門養子
福屋五郎兵衛

一右継目之御礼御太刀進上願申出候、右家者系圖無之故相知不申候、福屋伊賀(兼昭)より相見得申候、始國分之代官被仰付、後ニ御右筆相勉、正保四年江戸王子御犬追物之節、執筆仕相勤、射手同前ニ　公方様江御目見被仰付候、其子助左衛門(兼全)者右之節射手方江被仰付候、伊賀後ニ鹿之屋与何方之地頭職被仰付候、助左衛門事御納戸奉行・吟味役、諸所地頭職をも被仰付候、助左衛門右之通家筋者不分明候得共、其子助左衛門兼貞御用人役をも被仰付、其養子當五郎(兼慶)兵衛ニ而候、代〻御太刀進上仕筈ニ御座候間、當五郎兵衛事御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

20の20

伊東兵右衛門

一右継目之御礼御太刀進上之願申出候、右家者木脇次郎右衛門二男家ニ而候、兵右衛門親伊東六右衛門祐章事者伊東肥後祐昌三男ニて候へ共、二男五右衛門祐位事右松氏養子罷成候ニ付、祐章二男家ニ相立候、祐章御納戸奉行被仰付、川内山田・吉松等之地頭職被仰付候、兵右衛門初而之御目見仕候節も御太刀進上仕候ニ付、此節も不相替御太刀進上可被仰付儀与相考申候、木脇次郎右衛門先祖代〻御奉公相勤候趣者、前方御用ニ付

20の21

相調差上申候間、此節再記ニ及不申候、

西丹下

一右継目之御礼御太刀進上之願申出候、丹下親監物入道縁能儀も御太刀進上仕候間、丹下ニも不相替進上可被仰付儀与相考申候、右家筋之儀ハ前方相調差上置申候、

20の22

市來勘左衞門嫡子　市來權兵衞

一右始而之御目見御太刀進上之願申出候、右家者、市來千左衞門祖父市來太郎左衞門入道求己二男市來惣兵衞、其子惣兵衞、其子當勘左衞門、其子權兵衞ニ而候、勘左衞門父惣兵衞御兵具奉行役被仰付候、勘左衞門地頭不被下候さへ御太刀進上被仰付候、當時勘左衞門地頭をも被仰付置候間、權兵衞事弥以御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

20の23

外山九右衞門嫡孫　外山

一右初而之御礼(ヲ)〔御目見カ〕御太刀進上之願申出候、右家者系圖無(サ)〔御座〕〔之〕、所自出不相知候家ニ付而者御太刀進上絶而不被仰付筈候得共、九右衞門事御用人役をも被仰付候、嫡孫之儀候へ者、御太刀進上御免可被成哉、中紙者餘り之儀ニ御座候間、別品をも可被仰付候哉、此儀者能〻御吟味之上可被仰付与先年田中五右衞門〔国明〕より相調申出置候、此節我〻共相考申候ハ、九右衞門嫡孫之儀候間、御太刀進上可被仰付儀与相考申候、九右衞門先祖代〻御奉公相勤候儀者、最前相調差上置候間、此節再記ニ及不申候、

20の24

白尾登五右衞門嫡子　白尾金左衞門

一右家者元來古来之儀相知不申候、系圖無之候、何れ之分レ口不相知候、加治木ニ罷在候白尾傳左衞門家之二男家ニ而候、傳左衞門先祖白尾理右衞門〔国広〕者　惟新様御代惣大工ニ而候よし、傳左衞門者于今加治木ニ罷在候、登五右衞門養父金左衞門も▽(サ)加治木ニ罷在候を從　寛陽院様被召出、御小姓役ニ△被召仕、夫より御近習役迄被仰付候得共、先祖何者共不相知家筋ニて候、二種壱

荷進上者結構過為申儀候間、不被仰付筈候へ共、登五右衛門御兵具奉行役ニ付、足輕御赦免打込ニ中紙進上者難被仰付、二種壱荷進上□(ヰ可被)仰付候、此節可被召留候得共、上野御手傳御成就之節登五右衛門物頭役ニて、於御城拜領物も有之候間、此節より金左衛門家ニ付而二種壱荷進上被仰付可然与相考申候、

（表紙　二）

御家傳并諸家由緒

▽㊀一御家傳并諸家由緒目録

一伊地知金左衛門

一平田監物家由緒書

一仁禮家由緒書

一本田家由緒書

一河野氏由緒書

一川上十郎左衛門嫡子川上傳十郎

糺合濟

一山口甚九郎嫡子山口勘九郎
一伊地知助右衛門嫡子伊地知少八郎
一今井次右衛門
一折田治部左衛門
一家村平八嫡子家村
一酒匂利兵衛嫡子酒匂
一川上右京二男川上平八
一西八左衛門嫡子西長松
一亀山嘉兵衛二男亀山虎吉
一高崎四郎右衛門弟高崎權之助
一町田權右衛門嫡子町田
一野田三静嫡子野田源太左衛門
一蒲生家調書
一田中氏由緒書
一種子嶋氏
一菱刈氏
一諏訪氏
一鎌田氏
一平田氏

20の25

一本田氏
一高橋氏
一禰寝氏
一村田氏
一三原氏
一吉田氏
一土持氏
一山田氏
一東郷氏
一志岐氏
一蒲生氏
一敷根氏（土岐）
一秩父氏
一比志嶋氏
一田尻氏
一伊東家筋由緒書
一篠原氏由緒書△

伊地知金左衛門

一右家者、秩父家二男伊地知筑前守吉田之城代ニ被召置候由、自家之系圖ニ者記置申候、嫡子式部少輔重成事日新様江奉仕、田布施絶之内高橋を一所之地ニ被下候、其子式部太輔（重隆）　貴久公　義久公より被下候御神文弐通金左衛門格護仕置候、重成事日州ニて戦死仕候、弟民部少輔（重隆カ）家督相續仕候、朝鮮國ニ罷渡、於彼地遂戦死候、民部少輔迄者高橋を傳領為仕欤と存候、其子與兵衛（重頼）、其子筑右衛門（重直）身躰差迫、高岡衆中隈元吉兵衛二男金左（重徳）衛門外城養子ニ被仰付候、外城養子之儀者段々申上候通ニ候間、中紙進上可然与相考申候、

（元禄十六年）未十二月

御記録方
田中五右衛門（国明）
市來源右衛門（家年）
肥後仁右衛門（盛香）

右調書写之儀者未十二月廿日書記之候、但覚之通ニ候間、文章者相違可有之候得共、其家筋由緒ニ付而者相違無之候、右之内ニも酒匂利兵衛・猿渡亀之允家筋之儀者文章迄も相違無之書写之事、

21

平田監物家由緒書　本書之通書写之、

一平田監物養子三左衛門継目之御礼御太刀・二種一荷進上之願桂徴（伊徴）厳より申出候ニ付、調書之趣者、

三左衛門家者平田氏嫡家右馬介（後号美濃守）、重宗二男平田民部少輔宗保一流ニて、十二代之孫三左衛門ニ而御座候、平田氏嫡家之儀者代々家老職相勉為申家ニて、右重宗事も　元久公　久豊公之御家老ニ而御座候、應永廿四年九月　久豊公川邊松尾之城為後攻御勢を被差遣、犬太郎久林（上総介久世嫡子）・伊集院弾正忠頼久ニ對合戦候処、味方及難儀、松尾城弥致困窮候故、双方和談ニ罷成候、其節重宗事者松尾城中ニ籠居候、伊地之（伊作）平田民部・同伊勢守事者敵城ニ被罷居候、御記録之中ニ有之候、右民部者三左衛門元祖民部少輔宗保ニ而可有之与相考申候、宗保四代之孫式部少輔宗秀事者島津實久属、谷山之内山田を領、苦辛城ニ罷居候処ニ、天文八年三月十三日　太守貴久公於谷山紫原實久方与被遂御一戦、被得御勝利、谷山御手ニ入候故、右式部少輔降参仕、

貴久公を苦辛城ニ奉請候儀、相見得申候、其後廿三三(衍カ)年岩釼御合戦之節致戦死候由、自家之系圖ニ記置申候、其子安房介宗茂事　日新様御家老職被仰付候、其子新左衛門宗張所〻之地頭職相勤、天正十五年三月十五日、豊後於清田致戦死候、其子安房介宗衡所〻地頭職相勉、其嫡子新左衛門宗徳早世仕候処、三男監物宗乗事兄之後嗣ニ罷成、地頭職、吟味役相勉、女子一人有之候付、出水衆中山田吉左衛門有重嫡子六兵衛宗次聟養子ニ罷成候而、又女子壱人有之候故、桂徴(ヵ)厳三男監物事聟養子被仰付候、是三左衛門養亡父ニて御座候、

右之通、三左衛門家者平田家之二男家ニて御座候、一旦実久ニ属候得共、安房介宗茂　日新公御家老職相勤申、代〻地頭職被仰付、御太刀進上仕來候間、三左衛門事も不相替御太刀進上者可被仰付儀与奉存候、監物事家督之御礼申上候節二種壱荷相添進上為仕由候得共、前方者御太刀進上仕候人ニて御座候〔ハ(ヵ)得者〕、二種壱荷之儀者心次第ニ相添為申事ニ御座候、其以後御御(衍カ)吟味強く罷成、二種壱荷相添候儀御取訳有之事ニ罷成候得者、御與頭之外差立候一家之嫡流、

22

又者何ぞ差立候訳有之家迄を被遊御免之筈候儀ニ御座候、三左衛門先祖　日新様御家老相勤申候得共、御正統之御家老者格別之事御座候、剰　御正統之御家老相勤候子孫之内、御太刀計進上仕家も有之事ニ御座候、然者監物事家督之御礼御太刀・二種壱荷進上為仕由候得共、此節調之上ニて御座候間、三左衛門事御太刀計ニて御礼被仰付可然与奉存候、尤蔵人殿三男▽(ヵ)ニ而△、於彼家者　御前元服を被仰付候へ共、監物跡目被仰付上者其家之格式ニ可被仰付儀与詮儀仕候、乍此上御吟味次第可被仰付候、以上、

(元禄十六年)
未十二月廿四日　　肥後仁右衛門(盛香)
〔外ニ両人〕
(ヵ)市来源右衛門
田中五右衛門

仁禮家由緒書但文章者相違可有之候、家筋ニ付而者違無之候、文章も具ニ而少違も可有之欤、吊迄者違無之候、(ヵ本ノマヽ)

仁禮民部左衛門二男
仁禮安左衛門

一右、初而　御目見御太刀・二種一荷願ニ付調候趣者、

一右家筋民部左衛門系圖相考候に、延文之比日州志布志

を領罷在候信濃源氏楡井四郎頼仲一統与申候、新系圖ニ而御座候、頼仲　御家ニ度〻敵對仕候ニ付、六代之太守氏久公御討伐被成、終ニ者於大慈寺自殺仕候、民部左衛門曽祖父者別府隼人(頼延)与申候、此代迄者別而小身成人ニて御座候つるよし、隼人より以來者委細ハ相知申候、隼人以前之系圖信用難仕候、民部左衛門祖父別府信濃(後に蔵人)代ニ、元和六年御犬追物射手方ニ被仰付候節、　忠恒公江申上、別府を仁禮と相改申、今以其通り(廿候)ニ而、元別府者平姓ニて候、宮原之仁禮者藤原氏ニて別物ニ而候、是ニて民部左衛門系圖信用難仕訳相見得申候、仁禮者何様ニ相改申候哉与致考見候、仁礼覚之允二十代之祖經景、安元二年薩刕別府之庄を領候而、藤原を平姓ニ相改申候由、系圖經景傳ニ記置申候、依之元來所自出不相知平姓之別府氏を宮原之仁礼經景別府之庄を相領候儀致符合、仁礼ニ相改為申物欤与見得申候、別府之平姓与者其元大ニ為相替筋ニて御座候、右隼人一子小吉事少年より　忠恒公江奉仕、御小姓役相勤、文禄二年高麗江御供仕罷渡候、慶長三年御帰朝之節御供仕、直ニ伏見江罷登、同四年三月於御茶亭逆臣伊十院幸侃御手討ニ被遊候節、御側ニ罷在、首尾能相勤申候ニ付、御腰物拜領仕候、器量茂有之者候故、同五年、御知行百斛被下候、後ニ蔵人頼景与申候、御用人役迄立身仕、諸所地頭職被仰付、高岡初而外城江被召立候節も、右之蔵人江地頭職被仰付候、其子主計頼充事茂御用人役、地頭職被仰付候、其子民部左衛門頼定明暦元年與頭被仰付、江戸江も御礼使等相勤、日光江も　綱久様御名代相勤、諸所地頭職をも被仰付候、其子仲右衛門(玉「安左衛門カ」)ニて候、家筋ニ付而者御太刀進上茂不被仰付筈ニ候得共、組頭ニ付而者、嫡子之儀者勿論御太刀ニ二種一荷進上可被仰付候、二男之儀者御太刀迄を進上可被仰付儀与相考申候、

(元禄十六年)
未十二月廿五日

肥後仁右衛門(盛香)
〔外ニ弐人〕
(廿市来源右衛門
田中五右衛門)

本田家由緒

但一筋覚之訳ニ書記也、文章ハ違可有之候、

23

一本田新助家者、本家四代之嫡家次郎左衛門貞親他腹之長男次郎左衛門久兼嫡孫左近蔵人兼久二男親信三男弥

次郎与申者之二男何(ヵ)与(守)親恒(綱カ)之何伊賀(甲斐カ)守親良泊之地頭被仰付候、親良娘毛利肥前ニ嫁候而出生候外孫右衛門親何(平カ)を親良聟養子ニ仕候、右之右衛門者當新助曽祖父ニ而候、其養子新左衛門親何(元カ)、嫡子次太夫親何(興カ)、其子右之新助ニて候由、

但右衛門事茂諸所地頭職、吟味役被仰付候事、

未十二月

河野氏由緒書但大意覚之訳記之候、相違も可有之、

一河野源八家筋者、　義久公御代一王雅楽助与申者上方より被召拘候、能抔を仕候者ニて御座候由、天正十五年秀吉公薩州川内江御動座之節、罷出何角仕候儀共有之候由、其砌石田三成より被仰付候由ニて書付有之候者、御動座之節雅楽助尽忠節候間、知行可被下由石田三成より被仰候得共、當時者明合無之候間、重而明合有之候節可被下由書付有之候、其段(ヵ)細川幽齋老江被仰遣候(ハ)、其御動座之節一王雅楽助致忠節候ニ付、知行可被下由石田治部少輔三成より承候得共、明合無之候処、此節田尻荒兵衛跡明合候間、右之跡可被下由被仰遣候、御書付源八方江有之候、知行者三百石程も被下候由、雅楽助ハ上方者ニて候故、秀吉公御和談之節、何角与為仕ニ而可有御座候、右ニ付而者、彼方より御用等御達被成候間者之為ニ右之通知行をも被下候哉与相考申候、

一能太夫勸世之内ニ服部勸世・越智勸世与申候而有之候由、河野者越智〔氏〕(ヵ勸世)ニて候、右之雅楽助者越智勸世ニ而も可有之与相考申候、源八系圖之儀者河野氏之系圖ニて御座候、是本尊(ヵ高)山邊ニ罷居候河野名字之者所持仕候系圖ニて候、河野何某通何と申者迄系り切有之候処ニ、右之雅楽助よりつり次ニ而有之候、右之系圖を以河野与名乗為申与相見得申候、雅楽助子孫河野為右衛門、其子為右衛門通何、其其養子(衛カ)當源八ニ而御座候、河野道誦者右之為右衛門二男家ニ而候、

未十一月　　御記録所

▽(ヵ)御目見御太刀進上調方御記録所へ被仰渡、一〻ノ調書被差出候、見覚候趣左ニ記之候、文章・代数・假名・實名相違可有之候、大底之一筋并立候由緒等之

25

儀者相違無之様ニ書留置候△

川上十郎左衛門嫡子
川上傳十郎

一右初而之　御目見御太刀進上之願、右家筋者、五代之家督上野介兼久五男武蔵守義久入道道安、初之名乗者久勝、弓馬之達人故、弓馬之書を御預被成候、文明年中将軍義尚公依仰犬追物検見相勤候、従義尚公義之一字を被下候、且又扇子に道安検見之趣を畫、〔讃を〕〔讃ニ〕記被下之候、入道ニ而候故、其比嶌津小増〔曾〕与呼申候由、右之扇と通〔道〕安検見之節之頭巾、于今傳十郎家之笥蔵仕候、道安於京都名誉候処、従　立久公御褒美として薩州之内高江・寄田・宮里共ニ五十町被下之、高江之城ニ居住仕候、道安三男武蔵守受久入道昌孫、其子武蔵〔経久〕守入道芳麟、其子十郎左衛門久慶入道芳庵、代〻弓馬御預ケニ而、御代〻之　太守公之御師範をも仕候、御神文御書過分ニ格護仕置候、芳庵嫡子志摩久通家相續之器量無之候故、東郷肥前守重方四男佐太夫養子ニ仕候へ共、致違変、後ニ東郷善助与申〔候〕者、其後高城衆中新保七左衛門養子ニ仕、川上十郎左衛門久文与申候、嫡子十郎〔久興〕左衛門、其子當傳十郎〔親益〕ニて候、外城衆中養子仕候へ共、代〻弓馬御預之家ニ而　御師範をも仕、亡父十郎左衛門迄者御太刀進上仕來候、傳十郎事も不相替御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

26

山口甚九郎嫡子
山口勘九郎

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、勘九郎〔元〕先祖山口五郎〔直行〕兵衛与申者ハ山口勘兵衛殿由緒有之者之由、勘兵衛殿　惟新様　中納言様江御懇意之一筋を以、勘兵衛〈殿〉弟分ニて被召拘候、五郎兵衛嫡子内蔵〔直重〕之助、二男五郎兵衛ニ而候、内蔵之助男子無之、五郎兵衛家連續仕候、其子甚九郎、其子當勘九郎ニて候、勘兵衛殿者　權現様江御心安、伏見城代ニも被差置候、勘九郎家筋者新参ニて候へ共、右之訳有之、御太刀進上仕来候間、勘九郎事も御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

27

伊地知助右衛門嫡子
伊地知少八郎

一右家督之御礼御太刀進上仕度候由願申出候、右元祖者、

秩父十郎（ヵ）兵衛先祖伊地知弾正季隨二男弾正正貞与申者、日州田島を給領之、田嶌弾正与申者（ヵ候）、二三代田島を名乗申候、後ニ伊地知ニ改申候、正貞男子無之、伊地知縫殿助季豊入道久安二男を季隨直孫養子ニ仕候、其嫡孫伊地知伯耆（重秀）申口役只今ノ御用人、諸所地頭職被仰付候、其子勘解（重元）由蒲生之地頭職被仰付候、文禄元年六月十七日、於朝鮮國戦死仕候、其玄孫當少八郎ニ而候、伊地知家ニ而差立候二男家ニて、近代二代迄地頭職被仰付候、助右衛門事も相應之御奉公相勉、少八郎初而之　御目見仕候節も御太刀進上仕候間、不相替御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

28

今井次右衛門

一右御目見御太刀進上之願申出候、家筋者棚邊屋道（與脱カ）与申候而攝州界（ヵ堺）之町人ニて御座候、　惟新様江忠節之訳有之被召拘、御知行千石被下候、養子今井市兵衛地頭職被仰付候、代〻御太刀進上仕來候間、次右衛門江茂御太刀進上可被仰付儀与相考申候、次右衛門家筋之儀者、先比今井沼哲（ヵ紹）嫡子今井市八　御目見願ニ付御太刀進上仕度候由申出候、其節之調書へ委細申上候間、再考ニ不及候、

29

折田八郎左衛門嫡子
折田治部左衛門

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、右家筋上代之儀相知不申候、八代之祖入道安清（假名不相知候）与申より相見得申候、其子清閑、其子勘解由・嫡子八郎右（ヵ左）衛門両代ハ　中納言様・寛陽院様御右筆相勉申候、其子八（ヵ郎）右衛門御兵具奉行相勉申候、其子當八郎左衛門ニ而候、家筋ニ付而者御太刀進上被仰付筈ニ而無之候へ共、八郎左衛門結構ニ被仰付候間、勿論治部左衛門事御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

但八代之祖と有之候へ共、當治部左衛門より入道安清迄者七代ニて一代不足欠、如何、

30

家村平八嫡子
家村

一右初而之　御目見御太刀進上之願郷田源七左衛門より申出候、右家筋系圖無之故相知不申候、由緒相尋候得

共、平八在江戸故委細之趣相知不申候、平八養父家村弥左衛門事物奉行役相勉申候、男子無之、平田新左衛門殿三男聟養子ニ仕候、家筋ニ付而者御太刀進上仕筈ニて無之候得共、平八事御用人役、地頭職被仰付候間、嫡子与市郎御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

31

酒匂利兵衛嫡子
酒匂

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、大蔵兵衛より御太刀進上仕來候由申出候、先比利兵衛　御目見御太刀進上願之節、委細家筋之調申上置候、利兵衛事も御太刀進上可被仰付由申上置候、右嫡子事も御太刀進上可被仰付儀与相考申候、

32

川上右京二男
川上平八

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、右家筋者、川上式部殿先祖川上上野介久克(忠カ)入道意釣二男右京亮久(忠継カ)何事元祖ニて候、右京天文四年十二月於隅州廻嶌津忠(永禄四年七月十二日カ)将主戦死之節、右京久何茂(彦カ)遂戦死候、其子孫七郎久何(昭カ)方ニて戦死仕候、孫七郎男子無之、川上九郎左衛門二男を養子ニ仕、伊豫久晴与申候、久晴諸所地頭職被仰付候、其子作左衛門久何(高カ)、其子右京久昭(昌カ)諸所地頭職被仰付候、代〻折目ニ者御太刀進上仕來候間、申出候通ニ可有之候得共、二男家ニ御太刀進上御免之家者訳も有之候間、右京二男迄御太刀進上可被仰付儀ニ而者無之候条、平八事者中紙進上可被仰付儀与相考申候、先年申上候進上物之内ニ而者矢進上ニ相當申候、

33

西八左衛門嫡子
西長松

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候、右家筋、四代之祖西田和泉(忠貞)与申者之弟大乗院六代權僧正頼真和尚、伊作家之支族西喜左衛門(忠朗)与申者之系圖を乞請候而和泉江被致附属候、夫より西田を相改、西和泉与申候、系圖之表右喜左衛門より頼真和尚、其子主馬(忠重)、其子八兵(久慶)衛与系申候、八兵衛初而之　御目見御太刀進上仕候、其後名替之節者氣相付不申、御太刀進上不仕候、八兵衛嫡子八左衛門(久正)、其養子當八左(長雄)衛門ニて候、養父八左

34

衞門御兵具奉行役被仰付候、當八左衞門も御兵具奉行役相勤申候、同役〔其〕(ヰ)ニハ地頭をも被仰付候間、八左衞門嫡子ニ者御太刀進上被仰付度由申出候、八兵衞迄者代〻御太刀進上仕來候由申出候得共、右之通無故家筋ニて御支族之名字を冒罷在、先祖何とも相見得不申候へ者、右ニ申出候趣者相違ニ而候、當八左衞門迄者中紙進上仕候へ共、當時御兵具奉行をも被仰付置候へ者、中紙進上与者難申上候間、八左衞門事ハ二種一荷進上之筋ニ相調申候、先年白尾登五右衞門　御目見之節者、御兵具奉行役目ニ付而二種壱荷進上被仰付候得共、家ニ付而子孫迄進上之筈ニ者不被仰渡候、八左衞門事も地頭職をも被仰付候ハ者、家筋ニ者無御構、其身ニ者御太刀進上被仰付候へ共、八左衞門事も嫡子長松(長洪)儀を申上候へ者登五右衞門格与ハ相替申候間、長松事者中紙進上ニ被仰付候而可有御座候哉、先年申上候品之内ニ而者矢進上ニ相當申候、

亀山嘉兵衞二男　亀山虎吉

35

一右初而之　御目見御太刀進上之願申出候得者(ヰ共)、中紙進上被仰付可然儀与相考申候、先年申上候進上物之内ニ而弦進上ニ相當申候、右家筋調候儀者、嫡子何某　御目見進上物願之節委細申上候間、再考不仕候、

高崎四郎右衞門弟　高崎權之助

一右初(ヰ)而之カ　御目見御太刀進上之願申出候、右權之助事者高崎五右衞門二男ニて候処、四郎右衞門男之兄弟無之候ニ付、弟分ニ仕候、右五右衞門　御目見仕候節御太刀進上仕候条、權之助事も四郎右衞門弟ニて候間、御太刀進上被仰付由申出候得共、二男迄御太刀進上仕候儀者差立候家筋迄ニ被仰付事ニ候、此以前者御用人之二男迄者御太刀進上被仰付候へ共、近年者御詮儀強罷成候、四郎右衞門家筋二男迄御太刀進上仕筈ニ而無之候、殊更四郎右衞門直弟ニ而も無之、弟分ニ為仕事ニ候、此節琉球江も四郎右衞門與力役相勤罷渡候間、中紙進上可被仰付儀与相考申候、先年申上候進上物之内ニ而者弦進上ニ相當申候、四郎右衞門家筋之儀者、先比嫡

子何某　御目見之進上物願之節委細申上候故、略仕候、

36

町田權右衞門嫡子
町田

一右初而之　御目見御太刀進上仕度候、親權右衞門迄者小番相勤、御太刀進上仕來候、當權右衞門　御目見仕候節者氣相付不申、中紙進上仕候(ヘ共)□、此節嫡子何某事者、故權右衞門同前ニ御太刀進上被仰付度由申出候、權右衞門事者伊牟礼名字ニ而(ナシ)〔候〕町田家庶流之由ニて、故權右衞門代ニ町田名字ニ相改申候得(共)者、伊牟礼名字之儀ハ町田系圖ニ者所出不相知候、當權右衞門輕き躰ニ候間、中紙進上可被仰付儀与相考申候、先年申上候進上物之内ニ而者弦進上ニ相當申候、

37

(田)野町三静嫡子
野田源太左衞門

一右家督之御禮御太刀進上之願申出候、親三静事者表方ニて御礼申上候(ニ)〈不及候旨従　寛陽院様被　仰出、御奥ニて御肴二折・御手樽一荷進上仕御礼申上候、源太左衞門始而之　御目見之節御太刀進上之願三静より於江戸奉願候得共、御國元ニて申上候様ニと被仰渡候處ニ、其後又〻江戸江三静召列申候ニ付、衆并之中(紙)□進上仕候、此節者御太刀進上被仰付被(下)□度由申出候、右家筋、家傳ニ者、野田内匠國廣、其子筑後國昌、且次弟玄蕃何家致相續候、其子善左衞門ニて候、右筑後事者、天正十四年筑紫之城ニて致戦死候由、右善左衞門事者源太左衞門曽祖父ニて候、善左衞門事　惟新様江奉仕方〻御供仕、加治木江罷移候処、兵庫殿加治木江被為移候ニ付、善左衞門事横川江罷移候由申出候間、慶長十三年・十四年加治木之日帳、同十九年之御帳見合候へ共、相見得不申候、其節加治木ニて年頭之進上物帳も見合申候へ共、相見得不申候、加治木ニ而者いかにも輕き士ニ而御座候半哉、三静事者初御記録所筆者役相勤罷在、其後圖書久通小姓ニ而罷在、其已後寛陽院様御小姓役被仰付、鹿児島士ニ被召出候、其後御右筆被仰付候、其内ニ騎馬ニ被仰付、小番をも相勤申候、小番被(仰付)□候家筋ニてハ無之候、野田氏由緒書集(候)□物を差出候得共、野田氏者餘多有之候へ者、源太左衞門先祖与者不相見得候、考候に、先祖代〻之儀を

口授迄(ヤ)ニ而者相届不申候故、御記録所ニて野田氏之由緒を見合書写有之候を、我先祖之様ニ申立候欤与相見得申候、難致信用候、　義弘公御判之御目録二通御家老衆連判をも差出候得共、僅高三斛之目録ニて候、源太左衛門より御太刀進上不罷成(本ノマヽ)(其)何そ進上物之品をも御替被成被下度候由申出候へ共、右調ニ候へ者、中紙進上ニ可被仰付候、先年申上候通進上物之内ニ而者弦進上ニ相當申候、

正月十一(ヤ八)日　　肥後仁左衛門(ヤ右)
外ニ両人(ヤ市来源右衛門 田中五右衛門)

蒲生家調書

38

一御堂之道長公之五男通基之嫡子三位侍従何子教清豊前國宇佐八幡宮之留主職ニ而罷下、神(ヤ主之)□娘ニ嫁候而一子出生候真光坊舜清与(ヤ申)□者蒲生氏之元祖ニ而御座候、舜清保安四年大隅國ニ罷下、垂水へ居住仕、其後蒲生を領在城仕、家号与仕候由、系圖ニ相見得申候、無故蒲生を領申筈ニ而無之、考候に、蒲生之八幡神職ニて神領を司り、漸〻与彼地を領地与為仕ニ而可有之候、一十二代之祖越前(美濃カ)守清寛、其子忠清、二代致相續候　元久公・久豊公之御家老相勤申候、七代之祖越前守茂清代迄蒲生を領候由、申出候通清寛者　元久公・久豊公之御家老ニて御座候、應永八年　元久公山北ニ御出張之節、別而抽軍忠候ニ付、為賞谷山和田村三十町被宛行候、同十七年　元久公御上洛候節、　将軍義教公六月廿九日　元久公御旅館江入御候、此時北郷中務少輔・野辺薩摩守・北原左馬介・樺山安藝守・阿多加賀守・肝付(ヤ河)□内守・蒲生美濃守清寛奉謁見、御太(ヤ刀)□一腰・青銅百貫文献上仕候由、御譜之内ニ茂相見得申候、同廿年十二月上旬、菱刈之凶徒為　御自罰(ヤ)(久豊公カ、下仝)元久公御發向被成候処ニ、其跡ニ伊集院頼久鹿児島之本城(清水之城之事)、寄來候由相聞得、　元久公御憤り之餘り御一騎掛ニ被遊候処ニ、清寛・吉田若狭守申候者、此節　御一身之御働を可被遊時節ニ無御座由段〻申上候へ共、両人者身命を全く仕候而終之功を専ニ可仕旨　御意候て、唯御一騎御掛被成候間、清寛申上候者、右之趣御疑被遊候事残念至極ニ奉存候由申上、嫡子三郎太郎忠清与　御

駕ニ奉付、僅五六十騎ニ而鹿児島江御進入被遊候、頼久退散仕、原良ニ陣を取罷在候間、少時諸軍を御待揃被成、同十三日御取掛被成候処ニ、頼久身命相究り候ニ付、清寛与吉田若狭守より御断申上候ニ付、頼久命を御助被成候、右両人依忠節□(ヤ)被発　御運候、其後川邊之御合戦ニも□(ヤ)麗立抽軍忠候、其子美濃守忠清も御家老職ニ而、内ニ者政事を専勤、外ニ者労軍務候与相見得申候、代〻御奉公相勤候与申出候儀者、ケ様之儀共を思當ニ而為申出与相見得申候、

一従　立久公長録(禄)三年ニ轉蒲生喜入を被下候へ共、明應四年ニ従　忠昌公又〻蒲生を被下候、忠清嫡孫形(ヤ)刑部少輔宣清、嫡子越前守衆清(本ノマヽ)、同嫡子越前守茂清、此茂清不臣之色を顕候、大永七年(ヤ)充(ヤ)「忠兼カ」兼久公(後ニ勝久公)大軍を以御攻被成候処、茂清強拒之、　太守之軍を討破候、茂清嫡子越前守範清渋谷・菱刈之両氏与心を合奉背　貴久公を、天文廿三年八月より弘治三年四月迄四ケ年之間御攻討被成候、其委細者事長ク候、一〻記候ニ不及候、弘治三年四月十八日降参仕、城ニ火を放チ、一子を携邪(祁)答院江退去仕候(ヤ)而人来院□氏ニ依頼仕罷在、隈之城之内下青□(ヤ)木門を食邑に入來院氏より遣候、於彼地ニ範清病氣(ヤ)死仕候、其子壱人蟄居仕罷在候処ニ、天正十五年秀吉公西征之時、　太守公江御意を不受昵近ニ罷成度との願申上候儀相知、隅州鳩之脇ニ而誅罰被　仰付候、此もの男女(ヤ)子弐人有之、未幼稚ニ御座候つるを、母召列京都江参養育仕、壱人者松平加賀守様、一人者永井信濃守様江奉公ニ出し申、于今子孫有之、嫡流者右之通ニ而、御家中ニ而禿為申ニ而候へ共、當十郎兵衛筋目者、越前守充清初男子無之、娘弐人御座候ニ付、嫡女ニ越前守茂清を取合聟養子ニ仕候、已後美濃守清綱与申者出生仕候、是則十郎兵衛六代已前之祖ニ而御座候、充清實子ニ而御座候故、茂清平素清綱を憎申候ニ付、蒲生居住難叶、入來ニ退去仕罷居候処ニ、　貴久公より一人を以被　仰下候者、茂清之断交信不通□(ヤ)仕候而御味方ニ致参上候者、清綱(ヤ)ニ之蒲生家之家督を可被仰付由候ニ付、早速奉應　尊命御味方ニ罷成、蒲生之家統を被仰付候、此時茂清清綱か志を　守護ニ奉通事を承付、清綱嫡子十郎次郎(後ニ美濃守)信清蒲生ニ罷居候を殺害致さんと仕候を、肝付越前兼演(時ニ加治木を領ス)蒲生ニ差越、信清を

携加治木江帰、段〻を　太守公ニ被申上、信清茂御味方ニ罷成候、信清も男子無之候ニ付、留主左衛門佐景親(ヵ)ニ信清か妹相嫁、致出生候男子を養子ニ仕、家相續仕らせ候、其を宮内少輔清宣与申候、清宣祖父清綱江家督被仰付候得共、領知者然与不被下与相見得申候、清宣代ニ者小身ニ御座候間、於國分ニ　龍伯様江奉仕候、其時代小番大番之古帳此節相出申候、大番帳之内ニ蒲生宮内少輔与相記、片書ニ龍昌寺普請奉行与有之候、家傳ニ者兵具奉□(ヵ行を)も相勤候与有之候(ヵ衍)得共、御記録方ニ(ヵハ)□相知レ不申候、後ニ者納殿役相勤、別而御奉公仕候ニ付、　家久公より三拾六斛之御加増被成下候、清宣嫡子外記尊清与申候、御普請奉行相勤候由家傳ニ見得申候、外記直子無之候ニ付、國分衆中東郷五郎兵衛ニ外記妹相嫁、致出生候男子を養子ニ仕候、則十郎兵衛亡父正左衛門高奉行・物奉行・船奉行・郡奉行等被仰付、最末ニ吟味役、須木之地頭をも被仰付候、近代之内ニて結構ニ被召仕候、右段〻之通ニ御座候へ者、蒲生を一所ニ領罷在候者、(ヵ十)七代越前守茂清之嫡子範清代迄ニ而御座候、範清一所之地ニも相離れ、範清子誅罰被仰付候迄ニ而嫡流者断絶仕候へ共、美濃守清綱事越前守充清か直子故、蒲生之家督被仰付、家筋を為被召立置ニ而候、清綱以來者小身ニ而、然〻之御役をも相勤不申候而、殊ニ清宣代者國分ニ而大番相勤候へ者、以前之様子□(ヵ与此時)ハ各別ニ而候、正左衛門代ニ社地頭職共被下□(ヵ候)、家筋者御家老役仕候而一所之地をも領候筋目ニ而御座候へ者、衰申候而も御太刀計之進上仕来候、二種壱荷之儀者、清宣代ニ大番を相勤申候迄相衰候故を以懈怠為仕ニ而候半、然者此節十郎兵衛嫡子　御目見仕候に二種壱荷相添申度との願、家筋を以者其通に可被仰付事ニ候得共、近年者御吟味強く罷成、二種壱荷之儀者、御太刀ニ及不申、中紙ニてハ難被仰付間之人ニ被仰付儀ニて候、与頭者格別之儀ニ候、其外身上分限ニて御太刀・二種一荷上來候衆も御當代者相減候様ニ与為被仰付茂有之欤与存候、然者十郎兵衛ニも家筋ハ能候へ共、五六代以前より家衰申懈怠仕置候を此節取起申儀ニ御座候へ者、如何可有御座哉、肝付甚兵衛者御直元服被仰付候へ共、十郎兵衛家者不被仰付候へ者、甚兵衛家同格ニ而者無之候、御

吟味次第奉存候、
右□(ヱ之)家筋ニ候へ□(ヱ共、二男八十)郎事御太刀進上者□(ヱ難被)仰付候、二種一荷□(ヱ進上)被仰付可然与相考申候、已上、

十二月　　田中五右衛門(国明)
外ニ両人
(ヱ肥後仁右衛門市来源右衛門)

右蒲生十郎兵衛二男八十郎初而之　御目見御太刀進上之願申出候ニ付、調被仰渡候処、先年十郎兵衛嫡子初而之　御目見御太刀・二種一荷進上願申出候付、調書被差出置候、依之此節之調書者、最前嫡子之進上物しらへ書写候而、二男八十郎進上物調之儀者右写之奥右者書之内ニ書入有之候、右者書も少者事長く候へ共、不入儀ニ候処、八十郎進上物御太刀者難被仰付候、二種壱荷進上被仰付度候との趣迄を記置候、右嫡子進上物調書之内も、忠清嫡孫形(刑)部太輔宣清与申より奥者本書を直ニ写候、不入所者少拔候所も有之候、夫者いかにも少拔候、右形部太輔与申□(ヱよ)り前〻段〻□通ニ而候へ者、文章違□(ヱ可申)候へ共、一筋違□(ヱ無之候)、尤何か訳有之候儀者相違無之候、吉田若狭・蒲生清寛申上候儀共段〻有之候得共、ケ様之儀共を然与覚不申候、是又令略候、外ニも致略候儀、又者不覚之所者何れも右躰之儀共ニ而候、為後考如此相記也、

39

田中氏由緒書

一田中五右衛門(国明)家者加治木罷居候日野五郎右衛門家之二男家ニ而候、五郎右衛門系圖無之故相知不申候、田中珎阿弥与申者より相見得申候、掃部助　日新公江奉仕、別而技藝有之者ニ而、御同朋ニ被召仕候由、　貴久公御代弘治元年三月廿七日、一日付者不覚也、所付も不覚也、但帖佐平松ニて渋谷家之者共と御合戦、此時珎阿弥▽(ヱ相見得候欤)△何方ニて勇成戦死仕候、其子掃部助國明入道等林珎阿弥共申候由、▽(ヱ)繪師ニ而候由△天正十三年上井伊勢覚兼日帳ニも、等林ニ頼屏風ニ畫書候由有之候、其外世間ニも等林筆之絵有之候由、是も御同朋ニ被召仕候由、其子弥七始□(ヱ者絵)を書申候与□(ヱ相見得)申候、覚兼日帳ニ、珎□(ヱ阿)弥子息弥七□(ヱ方初而鐘)馗之絵書候とて預候由有之候、後ニ堅助内膳入道恕咤与申候、惟新公別而御心安被召仕、鹿児島江罷在候、後ニ　惟新公帖佐江被召寄候、其後　御息女様江被召付被召登候、御下様松平隠岐守様江御縁組之節、彼御方江之御

供仕候、主従十二人之御賦ニて被召附候、彼御方ニて
死去仕候由、是五郎右衛門五代之祖ニ而候、日野家之
由ニて、恕咤代ニ日野照資卿江申入候由、免状之趣者、
抑依名字之由緒何之乍斟酌可有資顯候也（不覚也）▽（本ノマヽ）（廿）与有之候△
夫より資顯日野ニ相改申候、由緒之儀者不相知候得共、
右之通免状有之候へ者、定而由緒有之候而社右之通候
半与存候、

一日野家之儀、家傳ニ者、硫磺島江配流せられ候処ニ、
鹿〔籠〕（廿児嶋）之内硫磺崎与申所ニ住居候而、所之者之娘を召
寄嫁候而、男子出生候由候□（廿得共）▽（廿）相知不申候、鹿児之
岩崎寺与申候而菩提所有之由候間、相尋候へ共△位牌又者
（廿何そ書）□付等も無之由候、宝勝（廿寺）□法華經之（廿奥ニ田中）□氏与
有之候、泊之海印寺ニも大檀那田中何某与有之候へ共、
是者皆橘氏之田中ニ而別家ニ而候、日野氏之儀者由緒
相知不申候、
右之通ニ候、五右衛門家者等林二男太郎兵衛（國賢）、後ニ珎
阿弥与申候、是も御同朋ニ被召仕候、　家久公示現流
被遊御稽古候節、珎阿弥御請出ニ被仰付、別而御心安
被召仕、人之師範をも仕候由、其子五右衛門國何（不覚）、其

子藤次兵衛國近ニて候、是五右衛門父ニ而候、先祖終
ニ騎馬并奉行職抔ニ被仰付候儀無之候、當五右衛門始
而騎馬ニ被召仕候、於江戸御系譜并頼朝公教書句解等
仕、林大学頭殿江被遣候ニ付、　中将（綱貴）様別而御悦喜被
思召上、其旨於　御前御直ニ被　仰聞、騎馬ニ被召成、
拝領物有之候、右之為御礼御休息所於御書院二種一荷
進上仕度由御内證より奉願、其通□（廿進上ニ而）□御礼□（廿申上候間、
此節）□も二種一荷進□（廿上被）仰付可被下□（廿候、左候ハ）者、右
御意を以騎馬ニも被仰付候證據ニも罷成候由申出候へ
共、二種一荷進上被仰付筈ニ而無之候、右之進上物者
御内證向ニ而候へ者、例ニ者不罷成候間、中紙ニも可
被仰付哉、乍然右之通ニも為被仰付儀候間、五右衛門
一代者二種一荷をも可被仰付哉、先比相しらへ申上候
品之内ニ而者、矢進上ニ相當申候由也、

（元禄十七年）
申二月　　肥後仁左衛門（廿右）
　　市來源右衛門（家年）

40
一諸家之由緒書依島津大蔵久明求ニ御記録奉行肥後仁右
衛門信（ママ）相調、以二十家為一冊久明送之写、

40の1

此二十家者、自家之系圖文章(廿書)を以相考、大概書調申候、此外相顯候家御座候得共、事繁候故略仕候、尤家之高下次席(廿序)不相分書記候、且又於御記録所(廿書記候上)□□(廿他見之儀)者□御用捨可有之与(廿奉存候)□、左様(廿無)□御座候へ者、家〻之批判ニ罷成、還而障ニ可罷成事ニ御座候間、仰御賢慮候、

種子島氏

一平姓種子島氏系圖者、安藝守清盛三代之孫左馬頭行盛之子肥後守信基、依北条時政之執奏隅州種子嶋を領、世〻傳領之地ニて御座候、種子島左近久時入道一琢龍伯様被補御家老職、嫡家當蔵人殿にて、此外種子嶋氏者皆庶流ニて御座候、

菱刈氏

40の2

一藤原姓菱刈氏者、大職冠鎌足十六世関白忠実之三男宇治悪左府之三男左中将陸長之子三位右中将之三男進士判官重妙、拜戴後白川帝之院宣、賜隅州之内菱刈之郡、其後建久五年(廿重妙菱刈ニ致下向、以菱)□刈家号ニ相定、代(廿〻傳)□領(廿仕)□、菱刈伴右衛門重廣ニ至去菱刈、伊集院之内神殿領地仕候由、自家之系圖ニ記置候、嫡家當菱刈孫兵衛ニ而、其外之家〻者庶流ニ而御座候、

諏訪氏

40の3

一大神姓上井氏ハ邊田七人之内ニて、隅州之内上井・下井之両所を領、以上井家号に仕候、天文年間上井武蔵守董兼薩州永吉之郷拜領仕、嫡子伊勢守覺兼　龍伯様御家老職ニて、日州海江田被宛行、同國宮崎ニ被移置候、其子上井治部經兼代ニ、諏訪・上井之両氏上古同姓之由ニて、依信州之諏訪氏得免許、諏訪氏ニ相改候由、自家之系圖ニ相見得候、嫡家者諏訪神二(廿六)殿、其外之家〻者庶流ニて候、

鎌田氏

40の4

一藤原姓鎌田權守通清三男蔵人太夫(廿光政事、長兄左兵衛尉)□政清遭不意之(廿殺害候間、家相続可仕者無之)□(廿故)候処、光政為後嗣、其子修理亮政佐与申者　忠久公御供仕御當國ニ為罷下由、自家之系圖ニ相見得申候、到子孫出雲政近・

治部少輔政統・蔵人正勝御家老職被相勤候、嫡流當出雲殿ニて候、

40の5

平田氏

一平姓平田之先祖肥後房良西与申者帖佐之地頭職之儀、東鑑ニも相見得申候、子孫平田新左衛門親宗・美濃守氏宗・美濃守兼宗入道洞印・美濃守昌宗・美濃守光宗入道舜蘆・美濃守歳宗・太郎左衛門増宗、御代〻御家老職相勤、太郎左衛門弟休兵衛宗親迄茂　龍伯様御隠居御家老相勤候処、太郎左衛門不忠之事御座候故兄弟共伏誅故、嫡家断絶仕候、其外之平田者庶流御座候、

40の6

一□(㋚本田氏)□(㋚本田氏者　忠久公御供仕)□御當國ニ為罷下由申傳候、平姓ニて候得共、藤原姓ニ相改候、本田重親・信濃守氏親・信濃守元親入道安丁(㋚了)・信濃守重恒・因幡守國親、代〻御家老職相勤申候、隅州清水を世〻致傳領候処、紀伊守董親・左京太夫親兼父子奉背　貴久公候故、清水城を被攻落候、親兼子與左衛門公親入道玄叱者　龍伯様御隠居御家老相勤申候、嫡流當信次郎ニて御座候、

40の7

高橋氏

一大蔵姓高橋氏者其源秋月氏より相分秋月春実之餘裔ニ而、高橋中務太輔種時筑前之内を領、養子高橋三河守顯種寶満城ニ致居住、吉弘氏之一子を養子ニ仕、高橋紹運与申候、顯種心に不叶、秋月修理太夫種実之子右近太夫元種を養子ニいたし候、顯種及死ニ、可責亡紹運之遺言仕候、依之□(㋚元種奉乞薩隅日之援)□兵を、天正拾四年□(㋚筑前岩屋城を隅責、紹運)□及自殺候、　義久公秋月種実・高橋元種父子ニ岩屋・寶満之両城被宛行、天正十五年　秀吉公西征之時、右近太夫元種之旧領を相改、移日州臼杵郡縣城、米地(㋚「采カ」)五萬三千石賜候、慶長十八年、右近太夫元種背将軍家(㋚之命)〔候故〕、所領被召上奥州棚倉ニ配流、嫡子一齋者▽㋚奥州△二本松ニ配流為被仰付之由、一齋之弟高橋七郎右衛門種直御家ニ罷出、右之養子㋚〈當

40の8

祢寢氏

高橋七郎右衛門種十(周カ)ニ而御座候、

一建部姓祢寝氏世〻隅州之内祢寝院之領主ニ而、沙弥清重入道行西　将軍頼家（㊟公）之御下文被下置子孫傳領之地ニて、祢寝安藝守重張代ニ先領を相改、薩刕之内吉利之郷拜領ニ而御座候、嫡家祢寝徳（㊟慈）黄丸殿ニて御座候、

40の9

（㊟村田氏）

一（㊟藤原姓村田氏者、菊池領）主兵藤四郎經頼五男村田五郎經秀之子孫阿闍梨如嚴薩摩ニ下向、其孫通善太守忠國公之御時初而御家ニ奉仕候由、自家之系圖ニ相見得申候、子孫肥前守經房・肥前守經安・越前守經定・右衛門尉經平等者被補御家老職候、嫡流村田五郎左衛門經貞ニて御座候、

三原氏

40の10

一藤原姓三原氏、兵藤太夫經俊後胤与自家之系圖ニ相見得申候、子孫遠江守重益入道昌安・備中守重種・左衛門佐重庸等御家老職ニ而候、嫡流三原諸右衛門重房ニて御座候、

吉田氏

40の11

一息長姓吉田氏正八幡宮之神官ニ而、代〻薩州吉田院之神領を領シ候、子孫美作守兼清者御家老職ニ而候、嫡流納右衛門澤清ニて御座候、

土持氏

40の12

一（㊟田部姓土持氏者、其先筑前之向國門川、号）國宇佐八幡宮之（㊟惣辨官ニ而、領日）門川七郎則綱、嫡孫土持冠者栄妙与申候、夫より嫡〻相續仕、土持右馬頭親成天正五年　義久公江御内應申上候ニ付、豊後大友氏軍を出、縣之城攻落候故、親成豊後國ニ致退去、其後戦死候、其子弾正忠久綱長門國江蟄居仕候を　義久公被召出、旧領縣其外被宛行候處ニ、　秀吉公西征之時、縣之城再及没落候、嫡流土持次郎九郎ニて御座候、

山田氏

40の13

一平姓山田氏者、武蔵三郎左衛門尉有國之嫡子式部少輔有実与申人當國江罷下、日置を被宛行、山田村江致居住、山田を以家号ニ被相立候、子孫山田新助有信、後

ニ越前守入道理安与申候而、　龍伯様御家老職ニて、
其子民部少輔有栄入道昌厳事も御家老職ニて御座候、
嫡家當山田市郎兵衛ニ而御□、

40の14

□

一平姓東郷氏者、渋谷太郎光重之二男重保与申候、重保
弟五人共ニ寶治年間薩摩江下向仕、東郷・邪答院・霾
田・入來院・高城家号之地を各領シ、此家を渋谷五家
与唱申候、東郷氏嫡家者東郷惣左衛門与申候、邪答院
氏・霾田氏嫡流者断絶仕候、入來院氏嫡家者入來院主
馬殿ニて御座候、高城氏嫡流者高城十郎兵衛殿ニて御
座候、

40の15

志岐氏

一藤原姓志岐氏者菊地家一姓ニて、肥後國天草郡之内六
か浦致領知、志岐〔氏〕之城主ニて御座候、貞和年間志
岐兵藤太郎将軍方ニ而於九州軍労仕候、其後菊地肥後
守重朝ニ致随身候、志岐豊前入道麟泉、其子兵部太輔
親弘事者九州御手ニ入候節　御家ニ相随申候、其已後

加藤主計頭清正肥後國領地ニ罷成□、
嫡子肥後守不幸□志岐藤右衛門室
者薩州義虎之女ニて御座候故、藤右衛門嫡子志岐小左
衛門親昌儀、右之由緒ニ付肥後國退去仕、寛永十年、
御家を奉頼被罷出候、此子孫志岐数馬ニて御座候、

40の16

蒲生氏

一藤原姓蒲生氏者、豊後國宇佐八幡宮留主職検校坊教清
子上総介舜清与申人、保安年中ニ大隅國垂水ニ罷下、
其後蒲生・吉田を領、宇佐八幡宮を蒲生ニ勸請仕、代
〻蒲生ニ致居住、蒲生を以家号ニ仕候、蒲生美濃守清
寛・其子美濃守忠清父子二代　太守久豊公御家老職相
勤候、弘治年間蒲生範清　太守貴久公ニ相背候故、蒲
生城御攻伐被成、及没落候、依之範清朔蒲生美濃守清
綱蒲生氏之家督ニ罷成、嫡流當蒲生十〔郎〕兵衛ニ而御
座候、

40の17

□

一□後鳥羽院之御宇大隅國小河院之

内敷根村致拜〔領〕(ナシ)受、数代敷根村江居住ニ而候、土岐四郎左衛門國房代ニ肥後國求摩ニ退去仕候、國房嫡子土岐賢太郎頼房求摩より御當國ニ罷出、敷根村再被宛行、土岐氏を相改敷根氏之称号ニ罷成、代〻敷根ニ居住仕候処ニ、文録(禄)年中敷根中務少輔頼賀下大隅田上城ニ罷移候由、自家之系圖ニ相見得申候、且又敷根筑前久頼寛永年間　菅宮御即位ニ付御使者被仰付上京仕候ニ付、島津之御称号并御諱之字拜領被仰付、到子孫其通ニ御座候、嫡家當嶋津主水ニ而御座候、

40の18

秩父氏

一平姓伊地知氏者、伊地知弾正季随与申人御家五代之太守貞久公御代ニ初而　御當家ニ罷出候、弾正季随三代之孫縫殿介季豊(下大隅垂水邊領知仕、伊地知)□縫殿助重(周)□其子周防守重武両代□御家老職相勤候、重武嫡子周防介重興永録(禄)年間肝付氏ニ致与黨　御家ニ相背候、重興嫡子佐渡守重順文録(禄)三年之秋　太守之背命領(地)知被召上、上方ニ致浪人、慶長六年　御家ニ帰参仕、御知行五百石拜領被仰付候、嫡流伊地知勘助代ニ秩父之称号ニ相改候、勘助子當秩父十郎兵衛ニ而御座候、

40の19

比志島氏

一源姓比志嶋氏者、源姓村上三郎左衛門尉頼重与申人薩州配流ニて、満家院郡司大蔵氏永平之女ニ嫁シ、栄尊(重賢)を出生仕候、永平事男子無之ニ付、満家院郡司職を以外孫栄尊ニ致附属候、依之比志島氏を冒シ、姓者実父之源姓ニ而両家兼帯仕、子孫天正年間(迄)郡山満家院領知仕候、西俣・川田・前田・邊牟木、此四家者比志嶋氏之庶流ニ而候、嫡流比志(嶋孫太郎跡ニ而御座候)□、

40の20

(田尻氏)□

一大蔵姓田尻(尻)氏者、秋月・高橋・原田此三氏者同家(姓)ニ而、田尻(尻)中務太輔鑑種後丹後守与申候者筑後柳川之城主ニて御座候処ニ、龍造寺山城守隆信ニ被攻亡、丹後守戦死仕、其子田尻嘉兵衛(統種)母方之由緒之者豊後ニ罷居候ニ付、浪人分ニ而暫罷在、其後　御家を奉頼嘉兵衛罷出候、子孫當田尻金右衛門ニ而御座候、

41

申三月廿五日

(ヰ寶)右寛永元年申六月十四日令書写之早、

伊東杢兵衛小番入願ニ付家筋之申立有之候、肝要之趣迄を記置候、文章違茂可有之候、於筋目者少シも相違無之候、左ニ記之、

上略ス

私先祖者、伊東大和守(ヰ殿)九代之祖伊東六郎左衛門尉祐國二男伊東加賀守嫡孫伊東駿河守(祐豊)私曽祖父ニ而御座候、駿河守事様子有之(ヰ日州飫肥を立除キ大坂ニ罷)□在候処、従(ヰ惟新様被召寄、御知行千石)□被下置候、大坂一乱之節、加治木之人数被召登候ニ付、新納雅楽助・右駿河守主取被仰付被召登候、其後新納右衛門佐・右駿河守京都蔵奉行役被仰付候、駿河守代年頭之御太刀進上仕來候得共、嫡子九(ヰ左)右衛門代より中絶仕候、九(祐秀)左衛門事　惟新様元服被遊被下候、信國之御脇差拝領仕、于今(ヰ刑)形部左衛門頂戴仕置候、(ヰ刑)形部左衛門始而　御目見仕候節者御太刀進上仕候、亡父松右衛門事者、幼少之時分　寛陽院様御小姓役被仰付候、其後以　御意表方小番被仰付候、其節迄者小番入自由ニ者不罷成時節ニ候得共、右之通被仰付候、騎馬之御奉公をも相勤申候、私事も、松右衛門老躰ニ而御番相勤候儀不被罷成候付、名代ニ小番相勤申候、御供番被仰付、　御駕籠廻御供相勤申候、御取次番(ヰを)□も被仰付候、福昌寺御法事之節も(ヰ御縁が)□わ詰をも被仰付候間、不相替)□小番被仰付度候、(ヰ當時持高百廿石餘有之候由)□段々之書付也、

42

(ヰ宝)寛永元(ヰ申)□五月廿六日書之、

一惟新様御上洛ニ付、文禄四年十二月廿一日、帖佐被遊御發駕、九州筋を御通道ニ而、筑前國秋月金屋ニ而被遊　御越年候、然者其節之御供之内野村大炊兵衛教綱、此家六代之孫當野村与右衛門ニて候、上床藤右衛門國寄、後ニ江田藤右衛門入道宗圓、此家五代之孫島津兵庫殿内江田善兵衛ニて候、白坂七右衛門篤眞入道與竹、此家五代之孫島津兵庫殿内白坂七右衛門ニ而候、

右野村大炊兵衛・上床藤右衛門▽(ヰ白坂七右衛門△儀者、肥後川尻問屋木村源兵衛江右三人より連名ニて遣置候状之内ニ名書相見得候、連名之次第も野村・上床・白坂与有之候、状之趣者　惟新様被遊御宿候

43の1

儀并送人馬質銀等之儀（㊥「質カ」）□（㊥ニて）候、文禄四年十二月、帖佐より被遊（㊥御上洛候節、右三人御供仕）□川尻ニ而源兵衛□（㊥へ為遣状与相見得候、于今源）□兵衛致所持罷在候、此時惟新様御直判之御書をも源兵衛ニ被下置候、當源兵衛頂戴仕置候事、

篠原氏由緒書写

篠原伊右衛門与伊作衆中篠原惣兵衛嫡庶之儀相しらへ可申由御頼ニ付申談之覚

一篠原惣兵衛より、兄篠原七之丞事鹿児島高ニ被召成、此方之家出シ除申候、親惣兵衛（惣右衛門カ）より私江譲りを請、地頭江も其返札儀相濟、高帳ニも嫡子与書戴相納り申候、七之丞被召出候節、親惣右衛門并持高者伊作江被召直之由被仰渡、惣右衛門家督者惣兵衛請継候故、此家之嫡流之筈ニ候与申出候段、無謂申分ニ而者無之候得共、嫡子ニて候七之丞を二男家ニ召成候との遺言證書□□□□者其詮難相□□□□

一篠原七之丞事　寛陽院様御代忝被召仕、鹿児島高ニ被召成、結構ニ成立申たる人ニ候処、何そ差立候訳も無之候得者、今更嫡子を二男ニ可被相立様有之間敷哉、其上系圖之事書茂難仕筈ニ可有御座候、然者天倫之通七之丞を嫡流ニ御定可被成事と存候、雖然系圖方之儀者法様も可有之儀ニ候間、御記録奉行衆江御内意被仰達可然与存候、委細之儀者双方口上書ニ相見得申候、略仕候、以上、

申七月廿二日

藤野休左衛門
木脇喜兵衛
谷山角太夫
鎌田傳兵衛
鎌田後藤兵衛
猿渡喜右衛門（信安）

43の2

□□□□之、

篠原伊右衛門与伊作衆中篠原惣右衛門嫡庶之調何れ茂御頼ニ付、吟味被成候書（㊥付）〈我〉〻致披見、存寄之趣於有之者可申入旨御内意被仰聞候ニ付、左之通御座候、

一伊作衆中筞原惣兵衛事、親筞原惣右衛門家督之内ニ兄筞原七之丞壱人鹿児島高ニ被召成候(㊥故)処、惣兵衛事二男ニて御座候得共嫡子ニ被成、惣右衛門致相續候儀、無別儀相見得申候条、惣右衛門家之嫡流者惣兵衛ニ而可有之与存候、

一筞原七之丞事筞原惣右衛門嫡子之儀ニ候(㊥者)〔得共〕、家相續可仕儀者勿論ニ候処、　寛陽院様忝被召仕、鹿児島高ニ被召成候故、家督相續(㊥不)可致候、然者七之丞事家督者不仕候得共、　君命を以被召出、外城士之家より罷出、　御城下士ニ家を(㊥相立申儀重キ事ニ御座候間)□、七之丞家之(㊥儀惣兵衛家之下ニハ相立申)□間敷与存候、

右之通□(㊥ニ)御座候へ者、此家之嫡流者惣兵衛ニて御座候得共、七之丞事長男ニて、殊更　君命を以　御城下ニ被召出、別ニ家を興シ、元祖与罷成儀ニ御座候得者、惣兵衛方よりも崇敬仕、且又伊右衛門家之儀者、養子(㊥父)七之丞事惣右衛門家より為罷出儀ニ候得者、其元を不相忘、惣兵衛を可致崇敬事ニ候、然者互ニ家之高下を相争可申事ニ無之、嫡家よりも右両家之高下同格ニ御取持可有之儀欤与存候、此等之趣(㊥ナシ)〔を〕以御内意我〻存寄任御尋如此御座候、以上、

申(㊥七)八月廿四日　　市来源右衛門(家年)
外ニ両人
(㊥田中五右衛門
肥後仁右衛門)

鎌田出雲殿　両家嫡庶之儀申出趣ニ付、此出雲殿伊作地頭ニて、先御用人衆御記録奉行江内〻御頼ニ而調へ為有之与相見得申候、

□被仰付候仰出□
□置也、

一猿渡喜右衛門(信綱)跡伊東源太兵衛江可被　仰付候事、

正保四年十月十三日被仰出、酉十一月廿九日、伊地知杢右衛門ニ而被仰渡候、

右之通御書付之内ニ有之、尤外之ケ条者見合ニ罷成儀無之候処、右一ケ条迄を書写置候、但信綱死去者寛永十六卯年正月十六日ニ而候、然者七ケ年ニ當る十月跡目被　仰出候、

光久公御代ニ而候事、

寶永元年甲申五月十日書写之、

45

（表紙　三）

『一番』

□家□并□

（中表紙）

「

糺合濟

御家傳并諸家□（由緒）　二

」

山口家由緒

覚

一山口勘兵衛殿御問條之旨ニ應し、御返答書御記録并旧記之中ニ見得申候山口駿河守直友之儀見合申候而草案書調申候、得与御覧候而、不入義ハ御消し被成、且又文字續悪敷所者御直被下候ハヽ、清書仕差上可申候、

一庄田三太夫義御記録所江見得申候旧記ニ□（㋚者山口）直友之□（㋚與力与相記シ）有之候ニ付、此□（㋚節茂）與力与□（㋚書申候、傳承候）得者、于今三太夫殿子孫有之候而、三太夫儀佐土原城主之役目をも一節被相勤候抔与被申由候、左候〔而〕（㋚ハヽ）、與力之文字者差合ニ可罷成候条、召置可申哉、私考ニ者与力者別条有間鋪与存候、

一佐土原右馬頭殿江拜領之時、山口直友より龍伯様江被差上候書状を書入申候、是者壱通ニ可仕哉、又召置可申哉、并嶋津中務太夫豊久主跡目被召立候義一ケ条書入申候、是者勘兵衛殿より之問条ニ、佐土原右馬頭殿江被下、御跡目代ニ（㋚付）而委細之分ケ承度与有之候ニ付、右馬頭殿御子孫之儀者勿論相記申候、豊久主之御跡目之事之様ニも見得申候故相記申候、不入事ニ候ハヽ、召置可申候、右何れも御差圖奉得候、以上、

（貞享四年）卯六月▽㋚八日△　　田中五右衛門（国明）

慶長五年九月十五日於濃州関ヶ原　権□(㊥現)様御勝利□(㊥已後當家之安)
□危、其以前逆□(㊥臣)伊集院幸□(㊥侃を誅伐致)候始末、
同十五年陸奥守家久琉王召列駿府并江戸江参上仕候儀
共、(㊥應)御問條之旨御返答之覚、

慶長三年、嶋津兵庫頭殿御家來伊集院幸侃切腹被仰付候後、其子源次郎居城ニ引籠候節、山口勘兵衛儀両度薩广江罷越候、此節之儀、始終之趣御書拔被下候様ニ奉願候、右之節より嶋津家之諸事公儀江之取次勘兵衛江被仰付候様ニ承傳候、

一慶長四年三月九日、家老伊集院右衛門忠棟入道幸侃と申者多年挾逆心事致露顯候故、又八郎忠恒(後大隅守家久)於伏見宅致手討候、妻子等者死罪を宥メ致追放候處、不及吳義早速東福寺江致退去候、幸侃嫡子伊集院源二郎忠眞儀者、父之罪科ニ不混令赦免、本領相違有間鋪旨申渡候得共、源二郎居城日州庄内之都之城ニ□(㊥楯籠)、十二之砦□(㊥を構へ、顯叛逆)之色候、依之龍□(㊥伯家)臣新納□(㊥武蔵入道拙齋)
□山田越前入道理安に人衆を相添庄内江遣、源二郎を押へ置、伏見江致住(㊥注)進候故、忠恒右之趣　権現様江致言上、早速御暇被下致帰國候、

一龍伯家老喜入大炊久正与申者を以源二郎逆意之趣致言上、且又庄内之繪圖を差上候、　権現様御前近大炊を被召出、繪圖を以地形之(㊥險)倹易、人衆之多少、兵糧之員数御直ニ御尋被遊候、大炊委細ニ言上仕候處、地之利を得たる敵なり、急ニ攻バ多く人数を損さすへし、來春者兵糧尽、おのつから落去すべし、忠恒若氣ニ而急ニ可攻落与存候とも、龍伯堅く制し、人数不損様ニ覚悟仕候へと龍伯江可申達旨、御直ニ被仰付候、

一忠恒致帰國、不移時日人数を庄内江遣、自分□(㊥茂令)出陳、六月□(㊥廿三日、源次郎先)□手籠置候山□(㊥田・恒)吉両城□(㊥攻落申候、直ニ源)
□二郎居城江取掛可申与致候へとも、　権現様より被仰下趣有之候ニ付、急ニ攻申間敷むね龍伯堅く制申候故、忠恒憤を押へ、出城之際迄押詰罷在候処、　権現様より山口勘兵衛殿江(同年七月九日大坂被為立候由、)被　仰含薩摩江御下し被成、源二郎降参仕候様ニ御曖候へとも、源二郎初者奉任　上意、後ニ違変仕候付、御曖不相調、勘兵衛殿も同年九月廿四日隅刕富隈を被為立、忠恒(㊥茂)之路次迄見送りニ罷出候、　権現様江為御禮家臣稫所越前入道休心・竹内織部両人を勘兵衛とのへ相付差上せ申

候、然處ニ又寺沢志摩守殿八月廿一日伏見被為立候由、　權現様御内意ニ而同十月十五日被為下着、色々御曖候得共、源二郎不致領掌候ニ付、志州も追付上洛候、此時為御禮忠恒家臣比志嶋紀伊相付差上□(ヶ候)、十一月十一日志摩□(ヶ守殿同)□(ヶ同年之)大坂ニ致□(ヶ上着候)□(ヶ十一月)□廿七日□冬、勘兵衛殿□(ヶ大坂)□被為立候、上□(ヶ意ニ而再下向さ)□せられ候、此時忠恒(本ノマヽ)家臣税所休心・竹内織部・本田助之允其三人勘兵衛殿供いたし罷下候、同五年正月、忠恒兼而勘兵衛殿ニ相断、大軍を以庄内ニ取詰、同二月、志和池・安永・高城・山之口・勝岡・梶山・野々三谷七ツ之出城を攻取申候ニ付、源二郎進退相究り、勘兵衛殿を頼一命を助り度之旨申出候、上意之趣も□(ヶ候間)、源二郎一命を助候様ニ勘兵衛殿達而(ヶ被)為曖候故、難黙止任其意候、源二郎則財部・梅北・末吉三ツ之城を指添都之城を明渡し退去仕候、三月十四日、忠恒都之城ニ入、翌十五日、源二郎召出知行二萬石申付候、是偏ニ上意を重し奉る処(ヶ故)ニ御座候、勘兵衛殿上洛させられ、四月廿三日、大坂江上着被成候由、此時忠恒家臣入來院又六重時・善載坊を勘兵衛殿江相付差上せ、庄内□(ヶ退治)之趣

(ヶ致言上候、依)〔言上□〕之　御内書頂□(ヶ戴)仕候、此已外□(ヶ二茂御内)□書数通被下置候、

一従　權現様為　上使勘兵衛殿惟新伏見之宅江御出候而、源二郎弟小傳次兄弟三人共ニ對面をなすへき由被仰聞候ニ付、同五月十九日、任　上意彼者共江惟新を對面候、其後　權現様奥州江御進發之砌、御見送として惟新山科迄罷出候、此時又伊奈圖書頭殿・山口勘兵殿を以被　仰出候者、伊集院源二郎弟小傳次兄弟三人并母早々國元へ可指下候、頃日源二郎母大坂　御城ニ三日相詰致直訴候、言葉不通御耳ニ不入候故、兎角之事者不被　聞召届候、ケ様之徒者其侭ニ而御差置候而者禍之基なるへき之旨御丁嚀之御意候ニ付、母子四人共ニ國元江差下し申候、

□(ヶ慶)長五年関□(ヶケ原御陣以後)之儀共委□(ヶ細承)度奉存□(ヶ候)、一兵庫頭義弘入道雅(ヶ惟)新事、関ケ原戦場より数ケ國之敵地を抑通、泉州平野江罷出候、平野迄相従候侍五十餘人、雑兵合弐百人計ニ而御座候、是等を者皆々大坂江遣、惟新者主従八人田邊屋道與与申者之住吉之宅ニ忍居、大坂ニ罷在候妻子(ヶ女)并家中之質人等留主居之者共申合、

廿二日ニ大坂を可(本ノマヽ)被出由相圖相極、惟新者堺之塩屋孫右衛門と申者之所へ宿を替、廿二日之晩、堺を出船いたし大坂川口迄参候処、惟新・忠恒両人の妻女并家中之質人女童迄一人茂不残大坂之宅をいて、番所無口能罷通候由承届、則船を出候、妻女之船も無程西之宮之沖ニ而追付、供船合之五十餘艘日州細嶋へ着船いたし候、十月三日、隅州冨限ニ而□(ヶ)伯ニ致對面、□(此度難黙止)□出陳いたし、家□(ヶを)危成之事□(ヶを申謝)□、夫より桜嶋へ蟄居いたし候、

一此時加藤主計頭清正薩广堺肥後水俣へ抑詰、近國之諸将も出船いたし、急度可攻入躰ニ相見得候間、人数を出し境目を堅めさせ申候、　近衛様其外黒田如水・寺沢志广守殿より書状差越、　權現様江御訴申上候者取(本ノマヽ)持可有由申来候、

一其比惟新家老新納旅庵并本田助之允と申もの関ヶ原敗北以後出京いたし、鞍馬之寺中ニ忍居候を、捜出生捕被成候処、幸檢使山口勘兵衛殿ニ而、先年薩广江被為下候時分より御存知之者とも故、惟新逆従(ヶ徒)ニ與し候趣委細ニ被相尋候、旅庵申候者、惟新事　權現様御懇意之義とも、殊ニ伏見御城をも御預可□(ヶ被成)様ニ兼而□(ヶ上意茂御)□座候間、御味方申□(ヶ伏)見ニ籠り可□(ヶ申旨某を以)□鳥居彦右衛門殿・内藤弥次右衛門殿江申遣候処、　上意者左も有之候、當時両人ニ御預ケ被成候御城之儀ニ候得者、他人を籠申事罷被成間敷由被申切候故、無是非御敵ニ加り候与申候、勘兵衛殿則右之趣被達　上聞候處ニ、旅庵申通惟新疎意有間敷与被思召候与御挨拶宜御座候、殊ニ龍伯・忠恒在國ニ而、此事曽而存間敷間、早〻御断申上候様ニ可申聞ク由(本ノマヽ)ニ而、井伊兵部少輔殿・山口勘兵衛殿方より書状相添、本田助之允を國元へ被指下候、依之龍伯・忠恒より般若院与申者を助之允ニ相そへ、兵部少輔殿・勘兵衛殿迄弥御取持頼入候由申越候、其時兵部殿與力勝五兵衛・勘兵衛殿與力和久勘(ヶ甚)兵衛両人般若院・助之允案内ニ而同十二月廿九日國元へ被差下、　御前之儀弥取持可申□(ヶ候)間、心安存□(ヶ致上洛候様ニ)□と龍伯江被□(ヶ為)申越候、同□(ヶ六年之春)□、又和久勘(ヶ甚)兵衛旅庵相添被指下候、同年之秋、右之趣為可申謝、兵部少輔殿・勘兵衛殿迄家臣鎌田出雲政進(ヶ近)を指上候処、達　上聴、　權現様御前へ出雲被召出、　御直ニ難有

46の1

上意御座候、其上本多佐渡守殿・山口勘兵衛殿連署之誓紙龍伯・忠恒へ被指越候、依之龍伯上洛可仕ニ相究候へとも、老病故急ニ發足仕義不罷成、同年極月、従弟嶋津圖書忠長を以右両人迄御礼申、病氣快氣次第罷上り御礼可申上旨申達候、同七年之春、伏見へ参着いたし、右之御礼申上、龍伯・忠恒連署之誓紙指上候、依之四月十一日　權現様被遊御誓紙、龍伯江被下候間、可指越由圖書ニ被仰付候、圖書則使を以國元へ指下候、勘兵衛殿よりも和久甚兵衛を相添被遣候、六月上旬、薩(中摩)□へ到來、龍(中伯達而頂戴)□仕候、其　御辞言、

両度使者祝着候、然者薩广大隅諸縣之儀、此間被(正相)召抱(正候)〈分、相違有間鋪候、少将事其跡被相讓事候間、不可有別義候、兵庫頭義者、龍伯江無等閑候間、吴義有間敷候、日本(正國)〈大小神祇、別而八幡大菩薩、毛頭不可有表裏者也、

(正卯月十一日)
〔月日〕　▽(正)内大臣△御判

龍伯

依之龍伯弥上洛仕筈御座候得とも、病氣然与無御座候ニ付、忠恒為名代上洛可仕ニ相究り、八月朔日、鹿児嶋を首途いたし、日刕野尻与申所ニて致滞留候、様子ハ、家來伊集院源二郎・同小傳次・同三郎五郎・同千次兄弟四人去〻年以來再隱謀を企風聞候へとも、先年上意を以宥逆罪置候者とも(中之)〈義故、実否を見計(中合延引候得)□□とも、逆意無紛故、八月十七日、(中彼者共)□於所〻討果、其外残黨方〻ニ隱居候を尋出し成敗申付候ニ日数抑移候、夫より日刕細嶋より出船いたし、攝刕兵庫ニ着いたし候、折節福嶋左衛門太夫殿安藝國致拜領被罷下候ニ逢候、太夫殿此間龍伯・忠恒上洛仕候ハヽ取持為可申大坂ニ相待候へとも、餘り延引故罷下之由候故、忠恒右之次第具ニ申談、太夫殿案内ニ而兵庫より致同道大坂ニ致着船、　權現様去ル十月二日関東江還御被遊候故、太夫殿・山口勘兵衛殿相計、関東江(中注)住進被致候、忠恒茂家來市來八左衛門与申者相添、本多佐渡守殿迄上着之趣申上候處ニ、八左衛門義　御目見被　仰付候而、十一月九日　御内書致頂戴候、　權現様被遊御入洛、十二月廿八日、忠恒於伏見　御城　御目見(中得仕)□

（本文書ハ「旧記雑録後編二」一六一五号文書ト同一文書ナルベシ）

□、御馬二疋・御鷹二連拜領いたし、(ヰ翌年)□正月御暇被下、致帰國候、

一忠恒御暇被下候而罷下候刻、山口勘兵衛殿迄内談仕候者、備前中納言秀家関ケ原敗北以後薩广江逃下頼申候故、無是非國之端ニ抑籠置候、一命を御助被下候様序を以御訴申上度候、如何可仕哉与申候へ者、本多佐刄江内談いたし重而可申越由候、其後勘兵衛との与力和久甚兵衛を指下、秀家事早〻差上せ御訴申候ハヽ、佐刄可被為取持旨忠恒江被為申越候、依之家來桂太郎兵衛与申者ニ警固申付、隅刄正興寺文之与申出家相添、秀家を指上せ勘兵衛殿迄案内□(ヰ申)候、佐州者関東江被為下候付、本多上野介殿より達　上聞候処、秀家事叛逆之為棟梁之旨、可被助置者ニ雖無之候、嶋津家之訴訟難黙止(ヰ被)□(思召候)間、宥死罪、駿河久野江可被召置□(ヰ之)旨上意ニ而御座候、依之嶋津攝津忠政与申者を以御礼申上候、其後秀家八丈嶋江流罪被　仰付之由候、

同年、日州佐土原之城主嶋津中務殿打死之後城主在番ニ庄田三太夫被遣候義、其後佐土原右馬頭殿江被下御跡目義ニ付、委細之分承度奉存候、

一嶋津中務太輔豊久関ケ原ニ而打死いたし候ニ付、中務居城日刄佐土原を被召上由ニ而、忠恒家老鎌田出雲政近慶長七年罷下候節、勘兵衛殿与力庄田三太夫を被差下、出雲致同道佐土原江差越候、龍伯より椛山兵部入道紹劔与申者を佐土原へ指越、城可去渡旨豊久家臣ともへ申付候ニ付、無口能三太夫方へ相渡候、依之直ニ番手被仰付候、龍伯・忠恒より惟新家老新納旅庵を以内〻勘兵衛殿迄御取持(ヰ之儀)□頼存候ニ付、中務奉對　權現様逆意□(ヰ無)御座段達　上聞、龍伯・忠恒親類之中ニて佐土原番手可申付之由被仰付候故、竜伯従弟嶋津右馬頭征久を申付召置候、且又佐土原之義直征久江被下度之旨龍伯内〻勘兵衛殿迄申入置候、本多上野介とのへ相談之上被達　上聞、同八年、佐土原を右馬頭拜領いたし、御直ニ被召出候、夫より征久子右馬頭忠興、其子但馬守久雄、其子飛弾守忠高、其子當左京迄継而佐土原を相領申候、左京幼少之間、飛弾守跡式従弟式部少輔一節致相續候、征久江佐土原拜領被仰付候節勘兵衛殿より龍伯へ被仰越候書面、左之通ニ御座候、

先日御両使御下候節、以書状申上候、然者今度佐土原之義、連〻御内存之趣を以、本多上刕申談御取成申上候処、御同名右馬頭殿へ佐土原之城可被成御請取之旨就被　仰出、則可相渡(旧由庄三)□太へ申談、我等使者右馬頭殿へ相添(旧差下)□申候条、無別義▽旧佐土原△右馬頭殿〔へ〕(旧ナシ)可有御請取候、然者又四郎殿伏見可被成御在府旨御諚候間、無御油断早〻被成御上候様被仰談御尤存候、同名右馬頭殿御息、是又関東江▽旧可有御下之由堅申談候間、早速関東へ△御下候様御相談専一ニ存候、何も急度〔和甚〕(旧和久甚兵)差下可申候間、其節旁(旧尚)以可申入候、恐惶謹言、

十月晦日　　山口勘兵衛
　　直友在判

薩摩龍伯様

参人〻御中

（本文書ハ『旧記雑録後編三』一八八三号文書ト同一文書ナルベシ）

一中務太輔豊久儀▽(ヰ)奉對△　權現様毛頭逆意無御座段被達　聞召、龍伯願之通佐土原を右馬頭江拜領被　仰付、難有奉存候上なから、豊久子なくして致戦死、其家可令断絶義、龍伯・惟新・忠恒有餘不便之事ニ存、豊久弟(ヰ源七郎)□忠直娘一族喜入攝津忠續与申者之(ヰ嫡)□子中務忠栄を取合、高四千石申付、豊久跡ニ取立置申候、忠栄嫡孫當嶋津中務久輝ニ而御座候、

慶長十五年、琉球王を被召列駿府・江戸江も御下候節之儀、

一琉球國者、家久十代之祖陸奥守忠國代ニ、　義教将軍普廣院殿御舎弟大学(覚)寺門跡義昭僧正を於日刕福嶋任台命切服させ申候付、為其忠賞永享十三年ニ致拜領候処、近年修禮致懈怠候、殊更　權現様ニ御礼可申上之旨使札を以申付候へとも不致領掌候間、人衆を差越可致退治之旨、山口駿河守殿を以致言上候処、蒙　御免、慶長十四年三月上旬、家老椛山權左衛門久高・平田太郎左衛門増宗申付、人衆三千・兵船百餘艘指渡し、家久も山川与(ヰ申)〈湊迄致出馬下知を(ヰ成シ)□、両人先大嶋と申嶋ニ着船いたし、(ヰ此)□嶋手ニ附候而徳嶋ニ参候へ者、嶋之者共防申候故、数百人討取候より、永良部嶋無呉義相隨候、夫より琉球之地ニ押掛、海陸より國王居城首

里与申城ニ取掛申候、國王尚寧降参仕候ニ付、早船を以申越候故、使者を以致言上候、　權現様・台徳院様御感不斜、御代始ニ吳國を従申候由ニ而御感状を被下、猶以琉球國を永〻拜領被　仰付之旨、御書面相見得申候、龍伯・惟新も同前ニ御感状頂戴仕、本多佐刕より茂御奉書被相添候、依之龍伯より為御礼使町田圖書、惟新為御禮使宮原主計指上候処、　權現様・台徳院様江両使　御目見被仰付、龍伯・惟新江　御内書被成下候、惟新事隱居仕、且又関ヶ原乱後蟄居之躰候処、御感状被成下候儀、難有仕合ニ御座候、

一琉球國王尚寧を權□（ヵ左衛門・太郎左衛門）相卒、薩摩へ致着岸候ニ付、同十五年（ヵ五）□月十五日、家久琉王を召列、駿府ニ参着仕候、道中御馳走朝鮮人來朝与可為同前旨兼而被　仰付由候、八月八日、家久琉王を召列致　登城候、尚寧御太刀一腰・御馬代白銀壱萬両・緞子百巻・羅紗十弐尋・太平布二百疋・蕉布百端献上仕候、家久茂御太刀・馬代其外品〻献上仕候、　御代始ニ早速吳國を従へ、其上其國王を召列来朝仕候儀、家久無比類働之由　上意ニ而蒙　御感、御饗應被下、御酒宴之上ニ而常陸介殿・御靏どの御舞被成、家久ニ貞宗之御腰物大小拜領仕候、夫より御暇被下江戸へ致参着候処、早速　上使被成下候、押付又〻　上使を以米千俵致拜領候、家久尚寧を召列致登　城候、尚寧御太刀一腰長光・御馬代白銀一萬両・緞子百巻・虎皮十枚・太平布二百疋・蕉布百端致献上候、　若君（ヵ様）□へ御太刀一腰・緞子五十巻・太平布百疋・蕉布五十端指上、家久も御太刀・馬代其外品〻献上仕候、其後御饗應被下、且又於御数寄屋　御手自御茶を被下候、依　召登城仕候処に、御饗應之上加賀貞宗之御腰物・御馬拜領、且又桜田之宅地被下、直ニ御暇被下候而、琉王者東海道、家久ハ木曽地（ヵ路）を罷上り候而致下國、其年以　上意琉王ニ帰國仕せ候、

右之外ニも山口勘兵衛事ニ付記録とも御座候ハヽ、御書拔被下候様奉願候、以上、

一慶長十九年大坂御陣之前、秀頼卿より高屋七郎兵衛と申者指下し、家久ニ味方頼之由書状ニ正宗之脇差を相添被遣候へとも、同心不仕、右書札ニ返書之案文を相添、板倉伊賀守殿迄指上せ、於　御出馬者急度可馳参由任（注カ）申候、伊刕返書ニ、人数を催、御左右次第可罷登

候、假令　御出馬之由承候共、無御下知候〔とも〕(ヤ者)罷立間□(ヤ敷由)被為申越候ニ付、人衆を揃へ　御陳觸奉待候、秀頼卿へ之御返答申候も、當家之儀、　太閤様江者一筋を相守、兵庫入道於関ヶ原雖尽粉骨候、合戦相破、御所様天下被成御安治、當家迷惑ニ相究候処ニ、被差捨　御遺恨、則家久被召出、殊ニ兵庫入道身上迄無吴義被差置候、然時者　御所様御取立為被成當家之儀候間、背　御當家申候儀不罷成候段、委曲申達候、其後川北少左衛門与申者を指下、以書札是非頼之由申來候、家久最前之返事ニ申入候通同心不仕、重而使札ニ預申間敷由申(ヤ返)通候処、又武井理兵衛与申者を被差下候間、則理兵衛を搦捕、秀頼卿之書状ニ相添、山口駿河守との迄指上候、

一家久家老三原諸右衛門重信(種カ)ニ人数を相添大坂ニ指上候、其後板倉伊賀守殿より、人衆を揃、家久早〻可罷上旨上意之趣申越候、十二月九日之御奉書同□(ヤ月)中旬到來致候ニ付、則日鹿児嶋を罷□(ヤ立)、日州細嶋より出船いたし候へとも、風波別而荒く、同廿九日、漸豊後之内森江迄参候処、本田上州・山口駿州十二月廿八日之御奉書致到來候ニ、大坂御無事相濟候間、何方迄致出船候とも早〻可致帰國与　上意之趣被為申越候故、森江より帰國いたし候、

一元和元年之夏、秀頼卿又叛逆之聞得有之候ニ付、本田上州書状指越、催人衆、御左右次第ニ罷上へく之由ニ而、奉待候処、上刄・駿刄卯月廿日之御奉書五月初到來候而、早〻可致出陳之由ニ付、五月五日、家久壱萬三千之人数を召列、領内京泊与申所より致出船、肥前平戸ニ参候時、山口駿州より五月九日之御奉書ニ、去七日大坂致落城候間、人衆を残置、手廻計ニ而早〻可罷登之旨、同十九日到來候故、則兵船を返し、手廻計ニ而六月二日尼崎□(ヤニ)着船いたし、則於伏見　權現様江□(ヤ御)目見仕、行平之御太刀・正宗之御腰物・御馬弐疋拜領仕候、其後於二條　御城舞楽并御能、於伏見　御城御能、何れも家久被召寄見物被仰付候、右大坂両度御出馬之節、隨　御下知家久致出陳候儀、御問条之外ニ而候へ共、自駿刄　上意之趣被為相傳儀有之候故、外ニも記録候ハヽ書拔可進由承候ニ付、書記申候、尤慶長四年逆臣伊集院源二郎忠眞庄内都城ニ楯籠候節為

御曖両度迄薩广へ駿州下着被成候而より已後者、當家より　權現様ニ申上候儀、諸事駿州を以頼存為申上之由候、其趣肝要之儀共者、右返答書ケ條之内ニ相見得候通ニ御座候、以上、

47

日州佐土原城地由緒書段〻之覚

嶋津左京(惟久)在所日刕佐土原之儀城地ニ而、堀・石壁・土居・内(伊外之)□曲輪・塀門等迄今以先規之通御座(伊候)□条、左京事城主ニ被仰付被下度内〻奉願存ニ付而、古來より之儀段〻書記申候、

一佐土原之儀、田嶋城与申候而、東日向之本城ニ而候故、嶋津家五六代比より家來伊地知氏之者を城代ニ差置候ニ付而、右之伊地知氏二三代田嶋を名字ニ名乗申候、其子孫于今當家之家來ニ而罷在候、其後子細御座候而、佐土原と改号仕候、

一其以後西日向者當家より領知仕、東日向之内者過半伊東家領候而、佐土原・都於郡両所を居城ニ被仕候、嶋津修理太夫義久入道龍伯・同兵庫頭義弘代天正之初比、當領之内ニ伊東(伊家)より手を掛被申候付而、難止防戦候

47の1

処、伊東家被致敗軍候故、人数を差向攻申候へ者、佐土原落城候而、大友家を頼豊後國へ被立退候付而、日州一國當家一統之領知(伊ニ罷)□成候、其節佐土原・都於郡を義久弟嶋津中務少輔家久江附属仕、佐土原城ニ罷移候、當分伊東之城地飫肥ニ者上原長門、當分秋月家之城地財部今ハ高鍋と申候、鎌田筑前地頭申付差移、此外上井伊勢・山田新助・比志嶋式部・吉利下総なとゝ申者も東日向諸所江差移申候へとも、皆以義久家來に候、佐土原者東日向之本城ニ而、義久弟中務少輔罷在候故、右之者共も中務を日州口之大将与仰申候付而、飫肥・財部なとも其節者佐土原へ相隨候城地ニ而御座候、

一秀吉公征西之時、薩摩・大隅両國并西日向を義久・義弘江被下之候、佐土原城者中務少輔へ被下候、其證書、

嶋津中務少輔儀、人質を出居城を明、中納言ニ相付上方へ罷上、似合之扶持をうけ可有奉公由、(田神妙)□被思召候間、日向之内佐土原城并城(田付之)□知行以下あけ候とて可被召上義ニあらす候間、是又中務少輔ニ可被返下事、

47の2

五月廿六日　　御朱印

嶋津兵庫頭とのへ

（本文書ハ「旧記雑録後編二」三三四号文書ノ抄ナルベシ）

今度身上之儀言上候処、佐土原城并本知可返付之由候之条、可被得其意候、謹言、

五月廿七日　　秀長判

嶋津中務少輔殿

（本文書ハ「旧記雑録後編二」三四〇号文書ト同一文書ナルベシ）

右両通を以城地之儀者相見得申候、

一中務少輔家久者天正十五年中ニ相果、其子嶋津又七郎豊久後ニ被任侍従、中務太輔ニ罷成、佐土原城致領知候、関ケ原乱之節戦死仕候付而、佐土原之儀者被召上、御番城ニ罷□（成）候処、中務事奉對　権現様無逆意死候趣被達　聞召、龍伯一族之内番手申付置候様と被仰出候付而、薩州より番手差越置候、依之、右之城地龍伯従弟右馬頭以久江被下度之旨、龍伯内存之趣山口勘兵衛迄申入置候処、本田（多カ）上野介殿江相談之上被達　上聴、慶長八年、佐土原城を以久江拝領仕候、其證書、

但此證書山口勘兵衛直友より十月晦日日付ニ而薩摩龍伯様宛書之状、前ニ山口家御問條御返答書之内ニ有之候故、略之、

右之状ニ茂佐土原者城地▽（ヵ）之儀△慥ニ相見へ申候、山口勘兵衛殿後者駿河守殿与申候、慶長四年、龍伯家來伊集院幸侃嫡子源二郎以逆意居城楯籠候を攻申候節、　権現様より為　上使勘兵衛殿下向候付而、□（ヵ其已）後者當家何角之御用頼申、□（ヵ万）端御取持候故、佐土原之義も勘兵衛殿御取持有之儀ニ御座候、

一右之通御座候得者、右馬頭以久佐土原城主ニ被仰付候儀無別条、以久子右馬頭忠興、其子但馬守久雄、其子飛驒守忠高、其子當左京ニ而候、左京幼少之間、飛驒守跡式従弟式部（久壽）少輔一節相續候、是迄も官位被　仰付候、當家之庶流差立御直ニ相勤候者左京一人に候、中務太輔戦死以後被召上候を、龍伯内〻奉願候付て、左京先祖江為被下城地ニ候、古來より之城ニ而、新義之構営ニ者無御座候条、何与そ城主列ニ被　仰付被下候様奉願候、

以上、

『右之書付ニ繪圖相添、大久保加賀守(忠朝)様へ此通御預(願)被成度候、御差圖被成被下候様ニとの儀ニて、赤松甚右衛門加賀守様へ参上仕、近藤吉左衛門へ相達置候処、久〻間御座□(候而)、此御願者當時中〻相調儀ニ無御座候、□(追而)時節も可有之候、先御返シ被成候由候付而、又〻被　仰入候筋ニ而左之書付相調、甚右衛門加賀守様江持参仕、吉左衛門へ渡置候、得与見届何分与可申旨ニ而、未兎角不申來候』

大久保加賀守様江被　仰入趣

嶋津左京事城主ニ被　仰付被下候様願申上度之旨、書付・繪圖懸御目候処、當時相濟儀ニ而者無御座候、重て時節も可有之候、委細者追而可被仰聞之旨、御返詞趣承知仕候、依之御内意申上候、新規ニ城を取立申儀ニ而者無御座、古來より之城ニ而、関ヶ原落去已後御番城ニ被仰付置候を、私高祖父修理太夫入道龍伯願申上、左京高祖父右馬頭へ拜領仕候、其節山口勘兵衛殿より龍伯江被遣候證書ニ茂佐土原城与御座候、其以後城を破却仕候様為被　仰付儀ニ者無御座、　權現様より拜領仕候城郭之姿ニ而、堀・石壁・土居・□(塀)門等内外之曲輪共ニ今以有之、此方ニ而者城主与存候而罷在候処、左京幼少之内嶋津式部少輔彼家相續仕罷居候砌、佐土原之儀　公儀ニ而者城地与者無御座様為承及由候得共、其段此方江者不申聞候付而、左京家督仕候迄も城主与存入罷在候付而、式部少輔へ三千石之分知をも奉願、被　仰付之候、左京祖父但馬(守)頭、父飛驒守并式部少輔迄も、彼家相續付而官位被　仰付候処、右之分知故三万石之高相減、二萬七千七十石餘ニ罷成候付而、城主ニ而者無御座、左京官位等も不被　仰付ニ而可有御座哉之由候、佐土原領ニ者新田も三千石余有之由候、城主列ニ不相加候儀存知候(ハヽ)〔て〕、式部少輔江者新田三千石之分知ニ可申上儀ニ候処、右式　權現様より拜領仕候城地ニ而御座候故、城主与存罷在候付而、三万石之内□(を)分知ニ奉願、今更家之瑕瑾ニ罷成候様有之残念ニ候、塀門等一宇茂新規ニ取立可申与奉願儀ニ者無御座候、有來候城構之通ニ而、　權現様より被　仰付置候一筋相立候様、城主之列ニ被召加被下候様奉願存候、

49

此等之趣何与そ御取持被成被下度候、急ニ御取持難被成義ニ候ハヽ、繪圖・書物等者先御請取置被下候様奉頼候、以上、

但月日付無之、

佐土原領之内諸村増高之書付写

古高千六百石四斗(卅七)三升三合

新高千六百拾五石三斗四升五合

一増高拾四石八斗(卅七)壱升弐合　上田嶋村

右者畑高ニ而増、

古高千六百八拾五石九斗壱升三合

新高弐千八拾弐石四斗六升弐合

一同三百九拾六石五斗四升九合　下田嶋村

内田高六拾四石四斗三升三合

畑高三百三拾弐石壱斗壱升六合

古高

新高三百拾三石四斗五升七合

一同無出入　袋廣瀬村

古高三百石壱斗九升六合

新高四百六拾弐石八斗七升六合

一同百六拾弐石六斗八升　石崎村

内田高百弐拾七石七斗九升六合

畑高三拾四石八斗八升四合

古高弐千八百六拾六石六升四合

新高三千三百拾九石五斗四升八合

一同四百五拾三石四斗八升四合　上那珂村

内田高三百拾八石九斗七升七合

畠高百三拾四石五斗七合

古高千三百四拾三石壱斗五升六合

新高千六百弐拾八石九斗八升弐合

一同弐百八拾五石八斗弐升六合　下那珂村

内田高百七拾四石八斗七升五合

畑高百拾石九斗五升壱合

古高六百拾七石八斗壱升五合

新高千百六拾壱石七斗八升弐合

一同五百四拾三石九斗六升七合　廣原村

内田高四百弐拾八石八斗弐合

畑高百拾五石壱斗六升五合

古高四百八拾四石壱斗三升九合
新高八百九拾九石三斗弐升六合
一同四百拾五石壱斗八升七合　新名爪村
内田高三百四拾石(卅弐)三斗壱升壱合
畠高七拾四石九斗七升六合
那珂郡内
合増高弐千弐百七拾弐石五斗六升五合　八ケ村分
内畠高八百拾七石四斗七升壱合
古高千弐百拾壱石三斗壱升七合
新高千弐百八拾壱石弐斗四升壱合
一同六拾九石九斗弐升四合　山田村
右者畑高ニ而増、
古高弐千六百弐拾石五斗弐升六合
新高弐千九百六拾七石五斗七升九合
一同三百四拾七石五升三合　三才村
内田高弐百拾七石六斗弐升六合
畑高百弐拾九石四斗弐升七合
古高七百三拾弐石壱斗三合
新高八百九拾五石六斗五升六合

一同百六拾三石五斗五升三合　荒武村
内田高九拾石三斗六升九合
畑高七拾三石壱斗八升四合
古高 新高 三百拾三石壱斗五升壱合
一同無出入　妻万村
古高弐千四百石八斗壱合
新高弐千七百六拾七石九合
一同三百六拾六石弐斗八合　鹿野田村
内田高弐百九拾六石五斗三升六合
畑高六拾九石六斗七升弐合
古高千百三石壱斗(卅九)□升五合
新高千四百拾五石九斗九升四合
一同三百拾弐石七斗九升九合　平郡村
内田高百八拾八石七斗七升七合
畠高百弐拾四石弐升弐合
古高弐千〔七百七石四斗六升〕(卅四百弐拾五石四斗)四合
新高弐千七百七石四斗六升四合
一同弐百八拾弐石六升　三納村
内田高弐百弐拾石八斗三升三合

畑高六拾壱石弐斗弐升七合
古高八百六拾六石七斗四升八合
新高千弐拾九石六斗四升九合
一同百六拾弐石九斗壱合　賀瀬村
内田高六拾四石七斗五升弐合
畑高九拾八石壱斗四升九合
古高八百九拾三石三斗三升壱合
新高九百弐石壱斗五升
一同八石八斗壱升九合　藤田村
右者畑高ニ而増、
古高弐千九百弐拾弐石六斗五升
新高三千八百七拾五石九升三合
一同九百五拾弐石四斗四升三合　冨田村
内田高八百四拾五石四斗五升四合
畑高百六石九斗八升九合
古高弐千三百七拾石弐斗七升四合
新高三千百七拾六石七斗七升
一同八百六石四斗九升六合　新田伊倉
内田高弐百拾壱石九斗九升
畑高五百九拾四石五斗六合
児湯郡内
合増高三千四百七拾弐石弐斗五升六合　拾壱ヶ村分
内畑高千三百三拾五石九斗壱升九合
那珂郡・児湯郡内
都合増高五千七百四拾四石八斗弐升壱合
内畑高弐千百五拾三石三斗九升　村数合拾九ヶ村

50

『寛文二年壬寅九月十九日佐土原地震ニ付　公義江
差上候書付之写』
九月十九日之夜子后刻佐土原地震之覚
一私居屋敷長屋三拾間程ころひ申候、
一屋鋪中惣家つふれ、壱ツも堅固成家者無之候、
一土蔵壱ツつふれ申候、
一二之曲輪之門冠木より上崩落申候、
一地三尺程われ、田畠少々損亡、山茂所々崩、牛馬之通
路當時難成所とも御座候、
一家來侍・寺・町屋・在々百姓之家都合八百軒餘つふれ
申候、其外之家何茂大破仕候、

一人・牛馬も少〻死申、けか仕候もの数多御座候、員数未改申候、

右之通有増書付(ヤ申)□候、昨廿日ニも四拾度餘少〻ツヽ、地震(ヤゆ)□り申候、以上、

九月廿一日　　嶋津但馬守(久雄)

51の1

『寛文八年戊申五月十一日黒川丹波守様より飛驒守被遣候御書附之覚』

口上覚

慶安二年ニ上り申候日向國之繪圖ニ嶋津万壽与御座候、貴様御幼少之御名ニ而御座候哉、若貴様ニ而無御座候共、御同名之儀ニ御座候間、御存知可被成候間、御報可被仰聞候、以上、

五月十一日　　黒川丹波守(正直)

嶋津飛驒守(忠高)様

51の2

『右之御返答飛驒守在所へ罷在候故留守居之者方より書付差上申候、其趣左記之』

慶安二年上り申候日向國之繪圖之内嶋津萬壽と御座候者、飛驒守父但馬守幼少之名ニ而御座候、以上、

五月十二日　　嶋津飛驒守内伊集院忠兵衛

52の1

『寛文八年戊申七月北条安房守様より之御書付之写』

口上之覚

何ノ年誕生

寛文八年戊申何ほと

御分限帳相改候ニ付入申候嶋津飛驒守殿御年、右之通御書附可給候、以上、

七月七日(ヤ五)　　北条安房守(正房)

嶋津飛驒守殿

御留守居中

52の2

『右之返答書左記之』

辛卯之年誕生　　嶋津飛驒守

寛文八年戊申年十八歳

七月六日

『延宝元年癸丑二月、佐土原愛岩(宮カ)之下飫肥海道作替、居

53

屋敷前土居之上塀之儀申上候扣、左記之』

一拙者在所本道筋坂御座候、難所ニ而いかゝ存候間、下ニ新道申付候、此段被聞召上置可被下候、

一飛驒守居屋敷前土居之上塀御座候、此内破損仕、其侭召置申候、右塀跡ニ如以前塀申付候間、被聞召置可被下候、

『右之両條、先大久保佐渡守様江家老之者差遣得御差圖、其上ニ而伊勢兵庫様頼入、繪圖を以御月番板倉内膳様へ被申上候処、無相違願之通ニ相濟申候、就夫則内膳様江右之御礼として飛驒守罷出候、

丑二月十四日』

『一式部少輔番代之中佐土原嶋之口門修覆之時御年寄之御老中土井能登守(様)江申上候書付之扣、遂吟味候へ共、其首尾相知不申候、

一佐土原大手口門修覆之儀大久保加賀守様江相伺候書付之写、左記之、

但元禄四年

辛未三月也』

54

覚

私在所居屋敷外廻塀地門壱ケ所之破壊候間、修覆仕度候、従前か様成節者毎度御断申上首尾致候、如何可有御座候哉、御内意御窺申上候、御差圖被成可被下奉頼候、以上、

三月四日　▽嶋津又七郎(次カ)△

『右之趣近藤吉左衛門殿迄申入置候処、同十五日御返答之趣左記之』

先比被仰聞候塀地門修覆之儀、御勝手次第可被仰付由之御返答也、

右終ル、

55

祢寝家由緒書之覚

口上覚

先年祢寝孫左衛(清雄)門殿より小松ニ改度由被仰出候間、相考可申上之由承候ニ付、私考申候分書付差上申候、

55の1

覚

祢寢孫左衛門殿小松之称号可被名乗由被為申候ニ付、考見申候、尤系圖小松重盛之孫六代高清より系申候へとも、元祖清重より以來之文書ニ小松与有之候儀少茂見得不申候、然時者、弘文院(林鳳岡)浅葉三右衛門殿抔より被尋候時、系圖計を立候而者不審を被掛候時、可申開證書無御座与存候、既ニ　御家頼朝公之御子孫之儀ニ付、先年於江戸松平美作守様其外御旗元衆抔御不審御座候ニ、川野六兵衛(通古)御返答ニ證拠を引申上候ニ付、何れ茂尤与被仰候由、兼〻咄仕候、尤系圖計ニ而も申開候事、私決定仕候ハヽ、小松与名乗候儀可然与可申上候へとも、右之分ニ而者私者申立不罷成候、ケ様之事ニ而御家并古き家迄も他所より疑を若被立候ハヽ、残念至極御座候ニ付、申上事ニ御座候、以上、

(元禄五年)申十一月廿四日　　伊地知助右衛門(重英)

右之通申上候趣者、数年私御記録所何角与見合申候ニ、此祢寢氏系圖計ニ而小松ニ改可被成儀、了簡ニ不及候儀共餘多見出申候ニ付、其節も五右衛門(田中国明)ニ申達候上ニ而右之通申上候処に、其後又祢寢氏之儀者小松与各別

56

之儀ニ而御座候證拠餘多見出申候、河野六兵衛も祢寢者小松家ニ而無御座段自筆に祢寢氏之文書ニ書加へ召置候を見出シ申候而、五右衛門ニも見せ申候、然時者、縦　御意ニ而御座候共、小松ニ改被成儀絶て不罷成候、尤小松之筋目ニ而無御座候別流之事ニ御座候、第一御家之御難題ニ可罷成儀眼前ニ御座候条、此段申上置候、孫左衛門殿不案内ニ而、か様之儀委細御存不被成候ハヽ、不可然と奉存候間、能〻御納得被成候様有之度与奉存候、傳承候へ者、孫左衛門殿於江戸祢寢之定紋を平家之一統紋所上羽蝶ニ御改為被成由候、且又小松家之儀ニ付、上方向并方〻ニ何そ御問合有之由ニ御座候得者、若外向ニ而不実之儀共何角与取沙汰申候而者如何奉存候間、能〻御思慮被成候様有之度与奉存候、尤後代小松家(伊)〔ニ(伊と)而〕有之儀、如何様之儀ニ而も罷成間敷儀ニ候、乍然此段〻之證拠を申消程之證書さへ有之候者、是又各別之儀御座候、以上、

(元禄八年)亥十一月十七日　　伊地知助右衛門(重英)

口上覚

56の1

去ル申十一月、祢寢孫左衞門殿より小松名字ニ被為改度之旨被為申出候付、相考可申上由肝付主殿老より被仰渡之由、高橋左衞門殿御取次ニ而相役伊地知助右衞門・私江承候而、両人面〻之書付差上申候、私申上候覚書左之通御座候、

覚

祢寢孫左衞門殿家号を小松与改度旨被為申候付、任御尋私存旨之分申上候、小松内府重盛之曽孫清重法師与申人、頼家卿之下文を帯、建仁三年、祢寢院江下向候、其より在名を以子孫ニ到り家号ニ被定、代〻之文書ニ茂引合申事ニ而御座候へ者、祢寢を不被為替候か可然与存申候、小松与被相改候半事引合申文書ハ無御座候へ共、系圖之筋目重盛之一統暦然ニ御座候へ者、是又先祖之家号ニ被為復號与申候而御座候へ者、差當候而御無用与存寄申儀無御座候、何れ茂申上候而本名を名乗被申候衆も其例多御座候、殊比志嶋氏抔も在名ニ而御座候へとも、於王子犬追物　上覽之時、本名村上与被為号候与見得申候、然者小松之称号者天下無隠儀御座候得者、御了簡も可有之儀与存申候、以上、

元禄五年
申十一月廿四日

右之趣ニ御座候処、相役助右衞門申上候趣者各別ニ而御座候つれ共、彼家之系圖者平田故清右(純正)衞門編集仕、重盛之一統ニ係り置申候得者、本より別条有間敷与存、其時私一分見及申候(ヵ)中之程を申上候、然処ニ、其以後彼系圖ニ相載有之文書之外、彼家ニ所持被成候文書之写御記録所江過分ニ御座候内ニ、小松名字ニ難被為成證拠共見出申候、是者清右衞門死後ニ近年河野六兵衞見出候而、取寄写置為申ニ而御座候、此節諸家系圖再撰ニ而委細ニ僉儀仕候へ者、弥以小松名字ニ被為成儀絶而成不申筈ニ私も落着仕候、初より右證據を乍存、右覚書之趣ニ為申上儀ニ而曽て無御座候、右證拠共別紙ニ書写差出申候、然者孫左衞門殿於于今私申上候覚書之趣を一(ヵ)編ニ是与被為思候而、萬一小松名字ニ被為改度与存念とも御座候而者、私申上候趣故自然　御家之御難題ニ罷成事とも候而者不可然儀与存、先比　公用ニ付孫左衞門殿江書状差上申候節、乍序小松名字ニ

御改候儀絶而不罷成證據見出申候由、粗申進候、乍其上猶以得与御納得被成候様、孫左衛門殿御方へ被仰遣被下候へかしと存候ニ付申上候間、此等之旨主殿老へ被仰上可被下候、以上、

（元禄八年）亥十一月十七日　　田中五右衛門（国明）

57

一祢寢家之儀ニ付而川野六兵衛通古貞享四卯年考之趣重而可詮儀由書附端ニ自筆抑札被仕置候、左記ス、

久安三年七月十五日親助陳状叉、（サ）〈故〉頼親ト云ヘ、頼親者天永三年四月十八日死去ト云ヘ、然者祢寢元祖清重拜領之建仁三年七月三日　頼家公御判、久安三年より五十七年以後也、是以考ルニ、建部姓者古來より祢寢・佐多・田代を領來り、小松殿孫清重を養子ニシタル成ベシ、祢寢殿内良淳房ニ僉儀すへし、

『貞享四年也』卯六月九日考之、

畠山家由緒書

58

私養父阿多内膳（忠栄）祖父畠山中務少輔（頼國）与申候、　将軍義輝公害せられ候以後牢ヘ之身ニ成、橘隱軒与改、京都江蟄居候処、近衛前久公より　龍伯様江御引合せ御座候而御當國江罷下、京都御國掛候而居住、終ニ御國ニ而致死去、男子一人・女子壱人出生候へとも、男子者出家ニ成シ申候、橘隱軒願にて、阿多甚左衛門を家財計之跡目被　仰付、畠山之名跡者相立不申候、右之出家（サ）〈遂〉還俗、　惟新様御家老役ニ被補、畠山之號を再相立、妻子者御座候得共僧躰者不改、畠山長壽（盛淳）与申候、然者長壽院戦死以來三才之男子孤ニ罷成候故、橘隱軒家財附属之由緒を以阿多甚左衛門所江引取成長為仕候ニ付而、後見介抱之厚恩ニ而阿多名字を名乗、阿多内膳与改申候、私儀内膳養子ニ被　仰付、相續仕罷在候、然處本家無其隱畠山名字ニ而御座候処、右之通阿多家介抱ニ付而無謂名字を名乗申候儀、連ヘ別而不本意儀ニ存候ニ付而、本家畠山民部（基玄）太夫殿江家筋之儀申達、許容之筋ニ而も候ハヽ、遂言上、本家之号を相立申度念願候付而、先年以來心掛申候処、猿渡喜右衛門先ヘ年より在江戸仕候ニ付而頼入訳有之、喜右衛門より段ヘ御内意ニ而達　貴聞候上ニ而、菊地新三郎江相便り、民部太夫殿江取持頼申趣御座候処、於江戸も外より畠

山名字名乗度旨願被申方有之、旁差支候間、許容難調候、畠山名乗候筋目之儀ニ候得者、名乗申候儀者民部太夫殿御方何そ御構も無之候由一族中ニも被申候旨、新三郎より喜右衛門江段々内所を以申達候旨趣も御座候ニ付而、阿多名字者無其謂事候故、永々名乗可申儀ニも無之候間、弥以畠山を此節より名乗可申通、喜右衛門より為證拠田中五右衛門（国明）・吉井為兵衛同席ニ而新三郎江達置候由、喜右衛門より委曲申聞候、数年大望之儀候間、右之段々被聞召達、畠山名乗申候儀御免被下度儀奉願候、喜右衛門より新三郎江者捻之下書新三郎返書相添差上申候、右ニ付而者新三郎江喜右衛門より問合之書付段々御座候へとも、事長く候故略仕候、此等之趣を以可然様御執成頼存候、以上、

巳九月日　　阿多淡路（國儒）

嶋津弥市郎（ママ）家由緒

嶋津薩摩守用久者　久豊公之御二男ニ而、嫡子國久加世田・出水表数ケ所を被領候、数代出水ニ被居候、右六代之孫薩摩守義虎奥者　龍伯様御嫡女御平与申候、此御腹ニ出生之者義虎嫡子又太郎忠辰・二男三郎▽㊥二郎△忠隣（金吾歳久養子）・三男備前守忠清（一旦新納家養子）・四男越前守忠栄・五男伯耆守忠喬（入来院家養子）・六男小七郎（於肥後國死去也）、右五人御平御腹之子ニ而候、嫡子又太郎忠辰者別腹ニ而可有之候、忠辰出生之年号之時御平者二歳ニ而候由、然者究而可為別腹候、入来院家腹ニ而も可有之欤と相考候、忠辰事天正十五年　太閤様御下向之節早々御身方被仕候故、昵近ニ被召出候、出水ニ者薩刕家より人数を被籠置候処、忠辰右之通候故、出水ニ而支候儀も無之候ニ付、京勢心安入來、　太閤様水引泰平寺江御着陣候、其後高麗江者忠辰事　義弘公相付渡海候様ニ与被仰付、渡海仕候處、　義弘公御下知相隨候をいやニ被存候哉、被罷戻候、此儀不可然由従　龍伯公も被仰附候ニ付、又々被罷渡候へとも、勤方不宜御改易、其身者小西攝津守行長ニ御預ケ被仰付候、忠辰高麗於加徳嶋死去ニ而候事、

一越前守忠栄事者忠辰之質として罷出、細川幽齋老江被預置候、忠栄長々豊前小倉ニ被罷居候由、忠辰死去以後小倉を引取佐土原へ被罷越、於関ケ原中務太輔豊久

戦死已後まて佐土原ニ被罷居候由、是者豊久之姉㊥〈ニ忠栄嫁候而被居候故を以右之通ニ候由、其後佐土原之衆忠栄を可打果与相企候ニ付、内場江被引取候、従　龍伯公為被召出候▽㊥由候△事、

但豊久者戦死ニ而候、忠栄ハ豊久之姉ニ嫁候而被居候間、豊久之跡願之趣茂有之、左様成訳ニ付而右之企も有之候半哉与被相考候事、

一越前守忠栄事者、其後御平より御申出、御平御高踊中津川村ニ而千弐百石を被給候、其後飯野末永村ニ御繰㊥替遣被給候、右之通又太郎事家断絶ニ而候間、越前事本家より一二重位を御下ケ被成候由、其後御平より本家御取立之御訴も有之候由ニ而、此節も弥市郎より嫡家成之願ニ而候得共、又太郎事従　公儀断絶之事ニ候へハ、重而右一筋御取立被成間敷由　龍伯公御譜之内ニ相見得候由ニ而候、然者今度弥市郎願之儀者不相叶筈之趣ニ御記録所より相調へ被申出候、大意覚之侭如斯相記也、

但太閤様薩州へ御下向之刻、又太郎早〻御身方ニ被参、殊更出水へ被籠置候人数も右之訳ニ付而早速致降参候故、京勢心安水引ニ到、泰平寺へ御着陳、又太郎御家臣として者不所存之至、是を以、乍恐龍伯公より又太郎跡被召立間敷旨被　仰出置候儀者、御道理至極為仕儀与其節各為奉申由候事、

未五月日

60

山田家由緒書

忠久様御國御拜領被遊　御下向之砌、私先祖式部太輔与申者江必御國へ可罷下之旨蒙　御諚、御入國之後、丸田名字之者船主ニ而御座候船を迎ニ被下、罷下日置を被下置、山田ニ居住仕、則山田名字罷成候、夫より以來曽祖父山田越前(有信)入道利安迄彼地ニ在住仕候、　龍伯様御代日州伊東氏抑領之地入御手候刻、新納院高城之居地頭被仰付罷移候、　太閤様御當國へ御發向之節、日向へ御舎弟羽柴美濃守殿被入來候時分、高城へ楯籠、引受大軍相支、終に落城不仕候、御和談被遊候而、任御意城を罷下候、其節昵近之御朱印被下、早速之御断難成一旦頂戴仕、関屋清右衛門・指宿清左衛門両使を以豊後迄持せ返上仕候、其後對　天下ニ籠城之恐ニ而

三ケ年蟄居仕領地差上候砌、一所之地ニ相離レ申候、
従　黄門様祖父山田民部(有栄)江被　仰出候者、父利安事軍
功故却而失一所之地候間、見合申上候ハヽ相應之一所
を可被下旨承知仕候得とも、辞退申上候、左候ハヽ、
御太刀進上之儀者一所衆同列ニ而被　仰出候得共、是
又辞退仕候、至私難申上候得共、右躰之訳とも御座候
間、年頭御太刀進上被仰付被下旨(ゆ度)奉願候、身躰禿入候
得とも、責而御普代(ゆ譜)之一筋を子孫ニ残置申度候、此等
之趣宜(後欠)

寅十二月十一日　　山田新助

十二月
右達　貴聞、山田新助より申出候書付・右之儀ニ付而
田中五右衛(国明)門書付被　御覧置候、願之通川上式部・新
納刑部并御禮御受可被成候間、此段可申渡之旨　御意
候、圖書奉承知候事、

町田家由緒書

此節年頭之御太刀進上之儀、川上式部・新納刑部并之
列ニ而御太刀進上被仰付度奉願候、右ニ付、私家之元
祖町田源左衛門久政儀者家嫡町田出羽久信(ゆ倍)入道存松次
之弟ニ而御座候、存松儀　義久公御家老職并大口之地
頭被仰付候、依之源左衛門久政江地頭代被仰付、大口
江被召移御奉公仕候、然處　義弘公朝鮮國江御出陣被
遊候ニ付、大口之人数召列朝鮮國江罷渡、多年軍労仕、
慶長三年十一月十八日、御帰朝之節番船相掛り　義弘
公被及御難儀候時分、源左衛門久政敵船ニ切乗申、於
南海終に戦死仕候ニ付、曽祖父伊賀久則孤ニ罷成大口
江罷居候処、父源左衛門久政戦死之為御褒美新恩地百
石被成下、鹿児嶋江被召寄、庄内并関ヶ原御出陣之御
供仕候、其後段〻御加増拝領仕、御家老職被仰付、多
年相勤申候、極老ニ罷成、役義之御断隠居之願申上候
処、首尾好被成御免、則祖父伊賀江御家老職被仰付、
数年相勤申候、亡父源左衛門事為御證人役数度江戸江
被召登せ、将軍　家綱公江及三度　御目見仕候、其後
御評定所詰被仰付、相勤罷在候得共、不意ニ早世仕候、
右之通代〻結構ニ被召仕候筋目之儀候間、御太刀進上
之儀、奉願候通ニ被仰付被下度奉存候、此等之趣、以
上、

寅十二月八日　　町田源左衛門（久孝）

62
田中五右衛門調書

町田源左衛門儀何れ之列ニ而年首之御太刀進上仕候哉、考候而可申上旨被仰渡候、依之相考候趣左ニ申上候、川上式部（久重）家之元祖者太夫判官頼久与申候而、　御家五代之太守上総介貞久公之他腹之長男ニ而御座候、嫡流川上上野者年首之御座配四番座之客居之上席ニ着座被仕候、式部元祖者上野家五代家督兼久之三男左近将監忠蜜（塞カ）与為申ニ而候、此代其時之自　太守様串木野三十町を被下、領為罷居由候、忠蜜嫡子信濃守栄久与申候、栄久嫡子上野介忠克入道意釣与申候、此者一節嶋津実久江相隨罷在候得共、　貴久公市來平城御攻落被成候時、忠克前非を改、串木野を差上降参仕候、其後御家老職ニ被仰付候、忠克嫡子左近将監久朗者十八歳より義久公之御家老職相勤、於所〻抽軍功、眞実ニ御奉公為仕人ニ而御座候、久朗孫因幡久國江も　家久公之御家老職申候、右通之故ニ而も候哉、年首之諸地頭を越候而御座配之次ニ前〻より御禮被申來由候、

新納刑部新納家之元祖近江守時久者　御當家四代之太守上総介忠宗公之四男ニ而御座候、嫡流之家者年首之御座配四番御座之主居之上席ニ着座候、刑部元祖者嫡家四代之家督修理亮忠治之三男駿河守是久与申候、五代之家督忠續之差次之弟ニ而御座候、是久者伊作式部太輔久逸主之籏下に属し、文明十七年六月廿一日、飫肥川原合戦之時戦死被致候、是久之息女（法名両一芳眞大姉）伊作（ヤ/又）四郎善久主江被嫁、　日新公御出生被遊候、是久之嫡子伊勢守友義与申候、友義之嫡子を左京亮忠祐与申候、是者享禄三年（元カ）五月朔日於庄内冷水戦死ニ而候、忠祐嫡子を加賀守祐久与申候、祐久代ニ始て家督之家を罷出、守護方ニ昵近被致候、祐久嫡子武蔵守忠元ニ而御座候、忠元武功抜群之人ニ而、専　義久公・家久公之御三代（ママ）ニ奉仕、別而節義を勵し候故、日本國中新納武蔵を不存士者無之由ニ御座候、其武功一〻記申ニ不及候、忠元一代大口境目之移地頭被仰付置候、忠元嫡子刑部太輔忠尭者、天正十一年六月十三日、肥前之深（ヤ/江）得之城攻之節戦死仕候ニ付、自　義久公懸命之地ニ（与欤）して大口青木村之内を被下、子孫ニ相傳申候由、忠尭嫡子次郎兵

衛忠光、養子加賀守忠清、忠清嫡子刑部太輔忠秀、嫡子次郎四郎忠暁(ゆ 饒)ニ而御座候、忠暁(ゆ 饒)者御用人役被相勤候与見得申候、當刑部者忠暁(ゆ 饒)曽孫ニ而御座候、刑部親外記代ニ初而番頭為被仰付欤与存候、是久より十三代之孫ニ而新納之三男家ニ而御座候を以、川上式部例を以年首之御礼同列ニ而申上度旨先年被申出節、僉儀有之候者、両家共ニ三男家之儀者相同候へ共、川上与新納与本家之位者一同ニ無之候、然者庶流も本家之不並ニ應し、同列ニ者難被仰付筈ニ候へ共、刑部家者　日新公之御外祖家与申、武蔵忠元抜群之武功与申、非無謂有由一筋之家ニ而候間、式部同列ニ被仰付度事与出合申、其趣達　貴聞、近年願之通ニ被仰付、式部差次ニ御太刀進上御流頂戴被致候、〇伊集院遠江伊集院家者（此所より伊集院家之事を記也、）御當家二代之　太守忠時公之御七男常陸守忠經之四男侍従房俊忠与申候、其嫡子圖書助久兼より伊集院之家号を推被申候、其一流ニ而御座候、此嫡家年首之御座配一番御座之主居上席之次ニ被罷出候へとも、川上・新納之両家ニ者並ヒ不申本家ニ而候、遠江(久照)者其二男家ニ而御座候得者、式部同列ニ者不被仰付家ニ而候得共、遠江儀新地を被下、十右衛門殿二男家ニ取立、且又御身近きニ(ゆ 付)而、遠江一代者川上式部列ニ而御礼御受被成、子孫者打込ニ御礼申上筈ニ先年為被　仰出之由ニ候、然者家ニ付而之儀ニ而無之候歟、

〇町田源左衛門町田と申家者、是も　忠時公之御七男忠經之三男五郎太郎忠光与申候、此人より町田与被号候、嫡家者年首之御座配も五番御座之客居上席之次ニ被罷出候ニ付、川上・新納之両家ニ者是も又本家相並ヒ不申候、源左衛門家之元祖者、嫡家十六代之家督兵部左衛門久徳之二男源左衛門久政与申候、久政兄者出羽守久信(ゆ 倍)入道存松与申候而、　義久公之御家老ニ而御座候キ、久信(ゆ 倍)へ大口之地頭被仰付候へ共、御家老相勤申候得者罷移儀難成候ニ付、境目之儀ニ而候へ者、弟久政を地頭代として替置申候、折節朝鮮國へ可罷渡旨被仰渡候ニ付、大口之人数を召列　義弘公之御供仕、朝鮮江罷渡り、久政者、慶長三年十一月十八日、御帰朝之節於南海番船ニ切乗遂戦死候、　御帰朝之後、久政嫡子源六久慶孤ニ而大口へ罷居を被召出、父久政御奉公ニ戦死仕候を以、懸命之地として高百石拝領被仰(ゆ 付)□候

而御奉公仕候キ、慶長四年庄内山田之城落申候節、走廻り手疵を蒙り、且又黒木越前与申者をも討取候由、同五年、関ヶ原江茂軍仕、軍破候而後、長谷場織部佐・川上休右衛門・伊集院弥六左衛門・本田主水佐・三原七左衛門・白濱三四郎・新納旅庵・喜入攝津守・新納新八郎・町田源六、以上十人　近衛様を頼上罷出候処、三輪山之大先達前官より銀子壱貫目御借被成候、其銀子を以十人共ニ　御當國江無恙罷下候、左候而、久慶ハ慶安二年御家老職ニ被仰付候而、町田伊賀久則ニ罷出、寛文三年迄相勤被申候、久則嫡子勘解由忠代も御家老職被相勤候、忠代嫡子源左衛門久英者御評定所御詰衆迄被仰付候、久英嫡子當源左衛門久孝組頭相勤候、右段〻ニ相記申候得者、四人共家筋之儀相知申候、伊集院遠江儀、川上式部列ニ而御太刀進上者一代計ニ而、子孫之儀諸地頭打込ニ被仰付筈ニ候得者、町田源左衛門儀茂川上式部・新納刑部同列ニ者難被仰付存候、是も諸地頭打込之列ニ而可有御座与考申候、乍然源左衛門家者元祖久政戦死仕、嫡子久刻(則)へ懸命之地をも拜領仕、且又久則・忠代二代御家老職をも相勤、忠代嫡子久英御評定所詰衆迄被仰付候、段〻被召仕候儀を以少色も有之欤ニ而、御取分ケも可有御座候哉、於其儀者外ニ茂猶同列ニ而願申出る家も可有之と存申候、御僉儀次第御究可被成候、以上、

十二月十六日　　田中五右衛門(国明)

十二月晦日

右達　貴聞、町田源左衛門より相願候趣有之口上書被御覧置候、段〻家之儀ニ付而申分も有之候得共、源左衛門并之人も余ニ茂可有之候間、願不相達候段可申渡旨　御意候、圖書奉承知候事、

北条家訴状

63

天正(十)五年亥三月　　太閤様薩州江

先年　太閤様當國江御出馬之時、御家御一大事ニ及候処、御曖罷成、御質として御料人(義久女)様川内まて被成御指出候ニ相定、同とし五月十五日、鹿児嶋を被成御打立候、御供衆本田下野入道殿始□(上下)百人餘之御供ニ而御座候ツ、然処御質様直ニ御上洛与被仰出候、左候得者、三清老事吉田之仕置被仰付候而被成帰宅候、就夫平野

丹後人道殿其外御供之多人数川内より皆〻被罷帰候故、漸上下廿八人ニ而御料人様河内より被成御出船、肥前之内千りくと申所（千栗）江被成御着候、従其被成御立候処、筑紫之領内藤生野と申於町御警固之京衆狼藉被申候付、所之者共一揆を起、大勢寄掛及御迷惑候間、不及是非何茂御供之衆仕はまり可申与仕候処、漸浅野弾正殿手之衆被成續合噯ニ罷出（伊成）、其場を被成御延、其夜者秋月ニ被成御一宿候、従其小倉ニ御着ニ而候処、　龍伯様御上洛下之関ニ而　御對面被成、夫より　御上洛ニ而候、上方御仕合事能、同十六年之十月十四日　龍伯様御同心ニ而被成御帰國候、其時御りう人さま御いと□（伊ま）出申さす候、時　龍伯様御哥被遊、いふさひ老へ御遣被成候、其趣　大かう様江言上候故、御いとま出候、御哥　二世とはちきらぬ物を親と子のわかれん後のあわれをもしれ　此（伊御）哥故御いとま出、御同心ニ而御下向、又其後天正廿年辰ノ三月廿六日　御料人様被成御上洛候、其刻者吾等事夫婦御供申、在京九年仕、子之年九月廿一日ニ関ヶ原一乱之刻　惟新様・御料人様・宰相様（義弘室）御供申罷下候、其時大坂籠城ニ罷成候処、佐土原之中務少輔殿御姉様大坂之城を忍ひ被成御出候、然時者　御質様・宰相様も城を忍ひ御出可有之由、桂太郎兵衛殿・平田太郎左衛門殿・吉田美作守殿・相良日向守殿・弟子丸越後守殿・伊東肥後守殿・有川大炊左衛門殿・宅間與八左衛門殿此衆打合（伊寄）談合ニ而候ツ、雖然一大事成儀ニ候間、先〻心見ニ誰ニ而茂可出之由候ニ付、我等かむすめニ女男を相付、先出し見可申候、定而番之衆何方之屋形よりかと可被尋候、左様ニ候共屋形を曽而不申、縦如何様成扱ニ逢候共其時迄之儀ニ仕候へと申付、女二人男三人に拙子娘を相添、城を出し申候時、何篇鎌田安房介へ堅申付出候処ニ、案中番衆あやしめ、何方之屋形より欤と尋被申候へとも、何方共不申候処、女二人をば門より外におひ出、男三人と我等か娘を城内之様ニ追返され候間、別口より罷出、はや夜ニ入候ニ付、方〻ニ罷成うろたへ申候処を、堺之密田可と行合申、以分別女共ニ尋合、夜中ニ堺之様ニ召列為被参由候、左様成様子御屋形江者知れ不申候条、不及是非其分ニ捨置申候処、　御質様　宰相様五三日目ニ御出船被成候、我等娘事御跡より参候、漸豊

後之ほとニ而追付申候、就夫申上候、大田筑前守殿御料人おまつ事、　御質様城を可被成御出候条、御跡ニ三日被罷居候、左候〔㊀而〕〔ハヽ〕、四日目ニ者吉田美作守・相良日向守其外暦〻、殊更筑前守茂被罷居候条、其衆同前ニ可被罷下由候ツ、然共其儀相違仕、おまつ事も御供ニ而被罷下候、乍去初御跡ニ三日罷居候事　御意次第与被申上候、其忠節として知行弐百四拾石御給ニ而候、然時者、我等事茂筑前守殿同前之御奉公之儀候間、右次之御手を被付候而可被下候、右之證據吉田美作守殿・相良日向守殿・弟子丸越後守殿・伊東肥後守との・大田筑前守殿・勝目加賀入道殿遠底為被存儀候、如斯御奉公之一筋御〔詫カ〕咤申上度存候処、其刻者京乱ニ而、御國元茂御繁多候、以時分御咤可申上存候処、拙者事関ヶ原一乱之後在大坂被仰付、平田大炊助殿与同前ニ罷上、二年相詰、三年目ニ罷下候、其後又〻大坂御蔵番被仰付、鎌田加賀守殿ニ替候而税所弥右衛門殿与一年罷居、又弥右衛門殿替ニ本田甲斐守殿被上候、拙者事者直ニ甲斐守殿与同番仕、二年相詰、三年目ニ罷下候、其後在江戸被仰上▽付之字欠㊀罷上△候、彼是取紛御咤申後候事、

一近年御妹様御質人として御在江戸之刻、上井次郎左衛門殿被成御供、六七ヶ年在江戸ニ而被成御奉公候ニ付、知行弐百石御給之様ニ承候、勿論賦銀・飯米出候事、然者右申上候様ニ、國分　御上様御質人として被成御在京候刻、我等事妻子を召列御供申、九ヶ年在京申、剰妻子共ニ上方ニ而相果申躰ニ而、殊其刻者御賦銀抔茂一圓ニ無御座、漸飯米計を被下、其外之儀者万事を自身迄ニ而候〔ママ〕在京仕候、然時者右次郎左衛門殿次之御手をも被付候而可被下事奉存候事、

卯九月十六日　　北条土佐守〔時弘〕

三原左衛門佐殿

64

一伊藤權角継目之御禮申上候刻、御太刀進上被仰付可被下由申出、權角曽祖父伊藤權右衛門代致訴訟候儀、家筋之由緒書差出候、右之扣写此節權角より差出候、左ニ記、

一日新公御曹子　虎壽丸様勝久様之御養子ニ御定被遊候時分、我等祖父井尻九郎〔祐宗〕次郎・同老母田布施より御供

仕候、其時分九郎次郎父井尻佐渡(祐光)御兵具奉行相勤申候、然處　日新様上意被遊候者、嫡子九郎次郎并老母此節虎壽様江附被進度被　思召上候通被　仰出候、　上意之旨則佐渡御請申させ候而、親子御供させ申候、然處に大永七年亥六月十五日、実久悪心内證より右老母承付申候ニ付、俄ニ御屋形を　御忍出、鹿児嶋小野迄御除キ被遊候、従其山道伊作之後平筋被遊御通候、其時騎馬山田伊與・木脇大炊助・川越民部左衛門・長井善左衛門・井尻九郎次郎・同老母・鎌田筑前、扨又鹿児嶋より薗田清左衛門、以上七人御供仕申候事、

一九郎次郎親子三人、此節之御奉公ニ付為御加増御高之内弐町可被下候通、鎌田寛栖老江御承候而、父佐渡江被仰渡候、難有奉存候、左候而、其時申上候者、我等親子當分高四町餘于今御座候、當時者御奉公方相續申候条、此節拜領之御高弐町返上可申候、様子者、代〻御年比ニ御奉公申來候一筋之者ニ而候間、子共末〻御奉公可申上候間、以來奉頼候通御断申上差上置申候、殿様御差出被遊候時分者、九郎次郎御備内ニ騎馬ニ而御供被仰付候事、

一実久被落候時分茂御奉公仕候、并一門乗賀市來平之城江被引籠候をも責落打取申候、又田尻荒次郎・井尻小太郎・小鷹兵衛其外　上意候者数多手打ニ仕申候、扨又天正十四年戊ノ年、豊後國年満渡ニ而多勢之敵取掛申候、其時も井尻佐渡・猿渡弥次郎両騎ニ而戦仕候、其内ニ被遊御除候、其時者佐渡へ御腰物并御鎧・百矢臺・征矢箙拜領申候、其以後日刕表高原戦に佐渡并嫡子九郎次郎被遣候処ニ、天正四年酉(ママ)八月十九日之取合ニ祖父佐渡戦死仕候、然処九郎次郎掛付敵打取申候、其後二男之井尻神力法印任御下知飯野江被召移候、九郎次郎事も日刕八代主大将仕候、後相左衛門与申時分、加世田表ニ而戦死仕申候事、

一我等事井尻九郎次郎与申候時分ニ、慶長二年酉六月家久様高麗江御渡被遊候時分御供仕、奥陣ニ立申候而、御帰國ニ御供申候、其後鹿児嶋濱之市ニ　龍伯様御隠居被遊候時分、御供申移申候、國分へ御移被遊候時分ニ茂御供移申候事、

一慶長十一年午五月、従御國　家康様江石并材木漕船三百艘御進上候ニ付、惣奉行我等江被仰付候、百五拾艘

者駿河國江尻ニ而御進上被成候、其時分本多佐渡守殿・本多上野守殿より　家康様上意之旨、遠路之海上首尾好参候、御機嫌之旨、為　上使内田織部助殿を以難有承候、其後(ゟ時)織部助殿御下知を以　家康様江御太刀進上申、　御目見仕候、左候而、呉服・白銀拜領申候、扨又罷下候時分ニ、上野守殿・佐渡守殿より御上使尾佐手助左衛門殿を以又御小袖・銀子拜領申候事、

一慶長十七年子年、國分より鹿児嶋江被召移候、同十八年丑六月　家久様御妹様江戸江為御質御上洛被遊候時分も御供申候、於江戸普請奉行被仰付候而相勤申候事、

一元和元年乙卯年、大坂戦御座候ニ付、　殿様御上洛被遊候ニ付、御兵具奉行被仰付候而御供仕候、然處ニ大坂城五月七日ニ落申候ニ付、瀬戸内より御帰國被遊御供申候事、

一元和三年巳七月、出水御蔵入代官被　仰付、御高弐千五百石五ケ名之代官四年相勤申候、然處身上行迫り申候間、御咤(詫カ)言ニ存上候者、我等事代〻高役之御奉公ニ行迫り申候条、代官役此節御免被遊候而可被下候通申上候而、御免被成候、左候而、東福寺之城江罷居候事、

一寛永元年子八月　中納言様御意之旨山田民部少輔どのを以被仰渡候者、我等身上行迫り為申通被　聞召上候、此節御里江可被召移候、左候而、東之御番并惣酒蔵御末方役迄相勤可申通被　仰付候ニ付、御咤言申上候得共、又〻被仰渡候間、同十二月、御里江罷移申候、我等身上行迫り申候ニ付、御心付として御里移被仰付、切米拾石被下候(ゟ者)□役儀之内計ニ而候、別ニ知行無御座候、子共一か所ニ而者御奉公難成御座候、右御切米拾石を高三拾石ニ被召成、永〻持留被下候様御咤言存上候、御里役数年相勤申候、我等儀者代〻御奉公申來候者之末ニ而候、此節御支配之儀ニ候間、高ニ被召成永〻持留ニ被下候様頼上候、扨又我等先役人浦川杢左衛門数年役儀被仕候ニ付、為御心付御暇之時分切米拾石を高ニ被召成、三拾斛到永〻持留ニ被給候、我等儀も数年相勤申候、此先例御座候、杢左衛門同前ニ此節被下候様御披露奉頼候、以上、

寛永十一年戌二月十三日　　伊藤權右衛門

右條〻久保七兵衛殿を頼細〻表へ申上候、嶋津下野殿・

伊勢兵部少輔殿被聞召上、鎌田源左衛門殿を以　中納言様達　上聞候、左様御座候而、御返事浦川杢左衛門同前ニ被仰出、高三拾石ニ被召成被下候通七兵衛殿より承候、則下野殿・兵部少輔〈殿カ〉・源左衛門殿江罷出、御直ニ細〻承候事、同十一月十九日ニ高ニ被召成、知行名寄被下候事、

寛永十一年戌十一月十九日　伊藤權右衛門

平山家由緒

口上覚

一御家十一代目　忠國様三番目之御舎弟季久様法号桂道（柱カ）題橋之二男越後守忠康号平山、松山之城主之由候、右越後守我等元祖ニ而御座候、承應三年、前嶋津中務殿・新納又左衛門殿より系圖差上可申之旨被仰渡候付、差上申候處、無別条被相改、清書頂戴仕候事、

一平山越後守忠康之子左衛門尉近久、其子左衛門尉久丘、其子越後守忠智自松山往志布志途中ニ而為肝付氏兵及一戦候刻戦死仕候、其子右馬頭久武、永禄二年己未四月十六日、肝付氏攻陥我居城松山、于時兄弟共戦死仕候、右之通右馬頭久武兄弟遂戦死、其跡断絶矣、依之左衛門尉久丘妹之子作右衛門忠續血筋之故家を連續仕來申候事、

一右越後守忠康四代目作右衛門忠續事、　又市郎久保公忝被召仕、天正十八年二月相劦小田原陣之時分、騎馬ニ而御供仕罷立申候御供人数十五騎之内ニ而候事、

一其後朝鮮國御征代（伐カ）之時、　又市郎久保公之御供仕、彼國へ令渡海候処、文禄二年癸巳九月八日、於唐嶋被遊御卒去候、　御死骸之成供奉、同年十月八日帰朝仕、御葬禮終り申、御法名一唯恕参大禅定門為　尊霊御菩提山伏与成、一忠房与名付、甲午二月進發仕候而、六十餘劦を廻國仕、奉納一國三部之經、同四年乙未、所願成就仕候而帰國仕、則供養之塔婆を奉修、大口小苗代原築十間四方之塚、建三十三尋之卒都婆申候而、于今其験御座候キ、廻國仕候時掛首申候　御位牌・厨子自分之格護依不似合、於加治木春日寺江奉崇置申、為尊霊供物自高之内知行壱石寄附仕置申候、其後　惟新様御供仕、慶長五年庚子九月十五日、於濃州関ヶ原戦死仕候事、

一右平山作右衛門忠續於関ヶ原戦死仕、嫡子備後(忠道)江跡目被仰付候、拙者祖父ニ而候、　惟新様帖佐江被遊　御座候時分、備後庄内御弓箭ニ罷立、於山田之城左之(ヵ)隊□口ニ手を負申、輿ニ而罷帰、右痛故不歩行ニ為罷成由候事、

一惟新様飯野・栗野・帖佐・平松・加治木江　御城移被遊候時分、祖父備後御近習ニ被召仕候故、　御城下方〻御供仕罷移申候事、

一惟新様御筆天神之名号大文字ニ被遊、脇附ニ　忠平拾九歳与御座候、祖父備後江拝領仕、于今自分頂戴仕候事、

一惟新様御卒去被遊候後、元和九年、踊之儀新外城之故、祖父備後地頭分として被召移、万事所〻差引為被仰付由候、私父仲兵(忠政)衛備後へ相付罷移、所〻下知数年相勤申、備後於踊相果申候、其後地頭三原次郎左衛門殿江被仰付、私父仲兵衛地頭代として被仰付、数十ヶ年相勤申候、

一平山作右衛門忠續廻國仕候節背負申候　御位牌、加治木春日寺より踊東光寺江奉守遷、如先例自高壱石并為御茶湯料茶園少〻、到御器物等迄拜進仕置、于今備香花申儀、於所其隱無御座候、文禄四未年より百余ヶ年如此仕來申候、

右之通、平山家代〻　御城下ニ被召置御奉公仕來候筋目ニ而御座候得共、漸〻身上衰微仕、二三代外城ニ罷居申候、惣領家者於踊立置申、拙者儀者二男故、踊御暇仕候而國分江屋敷壱ヶ所被下、只今迄國分衆中ニ而相勤申候へ共、弥身上困究仕、當日及飢仕合ニ御座候、右躰之拙者式誠以不似合御訴奉存候得共、先祖代〻御城下ニ被召置被召仕候筋目之末子ニ而御座候条、御憐愍被遊、此節鹿児嶋之人数迄ニ被召成可被下儀偏ニ奉願候、右之趣を以宜様御披露奉頼候、以上、

卯四月十七日　　平山作右(忠高)衛門

66

遠矢家由緒書

『是より末者別ニ倉(ママ)ニ有之候処、本書を書拔家筋一通を書留也、尤本書之侭ニ写候処多有之、書拔者書拔与記置申候、其外ハ皆本書之通也』

遠矢金兵衛世忰松千代初而之　御目見御太刀進上願ニ付由緒書拔書

一遠矢家者秩父氏ニ而、畠山重忠六代之祖将恒之弟忠道

与申より連續候通系圖ニも相見得候、忠道九代之孫成兼薩刕阿久根を被下罷下領地仕來、阿久根之内遠矢与申在所ニ居住故、其子孫遠矢名字を名乗数代相續候由、遠矢阿波重良代ニ罷成　日新様江被召仕、田布施江罷移、別而御奉公仕候、其子〔孫〕(ヲナン)對馬重勝於川邊戦死仕候、其子金兵衛良兼　日新様加世田城被入御手候前方御意を以城中ニ忍入、案内を見置言上仕候ニ付、無相違御攻取被遊候、其為御褒美備前景久之御脇指致拝領于今所持仕候、其後金兵衛儀於隅州平松戦死仕候、其子信濃良時　貴久様　義久様御代方〻御奉公仕、邪(祁)答院長野之地頭職被　仰付、数年移候而罷在候処ニ、天正十四年、豊後之内於竹田駄原戦死仕候、其子金兵衛良珎与申者當金兵衛祖父ニ而御座候、三才之時父戦死仕、長野ニ罷在母養育仕候処、従　義久様代〻戦功之筋目之者之通上意ニ而被　召出、御前元服被遊被下、御名之字可被下旨被　仰出、名を又菊与被下、盛長仕金十郎ニ罷成候処、祖父之名ニ而候間金兵衛与改名、琉球八重山在番被　仰付、伊地知六郎兵衛相役ニ而罷渡、彼嶋ニ而病死仕候、其子金右衛門(良重)儀　中納言様江

67

御目見為仕由候、定而御太刀進上為仕ニ而可有御座候得共、何そ書留等無御座候、金右衛門儀長〻相煩、私九歳之時相果候故、何事も尋置不申候ニ付覚無御座候、先祖之儀者過分領知をも所持仕、漸〻衰微仕候へ共、親代迄者持高弐百七八十石程御座候、私儀父死後拾三歳ニ而　御目見仕候処、若輩故御太刀進上不奉願、残念至極奉存候、私家之儀者御文書ニ茂為相知儀ニ可有御座候、此節御太刀進上之願書、

菱刈家由緒書

今度由緒を以申上候衆へ茂家來共へ名字付被仰付候、私家來へも名字付被　仰付被下度奉願候、私家之儀者孫兵衛家之次男家ニ而、私五代之祖伊勢守(重政)与申者より相別れ、其子兵庫(重根)迄者大口之地頭ニ而在城仕候、其子越後守(重昌)へハ曽木一所領地ニ被下、其後大口之内花北一所領地仕候、祖父休兵衛(隆豊)与申者ハ、孫兵衛家之□(ヲ二)代前善次郎(重秀)与申者　龍伯様江殉死□(ヲ仕)候、跡子共無之候ニ付、家督被仰付相勤候、然共善次郎之妹留守式部江取合罷在候而出生之子前之孫兵衛(重時)親半右衛門(重榮)ニ而御座候、善

次郎之甥ニ而御座候ニ付、血筋近く御座候故家督を相續仕候、休兵衛事ハ領地花北へ居住仕候、其前方より附來り罷在候七十家内之者共ニ而前方暇出申候者、鹿児嶋衆中并外城衆中ニ罷成候、私家漸〻ニ逼迫仕、私親代ニ御法様ニ而少身ニ成候、衆披官多人数格護之方ハ被召上候節同前ニ被召上、十家内被下置候、其後無名字ニ而披官与御座候、私逼迫仕候ニ付、家來共迄右之通残念之儀ニ御座候間、此節書下シ名字ニ被仰付被下度奉願候、同名十兵衛家來共書下シ名字ニ而御座候、私家逼迫仕候得共、十兵衛家ニ相替可申儀無御座候、私曽祖父江被下置候文書写差上申候、(ヰ且)□又先祖以來之家來とも書付置申候(ヰ写)□差上申候、右書付ニ御座候者共之子孫ニ而御座候、御文書写并家來共書付置候写相添、札奉行所次書ニ右之通被申出候、何様ニ可申渡哉、得御差圖申候由、披露豊前殿・圖書殿・助之允殿・蔵人殿・中務承之、申出之通ニ者不被仰付旨申渡候、口上書相返候事、

寅十一月十日　披露　　菱刈次郎兵衛(實洪)

（表紙　四）

『一番』

御家傳并諸家由緒

（中表紙）

「

御家傳并諸家由緒　二下

」

▽(島)一御家傳并諸家由緒目録

一和田家由緒書　　糺合濟

68

一小川氏由緒書
一鮫嶋刑部左衛門由緒書
一蒲地氏由緒書
一本田家由緒書
一郷田家由緒書
一野村家由緒書
一宮原家由緒書
一税所家由緒書
一市来家由緒書
一東郷・宮原両家調書
一宇都宮家由緒書
一酒匂家由緒書
一新納家由緒書
一大嶋家由緒書　△

和田家由緒書

和田平七継目之御禮御太刀進上之願由緒書抜書

一和田家者吉田嫡家吉田納右衛門家之庶流之由、吉田家六代家督又次郎清高二男新左衛門清光、　尊氏将軍筑前之多〻良濱御合戦之節、兄彦次郎清秋之為名代罷立抽軍忠候ニ付、初而和田与号、其上御直垂を拜領仕候、右清光和田之先祖ニ而私家之一流故、納右衛門父吉田次郎兵衛私祖父平右衛門江和田某与宛書被成足利直冬卿より被下候御教書私家ニ可致格護之由ニ而可遣与申候へとも、折を以正文者可致受用と申候而写を仕置候、私家中古之先祖共之訳然与相知不申候、私より六代以前之祖和田丹後以來分明ニ御座候、丹後以來別而御年來ニ被召仕候、丹後養子右京、天正年間自田布施飫肥江被召移御奉公仕、京勢下向之砌本知ニ相離候由、然処　惟新様納殿役被　仰付、飯野より栗野・帖佐・平松・加治木迄御供仕罷移候、　惟新様別而御心安被召仕、右京宿所江度〻被遊　御光儀候、右仕合故、右京死去仕候節、乍恐遺物迄も差上為申由、其子半十郎惟新様致御供朝鮮國江罷渡、其後男子別ニ無御座候故、椛山蔵人入道一慶二男を婿養子ニ仕、和田主膳与申候、惟新様御馬乗方之御弟子ニ而、御心安被召仕候、御香之番被　仰付、同番阿多長吉・野村喜兵衛・伊地知新三郎抔ニ而御座候、御取次・奏者等相勤申候、主膳男

子無之、私(ヰ祖)父平右衛門事宮原主計嫡子ニ而御座候得共、元來親類故養子ニ罷成候、亡父平右衛門事も御兵具奉行役迄相勤申候、私事も去〻年騎馬役ニ而御供被仰付候、右通故御太刀進上之願、

子正月十三日　　和田平七

小川氏由緒書但抜書

69の1

一私家元祖者日野宰相宗頼ニ而御座候、蒙勅武蔵國ニ配流、其後右之子日野(ヰ日)白槿宗親代ニ武蔵之内を被下候、其子武蔵大掾与申候、代〻武蔵國ニ罷在、子孫繁昌仕家数多ニ相分レ申候、平山季重・稲毛入道抔も庶流ニ而御座候、建暦年間　実朝卿之御時、小川右衛門尉直高与申者代に衰微仕、相劦之内二宮与申在所被下候、御下文于今所持仕候、其以後小川太郎季直与申者代ニ甑嶋被下罷下申候、様子者、小川太郎弟宮内左衛門直季之嫡小川太郎季直与申者代ニ甑嶋被下罷下申候、承久之兵乱ニ関東方ニ組仕、甲斐宰相範義卿を打取申候依忠節(ヰ甑嶋)(ヰ後カ)肥前益城郡之内七十町被下、甑嶋ニ罷下居住仕候、右證書之文書多〻所持仕候処、申之年・巳之年両度之火事ニ焼失仕候、範義卿を打取申候儀者、承久記并北条九代記ニも相見得申候、右之季直鎌倉より召列申候岸・和田・長濱其外之者共、於于今甑嶋衆中ニ而罷在候、彼地ニ茂無其紛申傳候儀共御座候、嘉元三年九州之探題北条上総介直政之御教書于今所持仕候、建武年間九州兵乱之節、小川太郎入道与申者将軍方ニ而太宰少貳ニ組仕、肥後國宅磨之城主宅磨豊前、肥前國之住人曽祢崎左衛門入道等同前筑前國有知山ニ致籠城軍労仕、自身蒙疵候、少貳證判之文書・義詮卿御判之文書等于今相残所持仕候、其外之文書惣様燒拂申候、右季直代より曽祖父小川中務(有季)与申者代迄十三代者相續甑之嶋江罷在候、文禄年間右中務代ニ、只今者田布施之内ニ而御座候高橋与申所江御知行千石ニ而甑嶋より御繰易被仰付、高橋江被召移置候、中務死去仕候已後実子無御座、跡久〻中絶仕候処、聟ニ而御座候伊勢内記より御訴申上、内記二男長次郎養子に被仰付候、其節も御太刀進上仕候由申傳候、然処右長次郎事右之以後　中納言様以　御意有馬丹波跡ニ被　仰付候ニ付、中務跡者右長次郎弟ニ被　仰付、小河喜兵衛(尚常)与

69の2

申候、様子有之、右高千石之内五百石被下、喜兵衛御礼申上候節御太刀進上仕候由、其子金右衛門者私養父ニ而御座候、金右衛門　御目見仕候刻も御太刀進上仕候由申傳候、何之年ニ而御座候哉、其段者承置不申候、漸〻与小身罷成、金右衛門代高百六拾石程相残申候、喜兵衛・金右衛門(ヰ迄)与者小番相勤申候得共、右之已後者無高ニ罷成候ニ付、無是非金右衛門大番奉願相勤申候、私実父岩元多楽院事者岩元與左衛門麁子ニ而、本家者畠山氏ニ而御座候、相續候而御奉公為仕一筋之者ニ而御座候、右之趣為御内見差上候由、

月日　　小河喜兵衛

覚

一※小河中務殿親父与中務殿名乗相知候哉、如何、

※(行間)『小川越前守与申候、　近衛様より　龍伯様江▽(ヰ)参候△御書ニも、越前守江御對顔御祝着之由之御書有之候』

一※甑嶋十三代御持ニ而、小河太郎季直代より中務迄十三代ニ而候哉、如何、

※(行間)『中務子藤八迄ニ而十三代ニ而御座候、藤八早世、家督者無之候半与存候』

一※甑嶋より高橋御繰易、高千石中務殿江御給之儀者何故ニ而候哉、如何、

※(行間)『高麗御在陣之節如何様之儀も有之候哉、帰朝已後御繰替ニ而有之候、是ハ幸侃叛心之節之節(衍カ)ニ而候由候、幸侃之申ニ而如此之由承候』(ヰ被)

一※右之後長次郎殿養子被仰付高五百石御給之儀者、右之千石有之候外ニ而候哉、又千石者無之候故五百石御給候哉、左候ハヽ、千石者何故無く成候哉、如何、

※(行間)『千石者中務一代ニ而被召上候、間有之候而長次郎御取立、五百石被下候由承置候』

一※長次郎殿高五百石ニ而候由、已後有馬丹波殿跡ニ者八百石有之候故為被仰付ニ而候哉、如何、

※(行間)『右有馬家高過分ニ有之候ニ付為被遣由候、左候而、弟喜兵衛

ニ其跡被仰付候』

一長次郎殿丹後殿跡ニ被仰付候已後、長次郎殿舎弟喜兵衛とのを小河殿跡ニ為被仰付趣ニ御書付ニ相見得候、如何、

※(行間)『長次郎有馬家ニ参候而、跡ニ喜兵衛被仰付候』

一文禄年間迄者甑之嶋御持候儀者慥成證文有之候哉、如何、

※(行間)『系圖ニ相見得候、御記録所へも相知可有之候、尤木脇刑部左衛門咄ニも承候、甑之嶋衆慥ニ存罷在候』

一前喜兵衛殿・金右衛門殿御太刀進上之儀證書有之候哉、又者申傳迄之儀候哉、如何、

※(行間)『年間月日者相知不申候、慥ニ差上候儀者伊勢六郎左衛門・有馬次右衛門・東郷四郎左衛門存候而、其段ハ慥ニ申聞置候』

右之趣御書附被遣候ハヽ、見合候而可相調候、以上、

二月十七日

70

▽㊟右書ハ木脇啓四郎集録之由△

田布施衆中鮫嶋刑部左衛門家由緒書写

鹿児嶋高ニ被召成被下候様ニ願ニ付書付拔書

鮫嶋刑部左衛門先祖鮫嶋双月(宗豊)事　一瓢様御代より田布施に居住仕候、　日新様御代ニ者御後見与被仰付、方々御取合之節御加判をも仕、軍役相勤申、田布施地頭職迄被仰付候、忰感應事茂田布施地頭ニ而、東之城御預ケ被下、御感状・御證文共頂戴仕候へ共、其後私代火事ニ焼失仕、残念之至御座候、感應子又左衛門迄者、伯囿様御代迄父子三人之内壱人ツヽ南方御用ニ而田布施城ニ被召置、残者者御城下ニ相詰、鹿児嶋ニも屋敷等被召置候而、又左衛門迄も田布施地頭分ニ而諸所御取合ニも罷立為申儀ニ御座候、右又左衛門子共無御座候ニ付、　龍伯様　黄門様達　貴聞、鹿児嶋衆中永吉采女弟左助年十三歳ニ而又左衛門養子ニ被仰付、後ニ雅楽助与申候、則當刑部左衛門祖父ニ而御座候、其比若年之故、未直親方江罷居候処、又左衛門事慶長十年之比田布施ニ而病死仕、則右之段不申越、經数日田布

施江差越申仕合御座候、其刻又左衛門弟大炊助与申者より其時分居地頭村田刑部方ニ罷出、死後ニ跡職之儀何角与申上候付、又左衛門持高等地頭差引ニ而為被召置由候処、左助田布施江罷越、跡職請取御奉公相勤申候ニ付、口上書を以段々地頭方江差出候、口上書于今所持仕候、大炊事ハ山伏之姿ニ罷成候而無程病死、跡目無御座候、又左衛門持高相應ニ御座候得共、存生之内ニ部屋住分ニ纔ニ高三四拾石程左助方江内々ニ而請取申候、又左衛門死跡ニ家督仕候節、惣高格護可仕儀地頭方迄者申上候得共、何角与抑移相達不申候、其以後右高御蔵入ニ為被召成由、其時分御繁多之時節故、左助より不申上候、右永吉采女事も品能被召仕、高も相應ニ格護為仕者ニ而御座候、雅楽助代ニも　黄門様田布施江　御光儀之時分、雅楽助所江被遊　御入、難有仕合ニ為有御座由申傳置候、雅楽助事最前養父より内々ニ而請取候高迄を以諸事相調御奉公相勤來候ニ付、漸々衰微仕、無高ニ罷成候、然処御領國中宗門御改有之候節田布施衆中手札申請、私迄三代ニ而、當分別而逼迫、田布施ニ而人役難相勤候ニ付、地頭方江御断申上御當地江中宿仕、方々田舎御奉公相勤渡世仕候、就夫、右一筋を以鹿児嶋高ニ被召成被下度与之願高之御訴訟申上儀ニ而無之、鹿児嶋高者御奉公之品多有之候故、御奉公之御蔭を以老母・妻子等を介抱可仕、往々御奉公相勤申度与之願書拔書、

卯二月十日　　鮫嶋刑部左衛門印

田布施
御曖衆中

蒲地氏由緒書　但拔書

蒲地家之儀、於筑後國領地四千町餘有之、上之蒲地之城主ニ而罷在候処、天正年間隣國之合戦ニ利を失ひ、城持留かたく罷成候故、私曽祖父蒲地備中与申者天正十三年　義久公江御味方可仕旨新納武蔵殿迄申上置、属御手御奉公ニ罷出候処、御出陣之砌段々御味方為仕訳共被遊　御感、高八百斛計拜領仕、野田之地頭職被仰付置被　召仕候、右味方仕候儀者上井伊勢殿日帳ニ茂相見得申候、備中養子新助事山田民部入道正圓兄ニ而御座候、新助小根占之地頭職被　仰付、首尾克御奉

公相勤候、新助嫡子八郎左衛門事私養父ニ而御座候、
右通難有被召仕、代〻御太刀進上仕來候ニ付、先年私
事八郎左衛門養子ニ被　仰付初而　御目見仕候節、御
太刀進上之願申上候得共、中紙進上可仕旨、私式早速
之御訴者成合申間敷、中紙進上ニ而　御目見仕候、蒲
地家之儀近代迄城主ニ而罷居候、私本家茂加茂之神主
庶流ニ而候、加茂之神職之儀、官位抔茂結構ニ昇進仕
事ニ御座候、加茂之頼長与申者、蒙勅日光神之宮供奉
仕、御當國財部江罷下、往古者神領大分ニ有之繁栄之
社ニ而、神主直参代をも為仕由申傳候、右頼長子孫有
田与名乗、其以後蛭牟田与改申、代〻御奉公仕來候、
私曽祖父有田神祇与申者庄内御出陣之砌罷立候、　龍
伯様白鹿嶌江被遊　御陣候処、凶徒打寄可申与企申候
得共、日光神之宮山江神祇主取仕多人数罷登防留申候
ニ付、御難無御座候由、夫より神祇事者御先手ニ罷立、
於志和池之城戦死仕候、神祇戦死之儀者福昌寺過去帳
ニも相見得候、神祇働之趣達　貴聞、早竟者神明之御
加護之由候而、慶長五年三月十六日、日光神江　龍伯
様被遊　御社参、御高弐拾石餘御寄附被成候、其節山

72

田理安老・伊集院抱節老両判之御目録于今頂戴仕置候、
右之外蒲地家并私本家之由緒段〻申傳候へ共、事長差
扣申候、餘例を申上候儀是又恐多奉存候得とも、志岐・
田尻抔者二男迄茂御太刀進上被　仰付由候間、備中由
緒之一筋を以御太刀進上之願書、

卯六月日　　蒲地休右衛門

本田家由緒書

私嫡子助六儀、當年九歳罷成候間、乍恐　御直元服被
仰付被下度奉願候、就夫近代私先祖共元服被　仰付候
次第并勲功仕候段左ニ申上候、
私先祖本田下野(親貞)入道三省儀、　龍伯様初而御犬追物被
遊候節、御太刀之役被仰付候、且又帖佐岩釼江　御出
陣之砌右之役被仰付、首尾好相勤申候、九州　御出馬
之刻於求摩脇大将迄被仰付候、尤先祖共諸所地頭職被
下置候、三省事者御家老役多年相勤候、居宅江茂　龍
伯様被遊　御光儀候、且又西目八ヶ城之押被仰付、加
世田之内竹田を住所ニ被下、彼地江数年罷居、八ヶ所
之諸士之出仕をも為　御名代受申候、次ニ三省剃髪仕

候者、　龍伯様被遊　御法躰刻御同時ニ剃髪仕候、其砌於泰平寺　太閤様より御高壱万石可被下旨御朱印被成下頂戴仕置候処、先年焼失仕候、其上　龍伯様より御高可被下旨毎度被　仰出候へとも、其節持高相應有之候故、外ニ御奉公之功有之候小身之衆江被下度旨御断申上、拝受不仕候、〇三省男子無之候故、本田大炊二男内蔵(親孝)之允を養子ニ仕、内蔵允儀も三省死去仕候跡引次ニ所〻之押被仰付、竹田江罷居候へ共、無程相果申候、〇本田内蔵允嫡子伊與儀(予)　御直元服被仰付候、殊　惟新様より大坪一流之馬書六冊　惟新様御判形ニ而伊与(親正)始之名弥六御宛書ニ而被成下、于今格護仕置候、将又慶長十四年琉球御征伐之砌、二十七人賦ニ而御使役相勤渡海仕、首尾好帰陣仕候、其後大坂乱之節も廿七人之御賦ニ而　御上洛之御供被仰付候、曽木其後福山之地頭職被仰付相勤申候、〇伊与嫡子長七郎儀(親宣)も於御本丸御對面所　御直元服被　仰付候、天井折并二種一荷・銀馬代進上仕、御禮申上候、二男大学儀(親秀)者大野隼人先祖之養子ニ遣申候得共、早世仕候、〇私父六左衞(親武)門儀者伊与三男ニ而候得共、母方之祖父祢寢右近太夫私領吉利江　中納言様御光儀之節　御直元服仕候、長七郎事も男子無御座候ニ付、六左衞門儀長七郎娘江取合、養子ニ罷成家督仕候、川内之高城其後福山之地頭職相勤申候、〇私父六左衞門儀　泰清院様御上洛之御供仕、於江戸兄弥六并拙者儀者出生仕候へ共、六左衞門跡目之儀者、本妻ニ女子壱人有之候を前之町田源左衞門ニ嫁し、其子とも御座候を養子ニ願可申上与内存相極罷居候、夫故兄弥六儀於江戸披露をも不申上、内〻ニ而元服仕せ申候、然處　泰清院様より御國元江差下六左衞門跡式可為仕之旨難有　御意ニ而召列罷下候、六左衞門相果候以後、弥六江家督被　仰付候、私儀者二男之儀ニ御座候故、母江相附江戸江差置候故、其内ニ中剃(刹カ)仕候、其後私儀も御當地江差下度之旨奉願、被遊御免候ニ付、私儀茂罷下候処ニ、兄弥六早世仕候ニ付、私江跡職被仰付家督仕候、其節御禮之儀者先規之通二種一荷・御太刀・〔馬代銀(伊銀馬代)〕進上仕候、弥六御礼之節も其通ニ候、先祖共代〻　御直元服為被仰付儀ニ御座候、私兄弟之儀者何そ怠を以中絶仕候儀ニも無之候、右申上候訳ニ而内證ニ而元服仕候処、　泰清院様難有

御意迄を以不慮ニ家督為仕儀ニ御座候条、私兄弟之儀者被　聞召達、先祖共結構ニ被召仕候筋目、且又親六左衛門迄者　御直元服被仰付被下候引次を以、此節忰助六儀も　御直元服被　仰付被下候様奉願候、此等之趣可然様御披露奉頼候、以上、

卯正月十三日　　本田六左衛門（親方）

右達　貴聞候処、六左衛門嫡子助六事元服之儀親より之願書被　御覧置候、於　御前者元服被仰付間敷候条、誰そを頼元服為仕候様ニ与申渡可然旨　御意候、主殿奉承知候事、

郷田家由緒書

私先祖小野太郎家綱与申者、薩州日置を領地仕、代々居住仕、　将軍家御家人ニ而候、然者　忠久様之御時家綱事　内裏大番并筑前國箱崎之御番相勤申候、家綱嫡子式部家重事も御家人ニ而候、其以後肥前之國松浦之庄此御方様御領之節、式部家忠子小野を改郷田、式部家氏与申候、右家氏松浦之庄之内早湊村・同國福萬名之地頭職被仰付候、右家綱より拙者迄二十二代ニ而候、先祖之内安藝（兼平）与申者豊後之佐伯雲留之城ニ而戦死仕候、右之安藝嫡子源次郎（兼重）、後ニ安藝与名を改候、私曽祖父ニ而御座候、右之安藝事、天正三年丑二月、従龍伯様日刕福嶋江物頭役被仰付、御加増高弐百石被下被召移候、其後同國宮崎江物頭役ニ而被召移候節も、右之通御加増高被下候、其節同役堀四郎左衛門・柏原周防助ニ而御座候、其以後　龍伯様九州御退治被遊候節、伊福・神代（伊江）山田新介・安留佐兵衛助・柏原左近将監・郷田安藝被差遣候而、彼地より人質取候而差上為申由、此段者上井伊勢殿日帳ニも相見得申候、且又御國江　太閤様御下り之節、宮崎より安藝事鹿児嶋江被召移候ニ付、被下置候高之内、衆并ニ五部一之御高百石為被下之由承候、左候得者、祖父源助（兼吉）事茂少高ニ而御座候、然共　御出陣之砌者被添御心可被下候間、乗馬之御奉公可仕之旨被仰渡、御請申上置候通、源助差出之留帳を記置申候、右之内先祖以來段々結構ニ為被召仕儀ニ御座候条、御見合ニも可罷成哉与存申書付差上申候、以上、

74

卯十二月六日　　郷田源助印

野村家由緒書　抜書

私家之儀者代〻小番相勤、養父清右衛門兄吉之允与申上略ス者者、伊集院幸侃一族御討罪之節、庄内ニ而鑓仕手負申候而、養生不叶果申候、其跡職清右衛門相續仕候処、長崎江為御使者罷越、船破損仕相果、数年養母計罷居、其跡式私江相續被　仰付候故、家ニ付而之由緒申傳者無御座候へ共、小番之儀前方者別而筋目之御吟味御座候而、高五六百石之衆ニも小番不被仰付人餘多御座候得とも、清右衛門事者阿多内膳抔相番ニ御番被仰付候儀、代〻小番之筋目を以、私儀も最初より小番ニ為被召加儀ニ候へ者、前〻結構御奉公仕候筋目与存罷在候、其上私儀若年より多年　寛陽院様・泰清院様忝被　召仕、猶以　御當代者　御部屋栖之節より唯今之通結構被　召仕、殊先年御家督之御礼被　仰上之節、　公方様江　御目見被仰付、冥加至極、誠偏御取立被　召仕、外聞実儀難有仕合奉存候、数年　御参勤之御供相勤申候故急度立被　召仕候（伊与〈）　御直参之御衆ニも御存知御座候、第一御一門・御家老を初暦〻九人之内ニ被召加、公方様江　御目見被　仰付候得者、　御當代結構ニ被遊御取立為被下ニ而御座候、嫡子小藤太事者先年御太刀・二種一荷進上仕　御目見為被　仰付儀ニ候へ者、二男平吉事御太刀進上被仰付被下候様ニ与之願書、初中後抜、

〔元禄九子年〕三月廿二日　　野村太左衛門（廣貫）

75

宮原家由緒書

乍恐口上書を以申上候、宮原休五郎此節　御目見申上筈ニ御座候、就夫奉願候、御太刀進上被仰付被下度候、先祖代〻御年比ニ御奉公仕候者之儀ニ候、休五郎六代之祖宮原隼人与申者、加世田間之瀬川ニ而　日新様薩州家与御取合之節、御難儀被遊御戦死御究被遊候時、肥後掃部左衛門・井尻四郎左衛門・宮原隼人御暇申上、三人踏留戦死仕候間、無吴儀加世田江被遊　御退去候、其後加世田御手ニ入候故、三人戦死之所江六地蔵を為三人之御建被下、于今塔之原与申候由候、其子太郎左衛門与申者、飫肥江豊刕御座候処、伊東殿取掛被申候

由ニ而為御加勢被遣置、飫肥業(ヤ)母ケ辻ニ而戦死仕候、
其子伊(景有)豫儀も飫肥ニ被召移、御知行六町被下、足輕御
預置候、其後如鹿児嶋被召(ヤ)帰、御船奉行被仰付候、其
子主計(景親)儀休五郎曽祖父ニ而御座候、於方〻戦場之御奉
公仕候、其上慶長十四年　中納言様より琉球御領知并
御感状御頂戴為御礼江戸・駿府江町田圖書殿被為差上
候時分、曽祖父主計儀も従　惟新様之為御使者、琉球
御領地并御感状之御礼、且又関ヶ原以来之御礼迄為可
被仰上、本多佐渡守殿・本多上野介殿江御付状ニ而被
遣候由、主計書付置申候、左候而、御献上物品〻有之
候、主計儀　權現様江自分御太刀・馬代進上仕、　台
徳院様江も同前之様子ニ而　御目見仕候而、首尾克罷
下候、祖父五兵(景房)衛儀　中納言様江　御目見仕候時分年
少ニ而、父ニ離小身ニ罷成候得者、可様成願共不申上、
親類共ニも氣を付申者無之候而、右之仕合ニ而候、父
半左衛門　御目見仕候節、不念仕右之御訴訟をも不申
上候而、残念奉存候、然共五兵衛事騎馬ニ被召仕候、
半左衛門儀も假御兵具奉行被仰付相勤為申儀ニ候、右
之通代〻無相違御奉公仕為申一筋之者ニ御座候、就中

76

主計事者町田圖書殿同前ニ　權(ヤ)現理様・台徳院様江為致
御目見儀御座候間、親半左衛門継目之御禮申上候節、
右由緒書を以申上置候へとも、不慮ニ相果申、継目之
御礼不申上候、此節休五郎初而　御目見奉願候間、御
太刀進上被仰付可被下候、休五郎甥之儀ニ候間、私よ
り奉願候、此等之旨御披露奉頼候、以上、

巳七月廿二日　　向井市之丞印

税所家調書『穏所平八継目之御礼御太刀進上願書候へ共、調書ニ相見得候故略仕候』
『穏所次兵衛養子』
税所平八継目之御礼ニ而御太刀進上願之口上書之
内肝要之儀計調候覚

一藤原姓税所氏之先祖曽於野七郎太夫敦茂与申者、依勲
功之賞　右大将頼朝公より御判之御下文を被下、税所・
惣検校両職ニ被補、恒次名・重武・松永名等致領地、
初而称号を穏所与号候由、扨税所与申官者、往昔霧嶋
之神領を支配仕、新米より始時〻之供御を調差上候役
ニ而御座候由、其職名を称号ニいたし候、於于今霧嶋
之内ニ穏所宮与申候而御座候、是者神田ニ出來候新米
を以供御ニ調祭申所之由候、曽於郡之儀も昔者霧嶋之

神領ニ而御座候ニ付相領し、後ニ者時〻運ニ乗シ一圓相領シ為申与見申候、左候而、子孫代〻傳領致、文明之比迄者暦〻ニ見得申候へ共、嶋津修理允忠廉帖佐ニ在城之節籏下ニ随候而、其時より漸〻威勢相滅し申候、穏所之号之儀大抵如斯御座候、〔肱枕(ゆナシ)与者不申候〕

一平八口上之内ニ穏所越前入道(篤和)肱枕与有之候得共、休心ニ而御座候、肱枕与者不申候、

一御家老役ニ者不被仰付候得共与申出候儀、此休心者義久公江奉仕、申次与申役ニ而御座候、只今之御用人ニ而御座候、御政道ニ相交申筈ニ而候、

一龍伯様御書を頂戴仕候由、是如何ニも申出之通御契約状を被下置候、『願書ニ無疎意御頼被思召之趣』

『願書ニ次兵衛父迄者伊十院地頭職被仰付候由』

一家之儀も同姓之中ニ者惣領与取持申候由、是平八系圖与穏所市之助系圖与引合見申候得ハ、両系圖共ニ元祖敦実親王より弐拾五世之孫大助敦庸与申者、平八系圖ニ者大助敦重与申者を互ニ一人ツヽ系申候故、如何様兄弟ニ而候半なれとも、嫡庶之分見得不申候、殊平八系圖ニ者、敦重之子敦昌、其子出家景嵯与申者迄系断申、敦昌之弟越前守篤好与申者より越前入道休心迄系置申候得共、筋者二男筋ニ見得、市之助系圖者敦辰之子敦庸男子弐人御座候、嫡子大介義貞、二男越前守篤綱与申候、市之助家者篤綱より嫡〻系來申候ニ付、両家共何れを嫡何れを庶与難分見得申候、然共上代より之文書者数通市之助家ニ所持仕候、是を以見申候得者、市之助嫡家ニ而茂可有御座候哉、究而難申候、平八方ニ者　義久公御判計笥蔵仕候、

一町人・百姓之流之者ニ而も無御座、本家者大脇名字ニ而与申出候儀、此大脇之嫡流者小林衆中大脇孫四郎与申者ニ而御座候、『平八直父大脇八郎衛門与申候而、高も三百石程ハ所持為仕事ニ候由、願書ニ有』孫四郎拾六代之祖佐〻木孫四郎為綱与申者、　頼朝公御治世之中日州都於郡大脇村之名主職を被宛行、大脇江罷下候而、在所之名を以号大脇候、子孫代〻傳領為仕与見得申候、足利直義之證判弐通、其外文書数十通所持仕候、平八家者孫四郎庶流之内ニ壱岐為歳与申者之末裔之由ニ御座候、

一大脇内蔵之助豊後ニ而敵二人討候儀、且又　久保公初而御上洛之御供仕候節、御銀拂底ニ付、棚部屋江銀拾貫目致借用差上候由、此等之段御記録所江御座候書記之内ニ見得不申候、

※一其外段〻御奉公仕候ニ付、國宗之御腰物・備前之御脇指拜領仕、御下向之後御高百石拜領被仰付、　御感状をも頂戴仕候由、此段御記録所江相知不申候、

※（行間）『棚部屋ハ内蔵介知人ニ而右之通候由、惟新様御下國之節御乗船等之取仕立棚部屋仕候も、最前御銀借用由緒より之由、願書ニ相見得申候、大脇八郎右衛門者大口江被召移、代〻曖役勤來候之由、八郎右衛門兄者加治木江罷居候由、願書ニ有』

一御太刀進上断絶之筋ニ相成候儀、税所家之瑕瑾ニ罷成残念至極ニ奉存候与申儀、尤之儀ニ候、然者（伊共）此段者自上被遊儀ニ而無之候、其故者、養父次兵衛身上逼迫仕渡世難續ニ付、外城養子御免被下候ハヽ、致助成候者を養子ニ仕一生相過、且又名跡をも續せ申度与之願之上、御免許被遊候、然者外城養子与申候者、血筋ニ而も無之者養父方江相應ニ銀子を出養子ニ罷成儀ニ而候（伊者）得共、養父より家を賣申ニ而御座候、養子茂血筋ニ而無之家を銀子を出養子ニ罷成候得者、家を買為申ニ而御座候、其上契約之致様初ニ銀子何程可遣候、是切ニ而以後者何様ニ難續候共養子より者合力不致候条、續ケ之儀曽而此方江被申間敷与申定、以後者何様ニ難續も合力不仕格式之由候、然者其家を継為申与者乍申、他人同前之交ニ而候得者、弥以家を賣除買除為申与申候而御座候、依之　御當代ニ罷成候而者、御僉儀之上買養子之儀者家之位を御下ケ被成、御太刀進上仕來候家も皆以中紙進上ニ被仰付候、大野正右衛門養子大野為右衛門・川上與右衛門養子川上七左衛門・此平八、先年中紙進上ニ而　御目見仕候寺山甚兵衛・鮫嶋兵右衛門儀者申に不及事候、平八より家之瑕瑾与申出候得共、自分より作り出候瑕瑾ニ而御座候へ者、上より可被遊様無之候、此等之段得与被仰聞、弥以最前之通平八儀も中紙進上ニ可被仰付儀ニ而御座候、扨又自是以後外城より家を買申候而鹿児嶋士之養子ニ罷成候家者、皆以中紙進上被仰付御法ニ必至与御極被遊候ハヽ、御太刀進上之願不申出筈候、萬一申出候共、頭ニ而御取上ケ不被成筈ニ御座候得者、調之儀ニ茂及不申候、御繁多之時節、一事ニ而茂滅申方ニ御座候半なれは、此御極能相之事与存申候、以上、

巳十月十二日　　御記録所　田中五右衛門（国明）

市來家由緒書

市來次郎左衞門嫡子長十郎初而之　御目見ニ御太刀・二種一荷進上願調覚抜書

市來次郎左衞門系圖者先年焼失之由ニ而所持無之、御記録所之写も於御蔵焼失、其写者市來次左衞門系圖ニ不相替与覚有之、此節次左衞門家之系圖文書取寄見申候文書之内ニ見得申候者、其次左衞門（家親）五代之祖備後守家利与申者之弟民部左衞門与申者、竹之内隱岐守与申者之養子ニ成、其嫡子を竹之内織部（家政）与申候、織部代ニ竹之内家を辞し市來ニ罷成、名をも備後与改候、是則次郎左衞門為ニ者曽祖父ニ而御座候、市來ニ立帰候節系圖を懇望ニ付、次左衞門祖父伴右衞門家尚より市來之系圖を写遣為申由、伴右衞門記置候、且又備後嫡子市來助左衞門跡目之儀ニ付、御家老嶋津下野久元・伊勢兵部貞昌より川上左近将監久國・喜入攝津忠政江被遣候書状之写ニ相見得候、然者次郎左衞門家者次左衞門家之二男家ニ而候、備後嫡子助左衞門、其子長千代早世ニ而、喜入久右衞門久供二男次十郎家賀与申候ニ助左衞門跡職被仰付、吟味役、阿多之地頭職をも被仰付候、次十郎子當次郎（家賢）左衞門ニ而候、御太刀之儀者次十郎より進上仕筈ニ御座候、二種一荷を加候儀者家筋ニ付而者難成筈ニ候、然共次郎左衞門當分御用人役ニ付、同役中之嫡子御太刀・二種一荷進上被仰付も御座候（ヰ故）処奉願候由口上書ニ相見得（ヰ候）、鎌田太郎右衞門・野村太左衞門嫡子御太刀・二種一荷進上為仕由、此両人ハ　御家督之節　上様江御目見仕候儀を以願申上、上様江御目見仕候者重キ儀故、願之通被仰付候由、次郎左衞門儀者左様之儀も無之、右両人例ニ者難被仰付候、然共相良主左衞門嫡子　御目見仕候ニ御太刀・二種一荷進上為仕之由候、此家筋目ニ付而者二種一荷迄進上被仰付筈ニ而無御座候、如何様之訳ニ而被仰付候哉、定而進上仕來候家癖共ニ而被仰付候哉、次郎左衞門より同役中与申出候者、是共を指申ニ而も可有御座哉、進上仕來候家癖者又格別之儀ニ而御座候、無左候ハヽ、次郎左衞門嫡子江も不被仰付〔も〕（ヰ候ハヽ）并不申儀ニ御座候間、得与御僉儀之上御究可被成候、御太刀・二種一荷進上不仕筈之家筋之者共進上被仰付候ハヽ、如何ニ候条、以後共并申様有之度事ニ而御座候由之調書、

78の1

巳九月十四日　　田中五右衛門〔国明〕

東郷・宮原両家調書

東郷惣左衛門家督之御禮ニ御太刀・二種一荷進上仕せ度旨親類川上九右衛門より願申出候ニ付調之覚

東郷氏者、平姓渋谷庄司重國之嫡男渋谷太郎光重之二男早川武蔵守実重与申者を始兄弟五人、父光重之命ニ應し、宝治二年薩刕之領地ニ罷下、実重者東郷を領し、車内与申所ニ致住居候、依之家号を車内共号し、又者東郷与号し候而、代〻東郷を傳領仕、拾六世之孫大和守重尚入道喜俊与申者之代ニ　太守公之命を奉背、國中之凶徒ニ與同仕候付、数御征代(伐)被遊候而、天正年間居城東郷を差上降参仕候故、領地を過半被召上、其罪を御免被成候、喜俊代迄者不背時者國人与申候而、年首ニ者以使者　御屋形様ニ御太刀進上仕御禮申上、暦〻之事ニ御座候、喜俊男子無之候ニ付、嶋津中務太輔家久之二男源七郎重虎を養子として家相續候、重虎子共出生之後養子を被致違変候へ共、四男市左衛門重益東郷家を致連續候、重益嫡子源七郎重元無男子候故、弟之市左衛門重商兄之跡を致連續候、重商嫡子當惣左(重興)衛門ニ而御座候、右通之家筋ニ而御座候へ者、代〻御太刀・二種一荷進上仕來筈ニ候間、此節も惣左衛門儀者申出之通被　仰付可然儀与存候、以上、

78の2

宮原休五郎儀御太刀進上仕せ　御目見仕せ度旨向井市之允より申出候願之調書

一休五郎六代之祖宮原隼人与申者、加世田間之瀬川ニ而日新様薩州家与御取合之節、御難儀被遊御戦死ニ御究被遊候時、肥後掃部左衛門・井尻四郎左衛門・宮原隼人御暇申上、三人踏留戦死仕候間、無吳儀加世田江被遊　御退出候、其後加世田御手ニ入候故、三人戦死之所江六地蔵を為三人之御建被下、于今塔之原与申候事、右之儀申出候通ニ御座候、　日新公御譜之中ニも相見得申候、

一其子太郎左衛門与申者、飫肥江豊州御座候処ニ、伊東殿取掛被申候由ニ而御加勢被遣置、飫肥業毎ケ辻ニ而戦死仕候、其子伊豫(景有)儀も飫肥ニ被召移、御知行六町被

下、足輕御預置候、其後鹿児嶋被召移、御船奉行被仰付候、

右太郎左衛門業毎ケ辻ニ而戦死之儀、御記録之中ニ者見得不申候、天正十一年　貴久公御代ニ、飫肥江御加勢として伊集院大和守忠朗ニ人数を相添為被遣儀御座候、其節之事ニ而可有御座候、ケ様之儀其家ニ者相傳、御記録所江相知不申儀、如何程も有之候、太郎左衛門子伊豫儀も飫肥江被召移候而、知行六町被下、(ヤ且)是又足輕御預被召置、其後鹿児嶋江被召移、御船奉行被仰付候儀、此段も御記録江者相知不申候、

一中納言様より琉球御領地并御感状御頂戴為御礼江戸・駿河江町田圖書殿被差上候時分、曽祖父主計(景親)儀も　惟新様より之為御使者、琉球御領地并御感状之御礼、且又関ケ原以來之御礼迄為可被仰上、本田佐渡守(多カ)殿・本田上野介(多カ)殿江御付状ニ而被遣候由、主計書付置申候、左候而、御献上物品〻有之候、主計儀　權現様江自分御太刀・馬代進上仕、　御目見仕候而、時服三重拜領仕候、江戸ニ而　台徳院様へも同前之様子ニ而　御目見仕候而、首尾好罷下候、

右主計儀　惟新様江為被召仕者与見得申候、相應之走廻り茂申出之通有之候半、　惟新公加治木江　御在城之時之古日帳ニ、主計儀御能有之候時笛を吹申候事見得申候、定而藝者ニ者無之筈ニ候、自分数寄を以嗜候故為被仰付ニ而候半、琉球國御拜領并御感状　御頂戴、関ヶ原以來旁之御礼使主計江被仰付、駿武両府へ参上仕、　両上様江自分太刀・馬代進上仕、致　御目見、首尾好罷下候儀、別条無之候、御記録所江も相知レ為申事ニ御座候、其時分者関ヶ原乱後より　惟新公御隠居之躰ニ而被成御座候故、態御使者も重立不申主計儀主従六人程之御賦ニ而為被遣与傳承候、然とも駿府・江戸ニ而者従　惟新公之御使者与有之、屹与立候御取持ニ而、自分太刀・馬代迄進上仕、　両上様江　御目見為仕之由候、扨休五郎家者平姓仁礼氏之宮原ニ而御座候由、然共系圖文書等所持不致候故所自(ヤ出)別不詳、家筋ニ付而者御太刀進上仕筈ニ而無之候得共、主計儀御使者ニ付　両上様江　御目見之節御太刀進上仕候儀、其身之果報大幸与申物ニ而御座候、以後祖父五兵衛(景房)・父半左衛

門　御目見仕候節者御太刀之願不申上候得者、中紙進上為仕ニ而候半、すれとも休五郎家之儀者初より御太刀進上仕筈之家ニ而無御座候得者、中絶与申ニ而も有御座間敷候、主計儀　両上様江　御目見仕候儀ニ付、休五郎代ニ始而願申上与申ニ而御座候、然者先年鎌田太郎右衛門・野村太左衛門嫡子　御目見仕候節、太郎左衛門（右カ）・太左衛門　御家督之節　上様江　御目見仕候申立ニ而、御太刀・二種一荷子共ニ進上被仰付候、此例を以見申候へ者、休五郎儀も主計　両上様江御太刀進上仕　御目見仕候儀者別而重き事ニ御座候へハ、御太刀社御免（ヰ不）〈被成共、中紙ニ者難被仰付候半、然者二種一荷共者御免も可被成事之様ニ被存候、（ヰ無）〈左候ハヽ、外ニ又別品之進上ニも被仰付ニも可有御座候哉、御吟味次第御究可被仰付候、以上、

巳十月二日　　御記録所　田中五右衛門（国明）

宇都宮家由緒書

私本家者宇都宮名字ニ而御座候、先祖（ヰ代）儀　忠久公被遊御下向候時分御當國江罷下、左候而、田布施ニ罷在候砌、家之書物等焼失仕候ニ付、委細難申上候、此等之段申（ヰ傳）渡候、私曽祖父宇都宮次郎左衛門代ニ者加世田之御城ニ被召置候、然処ニ猿渡越中殿羽月之移地頭ニ而被召移候節、次郎左衛門足輕大将被仰付罷移候、其砌宮内之家ニ御奉公高多く有之、跡目無御座候ニ付、宇都宮次郎左衛門江為御心付跡目被仰付、其節より宮内を相名乗申候、然処肥後より合志加賀御當國を頼罷越、羽月に多人数ニ而被罷居候処ニ、成敗被仰付候、其旨猿渡越中どの子息掃部兵衛殿御承、白坂式部・宮内次郎左衛門人数召列参候而討申候、于今大聖寺ニ石塔相立有之候、猿渡喜右衛門殿證文差上申候、且又肥後水俣御陣之砌、小川伊圖与申足輕大将宮内次郎左衛門討申候、左候而、　惟新公より次郎左衛門儀羽月ニ罷居候を栗野ニ可罷移旨被仰付、罷移申候、左候而、帖佐江被召列、其後蒲生江被遊　御在城筈之思召有之候由ニ而、山口大蔵・赤塚源太左衛門・遠矢下総抔同前ニ罷移申候、且又関ヶ原御陣　惟新公被及御難儀候節、鑓二度仕敵両人討取申候、左候而、　御帰陣之砌御立

80

跡ニ帰國仕候、左候而、次郎左衛門剃髪仕、宗繁与致改名、蒲生ニ而相終り申候、右宗繁嫡子宮内清右衛門儀、蒲生より加治木江被召移候、其後鹿児嶋江被召移候、右方〻仕候故、宮内清右衛門事漸〻逼迫仕居候処ニ、三原備中殿加治木之儀被承被為移候、并清右衛門儀筆者役被仰付、其節御扶持方御證文比志嶋宮内少輔殿・喜入攝津守殿御證文被下置、于今格護仕居候、左候而、宮内清右衛門嫡子宮内四郎兵衛儀、加治木兵庫殿江被進候時分、鹿児嶋衆鮫嶋家之儀、鮫嶋因幡、其子但馬、其子▽㊐双月、其子佐渡二男為庵無子候ニ付、弟嘉心相續仕候△嘉心無実子ニ付、私父宮内四郎兵衛相續仕候、宮内・鮫嶋之筋目右之通ニ御奉公為仕一筋ニ御座候得者、此節奉訴候通、高弐百石ニ御免被下候ハヽ、相應之御奉公相勤申度念願奉存申上事ニ御座候間、何とそ願之通被仰付被下度奉願候、以上、

月日　　鮫嶋仲兵衛

酒匂家由緒

乍恐申上候、私養祖父酒匂新左衛門（景次）江初而鎌田大炊殿御取次ニ而小番可相勤旨被仰渡候処、其砌者小番相勤居候衆皆大身ニ有之、僅取納高弐拾七石餘之小身ニ而、中〻小番可相勤様無御座候ニ付、一節大番ニ被召入可被下由奉願、大番帳ニ被召入置候由、内〻養父利右衛（景明）門申聞せ候、依之奉訴候、右之通新左衛門無案内与申、早竟無身上故御断申上候、然者拙者代ニ家之儀段〻申上、達　貴聞首尾能被　仰付、御銀并御續米被成下、難有仕合奉存候、新左衛門代ニ右之仕合ニ而迷惑ニ御座候、何卒此節小番ニ被召入被下度偏ニ奉願候、私事最早年罷寄、御奉公可相勤様無御座候へ共、願之通被仰付被下候ハヽ、世忰利（景安）兵衛ニ往〻小番相勤させ、江戸方之御奉公をも仕せ度念願ニ奉存候、誠以先祖代〻差立而被召仕候処、近代右之通罷成、別而残念之至奉存候条、願之通被仰付被下候様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

辰八月五日　　酒匂大蔵（景義）兵衛

新納家由緒

私嫡子百次（時英）郎事當十三歳ニ罷成申候、先祖共先例も御

座候間、於　御前元服被　仰付被下度奉願候、養父縫(久定)殿迄於　御前元服被　仰付候、私事者縫殿弟順(久明)右衛門世忰ニ而、前髪を取申候以後養子ニ罷成候故、其儀無御座候、拙者家之儀者新納(ヵ刑)形部三男家ニ而、元祖山城(忠光)与申者者　一瓢様・日新様江御奉公仕、御家老職相勤申候、従夫養父迄代〻於　御前元服被　仰付候由申傳候、縫殿元服之節者、新納刑部・新納又左衛門一所ニ被仰付、無銘弐尺弐寸弐部御腰物拝領仕候、右一筋之先例を以奉願候条、此節(於御前脱カ)元服被仰付被下度候、此等之趣を以可然様被仰上可被下候由、

卯正月　　新納小右衛門(久喜)

正月
右達　貴聞候処、小右衛門嫡子百次郎事元服之儀親より願書被　御覧置候、於　御前者元服被　仰付間敷候条、誰そを茂頼元服被(ヵ為)仕候様ニ与申渡可然旨被　仰出候、主殿奉承知事、

大嶋家由緒書

乍恐奉訴候、世忰大嶋孫右衛門(有宣)事小番ニ被仰付被下度奉存候、拙者事若輩之時分より方〻御奉公相勤申候ニ付、御番一度も不仕候、拙者家筋之儀者　久豊公之御四男出羽守有久之子出羽守忠徳之二男播磨忠經与申者私元祖ニ而、大嶋盛太夫家之二男家ニ而御座候、且又私并至孫右衛門騎馬ニ而江戸ニ被召仕、難有仕合奉存候、乍恐此節孫右衛門儀小番ニ被仰付被下候ハヽ、御番為相勤申度存候、右之趣、成合申儀ニ御座候ハヽ、宜被仰上可被下事奉頼候、以上、

午六月二日　　大嶋三左衛門(有以)

（表紙　五）

『一番』

御家傳并諸家由緒

（中表紙）

「

糺合濟

御家傳并諸家由緒三

伊敬写
七拾九枚

」

▽㊟一御家傳并諸家由緒　目録

一市來家由緒書
一新納家由緒書
一野元家由緒書
一徳永家由緒書
一相良家由緒書
一中西家由緒書
一土持家由緒書
一小番願之面々調書二通
一諸家由緒大概
一秩父十郎兵衛
一平山伊兵衛
一新納市右衛門
一長谷場源助
一伊東甚兵衛
一伊東権角
一川上八郎左衛門
一相良清兵衛
一平田五次右衛門
一和田平七
一碇山仲左衛門
一川上長左衛門
一川上左京
一郷田源助
一関喜右衛門
一本田與兵衛
一渋谷三四郎
一仁禮覺之允
一野村源左衛門
一海江田外記

一黒葛原少左(右)衛門　一町田孫兵衛
一川上益右衛門　一伊集院覺左衛門
一川上孫左衛門　一中神七右衛門
一伊地知内蔵　一田中(マ)五右(マ)衛門
一大島清太夫

小番可被仰人数

一町田勘左衛門　一伊勢八右衛門
一森川理右衛門　一伊集院新之丞
一伊勢弥三郎　一三原九兵衛
一川上益右衛門　一相良休右衛門外九名
一元禄十三庚辰年頭御座配
一志波(岐)・田尻両家之事
一川上式部家筋年頭進上之事
一山田七郎衛門(右脱カ)右同　一大島清太夫右同
一山田市郎兵衛右同
一一所衆列之事
一御座配之事
一比志嶋宮内少輔御仕置被仰付候際仰出之御書付
一本田刑部少輔調之事
一上井秀秋之事
一鮫島双月事
一桑波田孫六
一伊集院下野由緒調
一校名帳并目安　御一(見脱カ)状之訳返答書
一二禮景代系圖之覺△

83の1

市來家由緒書

市來家之儀者八文字民部太輔惟宗廣言一流ニ而、乍恐御家ニ相付御由緒も有之事御座候、古來薩摩國御家人ニ而、廣言より十代市來筑前守久家迄市來を領來候得共、寛正三年　立久公市來御退治被遊候付致没落候、右(家久)(伊久家)嫡子之太郎左衛門尉忠家其子三人御座候、嫡子早世仕、二男出家、三番目女子ニ而、是迄ニ而嫡流断絶与相見得申候、私儀御記録方見習被仰付置候故、於御記録所一家中系圖見合申候処、右之通ニ相見得申候、

市來小四郎系圖者自分之家を嫡流ニ系來申候、然者伊地知助右(重英)衛門丹後局御法名之儀申上候書付ニ市來嫡流

市來小四郎与書記差上候、其節右書付私江問合申候故、私より申達候者、小四郎系圖者自分之家を嫡流ニ系申候へ共、市來家之嫡流断絶与相見得申候系圖多御座候、我〻家傳ニも嫡流断絶与承傳候、左候得者、小四郎家を嫡家ニ相究申上候儀ハ落着不仕候、一家中系圖ニも小四郎を嫡家与系來為申者無之様ニ覚申候、此儀者詮儀仕候ハヽ相知可申候哉、只今之分ニ而嫡家ニ相極申上候儀者如何ニ候、嫡家之儀明白ニ相知候而一家中落着仕儀ニ候得者幸之至ニ候、唯今之分ニ而者嫡家与者難申候、其家之家傳計ニ而候欤、然ハ嫡流与極而可申上儀者可致了簡旨委細申入候得者、助右衛門申〔其〕(ヰ候者)小四郎家嫡家ニ而有之候儀者、新納又左(久了)衛門殿御咄ニも慥ニ承申候、河野六兵(通古)衛調申候諸家大概朱書ニも記置申候、然者先助右衛門見申候系圖、又ハ又左衛門殿御咄ニ而引合せ申候得者、嫡家之断絶与者難申候間、見及申候證據を引申上候、尤嫡家与無御座候證據御座候〔者〕(ヰハヽ)、何時も詮儀次第ニ可仕候、先見得申候分を社申上候、系圖之面ニ而致詮儀候様ニと於有之者、何時も其通ニ可仕候、此上ハ一家中何れもより可申上与存候ハヽ、心次第ニ可仕旨申候付、亦〻私〔儀〕(ヰより)申達候〔ハヽ〕(ヰ者)、助右衛門先見極之通ニ而申上之由候得者、我〻より當時差當可申上儀ニ而も無之与存候、私管見之分ニ而者落着難仕存候、願ハ於御記録所鑑(ヰ詮)儀有之、正嫡之儀一家中茂落着仕候而罷居度事ニ候、家〻之系圖家傳別格ニ有之落着不仕候得者、以後之支ニも罷成筈与存候通助右衛門江申達置候、依之當分諸外城より御記録所ニ差出置候一家中之系圖見合申候処、右之通忠家子共迄ニ而嫡流断絶与系申候古系圖十巻餘有之候、(ヰ其外)忠家迄ニ而系切申候古系圖是又十巻餘有之候而、系圖之面無相違嫡流断絶与相見得申候、我〻家傳ニも嫡家断絶与承傳候、然者小四郎系圖ニ者自分之家を嫡流ニ系申候得者、一家中系圖致相違、只今迄ハ小四郎家嫡流与相見得候證書等も無之候条、小四郎儀嫡流与相極候儀ハ難致落着儀ニ御座候、依之此節助右衛門、(ヰ江)〔談カ〕内證仕候趣者、又左衛門殿御咄ニ市來嫡家極り候▽(ヰ)證據有之候△通承候哉、且又河野六兵衛記置候諸家大概之朱書、是も其證據有之故を以為記置与見申候哉、其外小四郎系圖之外ニ小四郎儀嫡家与相見得申候(ヰ證)記書等見申候哉

与相尋申候(ヤ得)者、又左衛門殿御咄ニハ市來之嫡家者小四郎与被為聞傳候与御咄迄ニ而候、六兵衛記置候諸家大概之朱書之外別ニ證書等も見不申候、此段落着ハ難仕存候ハヽ、對助右衛門少も遠慮不入事候条、御調之願私より申上可然之由、助右衛門より申聞候、左候へハ、助右衛門方江も段〻内證為仕上ニ而、私ニ者難致落着儀ニ御座候間、奉訴候、只今之分ニ而ハ一家中茂納得仕間敷与存候、又者小四郎外ニ自分之家を嫡流ニ系來候系圖も間〻有之事ニ御座候へ共、是も系圖之面難致落着儀ニ御座候間、御調之上嫡流之儀相知候様ニ被仰付被下度奉願候、御繁多之砌、近比恐多奉存候へ共、一家中ニ相掛儀ニ御座候を、私御記録所ニ相勤罷居、委細之分ケ乍存、助右衛門へ内〻ニ而申達置候迄ニ而罷居候へハ、後年者私儀も助右衛門申上候筋ニ為致落着事之様ニ相見得可申候、然者此節御調之願私より不申上候而ハ不叶儀ニ御座候間、奉訴事ニ御座候、尤此等之趣一家中相談之上申上筈ニ御座候へ共、御記録方之儀を一家中迄ニ申聞致相談儀者不罷成儀ニ御座候故、私より申上事ニ御座候条、此旨可然様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

(元禄十四年)巳九月三日　　市來源(家年)右衛門

83の2

乍恐申上候、此節市來源右衛門より口上書を以申出候者、先年丹後局御法名ニ付伊地知助右衛門より書付を以段〻被申上候節、市來小四郎者此家嫡流ニ而御座候由被申出候得共、小四郎我家を嫡流与系申候、然共別ニ古キ系圖十巻余見合申候得(ヤ者)共、市來嫡流之儀者十一代筑前守久家嫡子忠家迄ニ而断絶仕候旨被遂披露候由、私家之儀者、八文字民部太輔廣言より十一代久家、其嫡子忠家より血筋を以代〻相續仕來候処、忠家蒙御勘氣、夫故本領被召上及迷惑申候而、以來子孫六七十年之間令蟄居、牢浪之者与成果、一身をも難隠候處ニ、日新様　貴久様御両殿様より、私六代之祖前之備前守家政之事御譜代者之儀ニ候得者、其一筋を以不便被思召上、先祖之不忠を御差捨被遊、難有御側ニ被召仕候、其時分嫡家無別儀段者無間(ヒ然カ)事故、明白ニ相知候上を以、先祖一筋殊更血筋之儀ニ候故、如本〻之嫡家ニ安堵被仰付候而、私迄六代血筋を以相續仕來候事無紛

儀ニ而候処、右申上候通伊地知助右衛門より私儀嫡家与被申出候由承候得共、我〻家之儀者廿四家抔之様ニ再撰不被仰付候得者、此方より申出候儀も無之、嫡家無別条迄ニ而罷居儀候処、此節序を以被申上候儀ハ幸ニ存候通助右衛門江も挨拶仕候、尤助右衛門極不申候とても上代より無別儀事御座候、然処此節源右衛門より被申出候ハ、私家嫡流之儀、私家を系申候由被遂披露、其上私家之儀者久家・忠家迄ニ而断絶仕候段、私方江問合も不仕、源右衛門一人之分別を以被相極候段、無案内故ニ而御座候▽㊝左様ニ御座候△へハ、源右衛門披露仕候ニ付而者如何様ニも御詮儀も可有御座哉与考申候、左候而、御座之落着候筋以後ニ被仰聞候時分何角申上候も如何奉存候故、私嫡家一筋無別儀候段前以申上置候事、委細ニ左ニ書記申候、

一市來家嫡家一筋忠家迄ニ而断絶与古キ系圖数巻ニ相見得候者㊝源右衛門より被申出候へ共、忠家と申者一人有之候、右数巻之系圖者皆写物ニ御座候、尤庶流之者共江者依懇望系圖写申候而遣申候段者不珎儀ニ御座候、左候へハ、嫡家一筋之儀者私家ニ社委細相知申候、庶子家ニ者分レ候元祖迄社大形書付候而遣事ニ御座候得者、忠家以來之儀庶流之者絶而存不申事ニ候、然者無案内故断絶与書付之上迄ニ而源右衛門存候者家筋少も不存故ニ而御座候、私系圖者右久家嫡子忠家より拙者迄無断絶血筋を以續來候得者、家之由緒家傳段〻有之候儀、庶流之者共努〻存る事ニ而無御座候、先年も私系圖為写可申旨市來勘左衛門懇望之由ニ而被申來候者、勘左衛門家之儀者家継一流ニ而、家廉二男家弘より續來候よし書付持参被申候ニ付、私系圖写遣申候、其砌勘左衛門儀者家廉二男家弘流与證文迄私より書置申候、其後市來千左衛門懇望之由ニ而源右衛門より申來候ハ、同姓勘左衛門より御方御系圖懇望ニ而写被遣候、我〻よりも懇望之由被申候ニ付、写遣申候間、勘左衛門同前ニ證文遣申候、然處ニ、至只今市來嫡流忠家迄ニ而断絶与源右衛門相極申候事ハ、毛頭家之儀不存候故申上候半与考申候、扨又右数巻之系圖ニ相替、私系圖之儀者忠家法名迄慥ニ書付召置申候、扨右忠家之儀ニ付家之為肝要家傳等委細有之儀ニ御座候、尤書面之上を以見合申候而も、忠家嫡子太郎者早世仕候へ共、二男

僧一人、女子一人之行衛私より外ニ存候者無之事ニ候、且亦忠家弟両人之末も如何様ニ罷成候共庶流之絶而不存事ニ御座候、尤系圖之儀者、題目ニ仕候嫡子之家督之外者誰〻之家ニも兄弟分レ口迄社大形相見得申事ニ候、其外之子孫之儀ハ、一所ニ罷居候とても二三代ニ成候得者分明ニ不相知候、況隔境方〻移替之時分、一門之家とても委細可存訳ニ而無御座候、此段者、御記録所御問付之砌明白ニ相極儀ニ而御座候、

一忠家事系圖ニ載不申候ニ付而者子細有之儀ニ候、忠家子共三人、弟両人有之候段、委細古系圖ニ相見得申候得共、新系圖ニ載不申候、様子ハ、忠家父久家迄者差立候間、大身ニ而市來居城ニ罷居候処ニ、　立久公御代寛正三年ニ城御攻落被成候事、早竟忠家驕故代〻之所領居城を失申候得ハ、不忠不孝之者之儀ニ御座候而、子孫も断絶可仕筈ニ而候処、私六代之祖市來備前家政事者、先祖之不忠を御差捨被遊、結構ニ被召仕候、依之備前より子孫申傳候者、御代〻市來先祖共代〻段〻難有御心を被付候、奉對主君大不忠之忠家、且又先祖對大不孝者之儀ニ候得者、後來系圖之血脉を削除可申旨備前以來代〻申傳候、然共古系圖者其節忠家兄弟其子共迄載置申候故、不及是非事共ニ候、扨又新敷系次申系圖ニ削候事者右之通代〻家傳故、先年も忠家を削候而御記録所江差出申候、

一右備前家政事者　日新公・貴久公御両殿様より市來嫡家一筋として御側江被召仕候処ニ、加世田之城攻之砌、於　御前遂戦死候、其節世悴小四郎(家朗)十一歳ニ罷成候を御前ニ被召出、御直ニ被遊御意候ハ、其方父備前事ハ大切之御用ニ相立申候得者、備前ニ被下候同前ニ小四郎江被成下候由ニ而、御腰物拜領仕候、其後備前ニ被召成、松山之地頭職被仰付、日州諸縣郡松山・福嶋・南郷之内高十三町被下、九州御出馬之刻、於肥後矢崎城遂戦死候、其子小四郎(家親)後ニ玄蕃左衛門与申者も不相替父跡松山地頭職被仰付置候処ニ、是も龍造寺隆信御誅伐之時相働、深手数ヶ所負申候而帰國仕(於)候地頭所相果申候、右玄蕃左衛門事ハ私曽祖父ニ而御座候、其子(家治)袈裟松事孤ニ罷成、十三之年　義久公江御目見仕候、其節親顔色ニ少も不相替候由難有　御意ニ而、則小四郎与名を被下、父跡職被仰付、松山之内ニ高十一町四

反余天正廿年十一月十日ニ被下候、其時之御家老町田出羽殿御判形ニ而候、右小四郎後ニ為御加増薩州川邊之郡之内高弐百石餘慶長六年三月五日ニ被下候、其時之御家老平田太郎左衞門殿・比志嶋紀伊殿・鎌田出雲殿・圖書殿御判形ニ而被成下候、右両度之目録二通于今所持仕候、

一右之通、私家之儀者、　日新公・貴久公御父子様より忠家血筋之子孫ニ而候故被召出嫡家ニ御極置被遊候而より私曽祖㊥〈父〉玄蕃左衞門迄三代者忠節一命を抛、祖父小四郎より私迄者纔三代ニ罷成、近代之儀ニ候得者、愚親平兵衞(家延)迄者直ニ見聞之前嫡家無別条事共ニ候処、此節事新敷儀共源右衞門より申上候事、至私覚外之儀と存候付、乍恐御記録所御裁許を奉願事ニ御座候、

一市來源右衞門家筋無案内之段者、近キ比迄も衣類之紋所井ケタヲ付申事諸人何れも為存事ニ御座候、然処先年私宅江源右衞門見廻ニ而被尋候者、我〻事者紋ニ井ケタヲ付申候、市來家之紋之儀者御方御付被成候紋ニ而御座候哉、無案内ニ候故御尋申入通被申候ニ付、如何ニも自分只今付申候紋ニ而候通返答仕候、夫〔より〕(㊥故)近キ比より私紋を付申候、ケ様ニ諸家共ニ題目ニ仕候家之紋さへ存知不申候得者、市來家之儀者猶以委細不存事ニ候、左候而、當時御座江相勤候故、御蔭を以方〻之写系圖を集、見合申候書付之上迄を以市來家之儀何角不知案内之儀(㊥を)者　公儀江申上事ニ候、市來家之儀者私嫡家故委細存申候、拙者より外ニ者、假何様之書付抔を所持仕候而も、面〻其家迄社為存者茂可有御座候得者、宗領一筋之儀者庶子家之者共存儀ニ而無御座候処、源右衞門事ハ最前此方之系圖を写、自夫方〻尋求集物を以于今何角与申候段、一家之市來ニ而ハ御座有間敷候、様子ハ、右分㊥〈ニ〉而家(㊥之)〻家傳少も存不申候(㊥ハ、)〔而〕、代〻宗領職之儀ニ候得者、何時▽㊥にて△も私方江相尋候ハヽ巨細ニ可申聞候処ニ、私ニ者隨分隱申候而、脇方江取掛色〻調法仕候事も、早竟家無案内故ニ而御座候、尤源右衞門事者近年私方より系圖を写遣申候得者、失念者仕間敷処、自分ニも成程能存候嫡家を差除、隱蜜を以方〻江致才覚、其上私方へ問合をも不仕、自分心之侭ニ御披露仕候段、對嫡家無礼之至、對先祖候而も不孝之働ニ御座候、依之、乍恐御繁多之砌ニ御座

候得共、屹与遂御穿鑿被下度奉願候、此等之趣を以可然様御披露奉頼候、以上、

（元禄十四年）巳十一月三日　　市來小四郎（家水）

84の1

新納家由緒

御番帳御改被仰付之由ニ御座候付、此節小番入奉願候、祖父新納三河（久徳）入道楚弓始四郎右衛門事　義久公江奉仕、冨隈江被召移新地拜領仕、慶長三年、朝鮮國江渡海軍労仕、且又小番相勉候儀無別条候ニ付而、國分衆中平田利右衛門所持仕候御番帳之写差上申候、夫より　惟新公江茂奉仕、元和八年、鹿児嶋江被召移　家久公江奉仕候而、楚弓四郎（嫡子脱カ）右衛門（忠村）事　家久公御小姓役▽㊍相勤、其已後　御代〻様江御奉公仕續、其子私事　綱久公御小姓役△幼少より相勤申候処、年長騎馬ニ而在江戸両度㊍其共前後毎〻御奉公方被仰付、當時納殿役儀ニ候得者、鹿児嶋江楚弓在宅以後代〻私世忰孫四郎（久治）ニ至相應之御奉公仕來候故、近代御番相勤可申㊍間無御座候付而、御番入不仕儀御座候間、此節奉願候通小番ニ被召入被下度奉存候、家筋之儀者嫡流之二男家ニ而、同氏孫四郎始而　御目見仕候砌御太刀進上仕置候、此等之趣被聞召達被下候様宜御継書を以奉頼候、以上、

辰五月廿七日　　新納五左衛門（久壽）印

84の2

小番
新納四郎右衛門　　三嶋小平三　　坂元孫次郎
山田民部少輔　　平田主水左衛門　　村田十次郎

右六人、始四郎右衛門三河入道楚弓相番之人数ニ而御座候間、拔書仕差上申候、以上、

辰五月廿七日

85の1

野元家由緒書

私事、亡父野元源左衛門（右カ）存生之内直嫡之儀別儀無御座候間跡目相續之儀願申上死去仕候処、先年亥九月十一日、平山次郎右衛門殿御取次ニ而願之筋ニ被仰付、誠ニ以難有次第奉存候、未継目之御礼者不申上候得共、御番之儀者被仰付被下度旨奉願候、

一佐多越後殿・本田伊賀殿・最上土佐殿・蒲池備中殿・新納大蔵殿・村田郷左衛門殿・蒲生宮内殿・本田甲斐

殿、野元源左衛門〔殿〕(ナシ)右之衆同役ニ而相勤申候儀近年之儀ニ御座候旨(間)、源右衛門(定綱)より申傳候ニ付、伊地知増也江相尋申候得者、右之衆同役ニ而相勤申候儀者別条無御座段承候、依之書付取置申候故、写差出申候、且又祖父源左衛門(為綱)嶋原戦死之一巻三原諸右衛門より之證文、亡父源左衛門(右)方江三原左衛門殿より被遣候書状写、何れも同前ニ差上申候、

一祖父野元源左衛門事、寛永十四年丑十一月、肥前嶋原一揆之砌、三原左衛門佐殿其外各嶋原江御越之節、騎馬ニ而被遣候、於彼地茂　上使板倉内膳様▽より△被召出御盃頂戴仕候時分、明朝之取合ニ可抽御奉公旨御意為有之由候、不新候得共、其約束之一筋を相勵、翌日寅正月元日取合ニ戦死仕候、〈人多中取分御盃被下候儀冥加ニ相叶候由ニ而、三原左衛門佐殿より亡父源右衛門方江御褒美之御状被下候、右状于今拙者格護仕候、先年琉球官宣之砌ニも少々之御奉公仕置候由申傳儀ニ御座候、

一亡父源右衛門事、先年長崎江騎馬ニ而御使者被仰付相勤申候、拙者事茂及五度騎馬ニ而江戸へ御奉公相勤申候、右之通段々難有被召仕相勤申候、何ぞ御奉公之功者無之、恐多申上事ニ御座候得共、右式祖父以來被召仕候故、小番ニ被召入被下度奉願候旨、子十二月申上候処、達貴聞、小番願之儀御免不被成旨被仰渡、畏奉存候、尤被　仰出候を又々申上候儀者其恐不少候得共、憚を不省雖難申上候、私家之儀者先祖以來段々忝被召仕、私代ニ至騎馬役ニ被召仕候段、別而難有奉存候、依之小番ニ被召入被下度奉存候、左候而、亡父源右衛門事、川上五兵衛為跡役御私山奉行(本ノマヽ)并御持筒御鉄砲方迄被仰付、其後納殿役被仰付、三十ヶ年之間　寛陽院様御側江ひたと被召仕候故、小番之願不申上相果申候、尤其内願申上候而拙者ニ相勤させ可申候得共、小身者故何角延引仕候処ニ、病氣差發相果申候、無是非仕合残念存候、依之拙者より願申上候、家筋之儀者御記録所ニ相知可罷居欤与奉存候、右式同役ニ而被召仕候衆并も御座候間、小番ニ被召入被下度念願奉存候条、何与そ奉願候筋ニ小番ニ被召入被下様ニ被仰付可被下儀奉願候、尤私代ニ至大番未相勤不申候間、此等之趣を以可然様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

巳二月十八日　　野元源左〔右〕(ナシ)衛門（長綱）印

85の2

御祖父野元源左衛門殿肥州於嶋原戦死之次第御尋ニ付、左ニ相記申候写、

寛永十五年正月元日肥前嶋原城責之刻、　上使板倉内膳正殿より被仰渡候者、戦場〈ニ(使)諸役者罷出儀可為無用旨被仰渡候へ共、祖父左衛門被申候者、申上様可有之事ニ候与被申罷出、内膳正殿御出を待上申候処ニ、御出ニ付申上候者、諸(使)役者罷出儀無用之由被仰渡候得共、何れも御供仕戦場見物仕度旨申上候得者、左も可有之旨為被仰由候、其刻左衛門水牛角酒筒ニ泡盛を入持せ候を被召上候半哉与被申上候得者、可然との儀ニ而候付差上候得者被召上、其御盃を野元源左衛門殿江被給たる由、家來平山助之允左衛門供仕、其場を慥ニ存候通申聞候、其後松平伊豆守殿御下着之刻、左衛門御使者被参候付、源左衛門〈殿戦死之段申上候通承傳申候、以上、

右之通承傳候間、有増私覚之侭書付進入申候、以上、

午正月十三日　　三原諸右衛門印

野元源右衛門殿

85の3

御方御祖父野元源左衛門殿儀、御奉公被成候様子私覚為申儀共候ハ〈、書付可進由承候間、如此候、拙者事若輩之砌より小番相勤、三番かへり之番ニ而御座候、毎度見申候ニ、上下着用ニ而出仕候、何役儀ニ候哉、其品不存候、右同前ニ被罷出候衆新納古大蔵殿・蒲生宮内少殿・村田郷左衛門殿・源左衛門殿抔ニ而候、右之衆於　御城如何様成御用共有之候哉、毎々何角与相談之様ニ見得申候、左候而、老躰衆最上土佐殿・佐多越後殿・本田甲斐殿・本田伊賀殿、右之衆四人抔相談有之欤与見得申候、委細之儀不存候、御親父源右衛門殿者　寛陽院様御納殿役ニ而御座候、其上ニ御鉄炮方被仰付置候故、御前御用多候而、ひたと被召出候、左候而、大磯なとへ御滞在之時者、彼方被為相詰御用被承候、殊之外御心安被召仕候儀、御前向御奉公申候衆于今存候方如何程も御座候、

右躰之儀任御尋書付進入申候、以上、

元録（禄）十二卯二月十三日　　伊地知權左〔右〕(ナシ)衛門（重昶）入〈(道)

85の4

野元源左衛門殿　　増也判

口切れ申候、

源左〔ナシ〕衛門殿事不慮ニ戦死ニ而各迷惑之段察入候、

乍去上使衆能被聞召、江戸江も被仰上候、又伊豆守殿・

左衛門殿江も委敷被仰候、然時者、御國之御為其身之

名誉不過之候、兎角一度者死するならひニ而候処ニ、

ケ様ニ　将軍様迄入　御耳儀不浅候、其上一戦之落ニ本ノ

マ、も板倉内膳殿御盃を源左衛門殿江御さし被成候、日本

國大形着合ニ余人ニ無之仕合候つる、此上之旨為可申

用一書候、恐〻謹言、

正月六日　　三原左衛門佐〔重庸〕

名乗判

86

徳永家由緒

私先祖徳永對馬事國府御時代小番相勤申、尤親善左衛

門迄小番相勤來申候、親善左衛門相果申、早速御番之

願申上筈ニ御座候処ニ、私儀横目御役被仰付相勉候付

御番不相勤候付、御番之願不申上候、横目御役御免ニ

而當分罷居候間、此節小番被仰付被下度奉存候、此等

之趣可然様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

辰二月十四日　　徳永善左衛門印

87

相良家由緒

我等儀此節初而未之日大番被仰付候、依之申上候、私

先祖共大番相勤候者無御座候処、至我等初而大御番相

勤可申儀、別而迷惑ニ奉存候付、恐をも不顧奉訴候、

此節御番於被仰付者小番ニ被召加被下度奉願候、左様

御座候〔ハヽ〕者〔ナシ〕難有奉存〔候〕隨分相勤可申候、〔ケ様〕ニ申上

候段何そ名利を存申上候儀ニ而御座なく、先祖一筋を

以奉願儀ニ御座候、就夫近代私先祖共被召仕候段左ニ

申上候、

一私祖父相良甚兵衛養祖父稲留丹後長秀入道憐松事者、

當相良新右衛門先祖之庶流ニ而、代〻首尾能御奉公仕

來候、然処憐松嫡子相良吉右衛門〔長信〕継子無之、殊更病身

ニ而御奉公方難勤罷成候付、憐松分別を以聟鎌田出雲

政近三男鎌田甚吉〔長継〕与申候を養子ニ仕候、其時分持高弐

百石餘有之候、甚吉江相渡申候、右甚吉後ニ者相良甚

兵衛与申候、甚兵衛母者憐松女、吉右衛門妹ニ而御座候故、跡職之儀血筋を以相續仕せ申候、

一甚兵衛事高麗江御供仕三年相勤、帰朝以來庄内御陣ニも始終相詰申、慶長五年　惟新様御供仕関ヶ原江罷上り、九月十五日ニ甚兵衛廿五歳ニ而主従三人於彼地戦死仕候、其節召列候者之内壱人者三年目ニ罷下候、尤毎度之出陣騎馬ニ而相勤申候、

一右甚兵衛女房者岩切三河入道女、其節懐姙ニ而、甚兵衛戦死跡ニ男子出生仕候、則私父相良舎人ニ而御座候、母養育仕居候処ニ、舎人九ツニ罷成候年　黄門様より被召出、難有御側江被召仕、夜白相勤申候、左候而、男ニ罷成初而殿中奉行ニ被召仕候、其後御普請奉行両度被仰付、初者平田民部左衛門与同役、後ニ者相良満右衛門与同役ニ而相勤申候、其後日州表代官被仰付、是も初者川越三右衛門、後ニ者猿渡喜之助同役ニ而相勤、老年ニ罷成候而御納殿役被仰付、役儀相勤候内於江戸病死仕候、跡役之儀直ニ私へ被仰付、當年迄四拾六年相勉申候、

右之通、祖父甚兵衛より私迄大御番相勤候事無之、

其間ニ父舎人御番相勉候節者、本田作左衛門・伊東九左衛門抔相番ニ而小番相勤為申由、右両人咄私直ニ承置候、尤私ニも亡父舎人御奉公仕候砌之儀慥ニ覚罷居申候、大御番抔相勤申候儀無御座候、然処ニ、至私初而大番相勤可申儀別而迷惑ニ奉存候付、奉訴候間、右家筋之儀被聞召達、當時私身上無御構、御憐愍之上先祖一筋を以奉願候通小番ニ被召加被下候ハヽ、難有奉存隨分相勤可申候条、此等之趣を以宜御申上偏奉頼候、以上、

巳二月▽㊌六日△　　相良甚左衛門印

中西家由緒書

私儀江戸ニ而今程可被召仕候間相詰可申由被仰付相勤罷在候ニ付、隠居之願申上、同名分右衛門江家督無相違被仰付、其上家ニ付進上仕來候御太刀茂無相違被仰付、難有次第奉存候、依之奉願候者、祖父長門（秀長）儀ハ格式も結構ニ被仰付、嫡子左兵衛部屋住之内父分右衛門（秀經）嫡子成、部屋住之内ニも御番帳小番ニ被召入、御狩御馬追串目奉行をも被仰付相勤申候処、　黄門様御意ニ

而御番御狩御馬追串目奉行をも御免被遊候故、御番帳
被召乗迄ニ而（本ノマヽ）、御番御狩御馬追茂父分右衛門・兄金兵（秀延）
衛・私家督之内相勤不申候、然者世忰分右衛門（秀貫）儀も御
番御狩御馬追如前〻御免被遊被下度奉願候、且又長門・
左兵衛・分右衛門・金兵衛・私五代之間、終ニ大御番
帳ニ不被召乗候間、世忰分右衛門儀も小番御帳ニ此節
被召乗置被下候様奉願候、私致隠居分右衛門江家督被
仰付候引次之節、幸罷下候ニ付、奉訴候条、此等之趣
可然様御取成奉頼候、以上、

巳六月廿二日　　中西長門（秀乗）右衛門

土持家由緒書

口上覚

乍恐申上候、私事者土持權兵衛（信全）跡職被仰付候付、元録（禄）
十丑年御番之願申上置候儀者、權兵衛御番為相勤由候
付而之事ニ御座候得共、權兵衛養父權頭（祖脱カ）、其子弾右衛（久種）
門迄御番為相勤儀ニも無御座処、權兵衛者養子ニ而、
家筋之事者不申上御番為仕ニ而も可有御座哉与頃日存
當り申候、数代之城主ニ而直ニ　御家を奉頼御國江参
候付而御取持御座候へ者、其廉者立申、御番之儀者暦
〻列ニ被遊御免、餘事之御奉公者何様成共當分之身上
相應ニ被召仕被下候者難有仕合奉存候付、此節御訴申
上候、

一代〻日向國之内領知仕、遠江守頼宣代勢多合戦之為忠
賞縣庄被下、右馬頭親成迄十代縣ニ在城仕候処、天正
五年之冬、伊東修理太夫義祐居城日州佐土原城を　義
久公被遊御攻候節、右親成御味方仕候、其砌思召之侭
ニ日州悉く御手ニ被入、其節義祐者佐土原没落ニ而豊
後ニ落行、大友宗麟を頼被申候、親成御味方申候儀を
宗麟被聞通、同六年四月、大勢相催シ親成居城ニ急被
取掛候故、士卒を勵シ粉骨を尽し防戦候得共、大軍故
防兼申、無是非仕合ニ而居城を立退申候而、大友之籏
下清田重忠者親成妻弟ニ而御座候故、重忠を頼豊後國
浦邊与申在所江参居候処ニ、又彼地へ取掛候付、其節
戦死仕候由、系圖ニ記置申候、

一右親成嫡子弾正忠豊州浦邊より長門國ニ参候而蟄居仕、
時節を以父之仇を報復可仕与存、世上之躰勢を伺申候
処ニ、　義久公より被掛　御心、薩州之ことく参上可

仕旨蜜ニ御使者を被下候付、難有奉存、早速應　貴命
御國之様ニ参上仕候得者、亡父親成忠志を被遊　御感
候由候而、則本領縣、其外門川・新名爪・塩地・御手
洗等之数ケ所を安堵被仰付、御簗下ニ罷成候、
一弾正忠縣江在城仕候節ハ、毎年歳首以使者佳札并御太
刀・御馬献上仕、御祝儀申上候、其御返札三通頂戴仕
候、
一天正七年、弾正忠弥以無別心旨誓書を　義久公江献上
仕候処ニ、　義久公よりも同年十月十三日被遊御神文
拝領仕候、於于今頂戴仕置候、
一同十二年十二月　義久公より御諱之久之御字弾正忠江
拝領仕、久綱与改号仕候、久之御字御折紙今以格護仕
候、
一同十五年殿下秀吉公西征之時、日州口之大将羽柴美濃
守殿より、御先手可仕候、左候ハヽ、本領安堵之上加
増地を可被下由、弾正忠久綱江承候得共、　御家之御
恩深〻敷候付、絶而不罷成由申切候而居城江引籠候付、
多勢を以則時ニ被取詰候故、小勢ニ而難防、同三月落
城仕、佐土原之内平等寺与申寺江忍居候、同十六年二
月十三日、弾正忠久綱奉對　義弘公無別心通之神文献
上仕候得者、　義弘公よりも同月十五日御神文被下候、
於于今頂戴仕置候、
一文禄四年、弾正忠久綱并權頭盈信父子共平等寺より被
召出、同年九月廿八日、於隅州栗野五百斛余之御知行
被仰付、其後又慶長六年四月廿五日、權頭盈信江御加
恩之地として日州諸縣郡之内於末吉五百石之御知行拝
領被仰付、両度都合高千石餘拝領仕候、右之高目録于
今格護仕置候、且又数ケ所之地頭職をも被仰付、難有
仕合奉存候、
一權兵衛者養子ニ而候得共、權頭子弾右衛門娘ニ嫁シ申、
私共出生仕候得者、權頭血筋之子孫ニ候、
一内〻御味方之志故、大友家より被攻亡候得共、又御恩
を以本領安堵仕〔故(ヵ候処)〕、不幸而城を持留不申候、御領内
江引取候得者堪忍料被下置、城主より直ニ　御家を奉
頼参候廉被相立置、私迄も家之例を以暦〻并於　御前
元服被仰付、重畳難有仕合御座候得者、御番御免之列
ニ被仰付被下候様ニ与奉願存事ニ御座候間、願之筋ニ
被仰付被下候様ニ宜御披露奉頼候、以上、

90の1

月日　　土持次郎九郎

一小番願之面〻調書二通左記之、

川上長左衛門　長谷場角太夫　本田市之助
酒匂大蔵兵衛　新納孫四郎　中神七右衛門
新納四郎兵衛　郷田源助　今井次右衛門
中西分右衛門

右十人者小番被仰付可然与考申候、

有川小源太　汾陽四郎兵衛　関七左衛門
同喜右衛門　羽田数馬　相良甚左衛門
吉留郷左衛門（廿冒）

右七人者小番不被仰付候而可然与考申候、

野元源右衛門（廿左）

右源右衛門（廿左）家筋相知れ不申候、祖父源左衛門（為綱）儀何ぞ役儀相勤為申由伊地知増也證文差出申候得共、何役儀共相知不申候、尤小番相勤為申證據ニ而も無之、家筋ニ付而小番被仰付筈ニ而者無之候、乍然源左衛門（長綱）祖父源左衛門事者嶋原一揆之節御使者相勤申、勇成戦死仕候付、上使衆能被聞召、江戸江も被仰上候、松平伊豆守殿・戸田左衛門殿▽廿へ茂△委く被仰候、然時者、御國之御為其身之名誉不過之候由、三原左衛門殿より被仰聞御状源左衛門致笥蔵、写差出候、右之武勇を以子孫小番可被仰付候哉、私共考申候も、抜群之武功有之候者之子孫者、家筋不宜候而も小番可被仰付事与存候、然共源左衛門戦死之儀者大切之場所ニ而抜群之軍功為仕者与同前ニ者難申欤与存候、乍然左衛門殿状ニ名誉之戦死与有之候得者、又御取分も可有之事の様ニ与存候、何之筋ニも私共より難究存候間、御吟味之上被仰付度事与奉存候、

徳永善左衛門

一右善左衛門亡父善左衛門代ニ小番願申出候砌、▽廿祖父△徳永對馬於國分小番相勤申候通申出、國分士是枝權兵衛證状差出申候故、御取次御用人高崎惣右衛門より蒲地四郎左衛門ニも被尋候へ者、權兵衛書面之通對馬小番相勉候儀別条無之由致返書候、寛文二年、其趣御用帳ニ被留置、善左衛門願之通小番為被仰付旨惣右衛門より之證状并右両人之状善左衛門致笥蔵、此節差出申候、然処國分御代御番星合帳有之故見合申候得者、

對馬嫡子源兵衛事大番相勉申候、是を以考申候得者、
對馬小番相勉申候〔㊐ハヽ者〕源兵衛事大番相勉申筈ニ無之候
条、權兵衛・四郎左衛門書状之趣者覚違ニ而も可有之
候哉、兎角御番帳ニ有之儀慥成事ニ御座候、尤善左衛
門家筋不相知候得㊐ハ共、大番被仰付可然与考申候、

種子嶋善左衛門

右善左衛門家筋問付申候而相考可申与仕候得共、當分
鬼界嶋へ致渡海候故、問付可申様無之候条、重而善左
衛門致上國候節問付相調可申上候、以上、
（元禄十五年）午二月廿五日　御記録所　肥後仁右衛門（盛香）

▽㊐市来源右衛門
田中五右衛門△

此節小番願之調被仰付候付相考申候処、古來小番之儀
者、為勤來家筋之者ニ而無之候得者不被仰付由候処、
近代者騎馬之御奉公さへ相勤申候得者小番ニ被召入候
（行カ）候故、無故家筋之者も子孫ニ至相勤罷居候、依之當小
番帳見合申候者相調可申様も無之候、左候得者、此節
被召入候者計家筋之調被仰付候而者、此已前無御調被
召入候（㊐者）之幸ニ罷成、其家〻を視申候而者御調之并不申
様諸人も可存与考申候、雖然當分小番相勤罷居候者を
急度被召除候儀も可難被遊儀ニ而御座候、漸〻に其家
之継目之節、又者何様之折目ニ而御正被成、此已前無
故小番被仰付置候家〻者時節を以被召除、大番ニ被召
入候筋可然欤与相考申候、且又先祖已來小番不勤來家
筋ニ而も小番可被仰付家致詮儀候趣、左ニ相記申候、
一小番不勤來家筋ニ而も、御用人・吟味御役・江戸御留
守居并京大坂蔵奉行▽㊐迄被仰付候人之子孫騎馬相勉、又
ハ奉行△職勤來人者、小番被仰付可然与考申候、
一地頭職被仰付候人之子孫をも右同断之事、乍然別而家
筋不宜者者、一代地頭被仰付候而も子孫者大番可被仰
付儀欤与考申候、
一先祖小番相勤為申儀も不相知候得共、家筋宜、近代奉
行職・騎馬之御奉公相勉、當分小番相勤申候家者、小
番被仰付可然与相考申候、
一家筋不相知者先祖致忠死、或武功有之故を以、夫より
引續騎馬御▽㊐奉公△奉行職相勤、當分小番相勤申候人
者、小番被仰付可然与相考申候、

一小番之儀者品能被召仕事ニ候得者、小番相勤來候家并右段〻之訳ニ而代〻小番相勤申候者も、致衰微奉行職・騎馬之勤も不罷成、筆筭者・附役人等之輕キ御奉公仕候時者、小番被召除可然与考申候、右之通致詮儀相調申候、乍然御納戸奉行・御兵具奉行之儀者諸奉行之内ニ而も御取訳有之御役之儀ニ候得者、右奉行職▽㋕被仰付候人之子孫引續騎馬之御奉公・奉行職△を勤來候者ニ者、小番被仰付候而者如何可有之候哉、奉伺候、此段何分与當座江不被仰渡置候得者、以後調被仰付節難致候間、御返詞被仰下度候、前方之儀者、御（何字カ不知）（㋕香）之番相勤候者之子孫、又者近代騎馬御奉公さへ相勤候得者小番ニ被召入候故、於御記録所家筋之調不被仰付候、然處ニ此節初而小番願調被仰付候（㋕付）、右之通私共江詮儀仕候間、以後小番願申出候節も相并申候様有御座度存候、無左候得者、此節相調候詮も無之筈ニ御座候間、乍推参右之趣申上置候、以上、

午二月廿五日　　御記録所

市來源右衛門（家年）
（外両人）
（㋕肥後仁右衛門
田中五右衛門）

91　諸家由緒大概

91の1　秩父十郎兵衛

右貞久公御代ニ初而伊地知弾正重隨（季カ）与申者罷下、㋕〈下〉大隅之内を領、御家老役も二代相勤申、一家之嫡流ニ而差立為申家ニ而御座候、御太刀・二種一荷進上被仰付可然与申談候、

91の2　碇山仲左衛門

右師久公御二男家ニ而、碇山を領号碇山候、勿論御太刀進上可被仰付儀与申談候、

91の3　平山伊兵衛

右嶋津豊後守季久二男平山越後守（忠康）子孫ニ而候、豊後守帖佐を領候節、平山城を領平山与名乗候、義弘公以御意右之平山家跡ニ被仰付、對馬（久清）、七兵衛（忠昭）、次郎右衛（忠知）門与連續仕候、代〻地頭被仰付、七兵衛事於王子御犬追物手組ニ被仰付候、次郎右衛門御用人役をも被仰付候、勿論御太刀進上可被仰付儀与申談候、

91の4

川上長左衛門
嫡子

右川上上野入道(久隅)意畋(慰畋カ)二男家之嫡子ニ而候、川上瀬兵衛嫡子を本家之養子ニ仕候、尤御太刀進上可被仰付儀与申談候、

91の5

新納市右衛門
嫡子

右本家新納越後守實久四男家ニ而候、新納治部少輔曽木地頭ニ而候、其孫大蔵入道一酔、市右衛門迄地頭、吟味役被仰付候間、御太刀進上可被仰付儀与申談候、

91の6

川上左京
二男

右川上将監三男家ニ而候得共、兄壱人将監家之養子ニ成候欤、又早世欤ニ而、将監家之二男家ニ罷成候、川上三河入道(忠智)肬心(肱枕カ)者　義弘公御家老ニ而候、其子左京久堅隆信を打申候而、其後筑前鳥(鷹カ)取之城ニ而戦死仕候、嫡子者御直元服被仰付候間、二男者御太刀進上被仰付可然与申談候、

91の7

長谷場源助

右家者薩摩之御家人ニ而、日州飫肥水俣北郷之弁指職ニ而鹿児嶋を傳領仕候、　元久公御代ニ居所差上候ニ付、福昌寺御建立被成候、御家御代〻御證判其外文書数通所持仕候、兵右衛門吟味役、地頭職被仰付、十郎兵衛兵具奉行被仰付候、勿論御太刀進上可被仰付儀与申談候、

但右件之内一代戦死有之欤与覚候(卆未)書定、

91の8

郷田源助

右家者頼朝公之御家人ニ而、日置を領、　忠久公依御催促禁中大番役・筑前箱崎之御番相勤、其後松浦庄早湊村等領知仕、小野太郎(家綱)与名乗候、元享(弘カ)建武之乱ニ日州ニ罷移、肝付八郎兼重家臣ニ罷成、兼重為ニ遂戦死候、何代目之孫従　龍伯様被召出、御知行八拾斛被下候、其子郷田安藝事山田新助ニ相付罷在、日州ニ而遂戦死候、上井伊勢日帳ニ相見得候、其子何某、其子源右衛門、其子三郎兵衛、其子當源助欤、御太刀進上願候へ共、一旦家臣ニ下り候家ニ而候得者、御太刀者被

仰付間敷候、乍然そのかミ暦〻ニ而一所地をも為領者候間、二種一荷進上可被仰付候与ても可有御座哉与申談候、

91の9

伊東甚兵衛

右家者木脇大炊助子孫伊東肥後家之二男家ニ而候、大炊助者　貴久公鹿児嶋より被遊御立〔退〕(ナシ)除候節御供仕候人数之内ニ而御座候、右大炊助より相見得申候木脇〔刑〕形部左衛門家之二男家ニ而候由、双方互ニ申候由ニ而候得共、系圖無之候故相究不申候、樵齋家之二男家ニ而候へ者御太刀進上仕筈ニ而無之候得共、養祖父三左衛門御用人役、地頭職被仰付、甚兵衛親半右衛門茂御太刀進上被仰付、其身も初而　御目見仕候節御太刀進上仕候得者、此節も御太刀進上可被仰付儀与申談候、

91の10

関喜右衛門

右家者相見得不申候、天正之比関主殿与申者相見得申候、喜右衛門親為兵衛先年申出候者、為兵衛初而　御目見仕候節御太刀進上仕候与覚申候、目録者火事ニ焼失仕候由申出候、其節之調ニ、近年兵具奉行役迄相勉申候、且又其身覚も右通ニ候得者、御太刀進上可被仰付儀与有之、御太刀進上被仰付候得共、此節喜右衛門江相尋候へ者、船奉行役相勤候由申出候、此節者中紙進上可被仰付儀与申談候、

91の11

伊東權角

右家者伊尻九郎〔次郎脱カ〕与申者〔ニ而候〕(より)相見得候、代〻伊作家ニ仕候与相見得申候、　貴久公鹿児嶋被遊御立除候節者、伊尻九郎・同母御供仕候儀者御記録所ニ茂相見得申候、駿河江御材木御献上船之奉行ニ而罷上り　御目見之儀者、御記録方ニ相見得不申候、其節者何某〳〵山鹿弥助抔上意ニ而被召上候、右之何某書付置候ニも、本多佐渡守殿江罷出候、佐渡守殿よりも右何某〳〵(へ)御使者被下候由、書付置候、權角先祖伊東何某儀者右之書付ニも相見得不申候、　御目見并拜領物等之儀者筋違ニ而者無御座哉、大坂落城之節兵具奉行相勉候由申出候得共、御記録方相見得不申候、其節者御兵具奉行と申候儀者無之候、弓奉行・鑓奉行・足輕抑抔申、

取違ニ而候、大坂立之節何方▽㊐より△被遊　御帰館候与書出候得共、其時ハ豊後之守江より被遊　御帰候、此段も相違ニ而候、中紙進上可被仰付候得共、　貴久公被遊御立除候節御供をも為仕儀ニ候得者、二種一荷進上可被仰付儀ニ而も可有御座候哉与申談候、

91の12

本田與兵衛
嫡子

右家者、本家本田信濃守兼親二男因幡守親何(㊐貞)二男ニ而候、本田六之助家之二男家ニ而候、琉球へ被遣候面々不断跡(㊐行)有之候処、本田伊賀(親政)・市來八左衛門律儀ニ相勤候ニ付、御褒美為被仰渡儀共有之候、甑嶋地頭被仰付候、休左衛門(親宣)事も諸所地頭、其子與兵衛(親昌)吟味役、地頭被仰付候、其子當與兵衛(親由)者初而　御目見仕候節御太刀・二種一荷進上仕候由申出候得共、其節ハ申出次第為被仰付与相見得申候、二種一荷難被仰付家ニも進上仕候家筋も有之候得共、此比者御吟味強被仰付候、與兵衛家者此節より御太刀迄を進上被仰付、二種一荷者被召留可然与申談候、

91の13

川上八郎左衛門

右より御用人役目ニ付而御太刀ニ二種一荷進上之願申出候得共、御太刀進上之儀者可被仰付儀与先比相しらべ、家筋之訳迄委細申上置候、役ニ付而与申候者、鎌田太郎右衛門・野村太郎左衛門・相良主税先年　公方様江御目見仕候訳を以御太刀・二種一荷進上被仰付候得共、此儀者格別ニ而候、八郎(久清)左衛門江者御太刀迄を進上被仰付可然与申談候、

91の14

渋谷三四郎

右家者東郷家何代目之二男白濱弾正左衛門重何一流ニ候、何代目周防重何事入來院家ニ仕候、嫡子者渋谷恕兵衛、二男重何事三四郎家ニ而候、白濱加賀重何(香カ)与申候者之女　貴久公御簾中様ニ而、　義久公・義弘公之御母堂ニ而御座候、此時加賀昵近ニ被召出候、代々地頭をも被仰付候、正保年間ニ一節組頭をも被仰付候へ共、東郷家之末々之家ニ而、且又東郷・入來院両家之家臣ニ為罷成一筋候得者、此節より二種一荷ハ被召留、御太刀迄を進上被仰付可然申談候、

91の15

相良清兵衛
嫡子

右家者相良遠江守殿家臣ニ而候、印東美作入道休意、
其子相良清兵衛(頼兄)、其子内蔵助(頼安)、其子喜平次(頼章)ニ而候、清
兵衛代ニ相良ニ罷成候、嶋津中務家久之女を　義久公
之御娘ニ被成、▽㊍内蔵助へ△御縁與被成候、此由緒ニ
而喜平次此方江被召抱候、喜平次後ニ内蔵允与申候、
右之訳ニ候得者、御太刀進上可被仰付儀与申談候、

91の16

仁礼覚之允

右系圖者仁礼親王より系申候、覚之允五代之祖宮原筑(景種)
前守、其子兵部(景次)左衛門、其子宮原左近(景晴)入道秋扇、其子
吉右衛門(景衡)早世故、三原次郎左衛門二男左近(景頼)養子ニ仕候、
代〻地頭被仰付、左近王子御犬追物射手被仰付候、覚
左衛門景治、其子覚左衛門景代両代地頭、御用人役を
も被仰付候間、御太刀進上被仰付可然与申談候、

91の17

平田五次右衛門
嫡孫

右家者瀧聞壱岐(越後カ)一筋ニ而候、平田家九代之孫平田美濃
守入道春爐昌宗より平田ニ免シ平田を名乗候、其子五(宗)
次(知)右衛門高麗江御供仕罷渡、昌原ニ而とら狩之虎二進
上之御使相勤申候、藤右衛門(宗則)地頭職、御用人役迄相勤
申候、御太刀進上可被仰付与申談候、

91の18

野村源左衛門
嫡子

右家者、野村但馬(松綱)其子備中(文綱)・但馬弟加賀(重綱)伊東家を背
御家ニ罷出候、備中ニ者志波渕(㊤洲)崎地頭被仰付候、加賀
子野村市右衛門(清綱)ニ者高江地頭被仰付候、源左衛門者右
之市右衛門一筋ニ而候、源左衛門初而　御目見仕節も
御太刀進上被仰付候得者、此節も御太刀進上可被仰付
儀与申談候、

91の19

和田平七

右家者吉田若狭右衛門家之庶流之由申候得共、一向相
見得不申候、和田何某〳〵与申迄者本家之系圖ニ相見
得申候、吉田新左衛門家之系圖ニも和田何某与申候者
相見得申候、左候得者、和田者又本家ニ立帰為申ニ而

も候半与考候、平七祖父代ニ吉田次郎兵衛▽(ヵ)より△直冬より和田何某ニ被下候文書を祖父平右衛門江可遣与為被申由平七書出候得共、庶流之和田ニ而候得者如何様平右衛門家者一類ニ而可有之与存候間(ヵ而)、(ヵ右)古文書可遣与為被申ニ而可有之候、平七より者和田之嫡流之由申候得共、其段者相見得不申候、天正之比和田丹後与申候者相見得候、其子孫平右衛門ニ而、平七親平右衛門兵具奉行迄者相勤候得共、中紙進上被仰付可然与申談候、

91の20

海江田外記
嫡子

右家者相見得不申候、天正之比、海江田主殿(綱富)与申候者山田新助ニ相付日州高城ニ罷在、足輕▽(ヵ)大将△抔相勤為申与相見得候、其孫仲左衛門吟味役、地頭迄被仰付候、其子仲左衛門兵具奉行被仰付候、御太刀進上被仰付可然与申談候、

91の21

黒葛原少右衛門　二男

右家者伊集院四代長門守忠國六男伊与守久□(ヵ俊)(俊久)流ニ而候、何之功も無之、何れ之書付ニも相見得不申候、ケ様成末〻之家迄も二男ニ御太刀進上被仰付候者丶、餘例ニ可罷成候間、中紙進上被仰付可然与申談候、

91の22

町田孫兵衛

右家者由緒申出候通相違無御座候、然共孫兵衛親龍右衛門者庄内高城衆中税所因幡子ニ而、町田家之養子ニ罷成候、買養子之儀者相見得不申候得共、龍右衛門御目見仕候節御太刀進上不被仰付候得者、買養子ニ而可有御座候、中紙進上被仰付可然与申談候、

91の23

川上益右衛門

右家者川上十郎左衛門(義久)入道道庵流ニ而候、犬追物肝要成書物可有之由ニ而加治木より被召出候得共、何そ為相替書物ニ而も無之候、益右衛門射手方之儀者不案内ニ有之候、最前御太刀進上被仰付候儀者、被召出肝要成書物をも差上、射手方をも相勉申候〔八丶〕(ヵ者)、次第ニ(ヵより)〔者〕御太刀をも進上可被仰付儀与御座候間、初者進上

91の24

被仰付候得共、射手方不案内ニ候得者、御太刀進上不被仰付筈ニ候由、新納又左衛門殿より伊地知助右衛門江為被仰聞由承候、兵庫久朗家臣ニ而被召出候得者、此節より中紙進上被仰付可然与申談候、

伊集院覚左衛門
嫡子

右家者、伊集院形部左衛門(ヰ刑)久何之女(光カ)　中納言様江被召仕、御知行六拾石被下候、其後町田伊賀久則ニ嫁候処ニ子無之候處、伊賀最前之腹之二男伊右衛門(伊集院忠饒)を養子ニ仕候而右之高相渡候、然共女性之跡相立候儀不罷成候故、形部左衛門(ヰ刑)二男ニ相立候、伊賀より引續候所より、初者覚左衛門(後意)御太刀進上被仰付候得共、今以御太刀進上可被仰付儀ニ而無之候、覚左衛門兄造酒(後富)　嫡子者御太刀進上被仰付候得共、二男者中紙進上被仰付候、覚左衛門嫡子江も中紙進上被仰付可然与申談候、

川上孫左衛門　二男
三男

91の25

右家者川上上野(久隅)入道意畝嫡子左衛門(久利)一流ニ而候、朝鮮國ニも不罷渡候故、二男家ニ而候瀬兵衛久(通脱カ)を名代として差渡候、其後庄内御陣ニも罷立候様ニと家來共迄も致諫言候得共、許容不仕徒ニ罷在候、不忠不孝之者ニ而候与意畝勘道ニ而候、孫左衛門兄彦三郎(忠利)・孫左衛門(久慶)迄者兄弟共御太刀進上被仰付候、右通之家ニ候得者、為差立家筋二男迄者御太刀進上可被仰付家ニ而候得共、右之訳ニ付而者、此節より二男者二種一荷、三男者中紙進上被仰付可然与申談候、

91の26

中神七右衛門

右家者伊集院幸侃家臣ニ而候、庄内御和談已後御家ニ被召出候、中神石見(頼周)、其子石見(頼屋)、▽(ヰ)其子内蔵允(頼増)△其子内蔵允(頼常)(安)、其養子七右衛門五代連續候、内蔵允頼地頭職、御用人役迄者被仰付候得共、家臣ニ為罷成家ニ候得者、七右衛門中紙進上被仰付可然与申談候、

右之外調之人数有之候得共、委細(ヰ之趣)　覚無之候、何進上との訳者慥ニ覚有之候故、其趣迄を左相記置候、

中紙進上可然由、　藤野休左衛門（井）（右）　川上彦四郎
丸田半左衛門　市來清十郎　平田勘左衛門（右）嫡子
亀山又兵衛　山田弥右衛門　平山作右衛門（田）
山鹿越右衛門　入田諸右衛門　長崎源助
大窪仲右衛門　蒲地休右衛門（左）　福崎新兵衛
今井（紹哲）　永山休兵衛

右人数一列之調へニ而候、合四拾弐人、田中五右衛門（国明）・肥後仁右衛門（盛香）・市來調也、
元禄十五年午二月十八日書之、

92

右之外先年調之内伊地知内蔵家筋

伊地知内蔵嫡子

右家者、伊地知弾正重隨（季カ）御家老之儀者申出之通別儀無御座候、右重隨之庶流ニ而候、小牟田と申所を領小牟田与名乗候由申出候得共、小牟田と申門を領シ小牟田与号候、伊地知喜兵衛白銀七曲ニおゐて戦死為仕与申候得共、白銀合戦之儀者何之年邪（祁）答院家与御合戦有之候、時代致相違候、七曲戦死相見得不申候、和泉（重倫）関ケ原御供仕、御知行五拾石被下候儀者、申出之通相違無之候、内蔵（重傳）兵具奉行、高江地頭迄被仰付候間、此節嫡子長五郎（重頼）御太刀進上被仰付、重而者御奉公之様子次第可被仰付由被仰聞ニ而も可有御座哉与申談候、

月日　田中五右衛門（国明）

93

一小番入之願人数御記録奉行相調申出之書付写
御番入之願申出候人数、且又御番調方より小番ニ可被召入哉之旨申出候衆も有之候間、相調可申由被仰付候付、如左相調差出申候、

93の1

一　大嶋清太夫

右清太夫江御番改方より被問付候処ニ、被申出候者、近年相應ニ被召仕、江戸ニも御使者被仰付相勤申候間御番之儀奉願事ニ而無之由ニ御座候、清太夫家筋御家四男家ニ而、家筋暦〻御座候故、先年年頭之御座配ニ被召入被下度之旨奉願候処、願之筋ニ者不被仰付、於内〻（之）御座年頭之御太刀進上被　仰付候、然者御番頭・一所衆列ニ者相并不申候、尤清太夫事小番勤來申候、

93の2

然者家筋を以御取分被遊、年頭御太刀進上品能被仰付ものニ御座候得者、此中之通ニ小頭者被仰付、御番之儀者被遊御免ニ而も可有之哉与相考申候、其通御座候〔㊇八、者〕、家筋を以年頭御太刀進上御取分被仰付候故、御番之儀者被遊御免候通被仰聞置ニ而も可有御座哉与奉存候、左様無御座候〔㊇八、者〕、自然者御番頭・一所衆并之様ニ自分ニ存罷居候而者格別ニ存候、

小番可被仰付人数

町田勘左衛門

右勘左衛門者町田源右衛門跡目ニ被　仰付、町田甲斐殿家之二男家ニ相立申、勘左衛門御番頭并之御奉公被仰付儀も毎〻有之候間、御番被仰付候而も御断可申上覚悟ニ候由、御番改方江被申出候由候得共、御番頭列ニ而者無之、當時小頭役をも相勤候得者、小番可被仰付儀与考申候、前〻小番之儀者、御家老職被為勤候衆之嫡子小番被相勤候衆も有之候、一所衆ニ而も小番被相勤候衆も有之候間、御與頭之二男・御与頭列ニ家不被召立衆者、何れも小番可被仰付儀欤与考申候、

一村田藤兵衛　　一志岐兵次郎（志岐藤左衛門二男）　一本田六左衛門
一佐多休左衛門　一児玉四郎兵衛（㊇一種子嶋伊右衛門）
一渋谷三四郎　一渋谷次郎左衛門一伊集院四郎兵衛
一大嶋孫右衛門（大嶋三左衛門嫡子）　一今井新右衛門（今井八右衛門嫡子）　一伊勢八右衛門

93の3

右八右衛門事伊勢十兵衛家之二男家ニ而御座候得者、小番被仰付筈ニ而者無之候得共、御納戸奉行、地頭職迄被仰付候間、小番可被仰付儀与考申候、

93の4

森川理右衛門

右理右衛門事渋谷半右衛門二男ニ而、町人（㊇森田）宗順養子ニ罷成身上取立申候得者、此家之儀絶而小番被仰付家ニ而無御座候、然共理右衛門事先年地頭職迄被仰付、名替之節も御太刀進上ニ而御礼被仰付候得者、大番者可難被仰付与奉存候、然者理右衛門一代之儀者右ニ付小番被仰付旨被仰渡置、子孫者大番可被仰付儀与相考申候、

93の5

一　伊集院新之允

右新之允(久建)家筋之由緒を以小番願申出候口上書之内、元祖讃岐守より其子刑部少輔忠昌迄川邊西之城ニ致居城、忠昌度〻励軍功、其子左馬助久景事　忠昌公御代過分之人数被召預、於諸所軍労仕、其直孫刑部少輔久慶菱刈御退治之刻市山之城主被仰付、大勢御預被成、西原川涯ニ而主従五人戦死仕候、其節平田加賀・市來備後茂馳來戦死仕候由申出候得共、右之段〻當座江相知不申候、人数抔被召預候者其趣書付等ニも相見得可申与存候へ共、無其儀候、右刑部少輔久慶於菱刈遂戦死候趣者　貴久公御譜之内有之候得共、新之丞申出候ニ者相違ニ而御座候、永録(禄)十年十二月廿九日、市山之守兵等到大口城下、敵之隙を伺候処ニ、凶徒一千餘致發出候故、市來備後守・平田加賀守・伊集院刑部少輔西原川涯を不去、尽粉骨致防戦候得共、敵多勢故三輩共ニ致戦死候与有之候、然者久慶事人数被召預市山城主為被仰付儀ニ而者無之、備後守・加賀守同前之市山城守兵ニ而候、尤戦死之色も三人同前ニ相見得申候、其外右口上書之内相違之事も御座候、新之丞曽祖父伊集院刑部少輔久光大姶良地頭職被仰付、其子刑部(久武)左衛門入道龍好於國分　龍伯様御代小番相勤為申由申出候得共、大姶良者其比伊集院幸侃領内ニ而御座候半与考申候、然者従　公儀地頭被仰付筈ニ而無御座候、此段不審候、扨又右刑部左衛門事小番為相勤由申出候得共、　龍伯様國分ニ被成御座候節之大番帳ニ、刑部左衛門大番相勤申候儀相見得申候、左候而、新之丞父仁左衛門(久敬)者長崎氏より右刑部左衛門養子ニ罷成、國分士ニ而罷居候処、新之允事〔國分〕(ヤナシ)被召出候得者、大番被仰付候而も申分者有之間敷欤と存候、然共新之允家之元祖讃岐守忠照者、伊集院家五代之家督大隅守久氏他腹之長男ニ而、暦〻之家筋ニ而御座候、忠照嫡孫刑部少輔久盈者忠昌公御代御犬追物御手組ニも被召入、　忠昌公正宮御社参之騎馬御供暦〻之内ニも有之候、其子刑部少輔忠慶(久カ)於菱刈遂戦死候、右家筋之由緒ニ而、新之允事御目見仕候節も御太刀進上被遊御免候上者、小番被仰付ニ而も可有之哉与考申候、

93の6

一　伊勢弥三郎

93の7

一

右弥三郎先祖筑前國江罷居、伊勢上野介与申者細川幽齋老より　龍伯様江御頼之故を以初而御當地ニ罷出、知行五百斛被宛行候、右上野介男子無御座候付、有川助兵衛子養子ニ仕、伊勢右京（貞則）与申候而、郡山地頭職被仰付候、右京嫡子弥三郎、其子權四郎早世仕、弟當弥三郎ニ而御座候、上野介以上之儀者不分明候得共、右京事地頭職被仰付、其子孫ニ而御座候得者、小番ニ可被召入事与存申候、然共弥三郎事別而少身者ニ而御座候得者、以後筆筭者・附役人等其外輕キ御奉公相勤儀ニ候ハヽ、小番者成合不申筈御座候間、大番可被仰付儀与奉存候、此等之段者御考之上、右躰之輕キ御奉公不被仰付筈候ハヽ、小番被仰付可然与考申候、

右拾六人者小番被仰付可然欤与考申候、乍然右之内難究人者其趣相記申候間、御詮儀之上被仰付度奉存候、

大番被仰付候人数

三原九兵衛

右九兵衛先祖三原飛彈守重長与申者　龍伯様御代牛根地頭職為被仰付由申出候、地頭職被仰付候儀無別条候（ヤ）ハヽ〔者〕、小番可被仰付家ニ而候得共、右地頭之儀當座へ相知不申候、九兵衛家傳計ニ而證據無御座候間、大番被仰付可然与考申候、若地頭相勉候儀以後相知申候（ヤ）ハヽ〔者〕、其節者小番被仰付度奉存候、

93の8

一

川上益右衛門

右益右（久武）衛門事川上道安一筋ニ而、亡父助右（久福）衛門并益右衛門始而　御目見仕候時も御太刀進上仕、助右衛門小番相勤申候間、小番被仰付被下度旨申出候得共、相考申候ハ、益右衛門家者川上家五代之家督上野介兼久五男十郎左衛門義久入道道安長子又十郎康久一流ニ而御座候、康久事長男ニ而御座候得共故有之、義久家者三男武蔵守受久致相續候故、康久流者道安家之庶流ニ而御座候、康久嫡子越前守明久牢人ニ罷成、其子左衛門忠安迄者渋谷家ニ為罷居与相見得申候、左衛門子益右（有久）衛門　義久（ヤ弘）公ニ奉仕、子孫直ニ加治木ニ罷居、兵庫忠朗家臣ニ罷成候処ニ、當益右衛門祖父代ニ御直士ニ被召出候、左候而、助右衛門并益右衛門始而　御目見之

節御太刀進上被仰付候儀者、祖父助右衛門(久清)事御犬追物方ニ付被召出候間、御犬追物御手組ニ於被召入者御太刀進上可被仰付儀与有之、御免為有之事ニ候、然処ニ、御犬追物御手組ニ被召入筈ニ而者無之由、▽㊥其後△新納又左衛門殿より先役伊地知助右衛門ニ被仰聞候故、然者御太刀進上被仰付家ニ而無之候間、御太刀御免不被遊筋ニ、去〻年右益右衛門家督之御礼進上物調被仰付候節、委細申上置候、御番之儀も右同断御座候間、大番被仰付可然与相考申候、

一相良休右衛門　一新納平右衛門　一阿多太仲
一田中吉左衛門　一冨山傳内左衛門　一黒田勘左衛門
一法亢三左衛門　一河野造酒允　一諏訪半右衛門
一町田權右衛門

右拾二人者大番被仰付可然欤与相考申候、右小番入調被仰渡候付、右之通相調差出申候、小番入調之儀、私共致詮儀候趣委細之覚書去年二月差出申奉窺置候へ共、于今何分共當座江不被仰渡候、然者此節之調も右奉窺置候詮儀之趣を以相調差出申候間、此上御詮儀次第ニ

94

被仰付度奉存候、以上、
(元禄十六年)未四月廿七日　御記録所
市來源右衛門(家年)
肥後仁右衛門(盛香)

元禄十三庚辰年頭御座配

二日

御
佐多豊前殿　嶋津圖書　嶋津中務
※2 嶋津勘解由殿　※3 嶋津助之允　新納美作
喜入安房〔殿〕(㊥ナシ)　種子嶋蔵人　肝付主殿
一行ニ着座、

三日

御
※4 嶋津又七　※5 伊集院源助　頴娃左京
嶋津兵庫殿　※6 樺山助太郎

御
※7 嶋津圖書　※8 嶋津主計　諏訪舎人
※9 嶋津又四郎殿　※10 嶋津筑後殿　※11 祢寢徳慈丸殿

御
※12 佐多豊前殿　※13 嶋津新八　▽㊥入来院主馬△
※14 嶋津石見　※15 桂太郎兵衛

御
※16新納美作　北郷作左衛門　川田長右衛門
川上上野　喜入安房殿　比志嶋孫太郎
（㊥ナシ）〔入来院主馬〕
※17

御
嶋津勘解由殿　大野隼人
※18嶋津内膳　町田助太夫　肝付帯刀

御
嶋津矢市郎　嶋津主水
嶋津助之丞　吉利治部　菱刈孫兵衛

※1（㊥行間）
『例年元日ニ而候得共、此節ハ　思召之程も有之候付、二日被仰付由被仰出候』

※2（㊥行間）
『在江戸ニ付進上無之』

※3（㊥行間）
『上ニ同し』

※4（㊥行間）
『嶋津圖書・嶋津内膳と三年代り』

※5（㊥行間）
『病気ニ付納太刀』

※6（㊥行間）
『家督御礼無之候得共、此程より着座故書載』

※7（㊥行間）
『嶋津内膳・嶋津又七と三年代り、御家老之座ニ而上ル』

※8（㊥行間）
『嶋津新八と隔年、但在江戸ニ付進上無之』

※9（㊥行間）
『若年寄ニ而納太刀』

※10（㊥行間）
『病気ニ付嫡子権十郎着座』

※11（㊥行間）
『幼少江戸ニテ御介抱故進上無之』

※12（㊥行間）
『三年ニ一度新納家此座ニテ御礼、但御城代々座ニテ上ル』

※13（㊥行間）
『嶋津主計ト隔年、但在江戸故進上無之』

※14（㊥行間）
『部屋住ニテ候へ共、依願着座』

※15（㊥行間）
『新納家三番座ノトキハ申分、表立候御奉公ハ依願宇右ヱ門殿着座』

※16（㊥行間）
『嶌津助之允ト隔年、但在江戸ニテ進上無之』

※17（㊥行間）
『御家老ノ座ニテ上ル』

※18（㊥行間）
『嶋津圖書・嶋津又七と三年代り』

右終而、
川上式部　新納刑部　山田新助

右三人持参太刀ニ而一人ツヽ、御礼、着座者無之、御流頂戴、

諸地頭次第不同、

志岐藤左衞門　田尻金右衞門　▽(ヰ)『在江戸ニ而進上無之』△　中西長門右衞門

右引次、

山田七郎右衞門　御目見迄ニ而御太刀進上無之、

内之御座配（御下屋敷ニ而者内之御座敷無之ニ付、右何れも御礼相濟候而より御内座ニ而内之御座之御規式、）

御

嶋津頼母殿　嶋津織部　阿多淡路殿　伊勢弥九郎

嶋津大蔵殿　嶋津備中殿　伊集院将監　鎌田隼人

右終而、

大島清太夫（右持参太刀ニ而御礼、着座者無之、御流頂載、）

四日

▽(ヰ)御△　種子嶋弾正

一所列之御座配被相定候年間御記録所ニ承候処、肥後仁右衞門信　・市來源右衞門家年返答、右之御座配相初候年間書付等も有之哉、未不見當候、〔就而〕(ヰ然与)者覚も無之由候間、信安覚之趣申達候者、　家久公御逝去少前方嶋津下野久元・伊勢兵部貞昌抔(ヰ専与)吟味有之相究り為被仰渡由候、寛永九年・十年・十一年之間欤与承覚候様ニ有之候由相達候得共、信　・家年よりも信安覚之通寛永十年欤十一年欤之間ニ而有之候半与此方ニ而も相考候得共、書付等不見當候得者、究而者難申候由返答ニ而候、始者少人数ニ而候、段々ニ相重為申由ニ候事、

○志岐・田尻両家年頭之御太刀進上之儀も、寛永之始一所列之御座配相始り候以後、自分之依願御太刀進上被仰付候(ヰ由)者、是も年間不相知候、乍然其家々ニ者書留等も可有之候哉、田尻家ニ者書付無之由候、家傳之趣者、當田尻金右衞門(ヰ脱文)種祖父田尻嘉兵衞(統脱カ)種幼稚之刻御家ニ罷出候、御知行百五拾斛被下候、一所之地をも可被下候処、少知を被下候間、其段申出候様ニ与有之候得共、隆信を御討被成被下候御高恩有之候上者、御知行之訴訟申上間敷由申達置候、其後御知行一倍百五拾石相増、合三百石ニ被召成被下候、右之訳を以年頭御太刀進上之儀奉願進上仕來候由承置候、志岐家之儀者何様之訳ニ候哉、重而可相考候事、

○川上式部家筋ニ年頭御太刀進上之儀者　光久公御代ニ

相究候由、年間之儀不承候、新納刑部家ニも近年より年首之御太刀進上被仰付候、是者右之式部家之例を以刑部家より願有之為被仰付由候、委細之儀者此一冊之内ニ記置候、刑部家ニ被仰付候年間不承候事、

○志布志之住人山田七郎右衛門年頭ニ罷出御太刀進上之儀者無之、　御目見迄を被仰付候、　綱貴公御家督追付已後為被仰付儀ニ候事、但七郎右衛門自分之願者無之由候事、

○大嶋清太夫内之御座ニ而年頭之御太刀進上之儀者、綱貴公御家督以後　久豊公御四男家且又大口一所領其外ニも諸所領候由旁之申立ニ而年首之御座配願被申出候得共、其段者不相達、右之通御太刀進上被仰付候事、

○山田市郎兵衛年頭御太刀進上之儀者、元禄十一寅年依願翌卯正月より御太刀進上被仰付候、委細者此一冊之内有之候事、

○一所衆列之儀者数ケ所領候も有之候、一所一圓領候も有之候、又一所之内一名を領候も有之候、今以佐司宮之城内ナリ、・新城鹿屋之内・伊牟田大村之内も一所之地ニ相立候、前代よりも河上鹿児嶋名之内・石谷伊集院之内・中津川踊之内・河田郡山之内も一所ニ〔㊀ナシ〕〔地〕相立候儀有之候、此外其所〔㊀之一名〕〔ヽ〕一所ニ相立候諸所数多有之候、尤身躰之多少与申物ニ而、一列ニ別而之差別者有之間敷候、

○右之御座配被相立候儀ニ付而者色〻申説も有之候得共、究而之儀不相知由ニ而候、田中五右衛門國明・信　・家年ニも相尋候へ共、然与之覚無之候哉、究而之返答無之候、信安承覚候趣者、　御家ニ差立候御分されし之御一門方并御氏族、他家之一所列之面〻を被相撰候、其内ニも一旦御敵對被仕候家も有之候得共、先非を改却而尽忠儀候家筋其立帰様之趣次第ニ御取持有之、右之列ニ被召加、年首ニ屹与被召出、御座配之御寄合有之候、何程暦〻▽㊀ニ而△忠節も有之一所をも相領候御譜代筋目ニ而も、其折節小身躰之人者右之御座配ニも不被召入候、又者御敵對以後先非改様之趣ニより不被召加家も有之候、又者、身躰も差而不相衰候得共、小名を領候面〻者時〻仕合ニより右之一列ニ不被召加も有之与相見得候、必一所列迄之御座配与申ニ而者無之候、就中當時者一所列ニ而無之衆御座配ニ被召出候面〻多〻有之候、是を一所列之御座配共唱申候事、

○川上・川田・月野志布志之内・大野田布施之内・吉利前代者伊集院之内ノ内ノ一名・中津川・石谷抔者其所之一名ニ而候得共、一所一圓ニ者相替、一所列之内与者難申事候得共、其在名之号を立候得者、其家〻より者一所之申立有之、一所列ニ為被召入欤与相見得候、今以宮之城附佐司、鹿屋附新城、大村附薗牟田与有之候得者、是も屹与一所ニ為相立与申ニ而者無之候得共、諸地頭帳ニも私領(ヤ)被相立有之候得者、外之知行所与者相替申候、石谷之儀者右之帳内ニも不相見得候、前代之一所者大方一名二名相領、其内城地を拵、其所ニ致居住候、是皆一所列与唱為申由候事、

○御座配之儀者前代ニも為有之与申説も候得共、可為相違候、古キ書付等ニも不相見得由候、専上井覚兼日帳ニ者可被書載儀ニ候得共、是も不相見得候、若年首ニ差立候面〻迄を被召出、御流等被下儀共有之、何ぞ之端書ニ相見得候儀も候哉、夫迚も屹与列ニ為罷成儀ニ而者無之候哉、只今之御座配ハ寛永年中為相初(ヤ)候者相究候事、

95

比志嶋宮内少輔御仕置被仰付砌被仰出候御書付写

覚

少年之時従　太閤公家督之儀被仰出、高麗江相渡、萬事無案内之処、　龍伯様・惟新様被仰談、伊集院下野入道抱節・鎌田出雲守・比志嶋紀伊(國貞)守を被相付、朝夕側をはなれす、内外共可然様ニ精を入、就中、伊集院右衛門入道幸侃誇威勢國を傾むといたし候を右三人見及、　龍伯公・惟新公江奉得　御内意、諸人幸侃江心を合せ候ハん様ニ与回計策、高麗より帰朝已來國之仕置等念を入、別而石田治部少輔乱剰已後(本ノマヽ)國家あやうく成行候時も抽忠節、道をたゝしく相守候故、國家無吴儀安全、當家之中興誠ニ其功不可勝計也、因茲、比志嶋宮内少輔(國隆)事前かた不相馴、心中之邪正雖不知、紀伊守跡を重んし家老役申付候処、無知無能にして背旧政守新(ヤ専)儀、我志之所之にまかせ、畜金銀、愛酒女、且又内者殺害等を輕し、無道之驕有之候間、諸人見せしめのため種子嶋江令流罪、命を助置候得共、生れ付不神妙之間、我悪を悔、分別を改、重而可抽奉公志者無之、還而催悪黨讎をいたすへき志連〻顕然候間、令行死罪

候、自此方義理者不違候処、右之悪心故天罰不遁事、
一山田越前(有信)入道理安事、先年大友家催六ケ國之軍兵日州表江取掛候処、為高城之主頭連〻城を可持覚悟有之候故、初叔父中務少輔暦〻致籠城於彼地支留、　龍伯公・惟新公其外薩隅日三州之人衆不残指合安否之合戦有之候而、被得勝利全并三州、加之、九州大形雖屬幕下、太閤公天下之大軍を引卒し給ひ、日向・肥後両口より抑入せられ候処、又於高城相支、彼地ニ而和睦成候、然処、肥後表者出水より早〻使を出、義虎　太閤公江被申入、何之子細茂なく川内迄抑入せられ無正躰候故、龍伯公被成落髪　太閤公御陣江　御参候而當家相續候、それより以來理安事　龍伯公御家老役被仰付、別而被召仕候事、
一三原遠江(重秋)入道昌安事、抽奉公依為義士御家老役を被仰付由、古來之衆物語委(伊)聞傳候、不幸にして子孫断絶之故、其跡を同名備中(重種)守令相續候間、近年家老役申付候事、

以上、

十二月晦日

96

一本田刑部少輔永禄十一年ノ比より天正年間相見得候、何某先祖ニ而候哉、御記録所江相尋候返答、

天正十三四年迄本田刑部少輔専相見得申候得共、本田家系圖相見得不申候、我〻考ニ者、本田六右衛門正親或親正始之名ニ而も可有之哉与存候、左様之書付も為有之様ニ覚申候得共、見出不申候、重而證書見出候節可申進候由、市來家年返答書ニ有之候事、

閏八月十七日

市來家年返書

御書付拝見仕候、

97

一上井次郎左衛門秀秋入道傳齋者伊勢覚兼親父武蔵守董兼▽(伊)二男△ニ而御座候処ニ、(ママ)祖叔父三河守親秋養嗣ニ被罷成候、天正年間　惟新様御家老被仰付、小林地頭ニ而候、其子甚五郎里兼、後次郎左衛門、是も同御家老被相勤、小林地頭ニ而候、傳齋事天正六年之書付ニ御家老与相見得申候、覚兼日記ニ御役被仰付候事委相見得不申候得共、急ニ(伊者)其難見合御座候故、如此御座候、

一鮫嶋双月事(宗豊)　日新様御家老ニ而御座候、是も(ヵ)傳齋同役ニ而者無御座候、天正六年之書付ニ田布施地頭与相見得申候、其節者御役ニ者無之与相見得申候、

一南郷城主桑波田孫六者讃岐守景元之子ニ而候儀、相知不申候、景元・孫六子孫并鳥取播州子孫相知不申候、

任御尋麁筆如此御座候、以上、

五月廿六日　　市來源右衛門(家年)

猿　喜右衛門様

98

伊集院下野入道抱節・同肥前入道元巣由緒相尋候返〔書〕(ヵナシ)答書左記之、

一(ヵ今)給黎長門守久俊之二男筋伊集院下野守▽(ヵ)久道△入道魯笑御家老ニ而無之候、其子下野守久治入道抱節者龍伯様より中納言様迄之御家老、魯笑時代之儀者右之趣を以御考可被成候、

一右長門守久俊三男筋伊集院久治(春カ)入道元巣永禄年間より惟新様御家老、何比迄被相勤候哉、究而相見得不申候、慶長十六年迄者存生与相見得申候、尤朝鮮江も七年在陣候、

右任御尋如此御座候、昨日御返事可申上処ニ、無據隙入故御座退出仕候ニ付、不能其儀候、一昨夕之御礼被仰聞、却而痛入奉存候、一夕市來源右衛門申談御咄ニ可罷出候、尤不及御報候、以上、

二月十一日　　肥後仁(盛香)右衛門

猿渡喜右衛門(信安)様

99

校名帳并目安　御一状之訳(見脱カ)相尋候市來家年返答書写貴札忝致拝見候、御勇健ニ御勤被成(ヵ遊)、珎重奉存候、御尋之儀略左ニ相記申候、御存之通之私ニ而、同役も今日者無據儀有之〔候故〕(ヵ御暇)被仕候故、究而故実之儀難申上候、相違之所者御用捨所仰候、

一校名注文者於御方致忠節候人数　　何某

致御敵候交名　　何某

或者何月何日於何方致合戦手負交名注文　　何某

何かし刀疵　　何かし矢疵
何かし　　何かし
或者一族交名注文
何かし　　何かし
右之通有之、月日有之も御座候、無之も御座候、其人名を連名ニ書注申候を交名注文与存候、
一御一見状与申候者
目安
何某去何月何日於何所屬何某殿御手、散々致合戦、一族或者郎従何某致討死、或被疵候早、御大将或者何某迄(ゆ被)遂御見知候上者、早賜御一見状、為備後代之亀鑑、粗言上如件、
何年号何月何日
一見了判
承了判
右之通ニ大形有之候を御一見状与申候、其人より之目安ニ一見判有之事ニ而候、目安与口ニ書不申も有之候、
乍早晩取込麁筆御免可被下候、任無御隔心、然与存知不申儀ニ候得共申上候、以上、
四月廿三日　　市來源右衛門(家年)
猿(ゆ「渡」)喜右衛門様

100

二禮景代系圖之覚之侭

一仁礼親王之子孫三州下向シテ、嫡家者別府与号ス、別府庶流二男中嶋、三男唐房、此両家相分れ候、別府弟ニ宮原家相分れ候、宮原元祖景治より覚左衛門景代迄者十六代ニ而候、宮原家之二男益山、三男加世田与相分れ候事、
一元祖宮原景治より八代之孫筑前守景益者友久江奉仕候与有之候、此外元祖より八代迄ハ何様之腰書も無之候事、
一八代右景益弟ニ越中景何与申者薩州家ニ致隨身、其子(ゆ之代ニ)〔代々〕日新公江被罷出候由腰書有之候事、
一九代右景益嫡子太郎左衛門景次与有之候、何様之腰書も無之候事、
一十代右景次嫡子宮原筑前守景種、始兵庫頭、永正十二年ノ誕生ニ而候事、

一天文年間　貴久公凶徒御退治之節、景種抽戦功候事、
○永録(禄)十二年、於大口又七郎家久公(後中務太輔家久)相議新納武蔵守忠元・肝付弾正忠兼寛、戸神ヶ尾ニ伏兵を置、此時景種大野駿河守忠宗与伏兵之将として抽戦功候事、
○天正四年、伊東家数ヶ所抑領之地を御攻取被成候、於高原ニ御合戦之節抽戦功、須木之地頭被仰付候由相見得候事、但何そ差立候様子ニ者不相見得、抽戦功与計有之候、
○天正九年、肥州芦北之郡御合戦抜軍功、其後九州六ヶ國御攻取被成候節抽戦功候ニ付、佐敷之地頭を被下候由段〻有之候、是も何そ差立候訳ニ而者無之、何方之合戦ニ抽戦功与申趣迄有之候事、
○天正十五年四月、肥後隈之庄ニ而戦死、年七十三歳与有之候事、
○諸所之地頭被仰付候、須木・佐賀谷・隈之庄、此外今二三所者地頭所書付有之候事、
一景種(十一代)嫡子兵部左衛門尉景次、天正十四年七月於平出水ニ戦死与有之候外別ニ腰書無之候事、
一兵部(十二代)左衛門尉景次嫡子左近将監入道秋扇景晴、天正六年、於(岩屋)(カ)城抽戦功蒙疵、同十四年、於岩屋抽戦功与有之候、是も何そ差立候様ニ而者無之候、諸所地頭職被仰付候与相見得候事、
一十三代景晴子吉右衛門尉景衡(初平太)(吉)、元和四年、柏原左近将監与道之嶋検地奉行被仰付渡海、帰帆之節破船ニ而死去、三十六歳与有之候事、
一景衡(十四代)養子左近景頼(実ハ三原次郎左衛門重嫡子ニ而候)慶長十年誕生、御國元ニ而御犬追物射手一度、合四度被相勤候儀相見得候、島原ニも被罷立鑓を被合候、長嶋・高尾野地頭被仰付候与有之事、
一景頼(十五代)嫡子太郎兵衛景治、後ニ覚左衛門、寛永二年誕生、諸所地頭職、御用人役被仰付候事、
一景治(十六代)嫡子覚左衛門景代(始平吉)、諸所地頭職、御用人役被仰付候事、
○元祖より太郎左衛門景次迄者九代ニ而候、此九代之間ニ何そ腰書も無之候、元祖之腰書ニも宮原与号スト計有之、何方を拝領トモ無之候、太郎左衛門嫡子筑前守景種より相見得候、就中景種一代御取分戦功為有之与相見得候事、

○地頭者景種・其孫景晴・其孫景頼・其子景治・其子景代迄五代為被仰付与相見得候、景種より景代迄者七代ニ而候得共、其内兵部左衛門景次・吉右衛門景衡、此両代者地頭無之候事、

○戦死者景種・其子兵部左衛門景次両度ニ而候、戦功之趣相見得候者、右之景種・景次・同子景治（頼カ）、此三代ニ（晴カ）而候、景頼も於嶋原鑓を合候得共、戦功与申程之儀与者難申候事、

右終ル、

▽㊐

101 一秩父家系圖

- 重能
  - 重忠　二郎　長寛二年誕生、元久二年廿二日被打、歳四十二、文治二年ニ八年二十三也、
    - 重保六良　父同日被打、
    - 重秀小次郎　父同日打死、廿三才、壽永二年誕生、文治二年ニ八四才也、
      - 太夫阿闍梨重慶　建暦三年九月二十六日被打、
  - 重清長野六年
  - 重宗六郎

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

102 一比企家系圖大概

- 掃部允
  - 右衛門尉能員　實ハ比企尼ノ甥ニテ猶子也、始藤四郎　判官　渋谷刑部丞女　妻ハ武蔵国比企郡ニ居住、母比企尼ト号ス、頼朝公ノ御乳母也、
    - 女子丹後局　忠久公御母堂
    - 女子川越太郎重頼妻
      - 女子頼家公ノ御乳母　義経公御妻
        - 女子伊豆右ヱ門尉妻
    - 女子
  - 女子頼家公御臺所
  - 比企三郎　此比企氏分レ不相知、可考、
    - 同四郎時員
      - 同弥次郎
    - 同五郎
  - 河原田次郎猶子
  - 女子三人　笠原十郎左ヱ門妻　中山五郎為重妻　糟屋藤太兵衛尉有季妻
  - 男子　二歳早世
  - 比企弥三郎　此弥三郎弥次郎ハ兄弟乎、
  - 比企藤内朝宗　此朝宗何レノ分レニテ候哉、

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

103 一佐多家系圖　但祢寢家之内之佐多也、

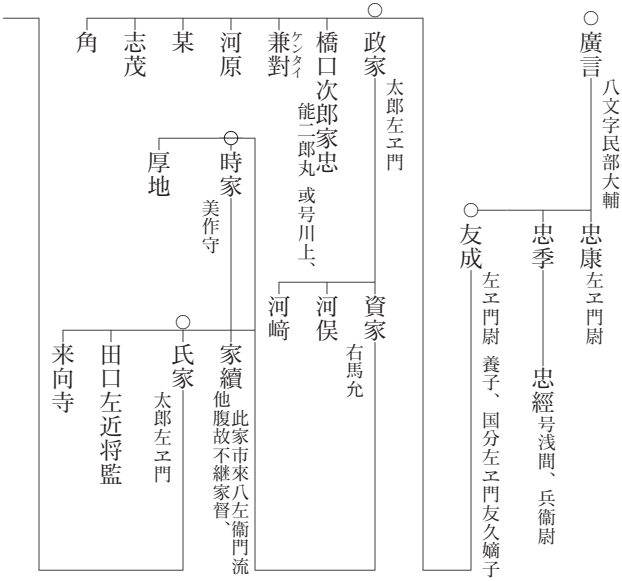
- 頼親　天永三年七月十八日死去、
  - 親助　小太夫
    - 親清　権太夫
      - 親音　新太夫
  - 親秀建二郎
  - 親時

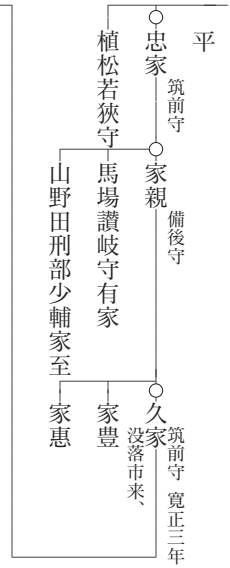
右系圖之儀者、祢寢家小松氏嫡流ニ而無之と丿趣川野通古相考、貞享四丁卯年六月九日右由緒書之端ニ押札被仕置候、此抑札与右之系圖為可見合記置也、

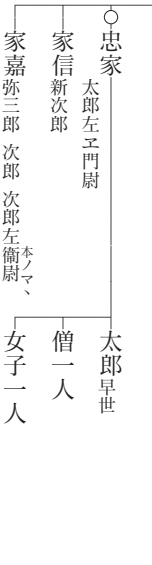
（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

104

一市来家系圖



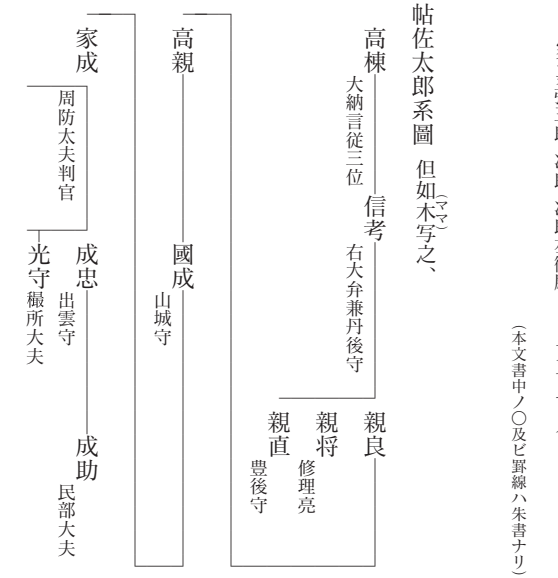




（本文書中ノ○及ビ罫線ハ朱書ナリ）

105

一帖佐太郎系圖　但如木写之、



106

一泰衡系圖

- 阿多平四郎
- 友清
  - 良西（肥後坊）
    - 信宗（帖佐太郎）
      - 宗光（平左近）

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

- 荒川太郎武則
  - 武具（貞カ）
    - 基衡（妻ハ鳥海三郎宗住女（任カ））
      - 秀衡（文治三年十月十九日卒、）
- 國衡西城戸太郎
- 泰衡文治五年九月三日死ス、母ハ民部大輔基成女、　万壽
- 忠衡
- 隆衡

107

一祢寢家系圖

- 樋爪大郎
  - 同五郎季衡
    - 新田冠者俊衡
      - 河北冠者忠衡
- 冠者師衡
- 次郎義衡

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

108

一梶原家系圖但東鑑ヲ以考之、

- 清盛
  - 基盛
    - 重盛
      - 惟盛（元暦元年廿七才ニテ入水、）
        - 六代（建仁三年卅才ニテ行西）
          - 清重（建仁三年給祢寢南俣院号祢占郡司、入道シテ清重法師、）
            - 清忠
            - 清綱
      - 資盛
        - 實盛
          - 國盛
            - 時盛（建武三年五月廿七日道鑑公ヨリ野上田伊与坊ト御文書被下之、）
    - 宗盛（平田氏ハ宗盛ノ孫ト有之候得共、實ハ帖佐ノ郷ノ地頭肥後房良西之孫ニ相究リ候由、）
      - 宗實（野邊氏ハ此宗實子孫ト系圖ニ有之候得共、又武蔵七党之内山横党ニテ小野姓ニテ候證書慥ニ有之候、此宗實子孫ニテ無之候、）

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

- 太郎景長
  - 景時（平三）（正治二年正月□（廿）日打死、）
    - 景季（源太左衛門　父同所打死、卅五才、）
      - 家茂（兵衛太郎　承元三年五月廿八日土屋三郎遠兼ニ被打、）
    - 景茂（三郎兵衛三十四才、　同、）
    - 景國（六郎　同、）
    - 景宗（七郎　同、）
  - 朝景（刑部丞景時ニ出ル、建暦三年五月二日打死、）
    - 景高
      - 萩野次郎景貞
      - 萩野三郎景綱
- 三郎景盛
- 次郎景衡（此四人兄弟ニテ候哉、如何分レ口不相知候、）
- 六郎朝景同時之謀叛（建暦三年五月二日和田義盛）

七郎景氏
- 景貞　俣野五郎　兵衛尉　刑部左ヱ門尉　建久三年十一月廿九日将軍家永福寺供養御参詣供奉之列ニ有、
- 景則八郎　同、
- 景連九郎　同、

梶原太郎　此両人兄弟ニテ候哉、其分ケ不相知候、
同小次郎

建暦二年正月二日
梶原右衛門尉景俊

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

田部姓土持氏系圖

按夫、田部姓土持氏者其先人皇第十九反正天皇之餘胤、而世々領日州縣三城塩見・門川・日知屋等也、之際家葉繁茂矣、我高祖伊豆守政綱亦其氏族也、曽仕於薩隅日三州之府君修理太夫勝久公被補家老職、内苦政年、外勞軍務不遑枚擧、然一朝有故政綱自殺、嫡子若狭守幼為孤、家風從是大衰、若狭守漸及長、只其知為土持氏、更不詳家系所自出、今我為其後欲稿家譜、而不能奈之何、雖然若今緩之、則後之見今者、復如今之見昔也、因政綱以来粗記一軸、以傳子孫無窮、希有孝孫之通古知今者削愆尋源、惟時元禄辛未歳春三月穀旦、小孫守綱謹誌、至祝至禱、

政綱　土持伊豆守　法名弓伴

○政綱仕於　太守勝久公、而被補家老職、数励忠志矣、

○大永年間凶徒蜂起、薩隅日大乱、　太守公不能治罰之、　太守之權威将衰矣、茲　嶋津相模守忠良入道日新公者　太守之宗族也、為其人寛仁大度、而以文懐衆、以武挫敵、其嫡子　虎壽公亦頴悟超人、以故　太守公欲以　虎壽公為養子讓守護職使日新公輔佐國家矣、大永六年丙戌十一月十二日、使政綱及村田越前守武秀・梶原備前守景豊語件旨趣於　日新公、三輩馳於田布施日新公之居城述厳命、日新公再三雖固辞、政綱等強請不止、故　公應太守之命、同十八日　虎壽公来鹿兒府、二十七日太守加冠　虎壽公、號又三郎貴久公、而讓守護職、自己者到伊作隠居矣、

○大永七年丁亥六月十五日、　太守之氏族島津八郎左衛門實久挾野心、詐称前　太守之命欲襲　貴久公、去鹿兒城皈田布施免虎口之難、是偏依政綱之忠功也、其後政綱候田布施賀還路之無事而皈、勝久公怒、密謀誅政綱、政綱熱察之、放火於家屋而自殺矣、

若狭守

父政綱自殺之時、若狭守幼稚而未辨東西、母携之退去伊集院、後從　日新公之君候田布施、　公憐之、使其妾大仁上木筑前守貞晴之女、島津左兵衛尉尚久等之母、撫育之、若狭守及長、以大仁之妹為之妻矣、

天文年間被補薩州泊之地頭職、

慶長六年辛丑四月五日死去、法名心月恭安上座、

『是ヨリ末略』

利綱　治部左衛門　若狭守

治部右衛門　親綱　太郎助　勝左ヱ門

守綱　利七　治部左衛門

安昌　始義綱　太郎兵衛　彦右ヱ門　勝左衛門

清右衛門—覺左衛門—五右衛門—新左ヱ門

右衛門—左京—清綱

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

（表紙　六）

御家傳并諸家由緒　四

（中表紙）

「

御家傳并諸家由緒　四

」

▽㊟一御家傳并諸家由緒目録　　糺合濟

▽㊟一惟宗氏△

一酒匂〔㊟氏家由緒書〕

一吉利〔㊟氏家由緒書〕

〔一酒匂㊟ナシ兵右衛門家筋之由緒〕

一伊木〔㊟氏半七郎由緒書〕

一赤松〔㊟氏家由緒書〕

一村尾〔㊟氏家由緒書〕

一〔㊟宮之原氏宮原家由緒書〕

▽㊟一岩切氏△

〔一㊟ナシ川上忠真・鎌田政近誕生并分れ所之支〕

〔一㊟ナシ本田家由緒書〕

一〔㊟花尾山由緒満家院厚地村華尾山御由緒書〕

〔一㊟ナシ東俣村一宮大明神之御由緒書〕

▽㊟一御目見列調△

▽㊟一一乗院由緒△

一不断光院〔㊟春日并下伊敷両所春日大明神御〕由緒

▽㊟一頼朝公法名ノ件△

▽㊟一猿渡法楽跡調△

▽㊟一忠國公御法名件△

▽㊟一市來氏△

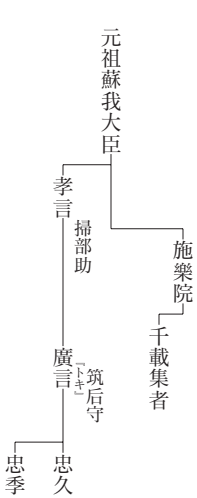
▽㊟一伊作家事件△△

110の1

▽㊥

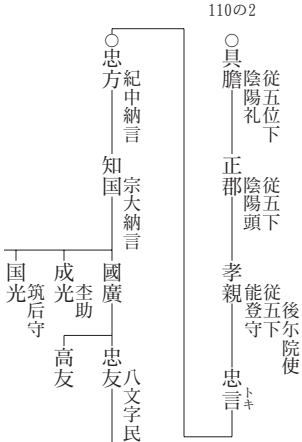
嶋津殿

御當家惟宗氏時系圖

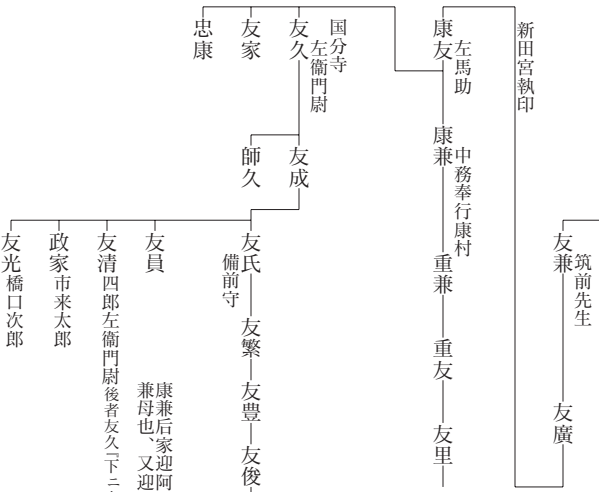


往代忠久御孫阿蘇谷時久（久時）御時八文字民部大夫奉行所被出系圖廣言・忠久トアリ、市来政家奉行處被出系圖忠康・忠久トアリ、執印國分系圖如此、

110の2



110の3



姓をかへて『本ノマヽ』

御當家者先惟宗氏にて御渡候事者無隠候処ニ、無故人のやうに申なす事候間、存て候分かきおかれ候者共を取集候てかき遣候、今たにも候、末〳〵ハ何とに申成し候ハす覽と存候、

御判在

110の4

市来政家ふきやう所へあくる系圖案

知國―國廣（俊「イ本ノマヽ」）―忠友（「イ八文字民部大夫」）―忠康（「橋口左衛門尉」）―忠久―忠時―久時

友兼―友廣―康友―康兼

康友―友尚―友成―政家（「イ市来」）

康友―康忠

110の5

大隅修理助いたす系圖

基言（「イトキ」）　廣言　忠久　忠時　久時

『右四通ノ系圖案水引執印氏笥蔵』　△

（二一〇号文書中ノ〇及ビ罫線ハ朱書ナリ）

111

酒匂家由緒書

一寛陽院様御葬禮御役者賦之儀御家老衆より私ニ被申付候条、役者賦仕差出申候、御太刀役古來より本田・酒匂両家江被仰付候例御座候条、此度之儀者此両家ニ被仰付候欤、又者本田次郎左衛門并嫡子ニ被仰付、父子ニ而相勤申候欤有之度儀（田ニ奉存候ニ付）〔与〕其段〻委細御家老衆江申達候、其趣者、本田・酒匂両家江問届申候時分口上書を以申出候趣ニ私考申候通書付差上申候、事濟為申儀を不入儀申上事候へ共、　御家之御威光に罷成儀ニ御座候得者、存寄為申儀を残置可申儀無御座候条、左之通御座候、

一酒匂家申出候者、御出陣并御祝儀之時分御太刀役相勤申候、御葬禮方江者勤申役儀覚無御座由ニ候、私旧記ニ而考申候ニ、酒匂氏ハ　忠久公御誕生之前より丹後局ニ被相付、御誕生被遊候てより御守役相勤、夫より御入國御供仕候、其時分　忠久公宇佐八幡江御参宮之時、御太刀役相勤為申之由候、従是以來代〻御家老相勤申、　貞久公より　師久公ニ被召附、彼御子孫様ニ御奉公仕候、　師久公之御子孫左兵衛久林御誅伐之後忠國公より被召出、酒匂氏ハ代〻御家老相勤、且又御譜代之隨一ニ而御座候、其上　師久公御子孫様江初終奉附、忠節之家ニ而御座候（田故）処、至子孫結構ニ被召仕候、伯囿様御代天文年間迄者日當山地頭職ニも被仰付（田置候）然時者、此家ニ終ニ下劣之御奉公仕家之衰為申儀無御座候、御太刀役　師久公御方ニ而相勤為申筈御座候、御葬禮之時分勤申役儀無御座候由ニ申傳候得共、是以（田茂）酒匂家も代〻養子ニ而御座候へ者、委細之家傳を唱失

申候半欤与考申候、其故者、福昌寺先住天海和尚書付置被申候書物之内ニ、嶋津殿葬禮之次第与有之候ニ、一御太刀弐人本田・酒匂、如此ニ見得申候、然者　伯囿様御葬禮之時迄者慥ニ本田・酒匂御太刀役相勤申候儀者無別儀候、　御家者　伯囿様中興之太守公ニ而被遊御座儀者不及申上候、　龍伯様・惟新様御葬禮ニも酒匂御太刀之役相勤為申由、少々覚為申者も有之由傳承申候得共、書付無御座候、　琴月様御葬礼前、嶋原一揆ニ付酒匂利左衞門事も彼地ニ在番仕候を、御葬禮御役者ニ而御座候条、長野・酒匂罷帰候様ニ与御家老衆より北郷佐渡・入來院石見江遣被申候状有之候、然者酒匂相勤申役儀有之儀者慥ニ(田候事)候、私存申候者、ケ様之時分御譜代之衆を不被召仕候へ者、　御家御威光も薄く、又ハ　師久公之御一流を御兼帯被遊候詮も見得不申候、酒匂家を本田家与先例之通被仰付候ハヽ、御家厚く伊作家并相州家を御兼帯被遊同然之儀候間、御譜代之一筋之衆罷出相勤申候而社、惣様之御嫡流を御家ニ御兼帯之儀与可奉存儀ニ御座候、酒匂家を被召残候而者　師久公之御子孫相残候様ニも有之候へハ、近頃残念至極不宜儀ニ御座候、殊更　師久公之御家より分れ申候鹿流も有之事ニ候得者、御考入可申儀ニ御座候、且又酒匂家御太刀役不被仰付候共、少も不足ニ者不罷成候、却而彼家之者ハ御舎兄様ニ被相附候故別各ニ　氏久公御子孫様よりハ被遊置候様ニ共存候得ハ、如何ニ奉存候、

一本田家より申出候者、御葬禮御太刀ハ本田二男家より相勤申候由御座候与申傳候由申出候、旧記等を以私考申候ニ、　忠久公御簾中様者畠山重忠女ニ而御座候、本田二郎親恒か女を重忠側江召置、此腹ニ出生為申女を　忠久公ニ奉嫁与見得申候へ者、　忠時公之御為ニ者親恒者御曽祖父ニ而御座候(田故ニ)、　御入國之時分本田家を重忠より御供仕らせ、酒匂家与同役ニ代々御家老職相勤申候、　氏久公(田ニ)被召附候(田而)与御太刀役相勤申候半与存申候、尤天正年間迄も御出陣之時分本田家御太刀役相勤申候、定而御祝儀之時分相勤為申儀も可有之候得共、旧記見得不申候、御葬禮ニ二男家より相勤申候与申傳候儀を考申候へハ、本田甚兵衞元祖者　忠昌公御代よりこそ相分レ申候、其以前二男家与申候而

無御座候、　慈眼院様御葬禮ニ、嫡家本田作左衛門ハ中将様御太刀役ニ而御座候、作左衛門男子無御座候故、二男家の甚兵衛を〔　〕(田作左衛門嫡子ニ)なすらへ為被仰付ニ而、其以前之儀者不相覚候得者、是を計覚申候而、御葬禮ニハ二男家与申出候半与考申候、御亡者様之御太刀を二男家に与賢哲之御先祖様御究置可被遊儀無覚束奉存候、其時酒匂家ニも為被仰付候由候得共、右之通申出候〔　〕(田ニ付)俄ニ御吟味難成故ニ本田家を両人共為被仰付欤(存か)与左候得者、御事欠故ニ如此御座候半与奉存候、此度之儀者惣様嫡家ニ被仰付候、尤　泰清院様御時者本田市郎左衛門相勤申候得共、其時者佐多・北郷茂二男家より相勤申候得者、是ハ例とハ難申候、偶両家共嫡家御立置被遊候、　御元祖様以來皆〻御譜代▽(田)之本田・猿渡・長野抔ニ而為相知家之者共ニ而御座候△本田・酒匂両家者御兄弟様ニ被相附候家ニ而、御兄弟様之御家ニ而御出陣▽(田)御祝儀△御葬礼之時分、大禮ニ者御太刀役相勤申儀無別儀候、冠婚祭喪者禮之大なるものと申候間、是者御祝儀、是者御葬禮与申、別ニ被定置候儀ニ而者有之間敷儀ニ御座候、

右之通ニ両家より申出候段、何れを信用仕可申哉与考申候ニ、其家ニ而者ケ様之儀何程も唱誤、又者唱失申候儀而已ニ而御座候、殊更養子又者幼少ニ而父母におくれ、或左様之処(田故)實とも心を寄不申候子孫ともハ、祖父親〔〻〕(田ナシ)之代之事をさへ存不申者多御座候、年來久敷儀ニ候得者、不限此儀ニ申出候儀ニ相違之儀も御座候得共、旧記を以相考、其上遂吟味申候得者、成程慥ニ相知申儀不新儀ニ御座候、酒匂家之御葬禮ニ勤方覚無御座与申出候茂、又本田家より二男家より御葬禮方ハ相勤申候与申出候も、両家共考違申候而申出候半与私ハ考申候条、存寄候段不残申上置候、段〻之儀證書御座候得共、御覽之障ニもと奉存候間、差上不申候、以上、

戌(元禄七年)十二月十六日　　伊地知助右衛門(重英)

112

●五代
貞久

宗久公御早世被遊候故、師久公・氏久公ニ両國之守護職ヲ御譲被遊、御兄弟様共ニ七代之太守公ニテ御座候、是ハ其時、乱國故、方〻へ人數ヲモ被遣候故、如此ニ御座候ト承及申候、

●六代
宗久

太夫判官　於向田御落馬被遊御早世、

七代
●師久　上總介　師久公一流ヲ總州家ト唱申候、貞久公薩州守護職　師久公ニ御譲被遊、御代〻之御重物小十文字御太刀　忠久公御鎧御附屬被遊、酒匂氏ヲ御家老職ニ被相附、自是酒匂家代〻　師久公御子孫之御家老相勤申候、

伊久　上總介　薩州守護職　師久公ヨリ伊久ニ御譲被遊候、（田證）御鎧判其外今川了俊證判等ニモ伊久ヲ薩州守護ト有之候、此朱筋ハ、御重物并薩州守護職ヲ　元久公ニ伊久ヨリ御譲、總州家・奥州家ヲ御兼帯被遊、御家安全ニ罷成候證據ニ御座候、

守久　播摩守

久世　上總介　於千手堂自害、

久林　左兵衛　於真幸被誅、

七代
●氏久　陸奥守　氏久公一流ヲ奥州家ト唱申候、氏久公ニ御譲、本田家ヲ御家老職被相附、　貞久公隅州守護職氏久公ノ御子孫御家老職相勤申候、自是本田家代〻

八代
●元久　陸奥守

仲翁和尚　福昌寺三代住持

九代
●久豊　修理亮

十代
●忠國　陸奥守

（本文書中ノ●ハ朱書ナリ）

113

右之通者、　寛陽院様御太刀并　太守様御太刀本田次郎左衛門・本田熊之助（親信）ニ被仰付候、私初御家老衆江存寄之儀とも申上候処ニ、尤之由被仰候而、其段被仰上候由候得者、御伺書も御見せ不被成候得者、私存寄之通者別事ニも為罷成哉与疑敷御座候ニ付、最早被　仰出候得者、相替事者有之間敷与存候得共、存寄之趣神文ニも違申候間、書付御近習衆を以差上置候、其後終ニ何様共御尋も無御座候、尤右書付御返しも不被遊候得者、非分を為申上与者不被思召上与奉存候、御家之（田御）掟之儀ニ候得者、無是非為申上儀候、後年又御用之儀共於有之者、右之別巻与同前ニ可被差出候、以上、

（元禄八年）亥五月十日　　同氏助右衛門（重英）

伊地知少八殿

『右之書物　御前江差上候書付留ニ而御座候』

114

覺

一戌十二月朔日之夜　寛陽院様御遺躰福昌寺江被遊御入候ニ付、私儀も致御供候、其夜豊前殿・縫殿殿より西湖之間ニ被召寄、御密談ニ承申候者、此節之儀ニ付私存寄たる儀（田共於）〔も〕有之（田ナシ）〔候〕者可申上之由被仰聞候、私申上候者、若輩者何そ申上儀も不承傳候、其上存寄申儀取覚不申候与申上候得者、尤之儀ニ候得共、御奉公之

儀ニ候間、存寄申儀者必可申上之由承申候、右之通御両老より被仰聞候儀別而忝奉存候、左様ニ無御座候共、当役之儀ニ候得者、存寄毛頭残置申覚悟無御座候ニ付、則申上、其委細奉得其意候、私為存寄儀とも、又者見當聞出共御座候(旧ハヽ)〔者〕、必可申上与御受申上候而退出申候、末座ニ御用人衆平田清右衛門殿・向井市之允殿・村田為(旧左)右衛門殿被詰候、此衆も為被聞欤与存候、就夫、此一儀ニ不限、其後存寄之儀共以書付為申上儀共有之候事、

一同三日、村田為(旧左)右衛門殿御取次ニ而御両老より承申候者、此度御葬禮御役者賦之儀被仰付候間、左様ニ心得可申由候間、御請申上候、就夫先例等見合申、其家〻江者為(旧左)右衛門殿可被仰遣候哉与申候へハ、私より直ニ可申遣由承候、其人数本田次郎左衛門殿・猿渡新右衛門殿・木藤平右衛門殿・中村勘右衛門殿・梶原善左衛門殿・梶原主水殿抔、其外ニも申遣候、然処ニ、酒匂弥太夫より以口上書、酒匂家御太刀之役、本田御劔之役被相勤候抔与有之候儀共申出候ニ付、其口上書御渡候、見申候に、少〻違目共有之候間、此儀信用も不仕候処ニ、評定所御案文帳に、

114の1

一書申候、仍　黄門様去廿三日被成御他界、(旧咲)笑止千萬為絶言語儀ニ候、就夫、御葬禮御日執來月十日ニ相定候、長野殿・酒匂殿御役者ニ而候間、早〻帰宅被申候様可被仰渡候、勿論船可被仰付候、少も延引有間敷候、恐惶謹言、

(寛永十五年)二月廿五日　　次飛脚　(旧庸)重広
(伊勢)貞昌
(川上)久國
(島津)久元

北郷佐渡(久加)守殿
(入来院重高)
澁谷石見守殿

(本文書ハ「旧記雑録後編五」一二三七号文書ト同一文書ナルベシ)

如此ニ御座候付、右写為左衛門殿江差出候、如此見得申候、如何可被成与申候へ者、此通ニ候へ者、酒匂家江問合申候ハヽ可相知由承候、於其儀者為左衛門殿より酒匂大蔵兵衛殿ニ可被仰遣候、御寺迄被参候も遠方

ニ候間、私所迄被参候ハヽ可申達与申候ニ付、其通ニ手紙被遣候由候而、其翌朝私宅江酒匂利兵衛殿大蔵兵衛殿病氣ニ付名代として被参候、利兵衛殿江問申候者、御葬禮之時分何役被相勤候哉与申候得者、利兵衛殿咄被申候聞書、

中納言様御逝去之時分、祖父酒匂新左衛門嶋原ニ在番仕候処ニ、御葬礼ニ付役者ニ而候間可帰陣由被仰聞候故、罷帰候得者、御尋御座候者、酒匂家者御葬礼何役を相勤候哉与之由候、新左衛門申上候者、御出陣又御祝儀之時者御太刀之役相勤申候由申傳候通申上候得者、酒匂家ニ者相勤役儀有之筈ニ候間可申上由再三被仰聞、三日打續被召出候得共、右之通申上候ニ付本田家ニ為被仰付由、新左衛門日記(田帳)ニ記置申候間、助右衛門ニ見せ可申候、　琴月様御葬禮之時分者、新左衛門者其前より入道仕候故、脇よりハ其時分剃髪与被思召候人も可有之由ニ而候、尤何役茂勤不申由候、私家ニ指合申候時分ハ本田家より相勤為申事ニ御座候、本田家ニ私家より寄申候而相勤為申儀者無御座候由被申候、其時右之状見せ申候而、いかにも其通ニ此状ニ嶋原より為被召寄与見得申候、右之通ニ候得者、御咄之通口上書被成御差出可被成由申候而返し候、其夜又助右衛門所ニ利兵衛殿口上書ニ新左衛門殿右嘶之日帳相添持参候而承申候者、近頃無御面目事ニ候、唯今相移候中村ニ而、此日帳を入置候箱ニ堂崩之虫入候而、下ニ成候帳之分ハ土同前ニ罷成、漸く此程被残(本ノマヽ)申候、右段〻有之所ハ見へ不申候得共、近キ比迄慥ニ右咄申候通ニ有之候を覚申候而罷居与申候而、為證據右日帳過分ニ持参候間、見届申候、此上者無是非儀ニ御座候、口上書者受取申候与申候而、其翌日為左衛門殿江其口上書為(田見)申候、為左衛門殿又大蔵兵衛殿より被差出候由候而、酒匂家之儀、此節之儀何役ニ而も相應之儀被仰付候ハヽ相勤可申候由之口上書差出被申由ニ而御渡候間、請取申候、後ニ御用人衆を以両通共ニ差上申候、本田次郎左衛門より覚書(田壱)之通被差出候、

琴月様御葬禮ニ者本田甚兵衛御太刀之役勤申候、　中将様御太刀之役祖父勤申候、　泰清院様之御時も甚兵衛嫡子市郎左衛門相勤申候、此節者市郎左衛門嫡子幼少ニ候間、曽於郡衆中本田与左衛門江被仰付候ハヽ可

申付之由候、次郎左衛門儀者　太守様御太刀先例之通ニ被仰付候ハヽ可相勤之由候、御葬禮御太刀之儀、二男家より相勤申事之由ニ有之候、此覚書右同前差上申候事、

右之通を以先私(田)〈考〉申候ニ、本田家より　御亡者様之御太刀を二男より相勤申候与有之儀難心得候、父子にて相勤來候抔与有之候ハヽ、左様ニも可有之候、佐多・北郷を初皆嫡家より役者被相勤候ニ、本田家計二男与有之儀、先道理ニ違申候、如何様子細有之候半哉与考申候ニ、作左衛門宣親男子無之故、肝付弾正二男を養子ニ被仕候、　琴月様御葬禮之時者、尤未養子不被仕候内ニ而候へ者、指次之家之甚兵衛子同前ニ被思召上、其段共を被仰聞甚兵衛相勤申候半欤、其後　泰清院様御時ニ者考ニも不及、其上佐多・北郷も二男家より相勤申候へハ、市郎左衛門相勤申候哉与考申候、此節之儀者皆〻嫡家ニ被仰付候ニ、難心得儀与存候間、旧記等見合申候而、左之通ニ書付置候処、豊前殿・縫殿殿御用之儀候間罷出候、御用後梶原氏之儀とも御問被成候、委細ニ申上候、其次ニ御太刀之儀者如何与被仰

114の2

●五代
貞久

御當家御重代之小十文字御太刀　忠久公御鎧自　貞久公　師久公江御附屬、後ニ伊久ト守久不快故、以二品自伊久　元久公江御附與有テ、両家ヲ合テ守護職御相續有、此時酒匂氏伊久一流ノ衰ヘ玉フト云へ共守節勤仕、酒匂家モ亦衰、守久子孫断滅ノ後奉仕于　太守公云〻、右四行朱書也、

●六代
宗久

●七代
師久　　伊久　　守久

薩州守護以酒匂氏為家老、自是代〻師久公御子孫之御家老相勤申也、

●七代
氏久

●八代
元久　　中翁福昌寺三代

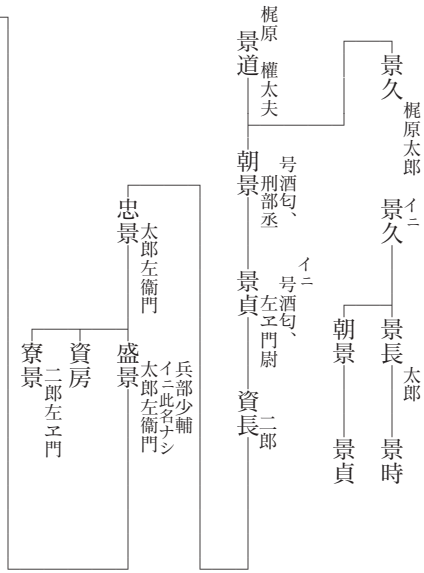
隅州守護以本田氏為家老、自是代〻御子孫之御家老相勤申候、

●九代
久豊

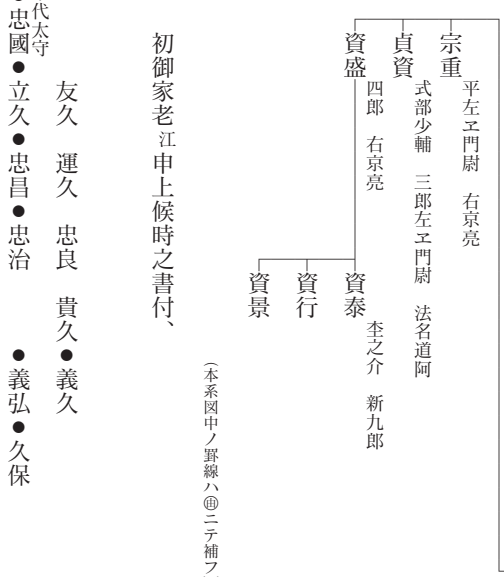
●十代
忠國

初御両老江申上候時酒匂元祖之書付、但本田家之事之(田)(八)為相知家ニ而候得者、不及申上候、

114の3



114の4



（本系図中ノ罫線ハ㊟ニテ補フ）

初御家老江申上候時之書付、

●忠國●立久●忠昌●忠治　友久　運久　忠良　貴久●義久　十代太守　●義弘●久保　●忠隆　●勝久　●家久●光久

本田氏十一代

●國親●兼親●親安●董親●親兼●公親●元親●宣親 作左ヱ門　親貞 甚兵衛先祖　親知　親治　正親　親光　友親 甚兵衛

一本田家ニ申傳候者、御葬禮之御太刀ハ本田二男家より相勤申之由ニ御座候、

私相考申候ニ、本田家　忠久公以來御代〻御家老相勤申候而、　氏久公ニ被相付候故、代〻御太刀役相勤申候半与存申候、御葬禮ニ二男家与御究候事難心得存候、其故者、本田市郎左衛門家者　忠昌公之御代より社相分レ申候、其以前ニ二男家与申候而無御座候、　琴月様御葬禮之時分ハ、嫡家作左衛門男子無御座候故、二男家之甚兵衛相勤候半、是ハ父子ニ而相勤申筈之処与考申候、其故ハ、　御亡者様を二男家ニ　御先祖様御究置可被遊儀ニ候哉、無心許御事ニ候、

一酒匂家ニ申傳候者、御出陣御祝儀之時分御太刀之役相

勤申候、御葬禮方ニ者相勤申役儀無御座候由申候、
私考申候ニ、酒匂氏　忠久公以來御代〻御家老相勤申候、　師久公ニ被召附、彼御子孫ニ相附罷居申候ニ付、　氏久公御子孫ニ者無構罷居申候得共、久林御誅伐之後　御先祖様より被召出、近代迄地頭職被仰付置候、　師久公御家ニ而御太刀之役相勤申候与存申候、冠婚葬祭ハ大者ニ而候得者、御葬禮之時者各別与者申間敷候間、此家も　師久公之御家御葬禮之御太刀を持為申ニ而可有之与存候、酒匂家も代〻養子故ニ委細家等取失申候哉与存候、此酒匂家御譜代之其一人ニ而御座候へ者、此度不被仰付候とも其家之不足には無御座、其上　氏久公の御舎兄様ニ被召付候家ニ而候故、却而規模与存候而罷居候得者、師久公の御一流を御合被成候間御相續有之候段も不相知、前ニ　師久公の御家之有之様(本ノマヽ)共見へ申候得者、御家薄ク罷成候、此酒匂家与本田家与被召仕候而社、御家ニ両家を御兼帯之證據ニ而厚ク御座候、本田家嫡家与又嫡子抔ニ而御座候ハヽ、左様ニも可有之候得共、二男家与ハ難心得候与申上候得者、縫殿殿より次郎左衛門嫡子有之候哉与承候、如何ニも男子御座候、定而幼少ニ而有之べく与被仰候、多分五六歳ニ而も有之候半与存申候、縱令當歳ニ而も御座候へ、夫ハ何様ニも被仰付様ハ可有之候、ケ様之儀者年之多少抔ニ者無構儀候、後記ニ残申事ニ候へ者、名さへ有之候得者相濟申事与存候与申上候、左候而、右書付等を指出置申上候者各様ハ如何被思召上候哉与申候へ者、縫殿殿被仰候者、右通之家之儀ニ候へハ、此度　寛陽院様御太刀者酒匂家ニ被仰付、　太守様御太刀ハ本田家ニ被仰付候而者如何被仰、豐前殿如何被思召候哉与被仰候へハ、豐前殿も如何ニ茂其通ニ被思召候、助右衛門者何与存候哉与被仰候間、私も左様ニ社存申候、適両家共嫡家を被立置候御譜代之家之事ニ候得者、酒匂家嫡流与本田嫡家与相勤申候欤、又酒匂を被召置筋之道理ニ而御座候ハヽ、本田父子ニ而相勤候欤、本田二男家与有之儀難取覚儀与申上候得者、尤之儀ニ候、私申上候段御伺可被遊候間、明日茂吉井為兵衛被召寄、御伺書御書せ被成候而、其上ニ而助右衛門江御見せ被成、御相談被遊

114の5

候而、御相役中江も可被仰達候間、左様ニ心得可申由承候、先早〻御法事奉行衆江相付可申上候得与承候、於其儀者各様より御差圖ニ而候与奉行衆江可申達と申候而、則主計殿・織部殿江唯今之委細書付等を以申上候得者、尤之儀ニ候、早〻可申上之由候、其翌日右之書付等差上覚悟ニ候処ニ、吉井為兵衛用事之由被申候間、於慥月間取合申候、為兵衛被申候者、御両老より私江取合申、昨日申上候通為兵衛ニ委細可申達之由被仰候条、可承与被申候間、右段〻書付ニ御記録并旧記等を引合見せ申、委細ニ申達候、左候而、御用人衆を以本田次郎左衛門・酒匂大蔵兵衛・酒匂弥太夫口上書三通并私口上書差出候、

覚

御葬禮御太刀之役本田家より相勤之由御座候間、本田次郎左衛門ニ相尋申候得者、別紙之通書付差出申候、酒匂家ニも何そ相勤役儀有之与見得申候条問合可申由承申候条、承合申候処ニ、別紙之通申出候、本田家者二男家より御葬礼之御太刀役勤申候由ニ御座候、二男家に被仰付儀候哉、御差圖無御座候得者、役賦難成御座候、将又酒匂大(田)〈蔵〉兵衛より茂此節之儀何そ相應之儀被仰付候ハヽ可相勤之由申出候、何役儀を可被仰付候哉、御究可被下候、右両家不相究候へ者、惣役賦等不罷成儀御座候、此旨被仰上可被下候、以上、

(元禄七年)
十二月十二日　　伊地知助右衛門(重英)

右之書付差上申候而、又其後　師久公・氏久公御事并本田・酒匂之家之事とも初之書付よりも委細ニ書付申候而差上申候、則此書付ニ而候、

114の6

『五代太守』
●貞久　酒匂家　師久公ヨリ奉附候而、伊久・守久父子不快故ニ御重代之御寶物　元久公ニ被進候、後ニハ伊久一流之威衰申候得共、守節義御奉公仕、久世居城於川邊戦死仕候、此段〻御家之旧記等ニモ相見得申候、依之酒匂致衰微之由候、久林御誅伐之後、御家ニ罷出御奉公仕候由候、其後ニモ段〻首尾能被召仕、天文年間迄ハ日當山地頭職為(田)〈被〉仰付ト見得申候、

『六代太守』
●宗久　於隈之城御落馬故御早世、

『七代太守』『御重代之儀者別紙ニ書与申候』『本ノマヽ』
●師久　薩州之守護職被遊御讓、此時酒匂家ヲ被附進、師久公御子孫御代〻御家老職相勤申候、御家御重代之小十文字御太刀忠久公御鎧ヲ師久公ニ被進候、

伊久　此伊久迄薩州守護職ト有之證書數多有之候、　守久　久世　久林

『七代太守』
●氏久　隅州之守護職御讓被遊、此時本田家ヲ被附進、　氏久公御子孫御代〻御家老職相勤申候、右貞久公ヨリ両國之守㊐〈護〉職ヲ被分進、七代之太守公ニテ御兄弟様共御成被遊候、是ハ其時分乱國故、方〻ニ敵國為退治人數ヲ被指遣候故之由ニ承及申候、本田・酒匂両家之儀　忠久公ヨリ以來御家老職相勤申候、

『八代太守』
●元久　仲翁守邦　福昌寺三代住持

『九代太守』
●久豐　『十代太守』
●忠國　本田家之事ハ　氏久公以來御家老職相勤首尾能御座候儀、　無其隱儀書記申候ニ及不申候、

（本文書中ノ●ハ朱書ナリ）

覺

一御太刀　一腰　光世造
　源氏御重代膝丸之御太刀ニ而候、従　頼朝公　忠久公江御拜領被遊、小十文字与名を御改候、

一御鎧　一領
　忠久公御鎧ニ而候、
　御太刀・御鎧ハ　御嫡家御代〻御相續之御重物ニ而御座候、明徳四年　元久公之御従弟上總介伊久より　元久公㊥江御使者を以被仰遣候者、御家督御相續之小十文字之御太刀　忠久公の御鎧　元久公江御附屬可被成候、元久公固く御辞退被遊候得共、御家鎮護之御寶物ニ候間、被成御受用、國家を御治候儀専要ニ候与再三被仰進候故、御同意被成、撰吉日河邊両城之間田之中ニ而、伊久方より相渡候役、御太刀阿蘇谷周防介、御鎧石塚大和守、此方より請取候役、御太刀山田右京亮、御鎧伊地知民部少輔請取之、納御寶蔵御家珎与被成候、御一族・他家之國人此御規式を奉拜、弥　元久公を奉仰、主君之御威光増莫大ニ罷成候、

右御讓物覚書之写

一其晩付候而傳承候者、笑岳寺江御葬禮之儀共為書付物有之由候間、則住持以書状可被差出由申遣候処、返事に右書付之写相添被申出候者、本ハ福昌寺維那寮ニ有之疏双紙之内ニ有之由候間、写仕置候由候間、則維那寮より右書物取寄披見申候、御用人衆抔一座ニ而候、福昌寺先住天海和尚之自筆之由ニ而、其内ニ嶋津殿葬

114の8

礼之次第与書出、諸役者旧記ニ致符合候内ニ、一御太刀二人本田・酒匂与有之候ニ付、其翌日御両老江被掛御目、御城江も為被指上之由候、

右之通ニ候而、其後者私江何そ御問条茂無御座候、初私申上候時分、御伺書御書せ被成候而御見せ可被成由承申候得共、御物音無御座、私より拝見可申共不申上候、初私存寄之儀共申上候節、御評定所筆者衆中山市郎右衛門殿御座ニ被罷居、縫殿殿与力衆日高次左衛門殿御縁ニ被罷居、為被承儀ニ候事、

一同役田中五右衛門殿當病起居并手足も不叶ニ有之、殊外草伏(廿四)有之由候間、度〻問合申儀も却而病氣之障、且又何そ難題之事共於有之者相談も可有之儀ニ候得共、及口能儀者無御座候間、為念以書状申達候、其趣者返書ニ見得申候、

御懇書忝令拝見候、然者

寛陽院様御病氣内より至今、何かと御公用ニ付寸隙を不被得之由尤之儀ニ令存候、寒天之時分御苦労察存候、然者、御葬礼之儀ニ付何〻御尋之儀、貴様思召寄可被為申上之通御承候ニ付、拙者方江御問合ニ及不申儀直ニ可被仰上候間承可置通、且又座より書付被差出候儀共も御一分可被仰上候間可承置通、入御念儀共存候、此節之儀ニ候間、乍不申隨分可被出御精候、拙者儀も不意之病氣ニ而、此時節御用ニも不罷立儀、近頃残念至極ニ存候、不及力ニ候、未手足不遂ニ御座候而、起臥も自力ニ不罷成躰ニ候、然共漸〻暖氣ニ罷成候ハヽ快氣可仕と醫師茂被申候間、折角養生仕事ニ御座候、快氣仕候節御面ニ相積儀互ニ可申承候、恐惶謹言、

(元禄七年)十二月十二日　　田　五右衛門(国明)

伊　助右衛門様

寛陽院様御太刀役　　市郎左衛門嫡子本田熊之助

少将様御太刀役　　本田次郎左衛門

右之通ニ為被仰渡由為左衛門殿ニ而承申候、惣役者之書付ニ右両人書加へ可差出由為左衛門殿ニ而承候へ共、熊之助名又者　少将様御太刀之役書所御究可被下由申候得共(田ハ)、於其儀者御家老衆御前▽(廿)ニ而△御

書せ被成候間、左様ニ心得可申由承申候、
右之通私存寄之儀申上候処ニ、右段〻ニ而御座候ニ付、為後見書付置申候、後年筋違之儀共を申上候抔与有之候得者、残念之至ニ候、以御差圖右両人ニ被仰付候得者、如何様御賢慮等も可有之候、私考違ニ而御座候ハヽ、無是非儀ニ候、若後年至其方私申上趣ハ如何様ニ而候哉(田公)与私共尋申人於有之者、此書付を以申達、此上ハケ様成儀能〻存候方へ御尋被成可被聞召達与可申候、公用を私ニ書付置候儀、御掟ニ違申候得共、此書付之通御記録所江茂一字之違なく記置候、且又　寛陽院様御葬礼方被聞召候御家老衆佐多豊前殿・嶋津縫殿殿、御法事奉行嶋津主計殿・嶋津織部殿、御用人衆村田為左衛門殿・平田清右衛門殿・向井市之丞殿、其外御葬禮御中陰方被致御奉公候衆者為被存儀ニ候間、此書付をも見せ置可申与被存候ハヽ、為後證入内見置、其疑を可被散候、萬一此書付入用之儀も可有之時分ハ可被差出候、私役儀相勤候内ニ無覚束儀を申候抔与後年ニ諸人之御疑も可有之候条、為後覽如斯候、以上、
(元禄七年)戌十二月廿八日　　同氏助右衛門(重英)判

115

伊地知少八殿

右者、　寛陽院様御葬禮方御役者賦之儀親助右衛門江被仰付候ニ付、御方御家之儀段〻申上候書付私江致宛書召置候、依之、此一巻御懇望被成候故、助右衛門儀在嶋仕候得共、兼〻御親父大蔵兵衛殿江書写可進と御約束申置候故、為私書写致進入候、以上、
(元禄十五年)午三月廿七日　　伊地知少八郎判

酒匂利兵衛殿

116

御葬場役者之次第

先
一御棺守　佐多豊前殿　▽(田)跡△　嶋津權十郎　本家北郷
一御太刀　本田熊之助
一御天蓋　猿渡新左衛門(田右)
一御香炉　御香合　指宿衆中　長野筑右衛門
一御茶碗　御茶入　御茶筅　御茶杓　指宿衆中　長野市左衛門
一御湯碗　御湯入　御サシ　指宿衆中　長野六左衛門
一御花瓶　財部衆中　長野三郎兵衛

一御燭臺　出水衆中　長野仲右衛門
一下炬松明　末吉衆中　長野覚右衛門
一御茶湯提子　長野庄兵衛
一御燈爐　木藤平右衛門
木藤長左衛門
木藤正左衛門
木藤四郎兵衛
一御幢　中村監助
中村勘（田右衛門）〔兵衛〕　串良衆中　中村孫兵衛
一御葬馬　中村新助
右　梶原主水
左　梶原平右衛門
蒲生衆中　右　梶原清兵衛
左　梶原善左衛門

右、元禄七戌年十二月　寛陽院様御葬禮之節御役者、

一御世御太刀　本田次郎左衛門

右、御葬禮之節　御在世之　太守公之御太刀本田氏之嫡家より役之、

右之節面〻被下物之儀御帳ニ相見得候趣左ニ記之、
猿渡新右衛門

右者衣裳上下代并青銅五百疋被下候所、古帳ニ見當り不申候、
中村（田堅）賢助

右者青銅五百疋ハ被下、衣裳上下代被下候所者古帳ニ見當り不申候、
長野筑右衛門

右者衣裳上下代被下、青銅五百疋ハ惣領家ニ而候故不被下旨、古帳ニ相見得申候、
本田熊之助

右江銀子弐枚被下候由古帳ニ相見へ申候、

117

私家之系圖其外家ニ相付候書付於有之ハ、御用候間可差出候、自然系圖等無之候者、近代相知候分書記、又者家ニ付申傳候趣由緒書調可差出旨被仰渡、承知仕候、系圖文書其外由諸有之重器とも私先祖代火事ニ而燒失仕候ニ付、右躰之書付所持不仕候、実之儀者不存候得共、家ニ付申傳候趣ハ有之候ニ付、左ニ申上候、

一忠久公御誕生前、丹後御局日州江御下御申可被成ニ相究、私先祖酒匂左衛門景貞後次郎左衛門与申者御供仕罷下候処ニ、攝州住吉ニ而御平産被成候ニ付、関東江御注進申上候、則右景貞ニ御守役被仰付候、左候而、御成人被遊、三ケ國御給御下國之節御供仕候、　頼朝公御意ニハ、遠國江御下向被成候間、何そと被思召候ニ付、御守御本尊并　御家御吉例之あまの御母衣被進候間、　忠久公御幼少之内景貞格護仕、御成長之時分可差上旨被仰付候、依之御成人被遊候而右之段申上候処ニ、右景貞ニ往〻御預被成候由被仰渡候、扨又景貞江者右同時ニ従頼朝公行親之御太刀拝領仕、御本尊・御母衣同前ニ従公義御蔵作被仰付、相納于今私格護仕候、

一景貞儀　御名代職為相勤儀有之候付、久景与名乗為申儀も為有之与申傳候、

一忠久公御下國之節、豊前宇佐八幡宮江御参詣被遊候ニ付、景貞御太刀之役ニ而供奉仕候、然処ニ、於社頭青銭二枚御素袍之袖ニ降下候を御頂戴被成、則景貞ニ被下候而、代〻格護仕候処ニ、従　龍伯公鎌田尾張守殿御使ニ而、右之由緒達　貴聞候間、可備　高覽旨被仰渡候ニ付、差上置申候、

一忠久公御下國被遊、景貞ニ為領地高江一所拝領仕候、夫より　貞久公迄酒匂家代〻御家老役仕候処、従　貞久公　師久公御方江被召附、　師久公御子孫御代〻御家老職被仰付候、然処ニ、伊久より私先祖江被仰聞候者、御家督之儀　元久公江御譲、御重物御附屬被遊候間、　元久公江奉屬御奉公可仕旨被仰渡候得共、　御家御威勢之節者奉屬、御衰微之時者退出可仕儀、存知も不寄儀与申上罷居、久世公御代於河邊ニ遂戦死候、右之戦死ハ酒匂紀伊与申候、左候而、久林公御誅伐之後、子孫共ハ従　忠國公被召出御奉公仕候、

一中比私先祖ニ右馬入道与申者御座候、御時代ハ不存候、御名代ニ上洛仕候刻、御分國諸士之次第可申上旨被仰付、書付差上候、酒匂一枚帋と申書并御當家之六巻書と申候而御座候、

一師久公御子孫御衰被成、酒匂家も衰微仕候、其上系圖文書其外由緒之重器とも、河邊地頭ニ而罷居候節彼地ニ而火事ニ燒失仕申候、方〻地頭職被仰付置由候得共、右仕合ニ而何れ之所共不相知候、

一天文之頃、酒匂源左衛門与申者、清水江伊集院孤舟被召移候ニ付鹿児嶋より卅人程被召付候内ニ而罷移候、其後日當山地頭職源左衛門江被仰付候、其比肝付家御退治之刻、廻之馬立ニ而源左衛門戦死仕候、其節私曽祖父新左衛門（景宗）九歳ニ而候、肝付表御手裏ニ参候翌年、従　龍伯公町田出羽守殿・本田因幡守殿を以、新左衛門事酒匂家督之儀ニ候、其上　御家之御重物格護仕候、親源左衛門戦死仕、幼少之儀ニ候間、為堪忍分串良之内知行八町被下候通被仰渡候、

右之通ニ御座候、以上、

未十一月十八日　　酒匂利兵衛

御記録所

117の1

▽田

『○』酒匂利兵衛家筋略系圖　利兵衛覚之趣

○酒匂紀伊守―源左衛門―新左衛門―源左衛門
　　僧大盛　大興寺開山、後一乗院住持、
　　此間二三代有テ酒匂五兵衛蒲生衆中、

―太郎左衛門
●次郎―●新左衛門―●利左衛門（實山口李左衛門嫡子、養子、）―●大蔵兵衛（養子、實東郷肥前二男、）
●利兵衛

△

117の2

（田別紙）

「景宗―酒匂新左ヱ門―景陳
　酒匂四郎右ヱ門　老号善済
　○母山口三左ヱ門女菊千代
　○萬暦四十年壬子即慶長十七年渡海琉球、
　景友―酒匂與四郎　后改友寄親雲上、
　　○母小田与左ヱ門女亀鶴
　　○天啓四年甲子即寛永元年為父後
　　請命亦渡琉球、善藍染法、
　　國王命賜廩米三石田禄仕至
　　友寄親雲上、
　景正―或作景正、改友寄筑登之親雲上、
　　○延宝九年辛酉如鹿府
　　訪宗氏景義、
　　高原親雲上、」

吉利家由緒書

覚

一吉利家之儀者嶋津伊勢秀久与申者元祖ニ而、私迄八代無断絶相續仕候、此代領鹿籠、彼地江住宅仕候事、

一文明十六年、　忠昌公伊東氏就御征伐諸将日州飫肥江被差遣候刻、其烈として於彼地秀久防戦御奉公仕候事、

一右之子治部忠将儀　日新様御妹聟与罷成、鹿籠江住宅仕候、天文年中於中郷杉嶋戦死仕候事、

一右忠将子右衛門久定儀　日新様御妹腹ニ而候付、御取持親祖父ニ越、別而忝被召仕、従　貴久公私領鹿籠を被相改吉利を拝領仕、彼地江移居仕、且伊集院地頭職被仰付候事、

一天文八年六月、　貴久公市來城御責被為成候時、度〻抽軍忠、於大日寺口ニ城代中務を久定討取申候事、

一同廿三年春、隅州蒲生城主并渋谷氏為御追討　貴久公御父子様御發向被遊候時、久定致御供御奉公仕候事、

一弘治二年之春、又　御父子様彼地江御發向被遊候時分も久定御供仕、御奉公仕候事、

一右久定子下總忠澄代、弘治三年之冬、九歳之時、隅州牛根乱相起り候時大将被仰付發向仕、彼地首尾能討納、罷帰早速家督被仰付候事、

一永禄元年之冬、　貴久公以　貴命初而吉利を名乗申候事、

一元亀二年之春、下大隅伊地知氏・根占氏・肝付氏御追討之時、於早崎陣防戦、下總別而盡粉骨、手疵数ヶ所負申候事、

一同三年春、又右之凶徒等為御退治諸将被差向候節、忠澄其列ニ加り勵軍勢候事、

一天正四年八月、　義久公伊東氏御追討日州高原・三之山江御進發之時致御供、諸所御奉公仕候事、

一同五年十二月、同凶徒為御退治日州野尻城江諸将被差向候節、忠澄茂為其烈差越遂軍忠候事、

一同六年三月、日州塩見三城之地頭職被仰付、彼地江罷移、封境を相守申候事、

一同年冬、豊後大友氏日州ニ責來囲高城候時、忠澄茂籠城仕、数日励軍忠候、尤耳川防戦之節別而御奉公仕候事、

一同八年十月、肥後國矢崎城主中村氏為御追伐人数被差

向候、其大将之内として發向仕、不日に彼城責落遂軍功候事、

一同八年十二月、同國比良之城并安楽之城被責取候時も、大将之烈として遂戦功候事、

一同九月八月、（田年）日ノナルヘシ同國水俣之城主相良氏御追討大将之内として出陣、水俣城責取遂軍功候事、

一同十年之冬、又肥後表江諸将被差向候時出張仕、日比良之城主小森氏御追討大将之内として遂戦忠、此城責落、則しも野城江抑寄責取申候事、

一同十二年三月、肥前龍造寺隆信同州嶋原江襲來候時、有馬氏江為加勢人数被差越候内として忠澄も出陣仕、於彼地別而強敵之取合励軍勢候事、

一同四月、肥後國一揆御退治諸将同前ニ出張仕、御奉公仕候事、

一同八月、肥後阿蘇氏・隈部氏御征伐大将之内として發向、吉松之城責落候、直ニ同國長野氏退治、諸所相働候事、

一同九月、吉松を發山北ニ打入、竹生之城被責取候時茂、大将之内として勵軍忠候事、

一同十三年九月、日州高知尾より乞和候時、大将数輩被差越候其内ニ加り彼地江参、豊後御出張之手立を申談候事、

一同月、又肥後八代之城を被責候時出陣仕候事、

一同十四年六月、筑紫之城主上野介廣門御征伐之時も、發向軍労仕候事、

一同七月、筑前岩屋之城被責破候時も、大将之烈ニ罷成勵軍功候事、

一同十月、大友氏為御征伐豊後國へ　義久公御發向、日州江御先手之大将之内として馳向、諸所防戦、殊ニ朽納城（網カ）被責取候時城代朽納氏ヲ忠澄討取、手柄仕候事、

一同十一月、年満城被責取候時、諸将同前ニ勵軍勢候、其後　太閤様より御和談為御使仙石氏被差越及防戦候時も、下總御奉公申上候事、

一同十五年正月、日州於松尾城強敵数多打捕、手柄仕候事、

一同三月、　太閤様九州御下向ニ付、　太守様御帰陣、下總致供奉、於諸所勵軍勢候、殊ニ於清田郷野心之輩御通路差塞及御難儀候処ニ、諸将同前ニ粉骨ヲ盡敵ヲ

追拂、無御恙日州迄御帰陣被遊候事、
一同四月、於日州根白京勢先手之内宮部善正坊陣ニ取掛
各被切崩候時茂、下總其列ニ而候事、
一文禄二年之冬、日州内山地頭職被仰付、彼地江罷移候
事、
一同三年之春、　殿下御下知を以三ヶ國之検地被仰付、
従　京都竿奉行被為下候時、椛山氏与忠澄案内者ニ罷
出候、検地相濟其帳共被差上せ候御使被仰付、上京仕
相調申候事、（本ノマヽ、田済）
一其子下總忠張儀、幼少之時より　義弘公御側江被召仕
候事、
一天正十八年、　太閤様相州小田原之城御征伐之時、
又市郎久保様致御供、忠張軍労仕候事、
一文禄元年、　義弘公御父子様朝鮮國御渡海致供奉、彼
地諸道御征伐、於方〻勵軍勢候事、
一同四年夏、嚴父忠澄就病悩御暇被下、帰朝仕候、又無
幾程朝鮮國へ渡海仕、全羅道御征行之供迄仕候事、
一慶長三年九月・十月、江南人両度猛勢新塞泗川之城ニ
寄來候時、諸将同前ニ勵軍勢候事、
一同十一月、朝鮮國御帰陣之御海上大明番船取掛申候刻、
別而軍労仕候事、
一同四年三月、於伏見伊集院幸侃御成敗被遊候刻、彼跡
御取分ケ之御使忠張・川田大膳江被仰付、両人相勤申
候事、
一同年夏、幸侃子源二郎荘内志和池城江楯籠候ニ付、為
御退治　忠恒公御發向被遊候時、忠張も致供奉候事、
一寛永九年四月、於江戸　綱久公御誕生被遊候節、　御
産弓被仰付相勤申候、其時國次之御腰物献上仕候事、
一同十七年春、　光久公御家督ニ而　御入部被遊初而御
参勤之時、年寄役として嶋津豊後・入來院石見与下總
三人御供被仰付、勤仕候事、
一同十八年霜月、　光久公下總宅江　御成之節、住物之（本ノマヽ、）
入唐雪舟筆五百羅漢之屏風為御引出物献上仕候事、
一同廿年春、御當所士十組ニ被召立候節、三番與頭桂又
十郎殿与下總江被仰付候事、
一正保元年之春、右組相替候時、一番與頭嶋津安藝殿と
下總江被仰付候事、
一此代一所川邊之内野崎村、後ニ市來之内湯田村を被下

候事、
一同地頭所阿多、市來、恒吉、飯野被繰易候事、
一右子仲四郎久良儀、飯野・山崎地頭職被仰付候事、
一承應二年春、二番與嶋津市正殿・佐多又四郎・頴娃右京・鎌田源五郎・仲四郎相組頭ニ被仰付候事、
一私家之儀代〻一所衆之烈ニ而、當時も年頭之御座配初諸事前代ニ不相替被仰付候事、
右、先祖以來御奉公仕來候由緒共大圖を書記申候、(ヒ)〔略カ〕
此外代〻御犬追物或滴(田鏑)流馬等数度被仰付候、又者時〻之御奉公之筋者多〻御座候得共、書載不申候、以上、

卯九月十日　　吉利治(忠名)部

酒匂兵右衛門家筋之由緒

口上覺

大玄院様就御葬禮乍恐申上候、私家之儀、古來より御葬禮之節役目相勤候通代〻申傳候、酒匂家之儀、　忠久公被遊　御下國候節、酒匂右馬入道御供仕罷下、御先祖様御代〻忝被召仕、忠之字ヲ拜領為仕由ニ而、今ニ名乗來申候、酒匂紀伊事相應之高所持仕、飯野御在城之砌御供仕、結構ニ被召仕候、私家庶子之儀者佐土原・志布志江も御座候、亡父惣兵衛事右紀伊養子ニ被仰付、紀伊事右馬入道子孫之儀　光久公被　聞召、右馬助与名をも拜領仕、夫より定御駕籠廻ニ被召仕、数年相勤罷在申候処、嶋津右馬頭様江差合申候ニ付、於江戸其趣申上、半右衛門与相改申候、私家御葬禮之砌役目相勤申候由申傳候、殊ニ半右衛門儀難有被召仕候ニ付、　寛陽院様御葬禮之節、私事此節相應之役目御見合被仰付被下度奉願候、若被仰付役目無御座候ハヽ、剃髪被遊御免、御葬禮之御供被仰付被下度候由、御法事座江申上候処、役者之儀者最早御調有之候、剃髪之儀者表方江可申上候旨被仰渡候ニ付、則右之願申上候処ニ、　綱貴公達　貴聞、其節被仰付候役目無之候、剃髪之儀者何れも被召留候間、此節願不相達之由、平山次郎右衛門殿御取次を以被仰渡候、依之申上候、右之通酒匂家筋を以相勤申候由申傳候、殊更　忠久公被遊御下向候節御供仕罷下候人数之内、本田・酒匂・猿渡之儀者御譜代ニ御奉公仕來申候処ニ、右両家之故(田衆)

ハ御葬禮之御役儀被仰付、酒匂家計相欠勤役不仕候段、近比残念至極歎ケ敷奉存候間、何卒此度之儀者御見合を以役儀被仰付被下度奉存候、若役儀無御座候ハヽ、剃髪被遊御免、　御棺廻ニ御供被仰付被下度、偏ニ奉願候、私事隱居仕罷居候得共、先年奉願候一筋も御座候ニ付、右之段奉願候、此等之趣成合申候様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

（宝永元年）申十月廿一日　　酒匂兵右衛門印

伊木半七郎与申人被召抱、　龜姫様江被召附、京都御裏方江被召置候、有筋目人之由由緒書を以御抱之儀願出候書物写、左ニ記之、

一曽祖父　　伊木七郎右衛門

若名を半七郎と申候、拾四歳より豐臣秀吉公（此時羽柴筑前守）近習ニ罷在候、天正十四年江北志津ヶ嶽柴田合戦之刻、十七歳ニ而高名仕、若武者之働倫を離レたる事ニ候与御感有て、預御加恩候、（此働太閤記に見え申候、）其後西國御進發之役ニ相州小田原陣等振ヨク相勤候とて、御帰陣以後軍労御褒美被成、一倍之御加増ニ而黄母衣ニ被仰付候、大坂御陣之節者、秀頼公より騎馬五拾疋・足輕百人御預ケ、當陣御理運以後可有御加恩旨ニ而、一廉之御證文并竹流（田シノ）〔二厂〕黄金被下、真田左衛門佐事新参之者ニ而候間、横目なから諸事當家之御軍法相談可仕之旨被仰付候、依之、冬陣ニハ真田出丸之鉄炮軍越前勢出丸之岸根迄寄來候を、七郎右衛門手ニ而討取候、頸数九十三秀頼公江差上、預御感候、翌年五月六日、道明寺江後藤又兵衛・薄田隼人・井上小左衛門等討死仕、二陣明石掃部・長岡与五郎・小倉作左衛門抔も敗軍仕候処ニ、三陣ニ罷在候真田左衛門・伊木七郎右衛門・渡邊内蔵助等備を堅メ、追來候関東勢十丁計頸数許多討取、未之下刻旗を立直し繰引ニ引取申候由、（此段大坂日記・秀頼記・家忠記抔申旧記ニ見得申候、）同七日、天王寺表茶臼山前後真田与一所ニ働申候処ニ、敗北之（田回）内勢ニ抑隔レ城中江得入不申、落武者ニ罷成申候、此節死不申事一生之恥辱、犬同意と存、昔語茂恥か敷候与申、老後終ニ子共ニも語不申、右ハ外より承候分、又者旧記等ニ相見へ候趣ニ而御座候、片桐市正・同出雲守年來之旧好を被存、客禮を以

呼被申候ニ付、和州龍田江参蟄居仕候、此節落髪仕、名を有齋と申候、其後龍田を立退在京仕候処、出雲守より使者を以、龍田を見かきり在京之由ニ候、たとへ唐へなり共被参候へ、親已來懇意之筋目者違間敷との儀ニ而、過分之合力年〻京着ニ而給候、此恩恵を受、茶之湯を友ニ而暮シ申候処、出雲守死去、龍田崩レ申候、以後京極丹後守方より、浪人之内養可申候、居住之儀者京都宮津之内心次第可仕旨、人かましき會釈ニ而呼被申、三千石之恩賞を受、老後宮津江参、終ニ彼地ニ而病死仕候、

一祖父　伊木半七郎

親七郎右衛門一所ニ大坂相勤、落去以後者母方之祖父瀧川豊前守引隱シ置、扨大坂古参之者者御赦免被仰出已後、紀伊大納言頼宣卿江豊前守御直ニ申上、私孫被召出被下候へ与尾州義直卿・水戸頼房卿御三人御列座之処江罷出御訴訟申上、紀州江被召出候、其節御上洛ニ而、頼宣卿駿河より紀州江國替被仰付候折節ニ而、洛外竹田ニ而目見仕、則知行五百石給、紀州入國之供仕、紀州江参り相勤罷在、終ニ紀州ニ而病死仕候、

一父　伊木半七郎

相續而紀州ニ罷在、先祖之筋目を以軍役被申付相勤罷在、其後病者ニ罷成、廿四年以前浪人仕大津江引込、十年以前病死仕候、

親類

一伯父　九鬼大和守殿ニ知行弐百石取物頭役仕罷在候、在世、　丹羽藤右衛門
一従弟　松平陸奥守殿ニ知行五百石取罷在候、在世、　伊木又右衛門
一従弟　中川因幡守殿ニ知行三百石取旗奉行役仕罷在候、在世、　伊木勘助
一従弟　内藤能登守㊐殿江知行三百石取用人役仕罷在候、在世、　伊木文右衛門
一従弟　松平安藝守殿ニ知行三百石取儒者役仕罷在候、在世、　味木立軒
一伯父　紀州ニ而八百石取罷在候、只今牢人仕、泉州ニ罷在候、在世、　廣沢庄右衛門

元禄十六年未二月廿三日　伊木半七郎

右之通由緒書仕、去〻年二月差上、去年四月十日、被召出候段被　仰渡候、勿論何方より茂構ヒ等無御座候、私儀者紀州ニ而親一所ニ罷在、無足ニ而番外与申奉公少之内仕候、紀州表親ニ隨ひ浪人仕、去年迄江州大津ニ罷在、去年九月より京都江借宅仕引越罷在候、以上、

121

宝永二年酉四月三日　　伊木半七郎印

伊集院主水殿

赤松家由緒書　但元禄十六辛巳年(西暦一七〇三)於江戸赤松甚右衛門申出之諸書付写

一赤松甚右衛門より嫡子長左衛門・二男甚太郎初而之御目見奉願候ニ付、嫡子者御太刀・二種一荷、二男者御太刀進上被仰付被下度旨、家筋之儀段〻由緒書を以於其御地子三月申出候得共、御下向前ニ而取次之御用人より段〻次渡ニ罷成、于今及延引候間、於爰許相談之上達　貴聞、何分ニも可申越候、　御發駕前ニ而相伺候儀難成候ハヽ、相談之趣申越候ハヽ、　御参府之節被達　貴聞、御意次第可被成候由、旧臘嶋津勘解由殿より被仰越、書物等被遣候得共、御記録方田中五右衛門儀も御供被召列候ニ付しらへ難成、五右衛門罷下候節相調させ可申与申談、扣置申候処ニ、此節勘解由殿より被仰越候ハ、右之儀其後何分共到來無之候、然者勘解由殿追付御暇ニ而其元可被為立候間、御自分江被次渡置候条、爰元相談之趣可申越之由被仰越候、甚右衛門家筋之儀者歴〻之儀ニ者相見得申候へ共、右躰之儀者御記録方へ申渡、相しらへ候趣を以達　貴聞儀ニ候得者、私共より何分与難申候、幸五右衛門其元江相詰罷居儀ニ候間、於其許被仰渡、申出之趣を以被達貴聞、御意次第可被仰付旨、辰五月十八日書付相濟、御家老中より美作殿江申越候処、右之旨達　貴聞、書物等者御國元御家老中江相返、甚右衛門嫡子長左衛門・二男甚太郎初而之　御目見御太刀進上之儀ニ付而者、明年御在國之節御記録方ニ而相調へ、達　貴聞候様ニと可申遣旨被　仰出候付、右書物等相添何れ茂被差越候ニ付、　御意之趣安房奉承知候、右ニ付書物等左相記候、

121の1

口上覚

拙者嫡子長左衛門・二男甚太郎儀未　御目見不仕候、御當地之儀者別而御事多候処難申上候得共、御序之節御目見被仰付候様奉願候、於其儀者、長左衛門儀者御太刀并二種一荷進上仕、甚太郎儀者御太刀進上仕候様被　仰付度奉存候、私小身之躰ニ而右願恐多候得共、

一城之主ニ而直ニ御家ニ罷出候人之子共　御目見之時分ハ、元服被仰付方も有之候由承候、拙者先祖之儀者播广・備前・美作三州を致所持、直ニ　御家を奉頼罷出、其段御當地御歴〻ニ一家之衆有之御存ニ而候、夫より拙者迄血脉不絶相續仕來候、　御家ニ罷出候而も、右筋目故ニ而も候哉、牢人之躰ニ而罷居候得共、御由緒之方江三代迄縁組被仰付候儀も有之、数代御奉公をも不被仰付被召置候、然共父宮内左衛門小高故身上難續、役儀等相勤申候、御番等之儀者養父次郎右衛門初而相勤、且又私庶子分ニ而初而御番被　仰付候節小番之願申上、筋目之訳被　聞召届、小高なから小番組ニ被召入候、其比迄縦持高四五百石ニ及候而も小番不被仰付人も餘多有之候、誠以此節両条之願申上候儀不似合儀ニ御座候得共、拙者式小身之方江被仰付候例も御座候(者ハヽ)、其并ニ被仰付度奉存候、右之趣可然様御申可被下儀奉頼候、以上、

三月廿二日　　赤松甚(前茂)右衛門

覚

一拙者先祖備前・播摩・美作三州之守護ニ而罷居候時分、嶋津周防守殿播州江御座候ニ付、其由緒を以私先祖江御家より無二之御懇意為被遊由候、依之私先祖よりも公義之儀旁身ニ掛御取持申上、尤　御参勤之節者御中途迄茂御供之者差上、御在京之内者猶以其通仕、種〻御為宜為仕由候、然者四百年ニ及御奉公仕候、其儀御記録所江相知可有御座候、

一右之訳故、私先祖播州没落之刻、嶋津周防守殿御一家同道ニ而志布志ニ着岸仕、松山之内中嶋と申所ニ二三代罷居候、其段ハ松山ニ申傳、今以松山之衆其通存知之人多候、

一上方江罷居候内より別而御懇意ニ被遊、其故ニ而候哉、赤松次郎四郎儀　忠國様御姪聟ニ被仰付候、

一私祖母ハ北原家ニ而候、　龍伯様江茂乍恐御由緒有之候故ニ而候哉、節〻被　召出難有仕合(ニ而共)候由祖母申候を私覚罷在候、

一赤松肥前儀も　義照(昭)将軍御代迄ハ松山江被召置候得共、信長御代ニ成被召出、　龍伯様より忝御取持之儀、山田昌巖・三原次郎左衛門能存被罷居候、只今之次郎左

衞門も承覚罷居候、其外ニ茂承候人有之候、
一私儀二男少高ニ而罷在候得共、右之訳故小番ニ被　仰付被下度与前ニ奉願候、　龍伯様御代御取持之様子山田昌巖・三原次郎左衞門存ニ而候、被遂御沙汰候者本望之旨申上候処ニ、前之仁禮覚左衞門を以御尋被成候処ニ、別条無之ニ付小番被仰付候、其段万治四年かと存候、御用帳ニ右件相知可有御座候、
一龍伯様よりハ恐多候而難申程之御取持ニ而御座候、其段者慥ニ證據有之候、
一先祖御國江罷下候以後、四人迄遂戦死御奉公仕候、
一私迄も赤松血脉断絶不仕候、親儀者養子ニ而候得共、本家鮫嶋ニ而候、此鮫嶋家茂代〻首尾好被召出(仕)、於御前元服抔為被仰付筋目ニ而候、右(両家)〔同前〕系圖ニも相見得、并親類共迄于今存命之者多〻有之、別条無之候、
一母方ハ赤松家之血筋ニ而候、右親類多〻有之、此段皆無別条存罷居候、
右之通ニ而御座候得共、祖父数年守空家罷居候、右私親以前ニ被召仕者も無之、御家老衆も私筋目之様子御存可被成様も無之候、然(共)者次郎右衞門・私迄も忝被召仕候ニ付、於御當地御太刀籏元衆も大身ニ而郷士ニ而罷居候者ニ数代之家來筋之者餘多有之候、左様之者私儀承傳音問仕儀ニ候、是以忝(被召仕)候故、只今先祖之名をも再挙仕候而、早竟御蔭を以難有奉存候、然者此上之願申上候事誠ニ以冥加恐多奉存候得共、以來迄之面目ニ御座候故、別紙之通ニ奉願候、ケ様ニ御當地ニ而諸人茂御存儀ニ候得者、此節御取立ニ被遊、奉願候通ニ被仰付被下度候、父方母方共数代首尾能為被召仕者共ニ候得者、筋目無之者を御取立与奉願ニ而も無之、中比衰申候而前之様子無御存方も御座候へ共、一門中存命之者有之、別条無之儀候故、此節被遂御詮儀候而成とも被仰付度奉頼候、以上、

三月廿二日　　赤松甚右(則茂)衞門

野村太(左)〔郎右〕衞門殿

121の3

覚

一暦應二年　貞久様京都江被遊御詰候時分、赤松家より御取持為申上儀共有之由候、
一應永十四年　元久様御代、伊集院頼久上洛ニ而屋形作

之儀御申被成候時分、赤松家より御取持仕首尾能相濟、
頼久　御目見迄為相濟由候、
一應永十七年　元久様御上洛之時分も、前以赤松家江御
内談被仰聞御取持申上、且又何そ國役相掛ル筈之儀と
も為有之由候処、是も御取持仕首尾能為相濟之由候、
右之通ニ相傳申、右段〻委細之儀者御記録所江相知候
半与存候、嶋津周防守殿播州江被成居住候故を以、
御家御代〻赤松家代〻御心安為被仰聞由候、周防守殿
赤松家御取持申候段者、嶋津壱岐殿御所持被成候文書
ニも相見得候、左候而、赤松満祐迄従　忠國様御音問
被仰下、其故ニ満祐没落之時分嫡子彦次郎（教康）　御家を奉
願為（頼字欠）寵下由候、
一右彦次郎寵下候而二代目赤松次郎四郎則秀牢人之躰ニ
而寵居候得共、嶋津忠廉息女縁組被仰付、就夫　忠國
様より堀川宰相殿江御遣被成候御状石野八兵衛殿方江
御所持被成候、
一右次郎四郎子肥前則重、妻者平山越後守近久之息女ニ
而候、右之子肥前義季、妻ハ北原武蔵守兼奉之妹ニ而
候、北原家之儀者御由緒為有之故ニ而候哉、肥前死去
之後、肥前娘　龍伯様御前ニ折節被召出、被遊御存候
故、御訴申上、御知行拝領為仕由候、
一私曽祖父赤松肥前弟甲斐介娘ハ壱岐助右衛門妻ニ而候、
其孫私母ニ而候、甲斐介壱人之娘ハ弟子丸藤左衛門殿
妻ニ而、其娘伊東樵齋老母ニ而候、
一田尻嘉兵衛殿事牢人ニ而御國を奉頼参上候處、其子八
兵衛殿二男喜右衛門殿　御目見之時分御太刀進上被仰
付候、嘉兵衛殿儀者私女房之祖父ニ而候故、委細為存
事ニ御座候、
右者、此節子共　御目見願ニ付右之段〻入用之儀も可
有之候処ニ、覚無之儀も可有御座与存、書付遣候由、
亥七月廿日　　赤松次郎右衛門
赤松甚右衛門殿

121の4

覚

鮫嶋家之儀者鮫嶋四郎宗家以後代〻阿多居城ニ而候、
其外川邊山田領地ニ而、領分之町反并境付迄相記有之
候、
一鮫嶋一流阿多加賀守指宿在所ニ而、應永十七年　元久

様御上洛之時分致御供、　公方様江御太刀進上ニ而
御目見名替迄仕候、此外北郷氏・椛山氏・蒲生氏・野
邊氏・平田氏なと同前ニ為被仰付之由候、此段ハ御記
録所江相知候半、此方江も委細相記有之候、
一鮫嶋四郎拾六代玄蕃亮宗延之弟四郎兵衛宗祐事、私親
赤松宮内左衛門曽祖父ニ而候、右四郎兵衛天文廿四年
正月廿二日致戦死、四郎兵衛孫鮫嶋喜右衛門事阿多ニ
居住候処、頴娃没落之後阿多より頴娃江被召移候、喜
右衛門母者種子田七郎右衛門娘ニ而候、
一右七郎右衛門嫡孫種子田七左衛門于今頴娃ニ致居住、
且又大田筑前事も種子田七郎右衛門娘之子ニ而候、筑
前二男平右衛門儀當分頴娃ニ中宿仕罷在候、
一鮫嶋喜右衛門子喜太郎事、幼少ニ而親喜右衛門致死去
候ニ付、頴娃ニ居住之儀親類共より御断申上、若年之
時分鹿児嶋江罷移候、然者私母者赤松甲斐曽孫ニ而、
赤松家血筋ニ而候故、私父喜太郎縁組并赤松家跡目ニ
被仰付度候旨平山對馬より御断申上、如願赤松家相續
被仰付、宮内左衛門与改名被下候、
一平山對馬事者平山越後守近久之二男久賢松元家之養子
ニ而、其以後四代目号松元主殿候、此段松元家系圖ニ
も相見得候、然処ニ、越後守曽孫平山左馬頭於松山城
戦死之後、平山家ニ嫡流及断絶候ニ付、松元主殿血筋
之故ニ　義弘様より平山家相續被仰付、平山對馬と改
名被下候、對馬妻ハ赤松甲斐介孫ニ而、旁以赤松家ニ
由緒有之候故ニ、赤松家之儀差引為被仕事ニ候、
右之段〻見合ニも可罷成と存、書付遣候、以上、

亥七月廿日　　赤松次郎右衛門

赤松甚右衛門殿

此奥ニ石野八兵衛殿状、其外堀川殿江之御状、又者上
井伊勢殿日帳・三原昌安證書・鮫嶋双月子息元服之例
書等有之也、
右赤松甚右衛門嫡子赤松長左衛門・二男甚太郎初而
之　御目見願之儀、元禄十四巳年、於江戸甚右衛門
より被申出候、同年十一月之御帳面写ニ而候、取次
野村太左衛門ニ而候、右願書ニ赤松次郎右衛門より
其前方亥ノ年甚右衛門江被申越候由緒書をも甚右衛
門より相添候而被差出候、写何れも右ニ記置候通ニ

而候、甚右衞門家筋之儀、同名次郎右衞門より右之以後被申出候ニ付元禄十六年未年御記録奉行調書被差出候趣とハ、右之巳ノ年被申出候筋とはそこ〳〵相違之所有之候、実儀難取請家筋ニ而候、赤松之本家ニ而者無之ニ相究候、親赤松宮内左衞門代ニ御記録所江被差出置候系圖平田古清右衞門被書留置候筋と、巳年甚右衞門於江戸申出候筋与、未年於御國元申出候筋と、三段ニ相替候、是本家ニ而無之證據分明ニ候事、

村尾家由緒書

乍恐口上書を以申上候、

一私儀曽祖父村尾源左衞門入道笑清以來結構ニ　被召仕、難有御奉公相勤申候処ニ、少高ニ而跡先才覚を以数十年御奉公相勤申候故、年〻不足仕、漸〻と相つとひ、當分弐拾貫目及他借御座候得共、返弁方ニ必至と行迫り申候ニ付、身躰相禿シ申より外無御座候、然共何そ私之驕物数寄無調法ニ而右之通ニ成立為申事ニも無御座候、少高ニ而永〻御奉公相勤申候故ニ右段〻御座候間、此等之趣を申上、身躰を相禿し不申候得者、唯今迄之御奉公も徒事ニ罷成申候与奉存候ニ付、憚をも不顧段〻書付を以申上候、

※一曽祖父笑清儀、幼少之時分徳松と申候而、拾才計之比、祁答院殿奥方祁答院殿を寝間ニ而仕詰被申候近邊ニ伏居候而、徳松起上り屏風を奥▽㊤方江押△掛、屏風越ニ差殺、無比類働を仕、　惟新様被聞召上、早速被召仕、飯野江三拾七年御供仕罷在候内、段〻御奉公仕候儀及数度申候、須木を切取、求摩・米良両所境目之故地頭被下、内場より衆中弐百人笑清差圖を以被召移、相應ニ御知行被下、居地頭私親村尾三右衞門(重侯)迄三代相勤申候、伊東家臣福永丹波野尾(㊤尻)之城主ニ而候処ニ、内通仕御味方ニ参候訳段〻ニ御座候、須木より山を通り高岡之内樅木罷出、籾木平右衞門先祖申合御味方ニ参、日向八千町御手ニ入申候、菱刈表御出陣之砌茂先手之大将被仰付、其後伊東家臣稲津掃部東目御下向ニ参向敵對仕候節茂、笑清須木より御迎に参候欤、山之上より此様子を見掛、世忰長介(重目)并衆中百五拾人急ニ召寄、綾之川内より掃部先手追返シ、本城之義(㊤文)寺江追籠御注

進申上、御迎之諸地頭被差遣候而一夜を明シ、掃部手勢壱人も不残打禿シ申候、其節長介拾六才、初陣ニ假屋原弥介与申者を打取、少手負申、其印持参仕申候間、野尻御仮屋ニ而初而致　御目見、舎人と改名被仰付、御長刀拝領、尤于今覚悟仕候、此外段々御座候得共荒増申上候、高麗・九州御出陣之砌者御供申、数度軍(田〈功)有之ニ付而必至と御側ニ被召仕候、

※(行間)
『此ケ条之儀者河野六兵衛(田通)道古も折々噂有之候、本行之通相違無之候、徳松其時の名ハ村尾亀三ト為申由、亀三ハ祁答院氏家中ニ罷在候を、後ニ段々依武功従　義弘公昵近ニ被召出、村尾源左衛門と名乗、地頭迄被仰付候、後ニ入道して笑清と改名、イニ笑世とも書たる由(田通)道古被申候』

一笑清嫡男村尾与五郎(重良)と申者高麗へ御供戦死仕候ニ付、

※須木居地頭ハ舎人と(ママ)改名仕右兵衛ニ罷成候而相勤申候、母ハ二階堂源太夫曽祖父常春妹ニ而御座候、

※(行間)
『此ケ条ハ相違有之候、村尾与五郎事ハ、　義弘公・忠恒公南門より天条江被遊　御越候中途ニ而御國衆と他國衆七八人喧嘩被致候、村尾与五郎并他國衆一両人相果被申候、此儀を取違戦死と申出候ハ相違ニ而候事』

(ヒ別紙)
「村尾与五郎事ハ　御両殿様御行列元帥浮田秀家兵ト行合喧嘩ノ節　御馬ノ前ニテ戦死故、私闘ニアラス、夫故ニコソ福昌寺戦亡帳ニモ載セ置レ、諸書ニモ戦死ト書載有之候、朝鮮明人トノ戦ニハ非レ共戦死ハ同シ、朱書ノ通ノ調ヘニテハ迷惑故辨シ置、○御渡海之節御国船不参、敷根氏舟ヲ御借ニテ久保公先ニ御渡ノ節、僅五六人御召列御渡リニテ其中ニ在リ、兼テ御側ニ召仕レシ人ト見ユ、　」

一庄内ニ而一番ニ山田之城御責させ被成候時、笑清大手之大将被仰付候而、同氏舎人召列一番ニ父子城江乗入責落申候、其後も軍功故段々之働も御座候、左候而、和談ニ罷成、入來院又六・笑清両人ニ而御差圖之城請取申候、

一私親村尾三右衛門御普請奉行数年御勤申候内、肥前嶋原雲之上四郎立籠、此方様被遊　御下向候ニ付而、須木衆中餘多召列御先立而罷越、御陣場御普請相調詰居

申、寅二月落城之節、鍋嶋殿・小笠原殿御仕寄之間を断申罷通、本丸ニ早〻責入、敵三人續合一人仕留、自分茂深手負申候、鍋嶋殿・小笠原殿御家段〻之證文并御證文数通格護仕罷居候、其後吟味役被仰付、在京迄も首尾能相勤、御用人役被仰付、数年相勤申候、

一私儀御勘定奉行相勤、御支配之時分も帳奉行相勤、御前帳之首尾迄も一人ニ而相勤申候、其後御船奉行被仰付、数年首尾好相勤、吟味役被仰付、惣田地奉行仕候而、私一人ニ而も段〻過分之御仕明相調、過分之御高出來差上申候、古田方ニも破損之所又ハ大形ニ前〻仕置候処、首尾好仕直シ為申所諸所ニ御座候、私儀代〻難有被召仕、相應之御奉公相勤申候処、脱躰少高ニ而御座候故、漸〻不足仕、借銀不相應ニ罷成、今更必至与差迫り申候、其上右少高之内親代ニ御借被下候金子返上不仕候儀、偏残多奉存候間、数年高三拾石上置申候、今少ニ罷成、右躰之儀共ニ而弥家内育申儀難續、如右之為差迫り身躰ニ罷成、至此節候而者最早必至与身躰差禿申外無御座候、私儀も今少相應之御奉公をも相勤可申と奉存候間、屋久嶋地頭一節御繰易▽㊟を以△五六ケ年程被仰付被下候ハヽ、左様成御蔭を以他借を相返シ、家を持留申度候、最早子共兄弟も相應之御奉公相勤申候間、往〻相續首尾好御奉公仕續候様ニと偏奉願候、若又右之段〻無御座候ハヽ、荘内家中中押一節被仰付被下候ハヽ、左様成を以何とそ身躰持留可申と奉存候、惣而右躰之御訴申上間敷内存ニ御座候得共、必至与差迫り申候ニ付、言上仕不申候而身上禿シ申候儀、道不成事ニ奉存候間、憚をも不顧、先祖已來之儀をも荒増書付申上候、此等之趣宜御内證より被達貴聞可給候、以上、

『寶永二酉年』正月十六日　　村尾源左衛門

123

宮原家由緒書左ニ記之、

私先祖代〻宮原名字ニ而、先祖より九代目宮原筑前(景益)与申者ハ　忠國様より友久様江九人被召附候衆之内ニ而候、伊集院道可・鎌田杢・本田名六(本ノマヽ)・宮原筑前・遠屋(㊟矢)織部・比志嶋助兵衛・鎌田弥左衛門・新納圖書・阿多源左衛門ニ而候由申傳候、其宮原筑前孫筑前(景種)与申候者　日新様・伯囿様・龍伯様まて御三代御奉公仕、方

〻走廻り候中に、永禄十二年　伯囿様大口表江御敵御退治之砌、中務家久様・新納武蔵殿・肝付弾正殿御談合ニ而羽月神尾伏兵被成、被為得大利候砌、筑前事大野駿河と両人▽(田)伏兵△之将被仰付、拔戦功候、且又天正四年八月廿三日　龍伯様高原之城御責取被遊候而、伊東(田)抑領之地数ヶ所御取候時分、筑前別而御奉公仕候由ニ而須木之地頭職被下候、同九年、肥後國葦北之郡御退治之砌御奉公仕候由ニ而、佐敷地頭職被仰付候、其外九州敵退治之砌御奉公仕申候、惣而地頭所靏田・加久藤・曽木・平和泉・須木・逆谷・佐敷等轉ニ被仰付候、上井伊勢殿・伊集院幸侃之書状弐通有之候、筑前事ハ天正十五年丁亥四月肥後於隈庄七拾三歳ニ而戦死仕申候、男子無御座候故、蒲地氏聟養子ニ仕、宮原(景次)兵部左衛門与申候、求摩・菱刈氏同意ニ而御敵被申候時分、平和泉ニ而戦死仕申候、尤養父筑前より戦死以前ニ御座候、平和泉者兵部左衛門江身ニ當為被仰付地頭所ニ而御座候由申傳候、系圖ニ者筑前地頭所与相見得申候、右兵部左衛門女子計有之候を、兵部左衛門弟蒲地氏を又〻養子仕、姪伯父取合跡相續仕せ申候、是ハ宮原左近(景晴)与申候、後入道仕秋扇と申候、日州石ヶ城ニ而御奉公仕蒙傷候、筑前江幸侃より被遣候書状此儀ニ付而参候、手疵儀者相見得不申候、系圖ニ者相見へ申候、又〻筑前岩屋城ニ而御奉公申候、其外度〻戦功有之候、帖佐ニ而者　惟新様御家老代相勤候、心岳寺御建立之奉行を仕候由申傳候、出水を御給被遊候時分、御城普請被仰付、大田吉兵衛・白坂七右衛門入道被差越候間相談可仕旨　惟新様御直御書　被成下、于今頂戴仕申候、且又、高尾野之儀者其砌在郷ニ而有之候処ニ、城御取立被遊、出水地頭本田六右衛門江諸事相談可仕旨被　仰付、城取立、阿久根より士八拾人餘召列高尾野江罷移候故、外城ニ罷成候、其外平和泉・串木野・紙屋・阿久根之地頭職被仰付候、日州逆谷地頭職被　仰付候、筑前佐敷之地頭之砌、父子別〻ニ地頭職為被仰付由候、美濃守殿御下向之砌、引取罷帰候由申傳候、右秋扇事於高尾野病死仕申候、寺沢志摩守殿御状弐通于今有之候、秋扇世悴宮原吉左(田右)衛門事ハ、高麗御渡海之砌拾四歳ニ而御供仕、其以後彼地大明人猛勢抑掛り候砌、吉左(田右)衛門敵打取申候由申傳候、　黄門様

関ヶ原合戦以後初而御上洛之砌も江戸・駿河之御供仕候、其後ニ琉球・道之嶋御検地之時分、柏原将監と両人奉行被仰付致渡海、帰帆之節逢難風船破損仕、将監・吉右衛門（景衡）相果申候、其砌迄者秋扇存生ニ而罷在候故、三原次郎左衛門入道永安嫡子を吉右衛門女子ニ取合、養子ニ仕申候而仁禮左近（景頼）と申候、折節仁禮蔵人事別府名字ニ而御座候得共、本名之由ニ而仁禮名字ニ替被申候由承付、地頭所高尾野より御當地江秋扇差越、一門之故野村大學所江宿仕罷居、蔵人方江段々為申入訳茂為有之由候得共、久敷儀ニ而如何様成儀も存知不申候、黄門様達　上聞、向後別府名字ハ蔵人承、宮原名字ハ左近承、左右方仁禮ニ可被成由被　仰出由申傳候、仁禮名字ニ為被仰付ハ元和六年ニ而御座候、秋扇事ハ寛永元年ニ死去仕候、右之通ニ而候故、左近仁禮名字名乗申候而、其子祖父仁禮覚左衛門（景治）、親仁禮覚左衛門、拙者迄四代仁禮名字名乗申候、依之奉訴候者、先祖数代宮原名字名乗來候、就夫申上候通筑前・兵部左衛門・秋扇・吉右衛門段々御奉公仕并戦死仕候、宮原ニてケ様ニ代々御奉公をも仕候処ニ、祖父代ニ考違仕仁禮名字ニ罷成、残念之儀ニ候間、御訴申上候由也、

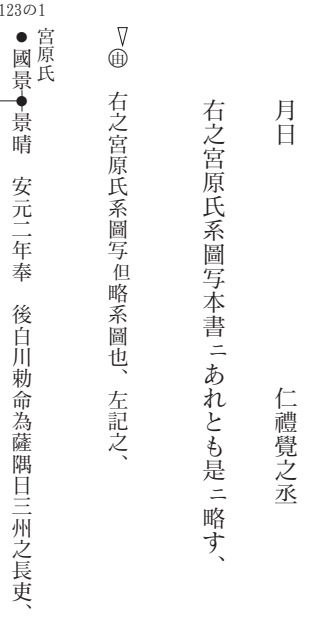
但此先少書記有之候得共、用ニ立趣ニ而無之候故令略也、

月日　　仁禮覚之丞

右之宮原氏系圖写本書ニあれとも是ニ略す、

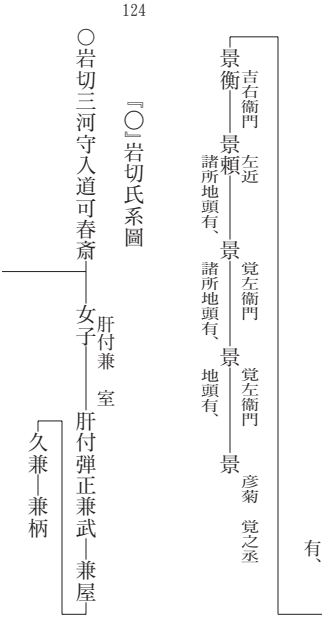
▽由　右之宮原氏系圖写但略系圖也、左記之、

123の1

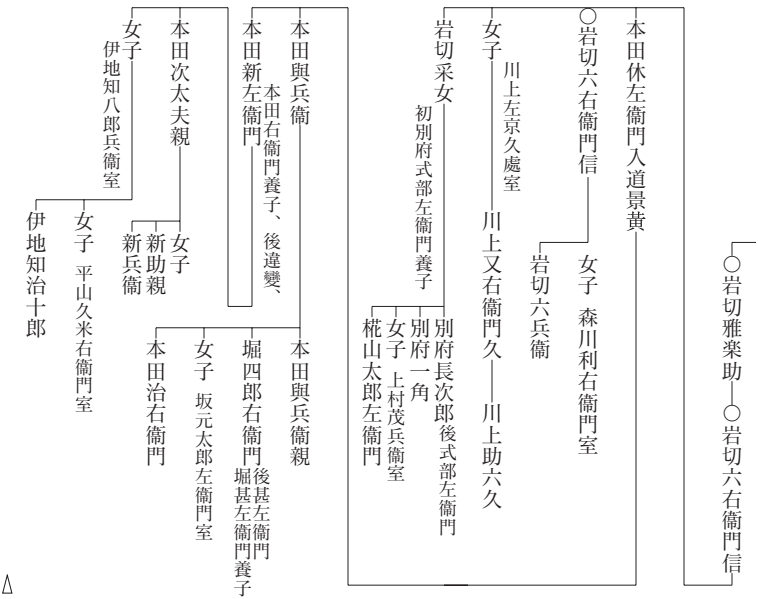


124

『〇』岩切氏系圖



125



川上忠真・鎌田政近誕生并分レ所之叟

一川上忠真者元亀二年ニ而候、

一鎌田出雲守政近ハ天文四年六月誕生、鎌田杢之助家筋者嫡家元祖より十一代之孫二郎左衛門尉三男ニ而候、然共右政近子孫嫡家之讓を請嫡家令相續候故、杢之助子孫も又二男家ニ可成欤、鎌田源左衛門政何入道作庵ハ右之杢之助一筋也、鎌田尾張(政年)入道寛栖、其子刑部(政広)左衛門尉、其子源五郎、養子源左衛門入庵(ゆ道)作庵、其子刑部左衛門初何之嫡子源五郎、源左衛門政何、源左衛門政初采女、

一政近嫡子左京政虎、其子蔵人(政富)於朝鮮國船破損死去、治部少輔(政統)(ゆ政)、養子蔵人(正勝)政、養子出雲(正長)政、其子出雲政、右之政近家ハ伊作家ニ仕(ゆ被)申候、杢之助家筋も同前、

126の1

本田家由緒書

一私先祖本田某与申者　忠久公御下向三年以前ニ薩州山門院を打明、感應寺を建立(ゆ置)、罷上り、　忠久公御供仕罷下候而より隅州守護代被仰付、承久兵乱以後守護代中絶仕候由、代々申傳候、

一貞久公より　師久公江者薩摩を被進、酒匂家を被召附、守護代酒匂家より相勤申候、　氏久公江者大隅を被進、本田を被召附、守護代本田より相勤為申由、代々申傳

候、

一康安之初より　氏久公凶徒為御誅伐隅州江御發向、則御勝利ニ而大姶良之城江被遊御座、同所西俣之城を愚祖重親江被下、左候而、應永六年三月一日、於荘内氏久公御合戦之時分、杉一揆之大将重親江被仰付、御内一統此手ニ相附被申候、新納家(ヲ)ハ月一揆之大将ニ而一家同心、　氏久公ハ小一揆之御備ニ而御馬廻り弐百許、都合千ニ不足御勢ニ而御座候へ者、是を最期之合戦与存定、氏親江行末段〻申残置、輕命相戦申候得共、御勝利も無之、重親者打死仕申候、重親存生之内ハ氏久公御弓箭之時分一度も不罷立儀者無之由候、

一重親戦死之後者氏親家督を仕候処ニ、永和之前後　氏久公より姫木・清水両城を御責取氏親并其子親治江被下、隅州之守護代を如本無相違被仰付置候、

一永和年中、九國之探題今川了俊之催促に應し　氏久公筑前博多ニ被成御座時、了俊探題之假威勢、小貳筑前守を方便寄未罪刺殺、　氏久公も如其可致内存ニ而、氏久公江御用与被申遣候ニ付、無據　御出被遊候得者、陣門警固嚴敷、御供之面〻中〳〵差通シ不申候得共、任恒例氏親御太刀を持抑而眞前に履人候得者、其跡より伊地知民部續而入來申候、然共餘兵曽而不差通候故、主従三人一途ニ究死候、了俊難對面及猶豫、兼而之巧を不得起、誠ニ危く其場御遁御帰國被遊候由、申傳置候、

一親治子者久親(元カ)与申候、　元久公より久豊公迄御二代隅州守護代并御家老職迄相勤、別而忠節仕申候、然共直子無御座候、五番目之弟重恒与申者江家督を譲申候而相果申候、以後重恒者奉對　忠國公不忠之儀共多御座候ニ付、被向　御馬重恒退去仕候ニ付、一節清水之城新納四郎三郎江被下候得共、悴家代〻之城与御座候而、元親差次之弟國親江家督被仰付、又〻清水之城(ヲ)被下、夫より私迄血筋相續仕來候、左候而、國親者寛正五年ニ戦死仕、其子兼親幼少ニ御座候得者、清水も危く罷成候得共、　忠國公より別而御取立之御意重く、兼親母江　御自筆之御書三通迄被成下候、就夫兼親六歳ニ而めのとに背おわれ釼之御陣ニ罷立候而より老年迄弓箭而已ニ而相過申候、軍忠之儀者　立久公・忠昌公御書之内ニ相見得申候間、委ク不申上候、右　御書格護

仕罷在候、右之通續絶救危被下候儀、御譜代之者と者
乍申、子〻孫〻迄も難有仕合奉存候、
一兼親嫡子者親安と申候、是も　忠治公より由緒之地与
御座候而　御判物御添被下候、其子紀伊守董親（薫とも作）与申者、
大永六年、於伊集院忠兼公　忠良公江國政御契約被遊
候、御同道ニ而鹿児嶋江入御之時分、薫親与阿多加賀
守与互ニ　両将様之御太刀を持替り、臣等も相違有間
敷との験ニ仕候、頓て　貴久公江御國御附屬目出度奉
仰候処ニ、實久依奸謀　勝久公より　貴久公御養子之
儀御違變之色見得申候、國中六ヶ敷罷成、三州ニ者十
三家各居城ニ引籠伺變候節、　貴久公義兵を以四ヶ所
より御發向ニ付、大方ハ御手ニ入候得共、右十三黨未
及御手候故、椛山之居城生別府を董親江御加増として
被下、別而御忠節可申上旨被仰付、則董親御請申上候
ニ付、十三人之黨も次第〳〵に　貴久公江奉帰服候、
右之通一和仕候儀者、乍憚董親働故欤与奉存候、其節
近衛様迄被聞召上、御自筆之御状被成下候、右段〻（ニ）□（ヲ）
御忠節申上候ニ付、在城清水・〔四十（早）〕人・姫木者古來
之地ニ而不及申、日當山・曽於郡・牛根・咲隈・小濱
以下数ヶ所を御加被下候、　御當家様を奉護罷居候処
ニ、家臣等逆心を起し未得静候処ニ、　貴久公より御
加勢之人数を被下、其上御和談を以家中平均仕候節、
清水一城ニ被召成候、左候而、天文十七年、渋谷・菱
刈抔申合董親野心を相企候様ニ世間風説仕候ニ付、
貴久公より清水御責候付、不及是非智之北郷一雲を便
り庄内之様ニ退去仕候得共、又〻被召返、天正之始
龍伯様より川内之天辰を一所ニ被下、國境之由ニ而同
所山田之移地頭迄被仰付（ヲ）候、清水落城之節者右之様成
雑説御座候得共、其儀ニ而無之段悴家も申傳、且又上
井伊勢守日帳ニも野心ニ而無之段相知申候、
一悴家　氏久公江被召附候而より董親迄一世も無断絶守
護代相勤、薫親孫與左衛門公親入道玄叱迄御家老役相
勤、曽於郡ニ罷在、勿論　御家之軍ニ不罷立者一人も
無御座由申傳候、
一御判物者、　氏久公より勝久公迄御八代　日新公より
貴久公迄之御間ニ者　久豐公・忠隆公之御書無之、其
餘者于今皆〻頂戴仕置申候、　道鑑公御判物者悴家庶
流之者江数通頂戴仕置候、

一私曽祖父本田作左衛門（宣親）迄者代〻之通無中途（中絶カ）御直元服仕
來申候処、男子無御座、亡祖父四郎右衛門事ハ肝付半
兵衛弟ニ而、廿七歳ニ而聟養子ニ入來申候ニ付、私家
ニ而者御直元服不仕候、然処ニ弥身上難相續、亡父次
郎左衛門事御直元服之願不申上罷在候、然とも私迄も
又〻右之願不申候而ハ家例中絶ニ可罷成儀残念ニ存申
候付、身上為差迫儀ニ者候得共、私儀御直元服之願申
上、且又悴家実名　道鑑公より　忠兼公迄之御間　御
代〻様御名乗之内一字を拝領仕、右一字を上ニ置、悴
家之字を下ニ履、私先祖共数代名乗來申候、俗名者
御家ニ御付被遊候又之字を被下、亡父次郎左衛門迄も
又次郎与代〻付來、冥加之仕合奉存候間、私事も右之
通不相替被仰付可被下旨亡父次郎左衛門より　御先代
様江奉願候処ニ、被仰渡候者、次郎左衛門事御直之元
服中絶仕候間、私事御直元服者不被仰付候、被添御心
家之儀ニ候条、於　御前元服可被　仰付候旨被仰出、
御諱之字・又之字者被思召訳も有之候条不被仰付候、
私先祖ニ信濃守与申者別而忠節武勇有之、首尾能御奉
公為仕者有之候間、被准之信次郎与名拝領被仰付、去

126の2

ル元禄十二年卯十一月朔日、如式法之御祝物進上仕、
於　御前元服被仰付、御脇指頂戴仕候、
一私家督之　御目見仕候節、御太刀并二種一荷進上仕候、
右由緒之儀者、私家ニ格護仕居候御證文又者家傳を
以書付差上申候、右本書於御覧者、御差圖次第差上
可申候、以上、
（宝永四年）亥十二月　　本田信次郎

右由緒書与御訴書相添被差出候、御訴書左ニ記之、

私先祖事　御下向三年前罷下、少〻調儀仕置罷上り、
又以　忠久公御供仕罷下候而より、別而難有被召仕、
代〻隅州守護代相勤、御難儀之御時ニ奉逢候儀度〻有
之、尽粉骨及両度戦死仕候、右之通ニ候故、私先祖共
御代〻様より数十通之　御書并御證文等被下置候内、
忠昌公御契約状、且又勝久公　貴久公より御神名被成
下、于今所持仕置候、又者鎌倉之故例を以御家之御規
式無断絶拙家より勤來申候、乍憚　御太祖様以來相續
首尾能御奉公仕來候、然處於私代身上相禿、邊路ニ引

入御奉公を相止可申儀、数代之功も其詮無之方ニ罷成、別而残念至極痛入迷惑存申候、依之不顧恐奉願候、當日迄無據相除不罷成家内人数十五人格護仕候、右家内渡世仕候程ニ此節御救被仰付置被下候様奉願候、左候〔者〕(サハヽ)、持高之分者他借之方江渡置、少宛成共返濟方漸〻目成候様仕、先キ〳〵何とそ相續(サ仕)、相應之御奉公相勤申度念望ニ奉存候、誠ニ當時之御事ニ而私式不似合御訴ニ奉存候得共、先祖共右通之御訴為申上儀絶而無御座候処ニ、至私如此之御願申上候儀何とも残念至極奉存候得共、無是非仕合故奉訴候儀ニ御座候条、何とそ御憐愍を以此涯御救被召置被下候様ニ与偏奉願候、家筋ニ付而大底之由緒書別紙ニ相添差出申候、乍此上文書等被遊御覽事ニ候ハヽ、御差圖次第差上可申候、右之趣を以宜被仰上可被下儀奉頼候、以上、

(宝永四年)十二月　　本田信次郎

本田家系圖本書ニ有之候得共、是ニ略之、

▽(サ)

127

本田系圖大概

但右書物両通ハ御訴ニ付被差出候、系圖大概ハ本田系圖之内を以書抜也、重親より上者系圖ニ不相見得欤、重而可考、

- 重親（氏久公御代大姶良西俣ノ城給ル、）
  - 氏親
    - 親治
      - 元親（無実子、）
        - 重恒（五番目ノ弟、忠國公へ不忠悪逆、）
- 國親（元親差次ノ弟、）
  - 兼親
    - 兼親（衍カ）
      - 親安
        - 薫親（因幡守　数ヶ所領ス、口宣有、）
- 親兼（左京大輔）
  - 公親（與左ヱ門）
    - 美作守（元親）（此代ニ鹿児嶋ニ移ル、）
      - 作左ヱ門（宣親）
- 四郎右衛門（親通）
  - 次郎左ヱ門
    - 信次郎

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

128

吉利家系圖写大概

- ○伊勢守秀久（薩州国久三方（ママ））
  - 治部少輔忠将（鹿児被下相領、鹿児傳領、）
- 右衛門大夫久定（吉利被下相領、伊集院地頭職）
  - 下総守忠澄（日州二城之地頭職）
- 下総守忠張
  - 山城守久在
    - 仲四郎久良
- 治部忠名
  - 杢之助（忠儀）
    - 長虎（久副）

川上左京系圖

（本文書中ノ○及ビ罫線ハ朱書ナリ）

川上左近将監忠塞三男
左京允　信濃守　忠塞二男左ヱ門尉忠豊後ニ号朝久、嫡家

○忠興
上野介公久猶子、因之忠興雖為忠塞三男准二男、

○忠智
左京　三河　入道肱枕　知行伊集院之内石谷村、高千七百斛余、　義弘公
飯野在城之時至御家督節任家老職、栗野・馬越被補地頭職、

女子
早世、母春成兵庫女

○忠堅
初久堅　助七　左京允　母同前、永禄元年午誕生、
天正六年十一月十二日　義久公日州新納院高城ニテ与大友氏合戦之時、討大友吉弘雅楽入道宗順得首、矢崎城氏下、天正十八年攻肥前国城之族有馬清甫、委見父忠智之下、天正十年夏肥後之大名島津義久公、鎮貴乞援兵久公、忠堅与新納一刑部輔忠堂共為馬入肥前、肥後、住人箕田平馬卒、相堅同年勢月従三安徳城出対面、攻族皆迎出、國深江城、敵兵皆一志極、同年六十日忠堅氏主・有忠氏同、被傷左右股終追退敵、衆坐忠堅先而名謁合鎧雖、傷、一番鎧則向敵陣、意必死而躅甚壮而皈途中ニシテ向忠堂曰、今日合戦之刻、大将中書、実男子本意也可見此云忠堂曰、我何劣乎、家久嫡子又七郎忠豊祝首途、忠豊三歳時、十賜盃於忠堅、忠堅、名気而戦死、箕田平亦同死、天正十二年甲申三月廿四日肥前国嶋原合戦之刻、大将中書、天正十二年甲申三月廿四日肥前国嶋原合戦之刻、大将中書、家久嫡子又七郎忠豊祝首途、忠豊三歳時、十賜盃於忠堅、忠堅、把盃曰、今日取敵将隆信召首備御覧、有其席、忠元云、忠堅カ言楚忽也、唐之辞、勿疑之云、傍人云廣言以甚、自辰至于午刻、攻戦最急、臨合戦之期、逃至隆信討隆信在此、交敵兵、信及末初剋忠堅元来、因□隆信、向何敗走乎、忠本之邊、隆信及思我信兵、高聲罵云、突伏獲其首、備、従是大敵一時、堅ニ敗亡之、直駝向隆信首遺肥後国鞍北之郡佐敷聞之、以鎧突伏獲其首、備、従是大守義久公、之高覧、貴賤男女群集途中見之、隆信甲冑并刀相州国次備忠、堅之子孫、

同十四年戊七月六日、攻筑紫上野介廣門所楯籠之鷹取城、廣門出城門防戦太忽也、忠堅先衆進闘、而遂与筑紫春門廣門子、或以短兵相接、共死行、年二十九歳、曰弟、
筑前國葬于増福寺邊、法名緑勢好因居士

○忠兄
久三　大炊助　四郎兵衛　斎名青糠　母同前、永禄四酉年誕生、初内小野寺養子、後辞彼家、給所領別立家、義弘公御時、忠智及老辞家老職、以忠兄為父代任家老職、三山地頭職、忠兄十六歳、三山号小林、補羽月地頭職、

久智久右衛門

○忠里
右衛門佐

○久智
久右衛門　実ハ三河守忠智三男、忠里依無世子為養子、

久恒
大炊助　佐渡守　母伊地智但馬女

久親
四郎兵衛
於甕嶋卒、

女子
川上與右ヱ門久信室

忠盈
始忠真　四郎兵衛　五兵衛　母有馬丹後守純盛女

久包
四郎右ヱ門　隅州垂水ニ移ル、又北郷□召附日州ニ移ル、
志和地之地頭、

久武
治部左衛門　島津玄蕃頭忠紀ニ附、

女子 北郷民部左衛門妻

久隆 太郎左衛門 慶安元子五月四日誕生、

久浪 六太夫 年子七月十五日 卒垂水、 貞享元

女子 北郷孫太郎妻

忠隆 四郎助

忠雄 弥五七

久明 助九郎

忠孫 甚右ヱ門

忠門 善助 延宝三卯年十月廿五日 卒垂水、

忠陳 孝右ヱ門

女子 伊集院覺左ヱ門妻

久序 正右ヱ門

女子

女子 母本田六右ヱ門正親女 比志嶋左近国重妻

久元 千法師丸 助八 母同前、 久右ヱ門 法名昌山清繁庵主 卒于江戸、

女子 柏原弥太右ヱ門妻 母佐多六郎兵衛忠利女

女子 東郷源七郎重元妻

女子 太守綱貴公ニ奉仕、

久峯 虎徳丸 助八 母同前、 休右ヱ門 初久重

女子 母同前、 佐多六郎兵衛久妻 (貴脱カ)

忠通 五兵衛 母伊集院宮内少輔忠鎮女

女子

忠 千松 次右ヱ門

忠 次兵衛

家武 傳八 市来永右ヱ門養子

女子 鎌田平六妻

女子 財部傳五右ヱ門妻

久林 左京 高城地頭被補、

女子 (樺カ)□山安藝守久守室 母(新納刑部カ)□太輔忠尭女

久如 助七 母同前、 慶長十一年午誕生、 千代 高城地頭、後ニ踊地頭、 寛永八年十月六日死去、

女子 亀山又兵衛久儀室 母同前、 延宝四年十二月二日死去、

久盛 千寿丸 慶長十九年寅二月十七日誕生、 助兵衛 摂津介 助進 母同前、 寛永八年兄久如死、 其子千徳丸 因為幼稚久盛為番代補踊地頭職、肥後國主加藤肥後守 改易、因之當國兵可有發向肥後、 催久盛踊兵卒可出張之旨 於鹿児嶋定舞臺受命而為判形、 寛永十六卯年、千徳丸 (久處号助六、) 依茲久盛辞踊之地頭職譲久處、

久基 長七 母本田越中守親良女 寛永廿一年申八月廿日誕生、

久胤 長助 慶安二年丑七月十四日誕生、

久淨 長右ヱ門 慶安五年六月八日誕生、

久處 千徳丸 寛永六年巳八月廿六日誕生、 助六 左京 母市来備前守家繁女 踊・大村・日當山地頭職、 寛永十六年元服、 光久公御加冠、理髪八川上因幡守久國、 正保三年丙戌十一月十三日 光久公於江戸王子犬追物張行、 射手烈ニ加、従家光公御時服拝領、 従家綱公御時服拝領、

久 (毘カ) 千徳 又右ヱ門 左京

久 (道カ) 千徳 助六

130

猿渡新右衛門信　家筋系圖但信重ヨリ上略之、

- 信重
  - 久（得カ）　助次郎
  - 久（命カ）　唯右ヱ門
  - 實信　承久三年六月朔日鎌倉ヲ立、八月廿三日薩門院致着、号藤□□供之□□
  - 信高　兵庫頭　千臺郡之内青山□二町余領之、
    - 實通　改名道胤
      - 信次　源五　有和泉
        - 實勝　兵部少輔　有和泉
        - 實奉　加賀守
      - 信昌　兵庫頭
      - 信秀　貴久有御内、大炊介　本ノマ、蔵人
        - 信秀
    - 信　弾正忠
    - 信　民部左ヱ門
    - 信康　号筑前守、知行、山北之内安原五町
    - 信匡　前河内守
    - 信　
      - 信乗　筑前守
      - 實善　勘解由次官
        - 出家一人
        - 信秀　源兵ヱ尉　有和泉

（本文書中ノ〇及ビ罫線ハ朱書ナリ）

131

- 男子一人
- 女子一人
- 男子二人
- 出家一人
- 信行　彦次郎　早世、
  - 信種　大炊助　隆此字ニ替ル、　休覚　蒲生地頭
    - 信孝　大炊助　羽月地頭
      - 女子　寺山殿江縁與、
      - 女子　本田殿江縁與、
- 信商　新助　横川地頭
  - 信元　新助　山野地頭
    - 女子　伊勢殿江縁與、
  - 女子　新納殿縁與、
- 信盈　源五郎　肥後ノ合戦ニ戦死、

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

本田新助親　系図

但親本□家筋系圖之表墨書之通相記、書被差越候由左ニ記之、□新次郎□相尋候処返□朱

『代々之儀ハ少相違も可有之候へとも、此方新撰未調候間、代々之儀ハ追而可相究候』

御嫡家四代之他腹長男

- 久兼
  - 『忠恒』
    - 『兼恒』　『因幡守　法名道意』
      - 『親辰　上野介　子孫アリ』
      - 『房親　子孫アリ』
      - 『佐渡守』
    - 『兼久』
      - 『親宗』
      - 『親信』

『忠國公之時於平佐抽戦功賜宝刀』

弥次郎　高崎播磨守養子　出羽守　高崎を去テ本田ニ成、

親綱　『善興』楞厳寺住持

親良　始ハ親智　新助　与五郎　甲斐　実ハ岩切三河善信入道可春
二男ニテ、親智養子ニ成、泊之地頭職被仰付候、高麗御陳御供仕候、黄門様御代御相談人ノ内ニテ御座候由申傳候、
『坊之地頭』

親盛　杢之助　本田帯刀養子ニ罷成候、右出羽守一子ニテ候得共、他腹ニ而候哉、帯刀養子ニ遣候、

女子　毛利肥前元親之妻　肥前嫡子右衛門親平甲斐親良孫ニテ候故養子ニ仕候、

親平　新助　与五郎　右ヱ門　実ハ毛利肥前嫡子、
正保四年亥十一月十三日、於江戸王子犬追物射手役相勤、同十六日、於御本丸何レモ同前家光公御目見、御時服頂戴、同十二月二日大納言綱公江御目見、御時服頂戴仕候、羽月・財部・綾地頭職、被仰付候、吟味役ノ内琉球在番役、京都蔵奉行役相勤候、綱貴公御供ニテ假御使役被仰付候而、一旅相勤申候、

親元　新左ヱ門　実ハ本田休右ヱ門（左カ）親宣入道景黄二男ニテ候処ニ、
親平実子無之ニ付養子ニ罷成、次太夫親興并其妹致出生候已後致違変、如本休左ヱ門親宣入道二男ニ罷成候、

親興　新助　次太夫　母河村四郎兵衛秀就娘
父本田新左衛門親元ハ親平養子違変仕候ニ付、親平ヨリ親興ニ家督ヲ譲申候、元禄七年四月十日死去、歳三十五、

女子　伊地知八郎兵衛妻　母右ニ同、

132

女子　母ハ東郷肥前守重利娘、

女子　母右同、

親　親八　新助　母右同、
新兵衛　母右同、

『右御方家筋之儀御記録所より御用之由被仰渡候、依之此方江右通系り立御尋候、依之家系見合致加朱進之候、弥次郎以來傳記之儀者於此方急ニ相糺候儀不罷成候間、其方家傳之通廉直ニ可被申出候、以上、

元録（禄）十六年癸未十一月四日　本田信次郎印

白尾登五右衛門

本田新助殿』

（本文書中ノ……ハ朱書ナリ）

久松流略譜　写

定勝　隠岐守　定勝者尾州知多郡安居院庄之主源姓久松佐渡之男也、母三沢氏女、始嫁徳川廣忠生家康公也、廣忠公自殺之後嫁佐渡誕定勝、家康公以異父同母之令弟之故、此流代々賜松平称号、初伏見御城代、少将